

沖縄県文化財調査報告書 第121集

湧田古窯跡(Ⅱ)

—県庁舎議会棟建設に係る発掘調査—

1995年 3月

沖縄県教育委員会



巻首図版1 遺構の状況



卷首圖版 2 張床土壤



卷首図版 3 上：土取り場跡 下：方形瓦敷遺構

序

本報告書は、県庁舎建設局からの分任を受け、1989年度から1990年度にかけて実施した県庁舎議会棟建設工事に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

県庁舎の建設は主要施設である行政棟、議会棟、警察棟の3棟の建設が順次進められ、1992年度に最後の警察棟が完成しております。本地域一帯は琉球王府が編纂した文献「球陽」に記録のある湧田窯があつたとされる地域として知られていましたが、確実な場所の特定には至っておりませんでした。

それが1985年度から1986年度にかけて実施された行政棟建設に伴う緊急発掘調査により保存良好な平窯形式の窯跡、その窯で焼かれたものと考えられる瓦など夥しい量の遺物や窯場で働く人達の作業場や生活用品、さらに居住空間を思わせる各種の遺構や井戸など、窯場で作業する人達の息吹が聞こえてきそうな状態でわたしたちの目の前にその姿を現しました。これらの成果はセンセーショナルな話題として窯業関係者を中心に多くの県民の関心を集めました。このような状況から同じ敷地内の議会棟地区や警察棟地区も湧田窯の範疇に入るものと予想され、建設工事前に発掘調査を実施した結果、予想に違わず各種の遺構や多量の遺物などが得られております。

今回報告します議会棟地区では張床土壌、瓦敷遺構、砂利敷遺構、ピット群、土取り場跡、瓦列遺構、溝状遺構などの検出、沖縄産の陶器や陶質・瓦質土器それに瓦類などの地元の焼き物を中心に中国産の陶磁器、タイ産の磁器、タイ産の陶器、肥前系の陶磁器などの遺物が出土していると聞いております。今回の成果は、既に報告されています行政棟地区的成果に新資料を追加し、湧田古窯の全体像の解明に新たなるページを記したものと考えます。

本報告書が文化財保護思想の普及や地域文化財への関心並びに歴史に対する認識と理解を深め、さらに学術研究の一助として多方面に御活用願えれば幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査および資料整理作業にあたり、多大なる御指導・御協力を頂きました関係各位に深く感謝いたします。

平成7年3月

沖縄県教育委員会
教育長 嘉 陽 正 幸

例　　言

1. 本報告書は1989年度から1990年度に実施した県庁議会棟建設に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は県庁舎建設局からの分任事業として県文化課が行った。
3. 第Ⅲ章で使用した国土地理院基本図(1/2500)は建設省国土地理院発行のものである。
4. 本書に表した高度値は海拔高である。
5. 出土遺物の鑑定は下記の方々による。記して謝意を表します。

陶磁器類 大橋 康二(佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長)

獸・魚骨類 金子 浩昌(早稲田大学考古学研究室)

貝類 黒住 耐二(千葉県立中央博物館動物課技師)

6. 各章の執筆は下記のように分担し、編集は島袋春美の協力を得て、島袋洋が行った。

島袋 洋(第Ⅰ章第1~2節、第Ⅱ章、第Ⅴ章第1~8・10・11・20・22・25節)

金城 龜信(第Ⅴ章9・12~16節)

豊見山 横(第Ⅲ章、第Ⅳ章第1~2節、第Ⅵ章)

島袋 春美(第Ⅴ章第17~19・23・24・27節)

仲間留美(第Ⅴ章第21節)

金子 浩昌(第Ⅴ章第26節)

7. 本書に掲載した遺物の写真撮影および現像・焼付などは長田剛、瑞慶覧尚美、立津春枝による。

8. 発掘調査で得られた遺物および実測図や写真類などの記録は、総て県文化課資料室にて保管している。

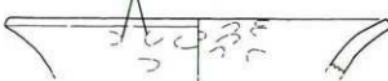
<実測図および層序の凡例>

☆実測図の凡例



■ 炭のあと
■ 彩色陶質土器

指あと



軸器と軸器のさかい

積線III
(不明瞭な線)

☆層序の凡例

■ 燃土混じり
■ 砂利
■ 2層
■ 4層
■ 5層
■ 地山
□

積線I
(明瞭な線)
積線II
(やや明瞭な線)

軸器のさかい
を示す
アルミナ・砂目
の範囲
軸器がかかる
範囲を示す

目 次

巻首図版

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至る経緯

　第1節 調査に至る経緯..... 1

　第2節 調査体制..... 1

第Ⅱ章 位置と環境..... 4

第Ⅲ章 調査経過..... 8

第Ⅳ章 層序と遺構..... 11

　第1節 層序..... 11

　第2節 遺構..... 16

　　1. 土取り場跡..... 16

　　2. 張床土壤..... 18

　　3. 井戸..... 20

　　4. ピット群と砂利敷遺構..... 20

　　5. 瓦敷遺構..... 22

第Ⅴ章 出土遺物..... 23

　第1節 青磁..... 23

　第2節 白磁..... 38

　第3節 染付..... 47

　第4節 褐釉陶器..... 60

　第5節 色絵..... 65

　第6節 三彩..... 66

　第7節 瑞璃釉..... 66

　第8節 その他の陶磁器..... 68

　第9節 東南アジアの陶磁器..... 71

　第10節 本土産陶磁器..... 75

　第11節 須恵器..... 81

　第12節 沖縄産施釉陶器..... 81

　第13節 沖縄産無釉陶器..... 111

　第14節 土器..... 127

　第15節 陶質土器..... 128

　第16節 瓦質土器..... 134

　第17節 青銅製品..... 149

　第18節 骨製品..... 149

　第19節 古錢..... 151

　第20節 キセル..... 154

　第21節 円盤状製品..... 155

第22節	埴堀	162
第23節	石製品	162
第24節	土錘	162
第25節	窯道具	165
第26節	脊椎動物遺体	167
第27節	貝類遺存体	181
第VI章	総括	182

図 目 次

第1図	沖縄本島及び那覇市の位置と湧田古窯跡の位置	5	第29図	染付 1 (碗)	49
第2図	湧田村の古地図	6	第30図	染付 2 (碗)	51
第3図	湧田古窯の範囲（推定）とその周辺 (那覇市歴史地図より)	7	第31図	染付 3 (小碗)	53
第4図	現県庁舎と発掘調査箇所	9	第32図	染付 4 (皿)	55
第5図	グリット設定と造構の配置	10	第33図	染付 5 (皿・鉢・袋物)	57
第6図	ニ・ネラインの層序	12	第34図	染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋)	59
第7図	30・33ラインの層序	13	第35図	褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)	63
第8図	井戸遺構と溝	15	第36図	褐釉陶器 2 (水壺・壺)	64
第9図	ネコ検出状況	15	第37図	色絵と三彩	67
第10図	古錢集中地（ネ・32第3層）	15	第38図	瑠璃釉、その他の陶磁器(青磁・鐵釉染付)	70
第11図	土取り場跡（平面）	16	第39図	東南アジア陶磁器	74
第12図	土取り場跡（断面）	17	第40図	本土產陶磁器 1	77
第13図	張床土壤（平面）	18	第41図	本土產陶磁器 2	79
第14図	張床土壤（断面）	19	第42図	本土產陶磁器 3	80
第15図	ピット群	20	第43図	須恵器	81
第16図	ピット群のプラン	21	第44図	沖縄產施釉陶器 1 (碗)	102
第17図	方形瓦敷遺構	22	第45図	沖縄產施釉陶器 2 (小碗)	103
第18図	瓦敷遺構	22	第46図	沖縄產施釉陶器 3 (小杯)	84
第19図	青磁 1 (碗)	28	第47図	沖縄產施釉陶器 4 (小皿・大皿)	104
第20図	青磁 2 (碗)	29	第48図	沖縄產施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)	105
第21図	青磁 3 (碗)	30	第49図	沖縄產施釉陶器 6 (鍋・酒器)	106
第22図	青磁 4 (皿)	33	第50図	沖縄產施釉陶器 7 (蓋類)	107
第23図	青磁 5 (盤)	34	第51図	沖縄產施釉陶器 8 (秉燭・火取・香炉・花瓶・茶入)	108
第24図	青磁 6 (袋物)	36	第52図	沖縄產施釉陶器 9 (水滴・壺・油壺)	109
第25図	青磁 7 (香炉・その他)	37	第53図	沖縄產施釉陶器 10 (急須・片口鉢)	110
第26図	白磁 1 (碗)	44	第54図	沖縄產無釉陶器 1 (摺鉢)	121
第27図	白磁 2 (皿)	45	第55図	沖縄產無釉陶器 2 (壺)	122
第28図	白磁 3 (小碗・杯・袋物・灯明具)	46	第56図	沖縄產無釉陶器 3 (壺・瓶子)	123

第57図	沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢 ・小鉢)	124	第70図	瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・ 置き物・急須・鍔釜)	148
第58図	沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急須 ・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の把手)	125	第71図	青銅製品・骨製品	150
第59図	沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部)	126	第72図	古錢拓影	153
第60図	土器	127	第73図	キセル	154
第61図	陶質土器 1 (鍋・火炉)	131	第74図	円盤状製品の大きさと種類と相関	155
第62図	陶質土器 2 (鍋の蓋・水鉢・急須・壺・蓋)	132	第75図	円盤状製品 1	160
第63図	陶質土器 3 (急須・壺・球状製品)	133	第76図	円盤状製品 2	161
第64図	瓦質土器 1 (植木鉢)	142	第77図	上: 埋場・石製品、下: 土鍤	163
第65図	瓦質土器 2 (こね鉢)	143	第78図	土鍤の長さと重さの相関	165
第66図	瓦質土器 3 (摺鉢)	144	第79図	窯道具	166
第67図	瓦質土器 4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢)	145	第80図	ウシ歯の年齢構成グラフ	176
第68図	瓦質土器 5 (浅鉢・碗・水盤・大皿)	146	第81図	切痕をもつ骨	179
第69図	瓦質土器 6 (火炉・竈・香炉)	147	第82図	切痕をもつ四肢骨 (ウシ)	180
			第83図	生息地別出土状況	181

表 目 次

第1表	青磁出土状況	24	第20表	イヌ出土量	169
第2表	白磁出土状況	39	第21表	ネコ出土量	169
第3表	染付出土状況	47	第22表	ネコ歯牙出土量	170
第4表	染付観察一覧	48	第23表	ウマ出土量	170
第5表	その他の陶器出土状況	62	第24表	ウマ歯牙出土量	171
第6表	本土産陶磁器出土状況	75	第25表	ウシ歯牙出土量	173
第7表	本土産陶磁器観察一覧	76	第26表	ウシorウマ出土量	173
第8表	沖縄産施釉陶器出土状況	93	第27表	ブタ歯牙出土量	174
第9表	沖縄産施釉陶器観察一覧	96	第28表	ゴンドウクジラ出土一覧	175
第10表	沖縄産無釉陶器観察一覧	116	第29表	ネズミ出土一覧	175
第11表	陶質土器観察一覧	130	第30表	ヒト出土一覧	175
第12表	瓦質土器観察一覧	138	第31表	トリ出土量	175
第13表	古錢出土状況	151	第32表	ヤギ歯牙出土量	175
第14表	有文銭観察一覧	152	第33表	ヤギ出土量	175
第15表	無文銭観察一覧	152	第34表	ブタ出土量	177
第16表	円盤状製品出土状況	155	第35表	ウシ出土量	178
第17表	円盤状製品観察一覧	156	第36表	巻貝出土状況	183
第18表	土鍤観察一覧	164	第37表	二枚貝出土状況	184
第19表	魚類出土量	168			

図版目次

- 図版1 作業風景
図版2 発掘の状況
図版3 作業風景
図版4 層序 上：ニ-31～33東壁 中：ネ-31～33東壁
下：ヌーノ-33南壁
図版5 遺構の全体状況
図版6 遺構の検出状況
図版7 張床土壙
図版8 ピット群検出状況
図版9 土取り場跡の検出状況
図版10 砂利敷遺構の状況
図版11 瓦敷遺構の状況
図版12 溝状遺構
図版13 敷石遺構の状況
図版14 B区井戸の状況
図版15 B区ネコ検出状況
図版16 遺物出土状況
図版17 青磁 1 (碗)
図版18 青磁 2 (碗)
図版19 青磁 3 (碗)
図版20 青磁 4 (皿)
図版21 青磁 5・7 (盤・香炉・その他)
図版22 青磁 6 (袋物)
図版23 白磁 1 (碗)
図版24 白磁 2 (皿)
図版25 白磁 3 (小碗・杯・袋物・灯明具)
図版26 染付 1 (碗) (上：外面、下：内面)
図版27 染付 2 (碗) (上：外面、下：内面)
図版28 染付 3 (小碗) (上：外面、下：内面)
図版29 染付 4 (皿) (上：外面、下：内面)
図版30 染付 5 (皿・鉢・袋物) (上：外面、下：内面)
図版31 染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋)
(上：外面、下：内面)
図版32 裸軸陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)
図版33 裸軸陶器 2 (水壺・壺)
図版34 色絵と三彩
図版35 上：瑠璃軸、下：その他の陶器 (青磁・
鉄軸染付一下左：外面、下右：内面)
- 図版36 東南アジア陶器
図版37 本土産陶磁器 1 (上：外面、下：内面)
図版38 本土産陶磁器 2 a (上：外面、下：内面)
図版39 本土産陶磁器 3
図版40 上：本土産陶磁器 2 b、下：須恵器
図版41 沖縄産施釉陶器 1 (碗)
図版42 沖縄産施釉陶器 2 (小碗) (上：外面、
下：内面)
図版43 沖縄産施釉陶器 3 (小杯) (上：内面、
中：侧面、下：外面)
図版44 沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)
図版45 沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)
図版46 沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)
図版47 沖縄産施釉陶器 7 (蓋類) (上：外面、
下：内面)
図版48 沖縄産施釉陶器 8 (秉燭・火取・香炉・
火炉・花瓶・茶入)
図版49 沖縄産施釉陶器 9 (水注・壺・油壺)
図版50 沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)
図版51 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢) 外面
図版52 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢) 内面
図版53 沖縄産無釉陶器 2 (壺)
図版54 沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)
図版55 沖縄産無釉陶器 4 (水壺・厨子壺・水鉢
・小鉢)
図版56 沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急
須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の
把手)
図版57 沖縄産無釉陶器 6 (壺か壺の底部)
図版58 土器
図版59 陶質土器 1 (鍋・火炉)
図版60 陶質土器 2・3 (鍋の蓋・水鉢・急須・
蓋・撮・壺・球状製品)
図版61 瓦質土器 1 (植木鉢)
図版62 瓦質土器 2 (こね鉢)
図版63 瓦質土器 3 (摺鉢)
図版64 瓦質土器 3 (摺鉢)
図版65 瓦質土器 4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢)

- 図版66 瓦質土器 5 (浅鉢・碗・水盤・大皿)
- 図版67 瓦質土器 6 (火炉・竈・香炉)
- 図版68 瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物
・急須・銅釜)
- 図版69 青銅製品・骨製品
- 図版70 古錢 (上:表面、下:裏面)
- 図版71 上:古錢 (鷄目錢)、下:キセル
- 図版72 円盤状製品 1 (上:外面、下:内面)
- 図版73 円盤状製品 2 (上:外面、下:内面)
- 図版74 上左:増堀、上右:石製品、下:土鍤
- 図版75 斧道具
- 図版76 上:カニ・魚、下:トリ・イヌ
- 図版77 ゴンドウクジラ
- 図版78 ウマ歯
- 図版79 ウマ・ウシ
- 図版80 ブタ
- 図版81 ブタ歯 (上:上顎骨、下:下顎骨)
- 図版82 ブタ歯
- 図版83 ブタ
- 図版84 上:ブタ、下:ヤギ
- 図版85 ウシ歯
- 図版86 ウシ
- 図版87 卷貝
- 図版88 卷貝
- 図版89 二枚貝

報告書抄録

ふりがな	わくたこようあと						
書名	湧田古窯跡(Ⅱ)						
副書名	県庁舎議会棟建設に係る発掘調査						
卷次							
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第121集						
編著者名	島袋洋・金城亀信・豊見山慎・金子浩昌・島袋春美・仲間留美						
編集機関	沖縄県教育委員会文化課						
所在地	〒900 沖縄県那覇市泉崎1丁目2-2 TEL 098-866-2731~2733						
発行年月日	西暦1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東緯 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
わくたこようあと 湧田古窯跡	おきなわけん 沖縄県 なはしいすみざき 那覇市泉崎	47201	26° 12' 31"	127° 40' 59"	1989.11.8 1990.7.14	2,000	県庁舎議会 棟建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
湧田古窯跡	生産遺跡	近世	土取り場跡 張床土壙 ピット群 井戸遺構 方形瓦敷遺構	青磁 白磁 染付 褐釉陶器 色絵と三彩 瑠璃釉 黒釉陶器 東南アジア陶器 本土産陶磁器 須恵器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 土器 陶質土器 瓦質土器 青銅製品 古錢			

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

県庁舎建設基本構想の中の主要な建物である行政棟・議会棟・警察棟の建設が順次進められ、1993年の警察棟の完成により建物の建設工事は終結をみた。行政棟建設の際には発掘期間中の工事ストップなど工事着手前の詳細な協議調整がなされなかったことに起因して大幅な遅れがでた。そのことが大きな教訓となり以後は建設局と文化課の間で協議調整が密に行われ、発掘調査の後に工事着手と建設計画の進行に支障のないスムーズな対応がとられた。

行政棟建設に伴う発掘調査により一大窯業地であった湧田の窯場の息遣いが聞こえてくるような成果が得られている。^(註1)このことから本地域一帯はすでに知られているとおり、^(註2)湧田窯が展開していた地域であることが判明した。そのことは議会棟・警察棟の建設予定地内においても当然のこととして予想された。

行政棟建設が一段落し、議会棟予定地内にあった武徳殿の解体撤去がなされた後の確認調査により、本予定地内も湧田窯の窯場の一角をなしていることが判った。それを受け文化課と県庁舎建設局は協議調整を行った結果、建設局からの分任事業として文化課が発掘調査を1989年11月から実施することになった。

註

註1. 「湧田古窯跡（I）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－」『沖縄県文化財調査報告書第111集』 沖縄県教育委員会

1993年3月

註2. 「国録沖縄の古窯 やちむん会10周年記念特別号」『やちむん』 やちむん会 1979年

第2節 調査体制

発掘調査（平成元年度）から資料整理および報告書の刊行（平成6年度）まで、下記の体制で実施した。

調査主体	沖縄県教育委員会
教育長	高良 清敏（平成元年度～平成2年度）
タ	津留 健二（平成3年度～平成4年度）
タ	嘉陽 正幸（平成5年度～）
文化課課長	宜保榮治郎（平成元年度～平成3年度）
タ	金城 功（平成4年度）
タ	糸数 兼治（平成5年度）
タ	西平 守勝（平成6年度）
文化課課長補佐	平田 與進（平成元年度）
タ	上江洲 均（平成元年度～平成2年度）
タ	伊佐 真一（平成2年度～平成3年度）
タ	知念 勇（平成3年度～平成6年度）
タ	川満 一成（平成4年度～平成5年度）

文化課課長補佐……………新垣　末子（平成6年度）

調査事務

文化振興係長……………仲里　哲雄（平成元年度～平成3年度）

文化振興係・管理係長……………大村　光仁（平成4年度～平成5年度）

タ……………比屋根正治（平成6年度）

主事……………波平　淳（平成元年度）

タ……………上原　節子（平成元年度）

タ……………照屋　邦雄（平成元年度～平成2年度）

タ……………新垣　昌頼（平成元年度～平成3年度）

タ……………仲里　富代（平成元年度～平成2年度）

タ……………玉村　良子（平成2年度～平成4年度）

タ……………上間　尚子（平成2年度～平成4年度）

タ……………比嘉美代子（平成3年度～平成5年度）

主任……………伊波　盛治（平成4年度～平成6年度）

主査……………新垣　和子（平成5年度～平成6年度）

副主査……………宮城　直子（平成5年度～平成6年度）

タ……………新崎　文子（平成6年度）

調査総括

埋蔵文化財係長……………安里　嗣淳（平成元年度～平成2年度）

タ……………大城　慧（平成3年度～平成6年度）

発掘調査委員……………豊見山　楨（充指導主事 現開邦高校教諭）

タ……………長嶺　均（文化課専門員）

タ……………金城　透（文化課専門員）

発掘調査補助員……………大城　聖子（文化課嘱託調査員）

タ……………安次富智子（文化課嘱託調査員）

発掘調査協力……………松沢　亜生（奈良国立文化財研究所 考古計画研究室室長）

タ……………小田　静夫（東京都教育庁文化課 学芸員）

タ……………山田　史子（東京大学史料編纂所 文部教官助手）

発掘調査作業員

平良フル子、鶴間利恵子、多和田順子、渡慶次賀三、仲間末子、山川トシ子、島袋文子、上原美枝、大城ひとみ、宮国恵子、中塚末子、中田邦子、与那嶽勢津子、外間喜久枝、新里造一、浦添栄一、平良百合子、金城由美子、安田春子、平良典子、津霸八重子、山畠キミ、金城ツネ子、鳥尻三郎、大城豊子、新垣直美、諸見里幸子、金城一美、比嘉すが子、並里富子、赤嶺春美、平良貴子、安次富マサ子、辺土名キヨ子、森田良子、金城春江、喜屋武和子、兼城光子、諸見里豊子、具志常子、幸地マサ子、根保康史、末吉敏恭、黒田和則、赤嶺和美、上原美智子、西銘バトロシニア、宮城サダ子、金城敬子、川上益子、与儀恵子、比嘉まり子、大村由美子

資料整理作業員

安次富智子、安西いずみ、安和千代子、伊礼章子、岡村綾子、我那覇悠子、外間瞳、外間峰子、吉田昌子、宮城サダ子、宮城成子、宮平優子、玉寄智恵子、玉城初子、金城敬子、金城克子、金城美祈、金城礼子、金武雅子、源河秀子、呉屋恵子、高良三千代、座間味美津子、崎原美智子、手嶋永子、小嶺禮子、照屋美智子、照屋利子、上原園子、上原博美、上原美智子、城間悦子、城間桂子、城間千鶴子、新垣ゆかり、新垣千恵子、新垣由美子、新城さゆり、新城礼子、新里マサ、神村英樹、神村英世、瑞慶覧尚美、杉山知寿子、西銘バトロシニア、西銘定子、石橋朝子、石嶺さゆり、石嶺真由美、川上益子、川満美賀子、大城淳子、大城勝江、大城聖子、大城茂美、大村由美子、池原直美、池田悦子、中村美江子、仲宗根三枝子、仲村恒子、長嶺初子、津霸園枝、津波古好子、田中睦美、知念純子、豊見山ゆかり、当山慶子、鳩間利恵子、比嘉まり子、比嘉昌子、比嘉優子、備瀬枝美子、浜元春江、普天間直也、諸久村郁子、平良貴子、豊見山小百合、木佐貫るみ子、与儀恵子、与儀清美、又吉純子、仲間留美、田中ゆきの、新城恵、島袋里美、島京美、島袋春美

遺物洗浄作業員

上原美穂子、中村昌子、嘉数キミエ、鏡平名安子、真境名百合子、吉田トヨ子、牧志珠代、大城好明、大城敏子、小沢紀美子、岡村綾子、伊志嶺ひとみ、上原涼子、親泊貞子、新垣かおり、山城淳子、上原菊枝、新垣直美、中嘉夏樹、平良加代

第Ⅱ章 位置と環境

湧田古窯跡は那覇市泉崎一丁目・二丁目および壺川の一部を含む広大な範囲に展開した一大窯業地であり、瓦を焼く窯、荒焼（無釉陶器）を焼く窯、上焼（施釉陶器）^(註1)を焼く窯に分かれていたことなどが知られている。

県庁所在地である那覇市は沖縄本島の南西側、東シナ海に面して位置し、中部から南部の方へ「く」の字状に東シナ海へ突出した周辺一帯に占地する。北側に浦添市と接し、東から南にかけて西原町、南風原町、豊見城村の各町村と接している。上部（西側）が若干M字状になる略台形状を呈している。地形的には西側（海側）に低地が展開し、それを囲むように東側（内陸側）に台地や丘陵が発達している。地質をみると島尻層群（砂岩、泥岩）が基盤をなし、内陸側は琉球石灰岩がそれを覆い、さらにその風化土である赤褐色粘土（島尻マージ）が分布する。海側は沖積層の堆積がみられる。

那覇市はもともと海上に浮かぶ大小の島々からなり、尚巴志王代のころに貿易港としてにぎわいをみせ、それとともに周辺の村落も繁榮し、西・東・泉崎・若狭町が那覇四町と呼ばれる商業の中心地となつた。1451年、尚金福王が国相壟機に命じて築造させた長虹堤により首里地区との行き来が便利になり、また、中国からの冊封使を迎える宿舎の建設や寺社などの建立が増加していったことなどが文献から知られる。

湧田古窯は識名丘陵がゆるやかに傾斜してくる北西部に位置し、海側の低地部に接している。南側に久茂地川、北側を国場川がそれぞれ略東西方に流れおり、両方の川を利用できる位置にあることが判る。つまり、これまでに収集された遺物や県庁舎建設に伴う調査（第1次～第3次）などから国場川に近い南側の傾斜に上焼の窯場、中央付近の西側斜面に荒焼の窯場、久茂地川に近い北側の場所に瓦を焼く窯場^(註1)があったようである。1970年に壺川の工事現場から多量の灰釉碗などが出土したようである。

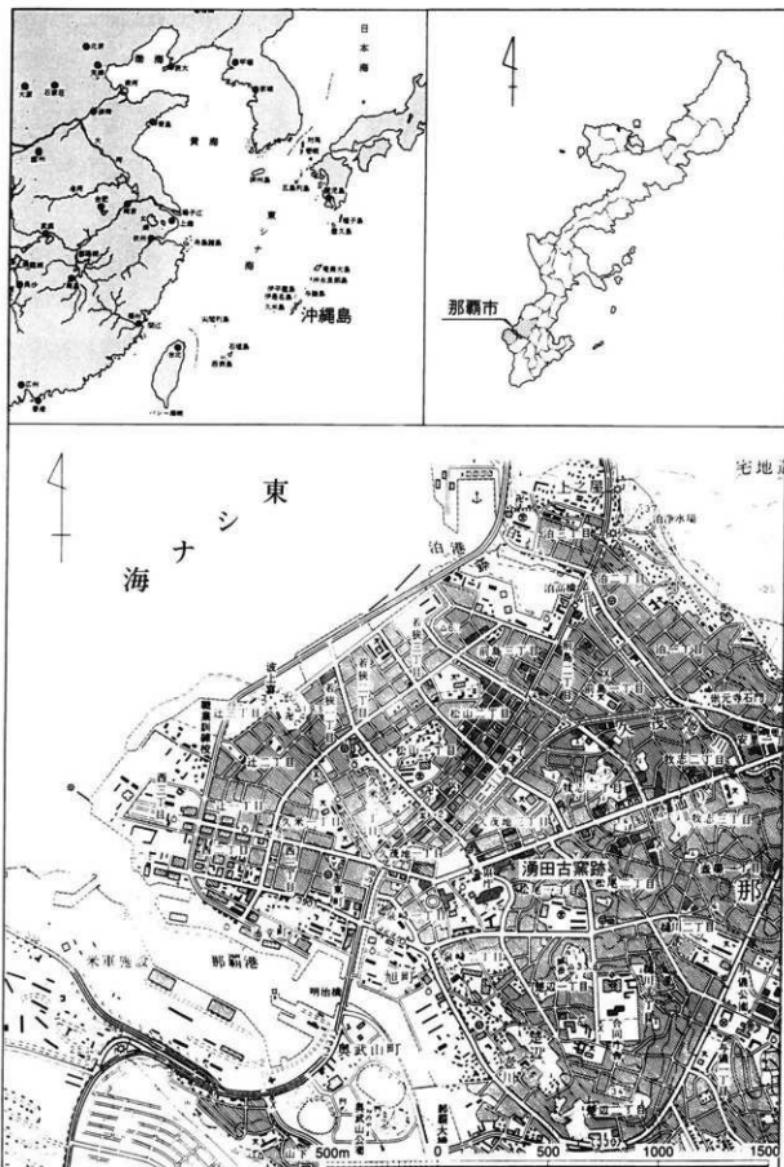
湧田窯の開始時期については判然としないが、1616年に薩摩から一六・一官・三官を招聘して焼き物の技術指導を行うことが文献にみえる。のことからも湧田の地にはそのような素地があったとされる。1682年の壺屋統合まで窯業の中心地として活気を呈し、陶業史をかざる名陶工、仲村渠致元や平田典通なども作陶にはげんだといわれている。また、壺屋への統合は順次行われたようで、その後も窯業地として営まれたとされる。

湧田と呼ばれた地域一帯は、現在、県庁や警察署、小学校や住宅などが立ち並び、当時の面影はまったくといっていいほど残っていない。ただ、那覇市歴史地図をみると当時の地名やその名残が点々とみられるだけである。（第3図）

註

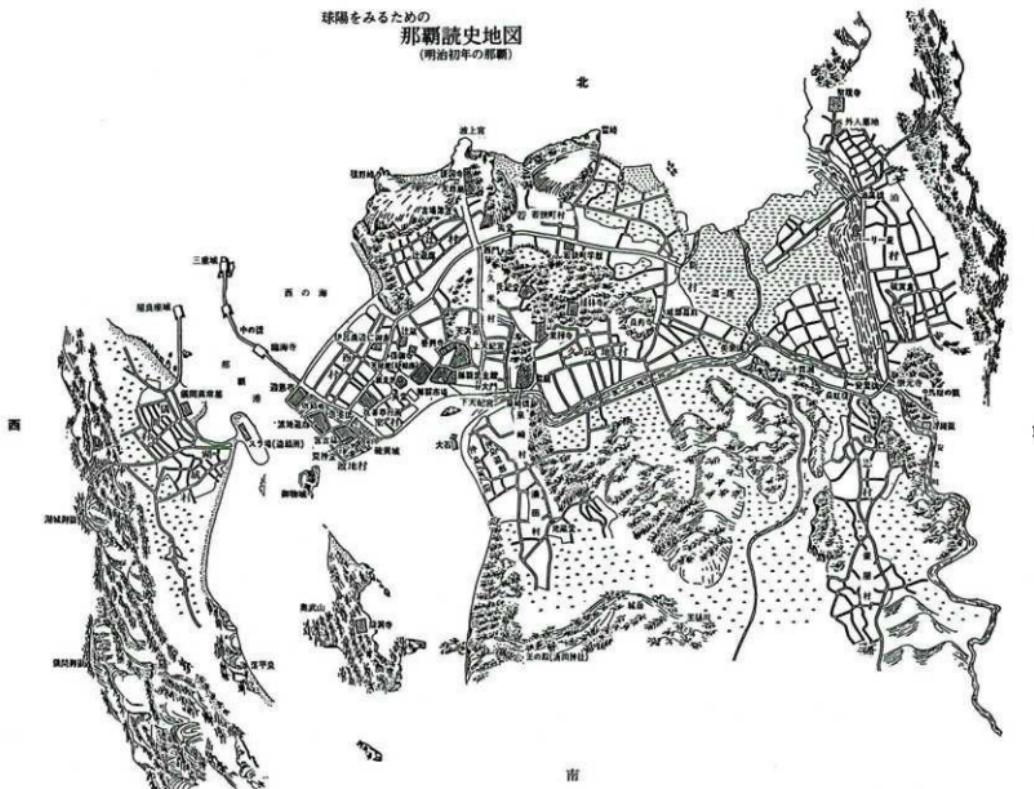
註1、「図録 沖縄の古窯」 やちむん会10周年記念 やちむん特別号 やちむん会 1979年

註2、「那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書—」 那覇市教育委員会 1986年3月

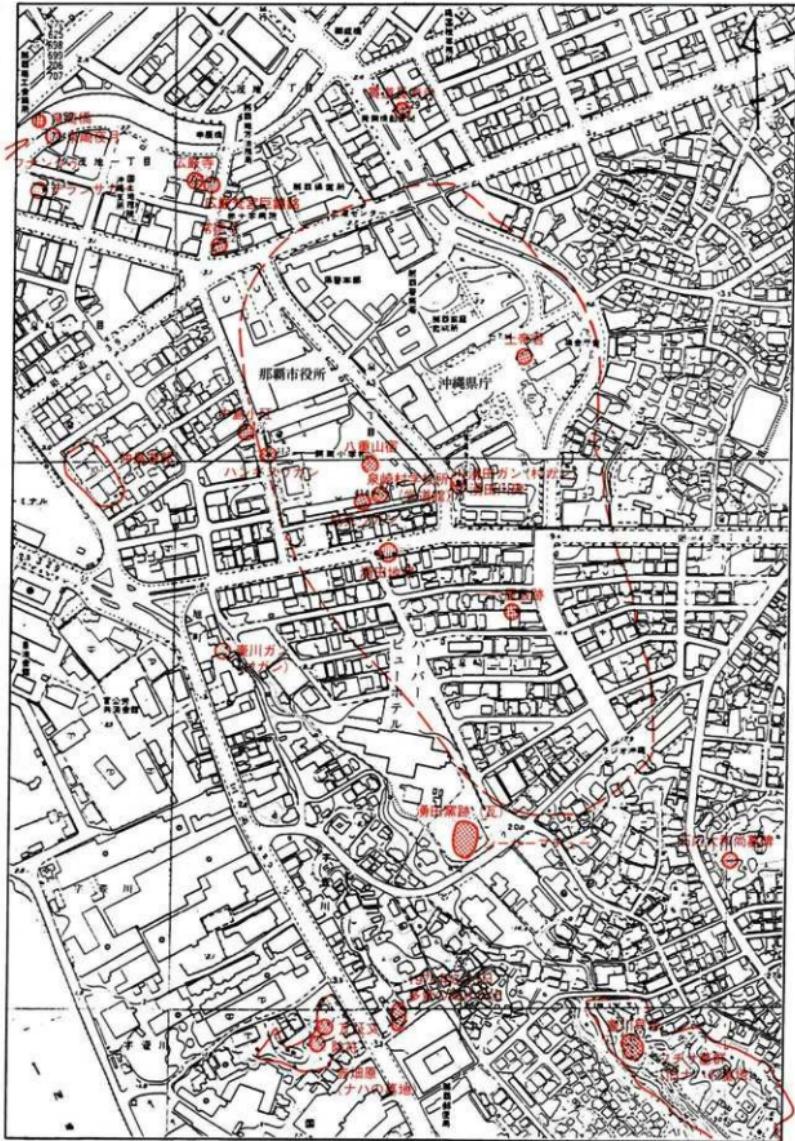


第1図 沖縄本島及び那覇市の位置と湯田古窯跡の位置

球陽をみるための
那覇讀史地図
(明治初年の那覇)



第2図 湧田村の古地図



第3図 湧田古窯の範囲（推定）とその周辺（那覇市歴史地図より）

第Ⅲ章 調査経過

調査は1989年11月8日～1990年7月14日までの約9カ月に亘り実施した。調査対象地域は議会棟建設予定地内の南側地域で、県庁敷地の北端部分（旧第4庁舎一帯）および一段低くなった旧武徳殿前である。しかし、調査開始当初は行政棟建設工事が進行中であり、それに伴う作業用地として行政棟側に近い地域が使用されていたため、工事に支障のない北側地域から調査を始めるうことになった。

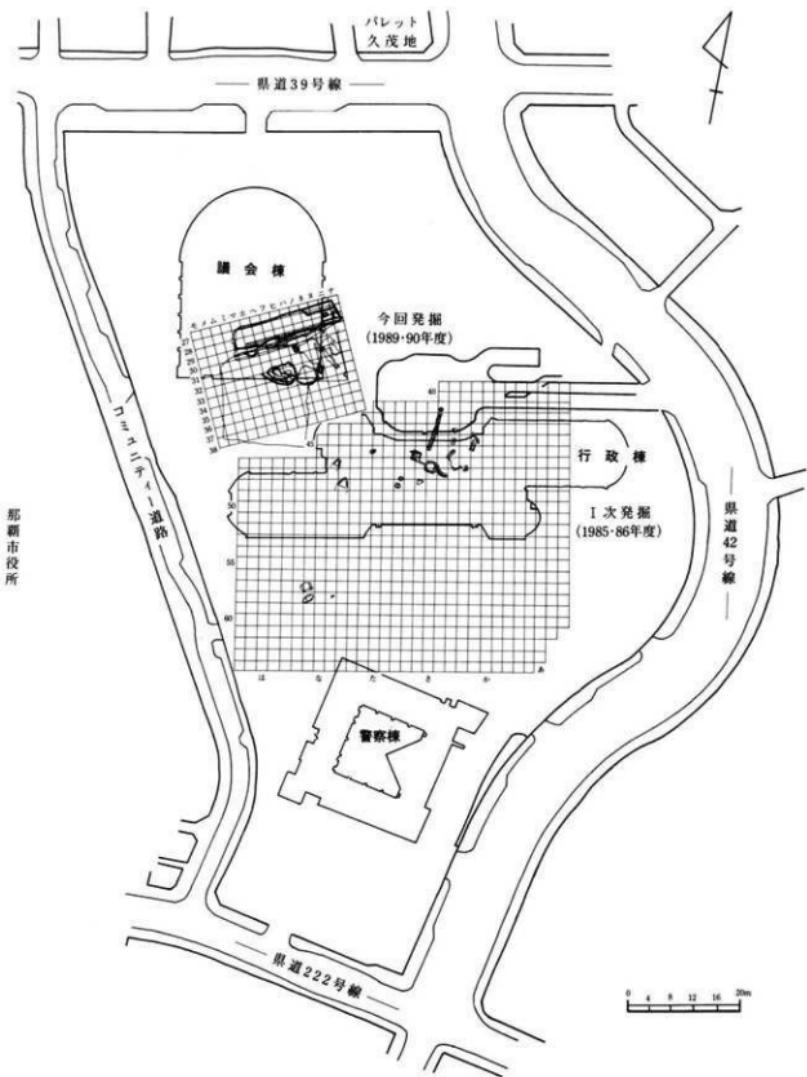
グリット設定は行政棟地区の発掘調査の際の基準に合わせて行ったほうが理解しやすいかと考えたが、その時の基準杭は撤去されたのか確認できず、仕方なく大体の方向あわせを行ない任意に基準点を設けた。調査区のほぼ中央にみられる井戸から西側へ流れる排水溝のラインに沿うように東西の基準ラインを決め、このラインに直交するように南北のラインを設け、調査区一帯に4m×4mを単位とする方眼枠を組んだ（第5図）。北東隅の杭を示標し、東西方向へ50音、南北方向へ算用数字で表した。グリットの呼称は井戸の際をハ-30とし、ヒ-30、フ-31などとした。

発掘調査は対象区域の北側、29・30ラインから開始した。ただ、この地区は海拔3m前後の低地であり、1m程度掘り下げるとき水が湧き出してくれるため、ポンプを使用しながらの発掘調査となった。また、1990年1月には行政棟建設に伴い作業用地になっていた区域の調査が可能になり、29・30ライン発掘調査と並行してバックホーによる表土剥ぎを行った。しかし、この年の1・2月は雨が多く、しばしば現場の作業が中断され、表土剥ぎが終了したのは2月中旬となった。

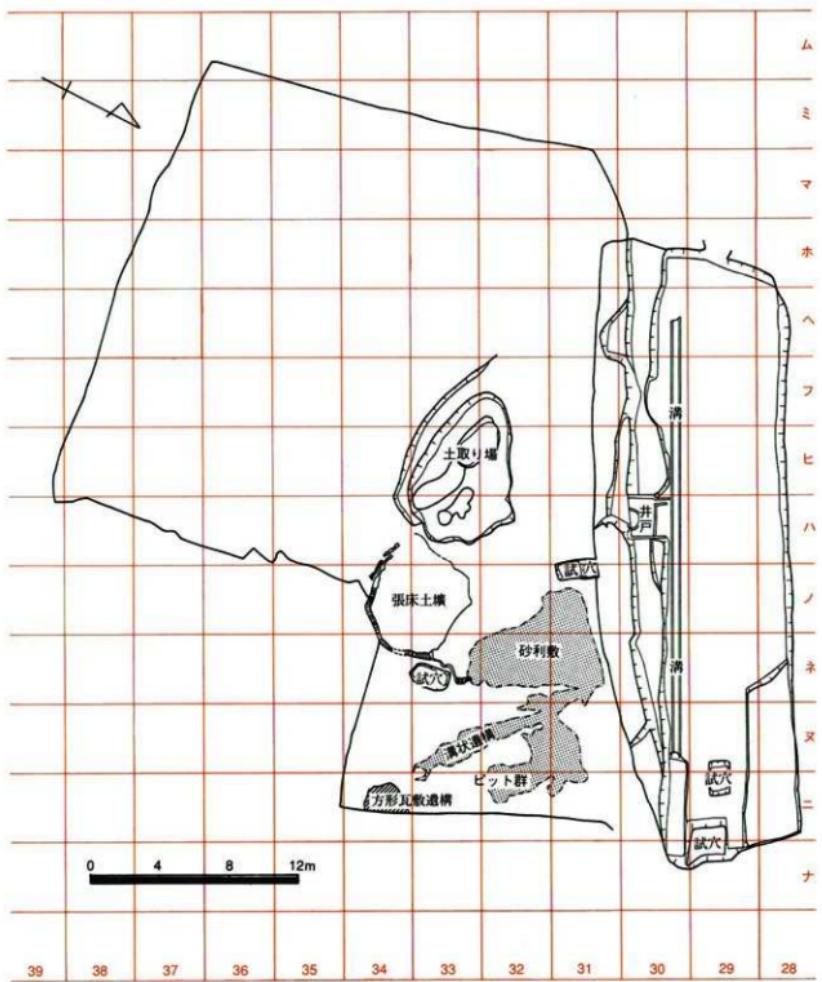
先に実施していた29・30ラインの発掘調査の状況から、この部分は未搅乱の遺物包含層がなく、水の湧き出してくれる深さまで搅乱されていることが判明した。そのためこのライン以北については調査の対象から除外してもよいと考えられ、以後は30ライン以南の調査に全力を注いだ。

表土剥ぎの終了した30ライン以南は発掘調査の進行に伴い、瓦敷遺構（第17・18図）、ピット群（第15・16図）、土取り場跡（第11・12図）、張床土壤（第13・14図）など当初の予想を大きく上回る遺構が検出された。このような未搅乱の堆積層の確認に伴い、出土遺物も質・量とも増加してきた。本地区のこのような状況は既に調査の終了している29・30ラインの状況と大きく異なっていることから、この地区をA区、30ライン以北をB区とした。

発掘調査の進行とともに季節も夏に向かい、春先とはうって変わった晴天続きの中、小十字を振りおろすと火花を散らすほど堅く締まった土との戦闘を強いられ、また、次々に顔を出す種々の遺構の実測作業に追われる日々が続いた。冬場から夏場まで約9カ月間という長期に亘る発掘調査も、1990年7月14日の実測作業および全体の完掘写真の撮影を終了し、県庁舎議会棟建設予定地の発掘調査業務を完了した。



第4図 現県庁舎と発掘調査箇所



第5図 グリッド設定と遺構の配置

第Ⅳ章 層序と遺構

第1節 層序

本地区の堆積層は、調査区全体では、東西方向はほぼ水平に堆積し、南北方向では遺跡の立地する微丘陵の傾斜に沿って堆積するという状況を示している。次に各層の平面分布をみると、微丘陵上の調査区をノーザンラインで東西に分けると、西半部南側では、表土下はすぐ地山となり、遺物包含層の堆積は見られず、地山まで旧居舍の建物基礎部分が入り込み攪乱を受けている。西半部北側では、表土下に第2層、第3層が堆積し、第3層下に土取り場遺構が地山を掘り込んでいる。東半部は第2層は調査区前面を被覆するが、第3層の堆積は見られず、第4層が全面に分布し、次いで第5層が堆積し、地山となっている。この第4層は、焼土や灰泥じりの土層が薄く幾重にも堆積しているが、分布はいずれも部分的で、全面を覆うものではない。この層より各種の遺構が検出されている。同層は、土層断面観察から上部は削平されており、この面より遺構が検出され始めることから、第4層上面が本地区的最終期の生活面と考えられる。また、この面より下部でも薄い砂利層などの間層を挟んでいくつもの遺構が検出されている。地山は西半部は第3紀砂岩（ニービ）で、東半部は青灰色粘土（クチャ）となっている。

以下、各層の状況について略述する。

表 土 一旧居舍の基礎及びコーラル・青灰色粘土からなる整地層である。層厚は調査区南側で最大1mを越える。

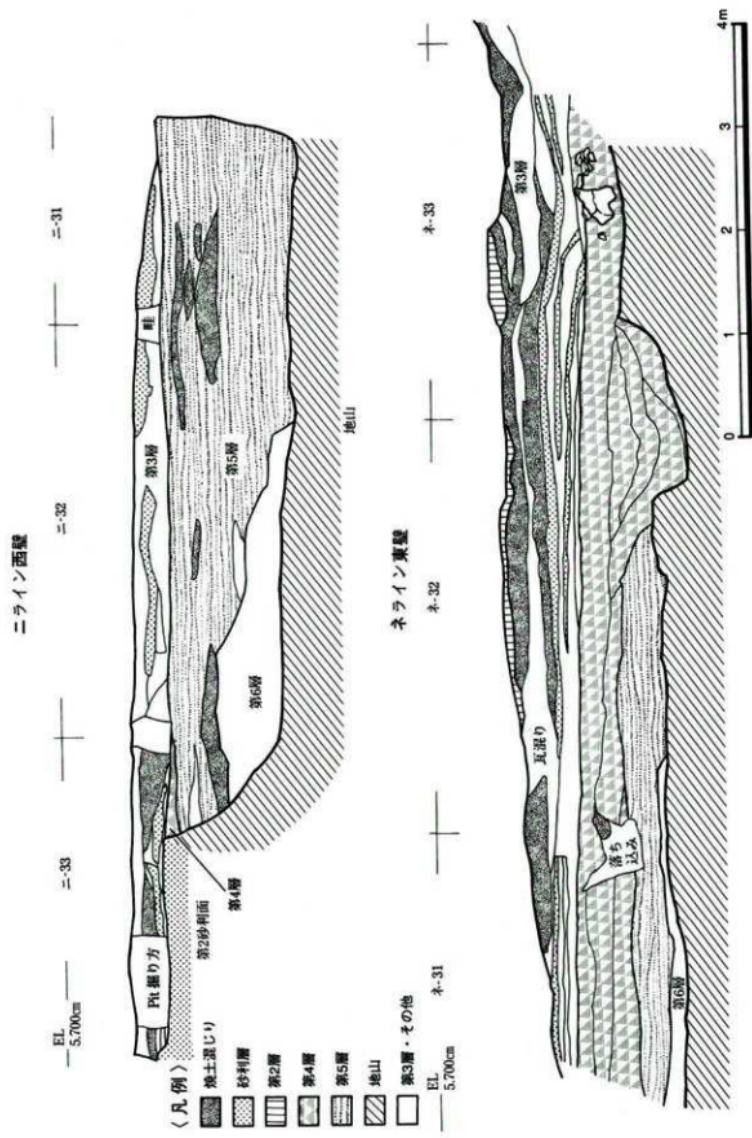
第2層 一赤褐色土層で、調査区のほぼ全面を覆う。本来は近世期に属すると思われるが明治時代以降、この地に県庁舎が建設される前後に整地されたとみられ、かなり攪乱を受けている。遺物は17世紀後半以降に属する中国産陶磁器および沖縄産陶器が多く、他に青磁・明染付等、近現代の遺物が混在している。

第3層 一黄褐色土層で、調査区の西半部を覆う層である。上層からの掘り込みによるほかは攪乱は受けていない。この層は土取り場跡、張床土壤を被覆している。遺物は近世期の陶磁器類が混在するが、明代の青磁・白磁・染付が量的には多い。灰色瓦類の出土もこの層から目立ってくる。

第4層 一焼土や灰、窯滓等が混入する土層で、本調査区の東半部を覆うものである。この層は単一層ではなく、前述の混入層が薄く部分的に幾重にも堆積し、平面的にも部分的にしか分布しないため全体としての把握が困難なため、これらの層をまとめて第4層とした。この層の上面は前述したように人為的に削平されているようで、張床土壤はこの面から掘り込んでいる。またピット群や砂利面、瓦列遺構もこの面から検出されている。またいくつかの間層を挟んで方形瓦敷遺構も検出されるなど、本地区的生活層を形成しているものと推定される。遺構は明代の陶磁器類、灰色瓦類、瓦質土器が出土している。

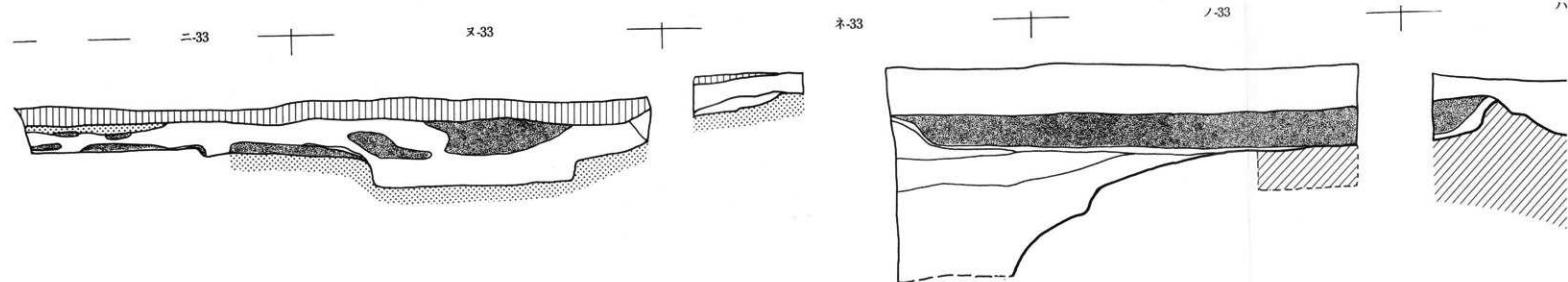
第5層 一地山への移行層で、後述する如く地山の土質の反映して、調査区西半部では黄褐色粘質土、東半部では灰色粘質土となっている。明代の陶磁器類、灰色瓦類、瓦質土器が出土するが量的には少ない。

地 山 一本地区的基盤をなす。東半部は青灰色粘土層（クチャ）、西半部は第3紀砂岩（ニービ）となっている。

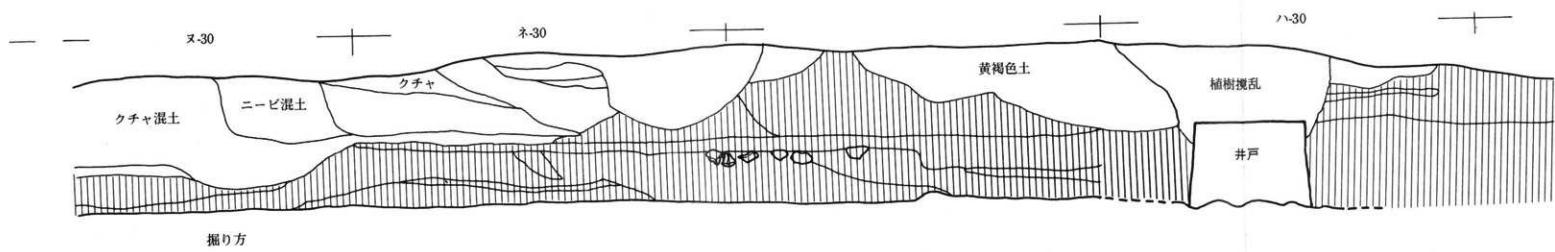


第6図 ニ・ネラインの層序

33ライン 南壁



30ライン 南壁



第7図 30・33ラインの層序

33ライン 南壁

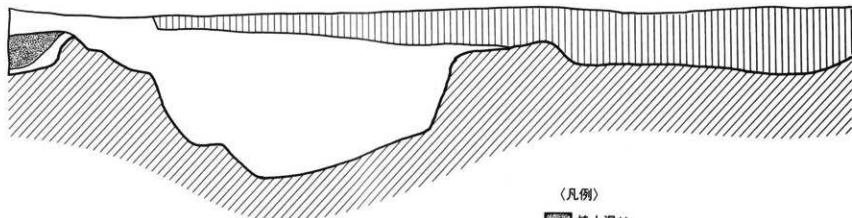
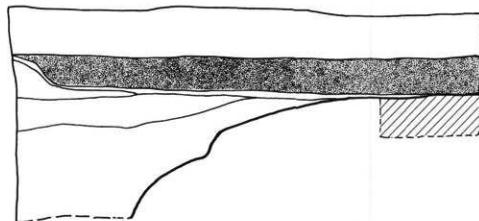
メ-33

ノ-33

ハ-33

ヒ-33

フ-33



〈凡例〉

- 焼土混り
- 砂利層
- 第2層
- 第4層
- 第5層
- 地 山
- 第3層、その他

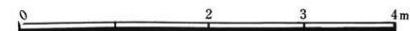
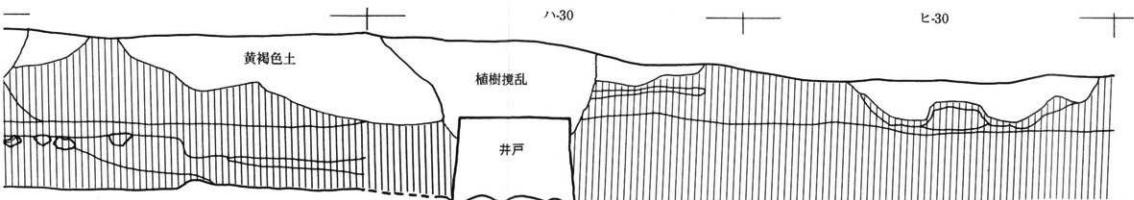
30ライン 南壁

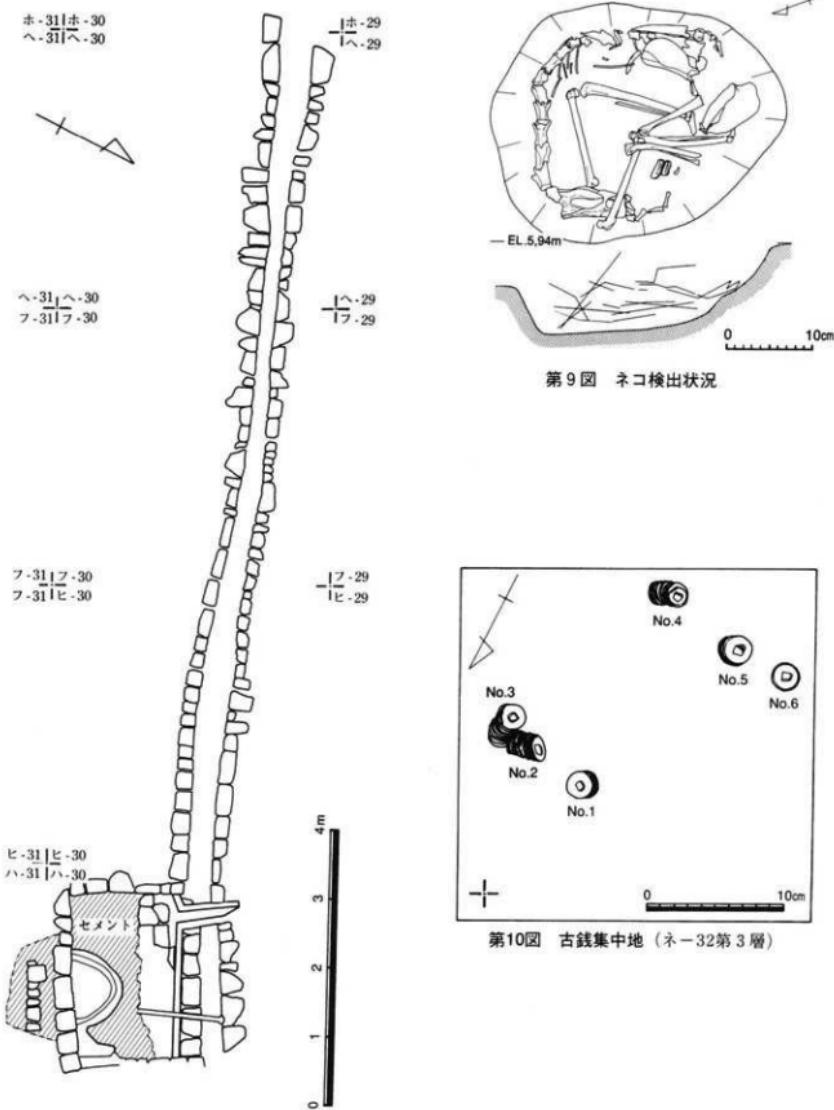
メ-30

ノ-30

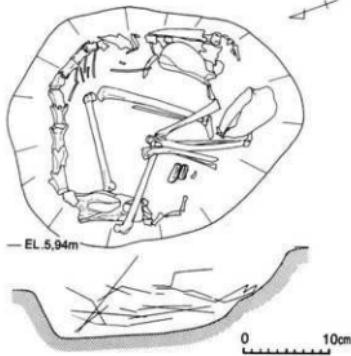
ハ-30

ヒ-30

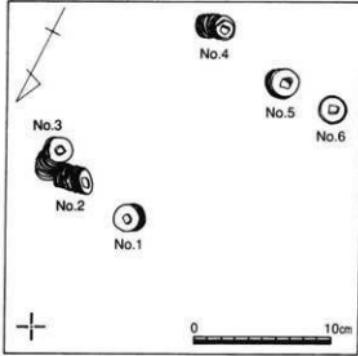




第8図 井戸造構と溝



第9図 ネコ検出状況



第10図 古銭集中地（ネ-32第3層）

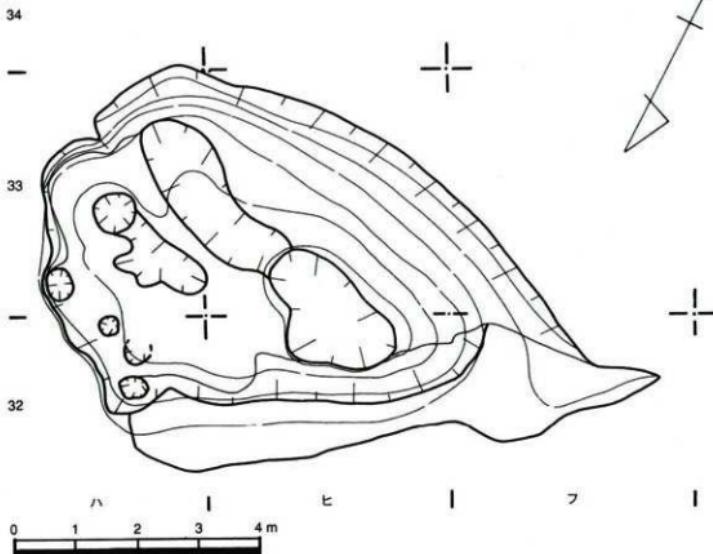
第2節 遺構

1. 土取り場跡（第11・12図）

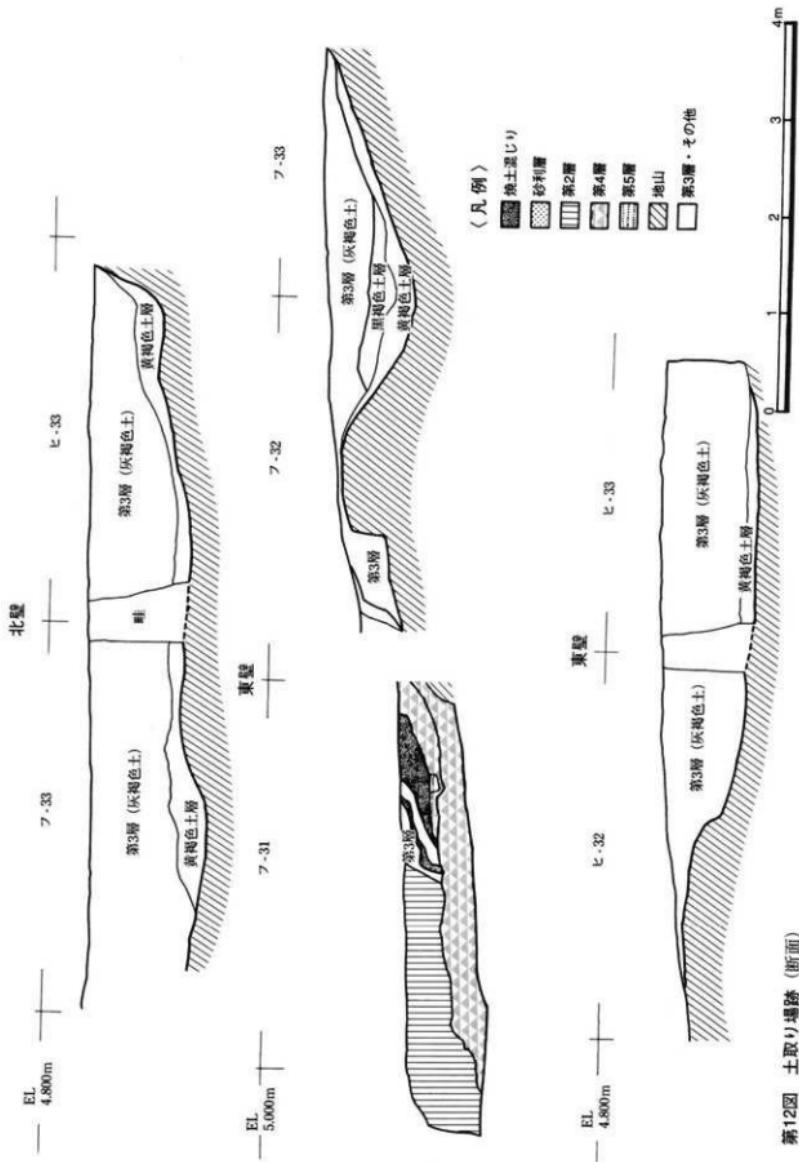
ハ・ヒ・フ-32~34に位置する。平面観は直径約8m、短径約5mを測る梢円形を呈し、第5層を掘り込み、地山（ニービ）に達する土壤である。土壤内は第3層が被覆している。側面及び底面には土を採取したと見られるような小さな掘り込みがいくつもある。採取の対象となった土は地山直上の黄色～黄褐色土のようである。

註

註1 陶芸家の松島朝義氏の御教示による。なお、同氏に同遺構内の土をサンプルとして焼成してもらったところ、同遺構の土は荒焼及び瓦の焼成には適してるとの見解を頂いた。



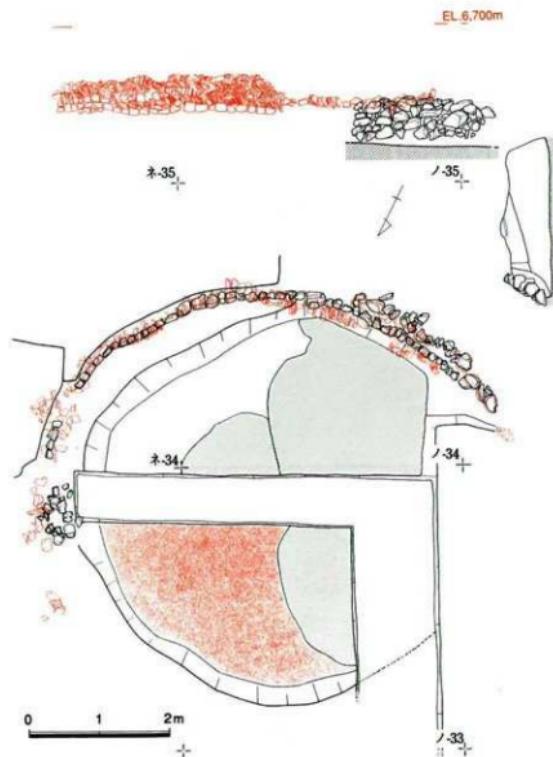
第11図 土取り場跡（平面）



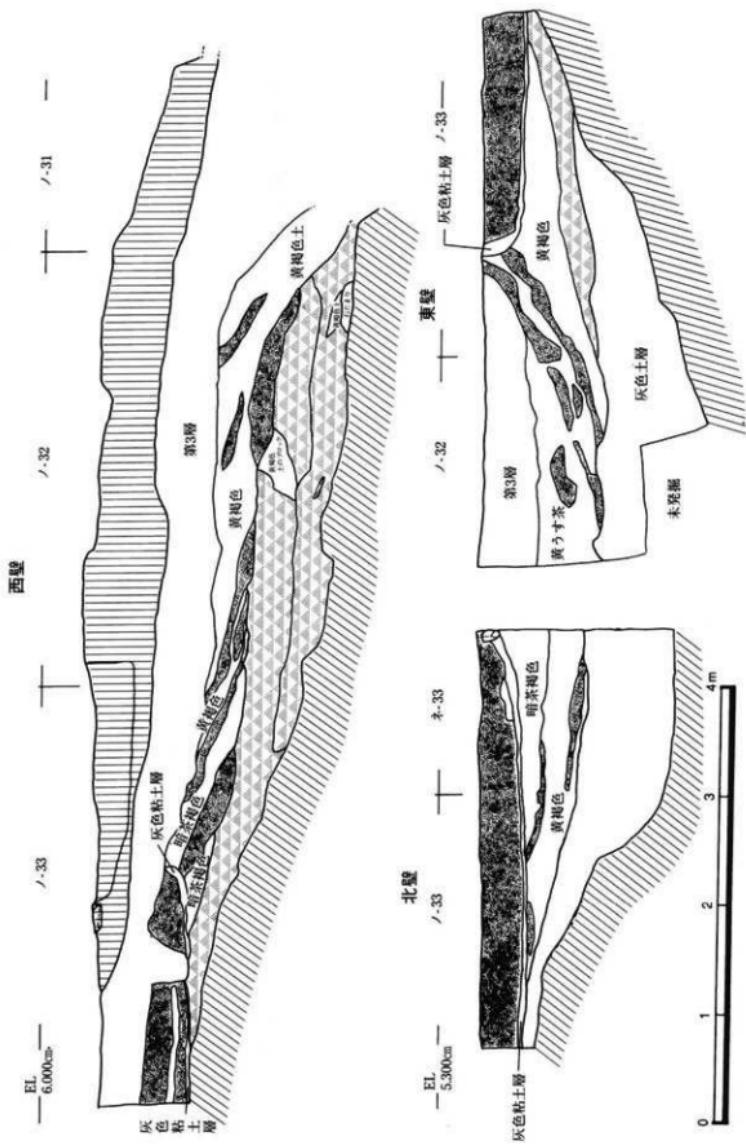
2. 張床土壤（第13・14図）

ネ・ノー33・34に位置する。直径約3mを測り、ほぼ円形を呈する。土壤は第4層を掘り込んでおり、土壤内の側壁から床面にかけて厚さ数cmの灰色粘土が覆っている。土壤内は赤褐色の焼土が埋土となっており、この上面を第3層が覆っている。この土壤の北半部を瓦列が巡る。瓦列は最下列にレンガを配し、この上に平瓦を交互に重ねる形で、4段確認されている。本来はこの土壤全体を取り巻いていたと推定されるが、南半部は残存していない。また、この瓦列は検出された土壤の縁辺を外れて取り巻いている。さらに、この瓦列の後方には石灰岩の土留め石積みが一部残存している。

以上の状況から、数回にわたって作り直された可能性がある。



第13図 張床土壤（平面）



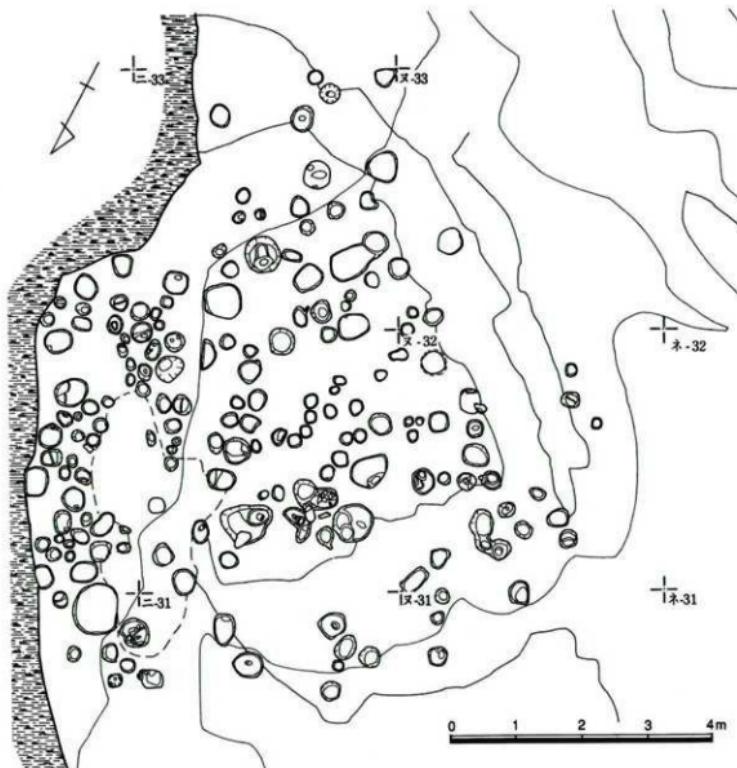
第14圖 張床土壤(斷面)

3. 井戸（第14図）

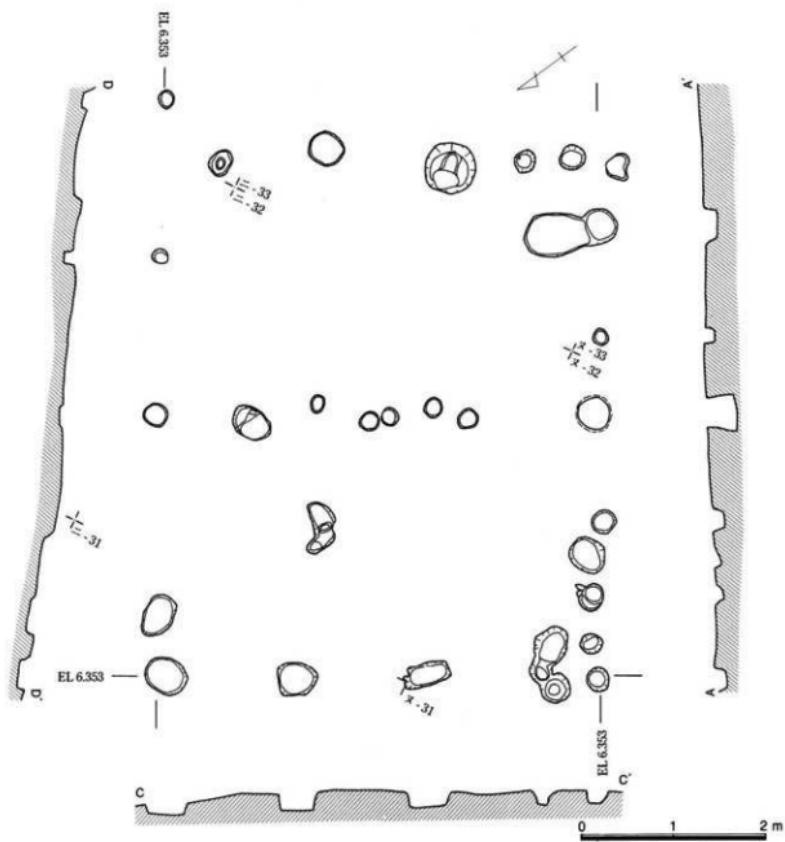
ハ-30～ホ-30にかけて検出されている。井戸は最近まで信仰の対象となっていたが、本調査の結果この井戸に接続して排水溝が検出された。

4. ピット群と砂利敷遺構（第15・16図）

第4層上面で検出されている。ピット群は調査区東半部で多数確認されており、同じくこの面に、サンゴ窓の砂利敷が「ロ」字状に広がっている。この砂利敷はピット群と間わりで、何らかの施設を取り巻いていたものと考えられる。このうち遺構として可能性のあるものを図示した。第16図は柱間が4間×3間である。また、このピット群の検出中にネ-32では、鳩目鏡がまとめて出土している（第10図）。



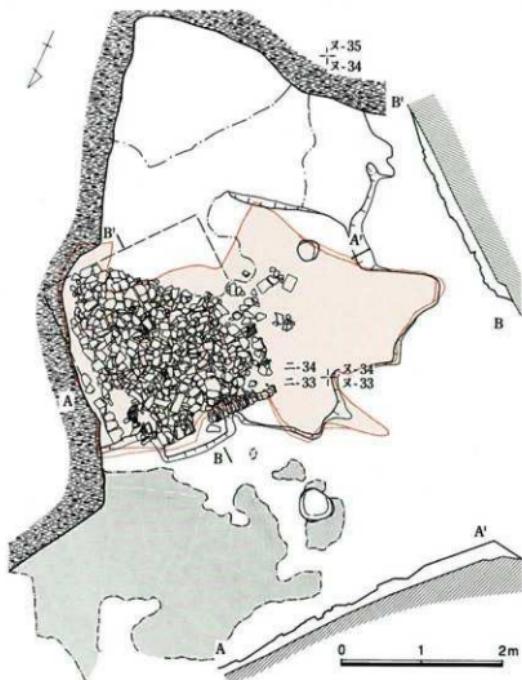
第15図 ピット群



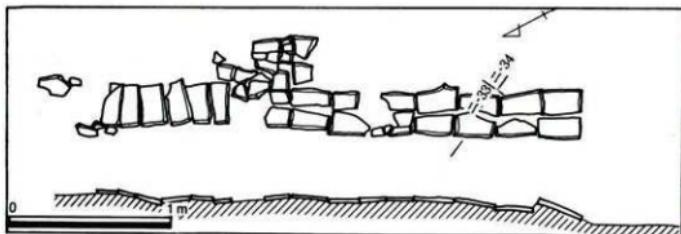
第16図 ピット群のプラン

5. 瓦敷遺構（第17・18図）

第4層中で検出されている。残存部はほぼ2m四方で、このうち1辺を瓦列が巡り、内部を瓦・磚で埋めている。この遺構の周辺にも砂利敷が取り巻いており、何らかの施設の跡と思われるが性格は不明である。内部の瓦・磚の中には丸に大のスタンプを付したものがいくつか出土している。



第17図 方形瓦敷遺構



第18図 瓦敷遺構

第V章 出土遺物

第1節 青磁

総数で500点近く得られているが（第1表）、破片のものが多くの復元して全形の窺える資料には恵まれなかった。時期的には14～16世紀頃のものを中心に、18世紀頃のものが若干みられる。器種的に明確なものは碗・小碗・鉢・皿・盤・瓶・壺・香炉・小杯とバラエティに富んでいる。量的には碗が圧倒的に多く、皿、盤と続き、この3器種で全体の約88%を占める。量的に少ないものは壺・小杯で、それぞれ3点、2点となっている。

大枠としては行政棟地区のものとおなじような内容として把握される。特徴的なものを第19図～第25図に示した。以下、器種別に略述する。

a. 碗

最も多く得られている器種であるが、先述したとおり全形の窺える資料はあまり得られていない。第19図11、第20図17、第21図22に示した3点が全形の窺える資料である。時期的な面からみると14世紀後半～16世紀頃の所産と考えられるものが大半で、特に15世紀後半～16世紀前半頃の所産と考えられるものが中心のようである。

これらの資料の中で口縁部について、文様や器形に注目し下記の様に分類した。

第1種—外体面にヘラ描き文を配するもので、口縁部が外反するもの

第2種—無文のもので、口縁部は外反するもの

第3種—無文のもので、口縁部は直口を呈すもの

第4種—外面の口縁近くに團線を1本廻らし、口縁部が直口状を呈すもの

第5種—雷文帯を配するもので、直口口縁のもの

第6種—蓮弁文を配し、直口口縁のもの

第7種—外面に横位沈線と格子目状の文様を配し、直口口縁のもの

以上の7種で、量的には第6種が圧倒的に多く得られており、他の資料はいずれもそれほど多くない。第7種は第21図27に示す1点だけである。

・第1種

特徴的なもの3点を第19図1～3に示した。1・2は外体面にヘラ描き文を配するもので口縁部は無文のままのようである。2はヘラ描き文と無文部との間に1本の團線を廻らしている。内面は無文。3は口縁部直下からヘラ描き文を外面に配し、内面には青海波文が認められる。口唇部は1・3が舌状をなし、2はやや丸味を持って仕上げている。1・2は腰部がやや脹らみかけになる。1は推算口径の算出ができる、約20cmを測る。

釉は1・3が青緑色を呈し、2が暗緑色である。2は内外面に、3は外面に荒い貫入が認められる。素地は1が乳白色でやや粗く、2・3は灰白色でやや細かい。

・第2種

1点だけを第19図4に示した。口縁部は折り曲げるよう外反させ、口唇部は舌状につくる。青緑色の透明釉が施釉され、内外面に荒い貫入がみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。

・第3種

第19図5に示したものである。腰部はあまり脹らまず、口縁部の方へやや開き気味に向かう。口唇部

第1表 青磁出土状況

器種	時期	部位	不明	トレンチ	A区						B区						合計		
					第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	小計	第1層	第2層	第3層	第4層	小計			
碗	14~15前半	胸部	口縁部	4	1	10	12	3	1	1	26	1	1	1	1	1	27		
		底部			2	2	5	9	1	21	0	0	0	0	0	21			
	14後半~16	胸部	口縁部	1			21	4	3		29	0	0	0	0	0	29		
		底部				7			1	1	8	0	0	0	0	0	8		
	15c	胸部	口縁部	2						2	1	1	1	1	0	0	2		
		底部				1	1				2	1	1	1	1	0	2		
	15~16前半	胸部	口縁部	3	4	23	43	11	12		96	1	3	1	1	5	101		
		底部		1	6	16	60	7	17	1	108	1	1	1	1	1	109		
		完形		1		3	2	4	1		11	1	1	1	1	1	12		
	16c	胸部	口縁部								0	0	0	0	0	0	0		
小碗	18~19c	胸部	口縁部								0	0	0	0	0	0	0		
	14~15前半	底部	口縁部							1	1	1	1	1	0	0	1		
	18~19c	胸部	口縁部	2							2	0	0	0	0	0	2		
		底部		3	3						6	0	0	0	0	0	6		
杯	14~15前半	胸部	口縁部					1	1	2	2	2	2	2	0	0	2		
		底部						2							0	0	2		
	14~15前半	胸部	口縁部			1	15	2			14	1	1	1	1	1	15		
		底部				6	3	1			10	0	0	0	0	0	10		
皿	14後半~16	胸部	口縁部				1				0	0	0	0	0	0	0		
		底部	口縁部	1							9	0	0	0	0	0	9		
	15~16前半	胸部	口縁部	3	2	3	2	10	3	1	24	1	1	1	1	2	26		
		底部		1	1	5	5	5	1		13	1	1	1	1	1	14		
盤	14~15前半	胸部	口縁部			1	10	1	1		13	0	0	0	0	0	13		
		底部	口縁部			6	1	1			8	1	1	1	1	1	9		
		完形	口縁部			1	2				4	0	0	0	0	0	4		
	明	口縁部					2				0	1	1	1	1	1	2		
瓶	14~15前半	胸部	口縁部	1	5		1	1			8					0	8		
		底部	口縁部			3	1				4					0	4		
壺	14~15前半	胸部	口縁部			1	4				5					0	5		
	14~15前半	底部	口縁部			1					1					0	1		
香炉	14後半~16	胸部	口縁部	1						1	1	1	1	1	0	0	1		
	明	口縁部				1					1	1	1	1	1	0	1		
袋物	14~15前半	胸部	口縁部				2	1			0	0	0	0	0	0	0		
		底部	口縁部					1			3	0	0	0	0	0	3		
小杯	14~15前半	胸部	口縁部			1		1			1	2	2	2	0	0	1		
		底部	口縁部			1					1	1	1	1	1	0	2		
不明	15c	胸部	口縁部								0	0	0	0	0	0	0		
	14~15前半	底部	口縁部	1			4				5	1	1	1	1	1	5		
	明	口縁部									0	0	0	0	0	0	0		
	15~16前半	胸部	口縁部	1							0	0	0	0	0	0	0		
		底部	口縁部								0	0	0	0	0	0	0		
合計						8	14	31	109	228	47	40	2	479	2	13	1	4	20 439

はや丸くつくる。推算口径は約14cmを測る。釉は発色が悪く、暗茶褐色を呈す。内面の口縁部には釉垂れが見受けられ、内外面とも細かな貫入が密にみられる。素地は赤味のある灰褐色を呈し、やや細かい。釉・素地の状況からすると焼成不良の資料と考えられる。

・第4種

3点を第19図6～8に示した。6・8は口縁部上端に、7はやや口縁部の下方に1本の圈線を廻らす。6・8は口縁がやや直方向になるもので、7は若干内彎気味になる。6・8は口唇部が舌状になり、7は比較的丸くつくる。8は推算口径が約14cmである。6は青緑色、8は暗緑色の失透性の釉で、7は淡緑色の透明釉である。6は内外面に細かく密な貫入が走る。素地はいずれも灰白色のやや粗いものである。

・第5種

雷文帯を配するもので、第19図9～11に示した。9・10は小破片であるが、11は全形の示せる資料である。9はヘラ描き、10・11はスタンプによるものである。

全形の判明する11をみると腰部の脛らみがほとんどなく、ゆるやかなカーブを描きながら口縁部に向かうもので、口唇部は丸く仕上げている。口縁部は胸部よりも若干厚くなっている。高台は厚く安定感があり、疊付の両側を斜位に面取りしている。そのため疊付は狭くなっている。外側の削りよりも内側の方が大きく面取りしており、高台が外側へ開く感じになっている。

推算口径が約16cm、高さ9.1cm、底径6.6cmを測る。比較的大振りの碗で、行政棟地区出土のものや尻川原遺跡出土のものと大体同じような大きさである。文様は外面の口縁部上端にスタンプの雷文帯を廻らし、内側面に唐草文を描く。内底面には印花文を配すが、判然としない。釉は暗緑色の失透性のものである。素地は灰白色でやや細かいが、赤味を帯びた部分も見受けられる。

10は文様や口縁部の形状などが11と同じものであるが、内面の文様は口唇下約1.5cmの所に配されている。釉は淡緑色でありあいに透明度があり、外面に細かく密な貫入が認められる。素地は乳白色のやや粗いものである。

9は外面にヘラ描きの雷文帯を廻らすものである。口縁部がやや開き気味になり、胸部から口縁部へは同じ厚みである。口唇部は舌状を呈す。灰緑色の比較的透明度のある釉を施す。外面に細かく密な貫入がみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。

・第6種

最も多く得られているものである（第20図および第21図22～26）。ほとんど破片の資料であるが、第20図17・第21図22の2点は全形の窺えるものである。ラマ式蓮弁文を配するものと、剣先蓮弁文を施すものが確認でき、前者は第20図12に示す1点だけで、他は後者の資料である。

ラマ式蓮弁文

底部の資料が1点だけみられ、第20図12に示した。高台脇にラマ式蓮弁文の弁尻が認められるもので、推算底径は約7cmである。見込にヘラ彫り文が認められるが、破片のため全体的な様子はつかめない。腰部の膨らみはあまりみられず、高台は方柱状につくる。疊付は斜めに整形しており、内側だけが地につく。釉は青緑色の失透性のもので、全釉のあと外底を蛇ノ目釉刺ぎしている。素地は灰白色のやや細かなものである。

剣先蓮弁文

本種のほとんどがこの形状の蓮弁文を施すもので、特徴的なものを第20図13～21・第21図22～26に示した。この種の蓮弁文は①弁幅が狭く、剣頭と蓮弁文がほぼ一致するもの、②弁幅が広くなり、剣頭と蓮弁文が一致しないもの、③弁幅が広くなり、剣頭がなくなるものの3種に細分されることが知られている。得られた資料をみるとほとんどが①のグループに属するものようで、②・③の資料はあまりみられない。

第20図13～20に示したものは①に属するものである。器形的には腰部がほとんど張らずに高台際からゆるやかなカーブを描きながら口縁部に向かうもので、口唇部は舌状を呈すものが主流のようである。ただ、20に示した推定図は腰部がやや丸味を帯びている。高台は比較的しっかりとつくるが、19は17・18に比べ高台が低い。17・19は疊付の外面を面取りするもので、18は疊付を斜めに仕上げている。また、17・18は内底面をほぼ平坦にするが、19は窪む感じに整形されている。19は17・18に比べ高台が低くつくられている。

大きさについては全形の推定できる17をみると、推算口径が約14cm、高さが約8cm、高台径は5.6cmである。この資料以外に推算口径の算出できた14～16・20や高台径の判明する18・19をみると14～16・20はそれぞれ約13cm、約15cm、約11cm、約13cmを測り、18・19はそれぞれ約5.5cm、約5.8cmとなっている。これらの推算口径や推算底径の状況や行政棟地区のものをみても、17は本種では普通の大きさのものようである。

文様をみると剣頭の配される位置が13・14・17・20は口唇部に近く、15・16は口唇部から若干下がる。特に13は剣頭が鋭角的になり、口唇部までおよんできている。14・20は剣頭が弧状を呈し、15～17は波状を呈す。多くの蓮弁文は比較的深い線彫りによるが、14は非常に浅く施文されている。また、20は他の資料に比べ細線になっており、異なる印象をあたえるものである。弁尻は高台際までのものが普通であるが、19は高台外面までおよんだのか斜位の短線が廻っている。

15・17～19からすると内底面の周囲には捻花文が施されるものが多いようで、15・19は線描きで描かれ、17・18は櫛描きにより施文されている。また、内底面には17・18のように字を印刻するものも割りとみられるようである。釉は深緑色のやや透明度のあるものを厚めに施釉するのがほとんどである。14・20は割りと薄く施釉しており、14が青緑色の透明度のあるもの、20が黄緑色の失透性のものである。17～19の底部は3点とも外底面を蛇目釉刺ぎしている。また、内外面に貫入の認められるものが多い。

素地は灰白色のやや粗いものが主流のようであるが、14は灰白色の粗いもの、20は黄白色のやや粗いものである。

第20図21は蓮弁の幅がやや広めになっているが、剣頭と蓮弁文が一致していること、推算口径が13cm台であること、施釉の状況や素地は14と似ていることなどから上記のグループのなかで捉えてよいと考えられる。釉は青緑色の失透性のものである。

第21図22・23は鉤状に蓮弁文を描いていくもので、蓮弁文は連続せず剣頭の左側部分が一旦途切れる形になっている。形としては剣頭と蓮弁文が一致するのでここに示した。22は全形の窺えるもので、高台際からスムーズな曲線で口縁部に向かう。胸部から口縁部の方へ厚さを減じ、口唇部は舌状につくる。高台は低くつくりだされ、疊付外面を斜めに面取りしている。推算口径は約13.6cm、高さが6.8cm、高台径の推算が約5.8cmを測る。

釉は青緑色で失透性のものを比較的厚めに施釉しており、高台際まで施される蓮弁文が胸下半部で見えなくなっているところが多い。高台から外底面は露胎のようであるが、高台外面には釉垂れがかなりみられる。疊付まで釉垂れする部分がみられ、そこでは砂粒の着着も見受けられる。素地は灰白色の粗いものであるが、外底面の近くは黄白色になっている。また、高台内面や外底面の仕上げは雑で、ざらついた部分や空洞の部分などが見受けられる。それぞれの特徴が①とはかなり異なっている。

23も22と同じような蓮弁文を配すが、他の特徴は①とほぼ同じようである。胸部から口縁部へ同じような厚さで至り、口唇部は舌状に整形する。推算口径は約14cm。釉は青緑色の失透釉で、内外面に細かな貫入が密にみられる。素地は灰褐色で粗い。

24は剣頭がみられず、蓮弁文だけのものである。焼成不良なのか釉が白濁色になっており、表面には

気泡も散見される。胴部から口縁部へほぼ直方向にむかうもので、口唇部は舌状を呈す。器形的には第20図20と似たような感じになるかと考えられる。推算口径は約14cm。素地は白濁色のやや粗いものである。

25・26は剣先蓮弁文の底部資料である。2点とも腰部が張らずに、高台際からスムーズな曲線で口縁部に向かうものである。高台は方柱状につくり、疊付の外側を斜めに面取りしている。25は高台際に溝状のものを廻らしている。高台径は25が5.4cm、26が5.2cmを測る。25は高台際まで、26は高台内側まで施釉するが、25は高台外面まで釉垂れしている。2点とも薄めの施釉で、25は灰緑色の失透釉、26は焼成が不良なのか濁った感じの色合になっている。素地は灰褐色の粗いものであるが、26は橙褐色を呈す部分も見受けられる。

・第7種

第21図27に示す1点だけである。口縁部が外側へ開き気味になり、腰部がやや丸くなる器形が想定される。直口口縁で、口唇部は舌状を呈す。推算口径は約12cmで、比較的小振りの碗である。文様は外面の口縁部と胴部および内面の口縁部に3本の圈線を廻らし、外面の口縁部と胴部に廻らされた圈線間にはラフな格子目様の文様が配される。釉は暗緑色の比較的透明度のあるもので、内外面には貫入が多くみられる。素地は灰白色の粗いものである。

第21図28~32は底部の資料で、32だけが内底面に印花文を配さない。いずれも疊付外面を斜めに面取りするものであるが、28・31・32は削り出しが雑で高台外面に段差ができる。32は腰部がやや丸味を帯び、口縁部の方へ直方向に向かうものである。他は高台際で破損しており、腰部の状況などは不明。

高台径は28が5.8cm、29・31が5.4cm、30・32が5.6cmを測る。釉は28が深緑色、29が暗緑色、30~32が青緑色を呈す。30は比較的透明度のあるもので、他は失透性のものである。28・30・32は外底面は露胎で、29は外底面を蛇ノ目釉刺ぎしている。31は高台無釉である。30・32は内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は28・29が灰白色のやや細かなもので、30~32は灰白色の粗めのものである。

第21図33・34は内面に印花文を配す胴部の小破片で、器形や大きさなどは窺えない。2点とも暗緑色の失透性の釉を施し、素地は灰白色の粗いものである。

b. 小 碗

总数9点と量的には多くなく、内訳は口縁部が2点、胴部が6点、底部が1点である。時期的な面からみると14~16世紀頃のものと、18~19世紀頃のものが得られており、大半が後者に属するものである。この中から特徴的な1点を第21図35に示した。剣先蓮弁文を外体面に施すもので、器形的には剣先蓮弁文の碗と同様である。推算口径は約8cm。施文はヘラ彫りで、剣頭は波状に連続的に施され、剣頭と蓮弁は一致している。釉は深緑色で失透性のものを比較的薄めに施釉している。内外面に細かな貫入が密に認められる。素地は灰白色のやや粗いものである。15世紀後半~16世紀前半頃のものである。

c. 皿

总数82点と碗に次いで多く得られている。しかし、ほとんどが破片の資料で、全形の窺えるものは4点（第22図3・4・7・8）だけである。時期的な面からすると14~16世紀頃に属するようである。特徴的なものを第22図3~14に示した。以下に略述する。

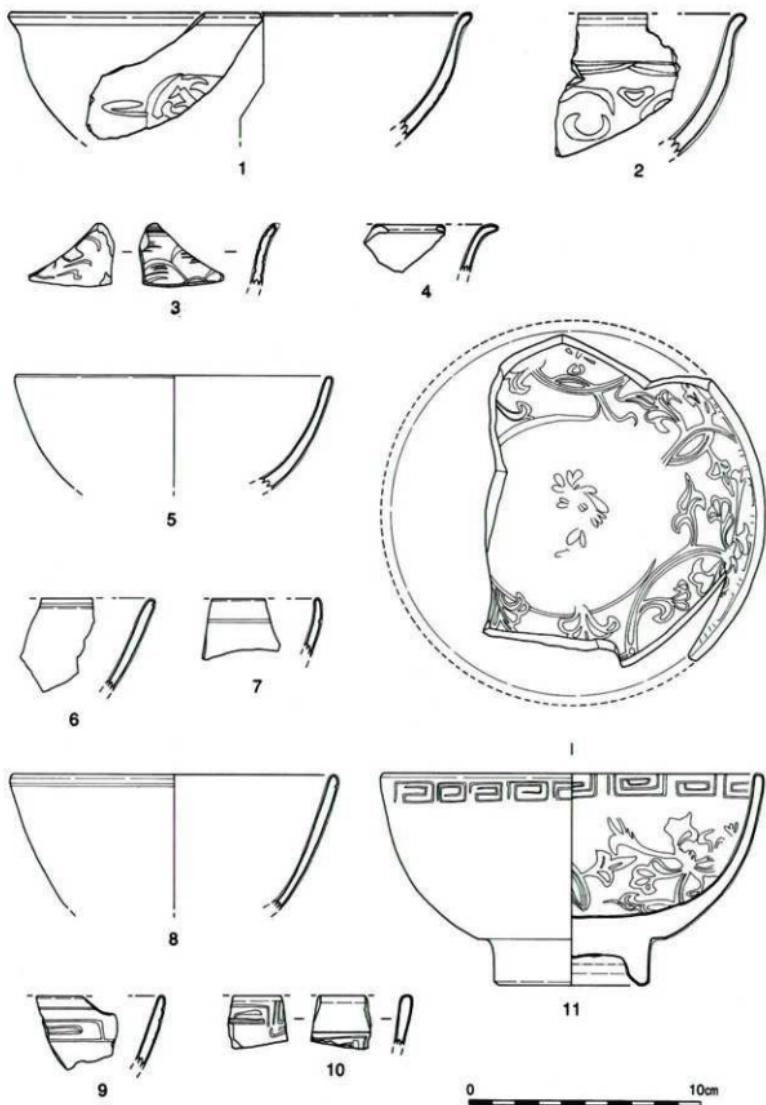
口縁部の形状からすると下記のように大別できるかと考えられる。

第1種一口縁部上端が若干肥厚するように仕上げるもの（3）

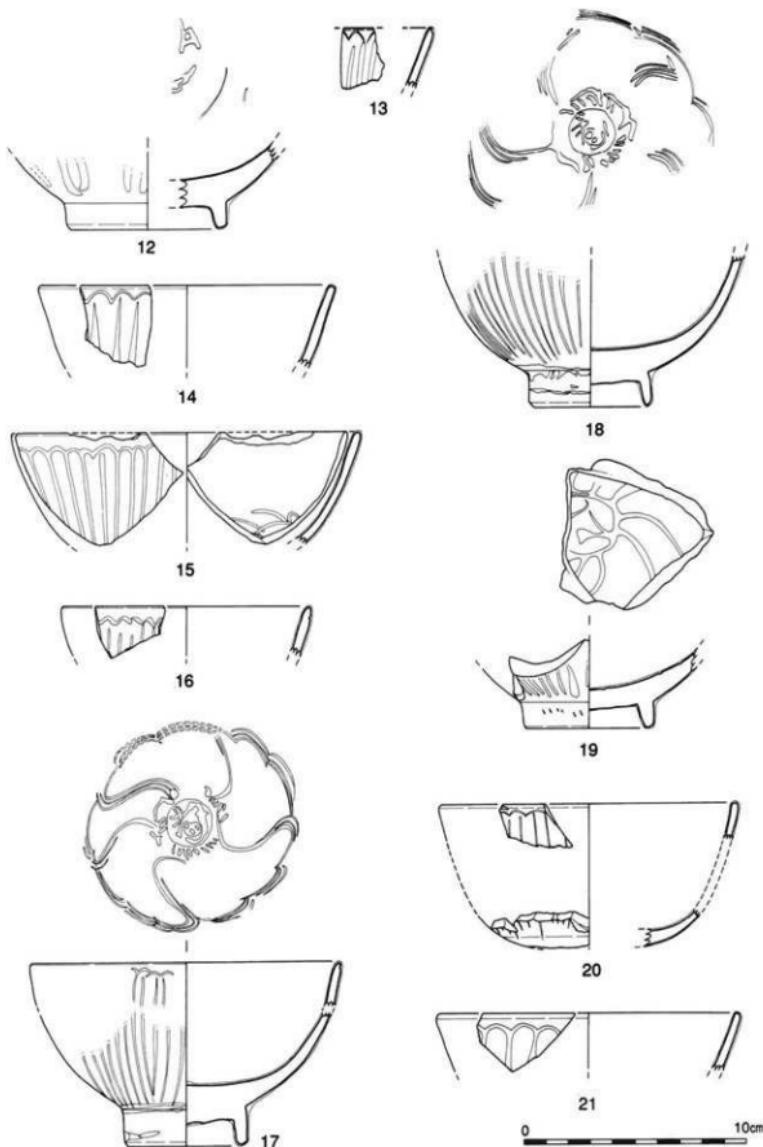
第2種一直口口縁を呈すもの（4・5）

第3種一口縁部上端が折れ曲がるように外反するもの（6）

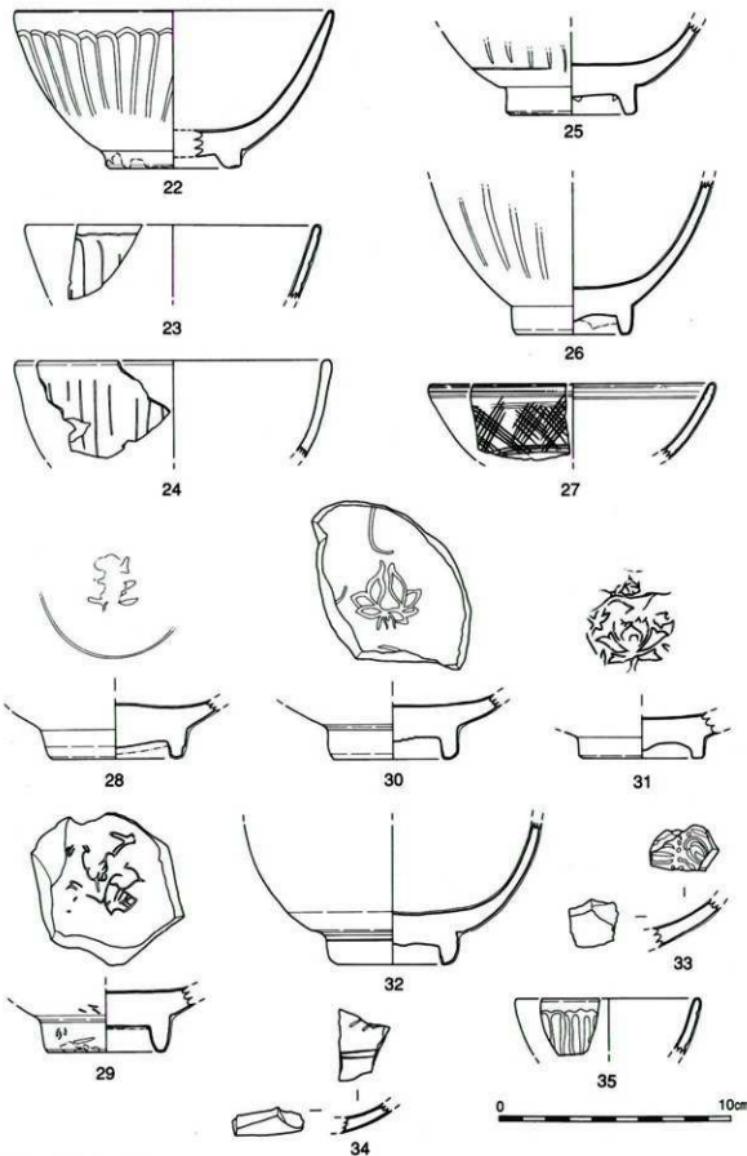
第4種一口縁部が外反し、口唇部が波状を呈す、いわゆる稜花皿のもの（7~11）



第19図 青磁 1 (碗)



第20図 青磁 2 (碗)



第21図 青磁 3 (碗)

以上の4種である。量的には第4種がほとんどで、他の種は僅少である。以下、種別に簡記する。

・第1種

特徴的なものを第22図3に示した。接合してほぼ完形の示せる資料で、口径が10.1cm、高さ2.7cm、高台径が5.5cmを測る。高台は疊付の方へ細くなるようにつくり、疊付は平坦に仕上げている。高台脇から口縁部の方へ直線的に開きながら向かい、口縁上端部を若干肥厚させる。口唇部は丸味を帯びるように整形している。また、内底面と内体部の境目に段差がみられ、両者を区切っているようである。文様は見受けられない。

釉は深緑色の失透釉で、内体部下半から内底面は露胎となっている。内体部上半から外面および外底面は全釉であるが、疊付部は釉を削り取っている。内外面に粗い貫入が認められる。内底面には重ね焼の際の熔着痕があり、外底面には繊維様のものが付着している。素地は乳白色のやや細かなものである。

・第2種

4・5に示したもののは本種に属するものである。4は全形の窺えるもので、5は口縁部の資料である。4は高台をやや外側へ開く感じで方柱状につくり、疊付外面を斜めに面取りする。高台際からゆるやかなカーブを描いて口縁部に向かい、口唇部は舌状を呈する。推算口径は約9cm、高さが3cm、高台径が4.8cmで、3よりもやや小さめである。文様はみられない。釉は青緑色の失透性のもので、内外面に細かな貫入が認められる。全釉のあと外底面の釉を削り取っているが、中央部に若干釉の部分が残る。素地は灰白色のやや粗いものである。

5は口縁部の立ち上がりが4よりも直方向になるもので、口唇部は舌状を呈す。口径の推算が約9cmで、4と似たような大きさのようである。無文。釉は深緑色の失透釉で、素地は灰白色のやや粗いものである。

・第3種

6に示したものが本種に属す。胸部からゆるやかなカーブできたものが、口縁部上端で折り曲げるよう外反する。口唇部は尖り気味につくる。小破片のため詳細は不明。釉は明緑色のやや透明度のあるものであるが、表面が風化のためか白色化している。そのため文様の有無については判然としない。素地は灰白色のやや粗いものである。

・第4種

いわゆる稜花皿のグループで、最も多く得られている。特徴的なものから5点を7~11に図示した。7・8は全形の窺えるもので、9は口縁部の、10・11は底部の資料である。器形的には高台際から若干水平方向に向かい、すぐに直方向に立ち上がり、体部がゆるやかな弧を描いて口縁部に至る。そのため、高台脇で比較的明瞭な稜をつくる。口唇部は7~9とも舌状に仕上げており、削りや抉りの配し方はそれぞれ若干異なるようである。高台のつくりをみると、7・10のように疊付の外面を斜めに面取りし、疊付を平坦にしあげるものと8・11のように疊付を斜めにつくるものが見受けられる。

大きさは全形の窺える7・8をみると、2点とも口径が約11cm、高さが約3cm、高台径が約5cmである。9の推算口径が約11cm、10の推算高台径が約6cm、11の推算高台径が約5cmとなっており、7・8の大きさは本種の一般的なサイズであったかと考えられる。文様は8~10のように内面に唐草文を配するものが普通のようであるが、7は口縁部上端に2本の平行線を描くだけである。外面は無文。内底面は7・8が無文で、10・11は破片のため不明。

釉は7が深緑色、8・10が暗緑色、9・11が青緑色を呈し、いずれも失透性のものである。11以外は内外面に細かく密な貫入が認められる。施釉の状況をみると7は高台内無釉で他は全釉、8は全釉のあと外底面を蛇目釉剥ぎしている。11は内底面を円形に釉剥ぎし、疊付から外底面にかけても露胎をしている。素地はいずれも灰白色のやや粗いものであるが、8・11は橙褐色を呈す部分も見受けられる。

第22図12～14に示したのは高台際で破損している底部資料である。12は高台疊付を平坦にし、その外側を斜めに面取りしているものである。推算高台径は約6cm。内底面に「惟」の字が認められる。釉は青緑色で割りと透明度があり、高台内面の中ほどまでの施釉である。そこから外底面にかけては無釉。内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は灰白色の粗いものである。

13は高台が完全に残るもので、疊付を斜めに整形している。高台径は5.6cm。内底面に印花文を施し、その中央部に「吉」の字が認められる。釉は青緑色のやや失透性のもので、内外面に細かく密な貫入がみられる。外底面を蛇目釉剥ぎしている。素地は灰白色の粗いものである。

14は基筒底の資料であるが、小破片のため全体的な様子は窺い得ない。内底面に七宝つなぎ文の一部が認められる。また、高台内側には1本の沈線が廻る。推算底径は約6cm。釉は深緑色の失透釉で、素地は黄白色のやや粗いものである。

d. 盤

30点近く得られているものの、ほとんどが小破片である。時期的な面からみるとほとんどが14世紀後半～15世紀前半頃のものようである。第23図6だけがある程度全形の窺える資料である。特徴的なものを第23図に示した。以下に簡記する。

口縁部の形状から下記のように分類してみた。

第1種—銅縁口縁で、端部を上方へつまみあげるもの

第2種—銅縁口縁で、銅を平坦にして銅端を稜花形にするもの

第3種—口縁部上端を僅かに外反させるもの

の3種に分けられるようである。以下、種別に略述する。

・第1種

第23図1に示すもので、推算口径は約27cmを測る。銅縁部の外面は若干削り込んで段差がつき、また、口唇外面部は凹面をつくる感じで仕上げている。内面には数本1組の櫛描きによる蓮弁文が施されるが、破片のため本数ははっきりしない。釉は深緑色で比較的透明度があり、内外面に粗い貫入が認められる。素地は灰白色のやや細かなものである。

・第2種

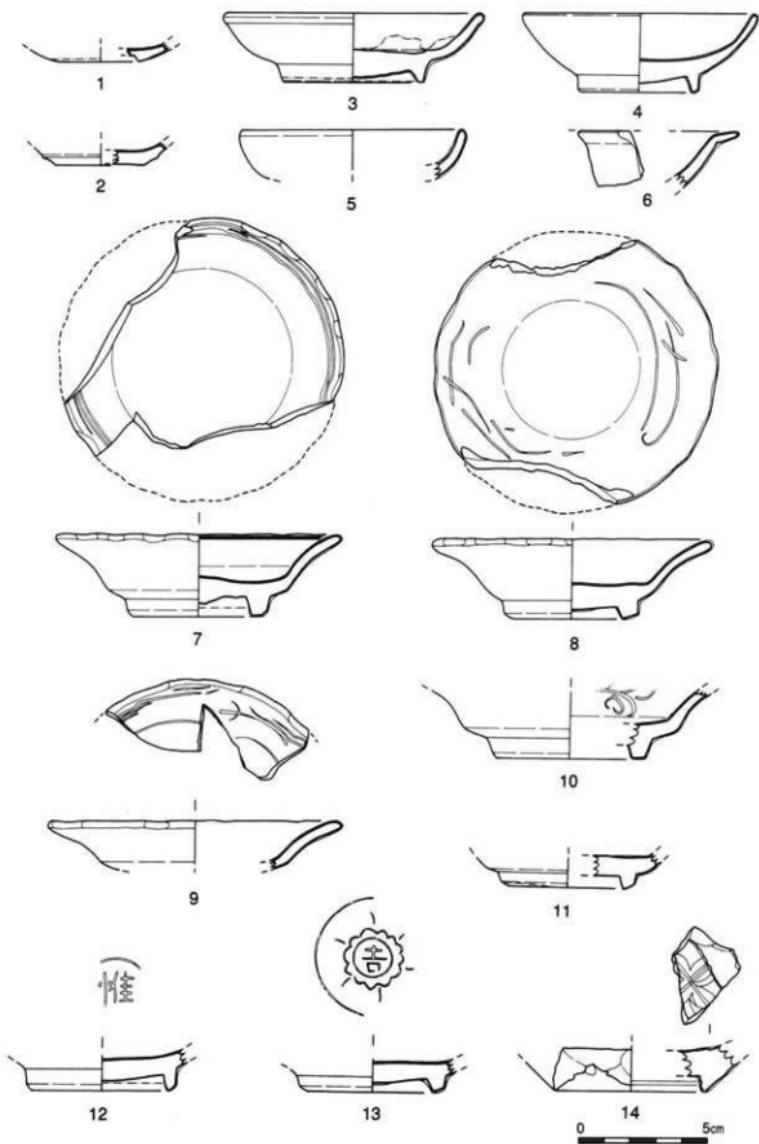
第23図2～5に示すものが本種に属す。銅縁部の上面はやや凹面気味に仕上げられており、長さには若干のばらつきが見受けられる。内面の稜は比較的明瞭なもの（2～4）、はっきりしないもの（5）がみられる。口唇部は2・4が平坦に整形し、3・4はやや丸く仕上げている。また、口唇部の抉りはゆるやかに配すもの（2～4）と間隔を狭めて配すもの（5）がみられる。

推算口径の算出できるものは2だけで、約22cmである。文様は2・3が口唇部の形状に沿う形で銅縁部に櫛描き文を施し、4は1本の沈線が廻る。5は無文。釉は3が暗緑色でやや透明度があり、他は青緑色の失透性のものである。3は細かく密な、4は粗い貫入が内外面にみられる。2は風化のためか釉の表面が白く濁っている。素地はいずれも灰白色のやや細かなものである。

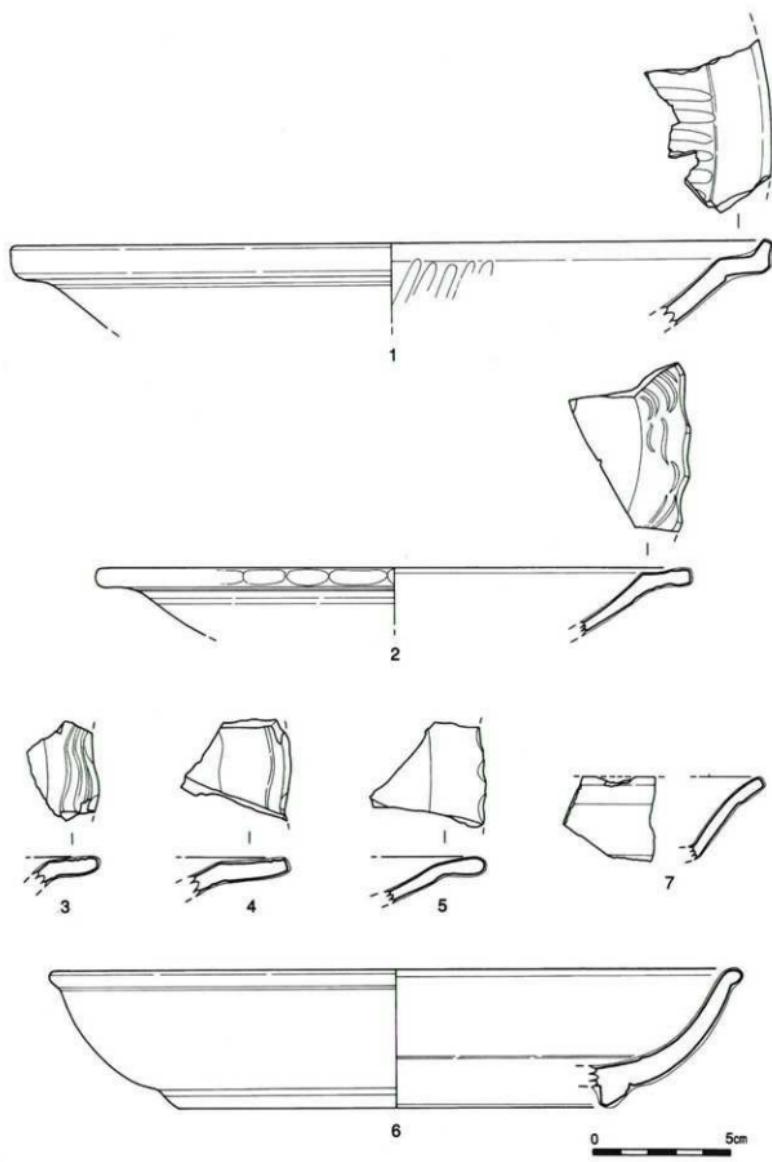
・第3種

6に示したものが典型的なものである。底面部の状況を除き、ほぼ全体の形状が窺える資料である。腰部が若干膨らむようにゆるやかな弧を描いて口縁部へ向かい、上端部を僅かに外反させる。口唇部は丸味を持って整形している。高台は低く、広くつくりだし、疊付は斜めにしている。内底面の下方では若干の段差がみられる。

大きさは推算口径が約25cm、高さが約5cm、高台径が約15cmを測る。残っている資料でみると無文で全釉。釉は暗緑色の失透性のものであるが、外面には灰黒色の部分が約1cm幅で半梢円形状に認められる。



第22図 青磁 4 (皿)



第23図 青磁 5 (盤)

灰黒色のラインで囲まれた箇所には気泡がみられ、内面にも部分的に気泡がみられる。素地は灰白色のやや細かなものである。

7は皿のようであるが、判然としないのでここに示した。外反口縁の資料で、外面の口縁部に若干の段差を設けアクセントをつけている。口唇部はやや平坦に仕上げている。釉は風化のためか渦り、色合は判然としない。素地はやや粗いもので、焼成不良のためか橙褐色を呈す。

e. 瓶

頸～胴部片12点、底部1点の13点確認できた。いずれも小破片のため器形や大きさなどの詳細は不明。ほとんど14世紀後半～15世紀前半頃のものようである。特徴的なものを第24図1～4に示した。1は頸部の資料で、推算の径は約2cm、残存部は約4cm。2・3は頸部から肩部にかけての資料で、2点ともナデ肩のものである。3は飾りの一部が残るもの、破損が著しく形状は不明。図は双耳として示した。2は上部の推算径が約3.4cm、下部の推算径が約7.0cm、3は上部の推算径が約4.4cm、下部の推算径が約6.4cmである。

3点とも資料の全面に施釉されている。1は内外面とも同じ厚みで施釉されるが、2・3は外面が内面より厚く施釉される。1は粗い貫入が、2・3は細かく密な貫入が内外面にみられる。素地はいずれも灰白色のやや粗いものである。

4は底部の資料で高台径は約7cmを測る。高台は外側へ開くようにつくられ、置付は平坦に仕上げ、その外側を斜めに面取りしている。外底面は中央部が下がり、内面は削り痕を明瞭に残す。釉は暗緑色の失透性で、本資料からすると全釉のあと置付とその外面を釉剥ぎしている。貫入は見受けられない。素地は灰白色のやや細かなものである。

f. 壺

2点だけ確認でき、1点を第24図5に示した。酒会壺の胴部片で、外面に蓮弁文が施される。小破片のため詳細は不明。釉は青緑色の失透性のもので、素地は灰白色のやや細かなものである。

第24図6～8は瓶か壺の胴部片である。（第1表では壺に含めた。）6は外面に花文を陽刻し、7・8は唐草文を施す。8は唐草文の上方に2本の横線が配される。いずれも内面より外面が厚く施釉されている。釉は6が深緑色、7が青緑色、8が黄緑色を呈し、3点ともやや透明度がある。8は内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は6・7が灰白色のやや細かなもので、8は黄白色のやや細かなものである。

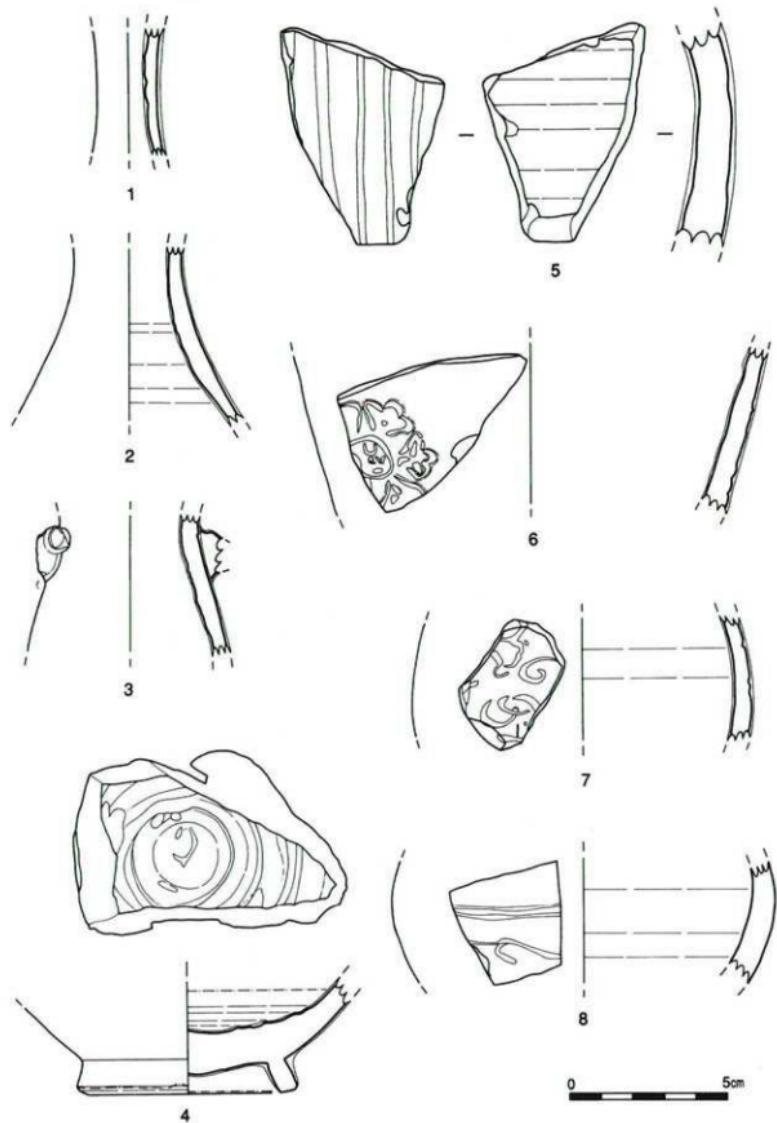
g. 小杯

本器種に属すかと考えられるものが4点得られている。第25図1・2に示すもので、2点とも口縁部の資料である。両者とも外反口縁で、1は口縁部上端が僅かに外反し、2は口縁部がラッパ状に大きく外反するものである。推算口径は1が約7cm、2が約6cmを測る。文様は1が内外面にヘラ彫りの、2が外面に線描きの文様が認められるものの、全体的な様子は判然としない。これらの特徴は行政棟地区から報告されているものとはほぼ似通っている。2点とも釉は灰緑色の失透釉で、素地は灰白色のやや細かなものである。

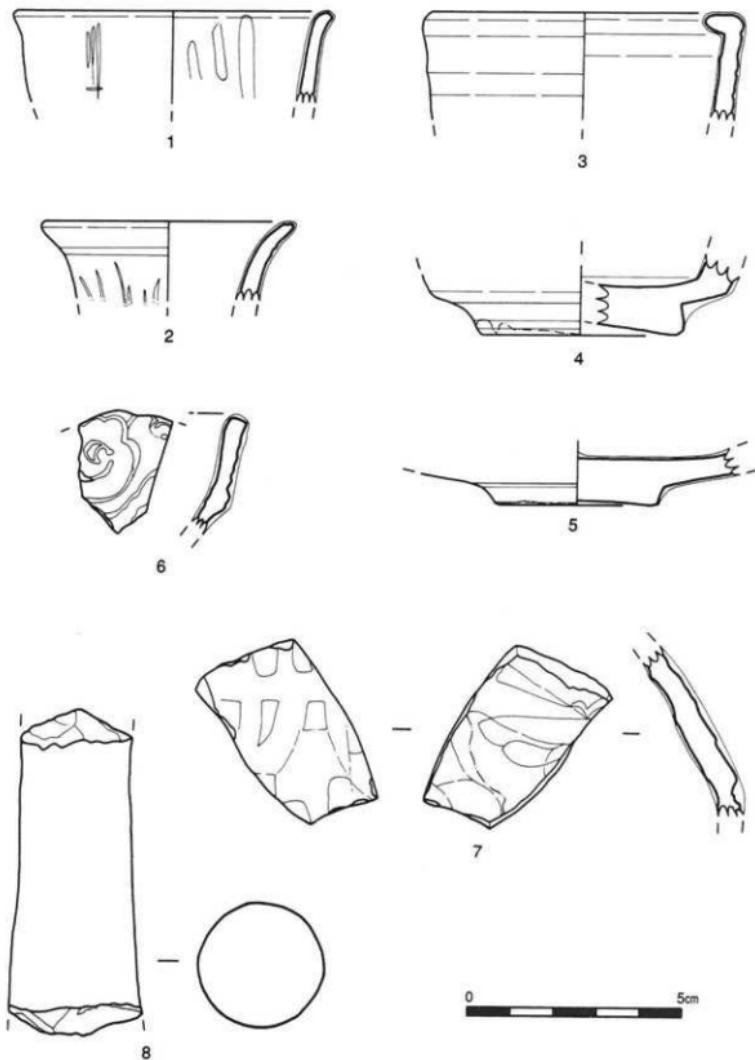
h. 香炉

6点確認でき、内訳は口縁部1点、胸部3点、底部2点である。そのうち特徴的な口縁部と底部を第25図3～5に示した。3は口縁部の資料で、上端が内側へ鉤状に折れ曲がるものである。推算の口径が約7cmを測る。風化のためか釉が白く渦り、器面の状況は判然としない。素地は橙褐色のやや細かなもので、全体の様子からすると焼成不良のものかと考えられる。

4・5は底部の資料で、高台径は4が推算約5cm、5は3.8cmである。4は腰折れのようで、その部分の推算径は約7cm。2点とも高台は低く、端部を斜めに面取りし、内削りが非常に浅い。両者とも足の有



第24図 青磁 6 (袋物)



第25図 青磁 7 (香炉・その他)

無は不明。釉は4が暗緑色でやや失透性の、5が淡緑色のやや透明度のあるものを施釉している。4が内底面・外底面とも露胎で、5は外底面だけが露胎である。4は外面に粗い貫入が認められ、内底面には熔着痕もみられる。5は内底面に付着物が数ヶ所に認められる。素地は2点とも灰白色のやや細かなものである。

第25図6～8は器種不明のものである。6は外面に陽刻による花文が描かれる口縁部の資料であるが、小破片のため器形や文様など全体的な様子はつかめない。釉は深緑色のやや失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。7は外面に縱位の幅広短線を廻らす脚部の小破片で、全体の状況は判然としない。裏面に明瞭な指頭痕を残し、下方には無釉の部分も見受けられる。釉は暗緑色の失透釉で、素地は灰白色の細かなものである。8は上下の部分が欠失した脚台部の資料かと考えられる。上端部の径が約2.5cm、下端部の径が約3cmで、下方がやや広くなる感じである。長さは約6cm。青緑色の失透性の釉を施し、器面に細かな貫入が密にみられる。素地は灰白色のやや粗いものである。

同図4は基筋底の資料であるが、小破片のため詳細は不明。器厚が約2mmとかなり薄手のつくりである。推算の底径は約3cmを測る。疊付周辺から外底面にかけては露胎にし、他は全釉のようである。青緑色の透明釉を薄く施釉し、内外面に細かな貫入がみられる。疊付周辺には砂粒の熔着も見受けられる。素地は灰白色のやや細かなものである。

同図5はベタ底の資料である。本品も小破片のため詳細は不明。器厚が約3mmと薄手のつくりで、推算底径は約3cm。内面だけ施釉されており、外面は露胎である。青灰緑色の失透気味の釉で、細かな貫入が認められる。素地は灰白色のやや細かなものである。

第2節 白 磁

総数660点余り得られているものの、ほとんど小破片で全形の窺える資料には恵まれていない。時期的にみると碗が圧倒的に多く、皿・小杯・小碗の順に減少し、小鉢と灯明具がそれぞれ1点づつ得られている。碗は17～19世紀のものが圧倒的で、皿は15世紀後半～16世紀のものが中心のようである。特徴的なものを第26図～第28図に示した。以下、器種別に簡記する。

a. 碗

過半数を越える出土量であるが、全形の窺えるものは第26図7に示す1点だけである。17～19世紀頃のものが中心で、15世紀後半～17世紀頃のものや12～13世紀頃のものがそれぞれ若干得られている。特徴的なものを第26図に示した。以下、時期別に簡単に述べる。

・ 12～13世紀頃のもの

第26図1～3に示したもので、いわゆる玉縁口縁の碗である。1は玉縁部が小さく、口唇部は尖る。玉縁部直下に約7mm幅の深い凹線状のものを廻らしており、玉縁部を誇張する感じになっている。2・3は玉縁部が大きなもので、2はやや扁平、3は厚みがある。2点とも口唇部は丸味を帯びる。いずれも口縁部が直線的に外側へ開くものであるが、小破片のため胴部以下の状況は不明。1は推算口径の算出ができる、約13cmを測る。

1・3は緑味のある灰白色の釉を施し、2は乳白色の釉を施釉している。素地は1が灰白色のやや粗いもので、2・3は灰白色の細かなものである。

第2表 白磁出土状況

器種	時期	部位	出土地					A区			B区			合計
			壁		第3層		下部	第4層	第5層	小計	第2層		第5層	
			第1層	第2層										
	12~13c	口縁部			1	2				3		0	0	3
		胴部					2			2		0	0	2
		口縁部								0		0	0	0
	15後半~16c	胴部						1		1		0	0	1
		底部	1	1	2					4		0	0	4
		口縁部	1							1		0	0	1
		胴部								0		0	0	0
		底部			1					1		0	0	1
	16c	完形			1					1		0	0	1
		口縁部								0		0	0	0
		胴部								1		0	0	1
		底部	1		1		1			3		0	0	3
	16~17c	口縁部								0		0	0	0
		胴部								1		0	0	1
		底部			1					3		0	0	3
	16後半~18c	胴部			3					3		0	0	3
		底部			3					3		0	0	3
		口縁部	1		6	26		2		35		0	0	35
	17~19c	胴部	3		54	45		4		106	7	7	113	
		底部	2		3	13				18		0	0	18
		口縁部	2		2					4	1	1	1	5
	18c	胴部	10							10		0	0	10
		底部	3	4						7		0	0	7
		口縁部	14	28	3					45	3	3	3	48
	18~19c	胴部	18	30	7					55	3	3	3	58
		底部	13	15	5					33	5	5	5	38
		完形			1					1		0	0	1
	14後~17(明)	口縁部			2					2		0	0	2
		口縁部	1	16	21		5	3	46	2	2	2	48	
	15後半~16	胴部	1	1	13	27		4		46	1	1	1	47
		底部	3	2	11	25		2	5	48	1	1	1	49
	16c	口縁部			1	1	1	2		5		0	0	5
		胴部	2	2						4		0	0	4
		底部	2		1					3		0	0	3
	16後半~17c	口縁部					1			1		0	0	1
		胴部					1			1		0	0	1
		底部			1	1				2		0	0	2
	17~18c	口縁部						1		1		0	0	1
		底部			1	1				2		0	0	2
	18~19c	口縁部			7	2	1			10		0	0	10
		胴部			1					1		0	0	1
		底部			2					2		0	0	2
	明治頃	底部			1					1		0	0	1
小皿	15~16c	底部			1					1		0	0	1
	明	口縁部			3					3		0	0	3
	15c	口縁部			1					1		0	0	1
	15~16前半	口縁部	1	2					2	5		0	0	5
		口縁部				3				3		0	0	3
	明末~18c	胴部			2					2		0	0	2
		底部			1					1		0	0	1
	清	口縁部	2	1						3		0	0	3
		胴部	1							1		0	0	1
		底部	1	2						3		0	0	3
	瓶	完形			1					1		0	0	1
	清	胴部			1					1		0	0	1
	壺	14後~17(明)	胴部		1		1		2		0	0	0	2
	トマト	18~19c	底部		1					1		0	0	1
		口縁部	1	6	7	1				15	1	1	1	16
		胴部	3	21	16	13				53	1	1	1	54
		底部			3	1				4		0	0	4
	不明	口縁部			4					4		0	0	4
		胴部			8	1				9		1	1	10
		底部			5				1	6		0	0	6
	明	底部					1			1		0	0	1
	明治以降	底部	1							1		0	0	1
	不明	胴部					6			6		0	0	6
		底部			1					1		0	0	1
	合計		18	133	236	218	1	23	11	640	25	1	26	666

・15世紀後半～17世紀頃のもの

胴部と底部が得られており、16～17世紀頃の底部3点を第26図4～6に示した。いずれも高台脇までの資料である。4は高台を低くつくり、疊付の外側を斜めに面取りしている。疊付は平坦にし、内側の削りは外側よりも深く、高台が開く感じで斜めに削られている。5・6は高台が疊付の方へ細くなっている。5は内底面の周囲に溝状の凹線を配し、体部との境目を明瞭にしている。高台径は4が5.4cm、5が5.2cm、6が約6cmである。

4は内底面および外面の高台脇から外底部にかけてを露胎にしている。5は内底面を蛇ノ目釉刺ぎし、外面は疊付だけを無釉にしている。6は全釉のあと疊付を釉刺ぎしている。5は疊付の周囲および内底面に重ね焼きの際の熔着痕が認められる。6は疊付の周辺に砂粒の熔着がみられる。4は白濁色の、5・6は乳白色の失透性の釉を施しており、5は光沢を有す。素地は4が黄白色のやや粗いもので、5・6は灰白色のやや粗いものである。

・17～18世紀頃のもの

第26図7～15に示したものである。7は唯一全形の窺える資料で、8～12は口縁部の、13～15は底部の資料である。7～11をみるとほとんど薄手のものである。

7は口径が13.6cm、高さが4.5cm、高台径が5.8cmを測る。高台径が大きく、高さの低い安定感のある資料である。高台脇から直線的に開いて口縁部に至り、上端部で僅かに外反し、口唇部を水平につくる。高台は広く、低く削りだし、疊付の外側を斜めに面取りしている。疊付は平坦。外表面には調整の際の削り痕が明瞭に残る。内底面および高台脇から外底面を露胎にしている。釉は灰白色の失透性のもので、外表面に細かな貫入が密に認められる。また、露胎にしている内底面や高台の周辺には赤みを帯びる部分も見受けられる。素地は乳白色のやや粗いものである。

8～12の口縁部をみると8～10は体部から口縁部へ直線的に開き、上端部で若干外反ぎみになるものである。8・9は口唇部が尖る。10は舌状につくった口唇部の内側を斜めに削っており、口縁部の内側に明瞭な稜を有す。いずれも外面に比較的明瞭な削り痕がみられる。8・9は推算口径の算出ができる8が約13cm、9が約15cmを測る。3点とも破片の全面に施釉され、8・10は黄白色の、9は灰白色の失透釉である。8・10は両面に細かく密な貫入がみられ、9は外表面とも破片の下方に粗い貫入が認められる。素地は8・10が黄白色のやや粗いもので、9は灰白色のやや細かなものである。

11・12は外反口縁の資料で、口唇部は11が尖り、12が丸味を帯びる。12は口唇部の両側を若干削り、明瞭な稜をつくる。11の推算口径は約12cm。2点とも破片は全釉で、縁味を帯びた灰白色の失透釉を施している。素地は灰白色の細かなものである。

13～15は底部の資料である。13は高台を方柱状につけ、外側の中央部から先端部側を階段状に削っている。疊付は平坦で、外側を若干斜めに面取りしている。推算の高台径は約5.6cmを測る。施釉される部分は見受けられない。素地は黄白色のやや粗いものである。14は高台を逆台形状に低くつくりだす。内側の削りが斜めになり、高台が外側へ開く感じになっている。高台の内側は外底面よりも深く削り、疊付は若干斜めに整形している。外面は高台脇から高台および外底面は露胎にし、内底面は蛇ノ目釉刺ぎしている。釉は暗灰色の透明釉で、内底面に重ね焼きの熔着痕が認められる。素地は灰白色のやや粗いものである。15は高台が疊付の方へ若干細くなり、疊付を斜めに整形している。推算高台径は約6cm。疊付と外底面、さらに内底面が露胎のようである。黄灰色ガラス質の透明釉を施しており、外表面に細かく密な貫入が認められる。素地は黄白色のやや細かなものである。

16・17は高台脇で角度をもって折れ曲がり、口縁部の方へ直線的に立ち上がっていくものである。16

は高台が逆三角形状で、疊付を斜めにしている。17は蛇ノ目高台をつくるもので、疊付の外側を斜めに面取りしている。推算の高台径は16が約4cm、17が約5cmであるが、高台脇の折れ曲がり部の推算径は2点とも約7cmを測る。16は外面の胴部中央付近に陽刻の細線が1本廻る。16は疊付、17は疊付および外底面を除き全釉である。16は乳白色の釉で、17はやや緑味を帯びたガラス質の透明釉を施す。素地は2点とも乳白色の細かなものである。16の類例資料が行政棟地区から報告されている。

b. 皿

総数170点余りと碗に次いで多く得られているものの、図上復元を試みたものが3点だけであり、ほとんどが小破片の資料である。本器種の場合、碗よりもやや古手のものが主体をなしており、注意される点である。特徴的なものを第27図に示した。1~15に示したものは15世紀後半~16世紀頃のもの、16・17は16世紀頃のもの、18・19は18~19世紀頃のものである。以下に簡記する。

15世紀後半~16世紀頃のものである1~15をみると、器形や施釉の状況などから次の3種に分けられるようである。

第1種一口縁部が内彌氣味で、方柱状の高台をつくり、外面の胴部以下を露胎にするもの

第2種一口縁部が内彌氣味で、切高台をつくり、全釉のもの

第3種一基筒底のもので、疊付を露胎にし、内底面を蛇ノ目状に釉剥ぎするもの

第4種一口縁部上端が外反し、高台は細くつくり、疊付を釉剥ぎするもの

第5種一胴部下半からゆるやかに外反し、高台は細くつくり、疊付を釉剥ぎするもの

量的には第4・5種のものが主流で、全釉のあと疊付部を釉剥ぎするものが多くなるようである。

第1種に属すものは1~3に示すものである。1は口縁部の、2・3は底部の資料である。1は推算の口径が約10cmを測り、口唇部は舌状になる。口唇部の内側に比較的明瞭な棱が認められる。白濁色の失透性の釉で、内外面に細かく密な貫入がみられる。素地は乳白色の細かなものである。2は推算高台径が約4cm、3は推算高台径が約3cmを測る。2点とも疊付外面を斜めに面取りし、外底面は円錐状に中央部が盛り上がる。両者とも釉は白濁色の失透性のもので、施釉されている部分には細かく密な貫入がみられる。2点とも素地は乳白色の細かなものである。

第2種は4・5に示すものである。4は全形の窺えるもので、口径の推算が約8cm、高さが約1.7cm、推算高台径が約4cmである。大きさからいえば小皿の部類に入るものである。口唇部は平坦につくる。高台の付け根まで切り込んでおり、図では4脚として示した。内底面には重ね焼の際の痕跡が認められる。釉はやや黄色味を帯びた白濁色の失透性のもので、素地は乳白色の細かなものである。5は高台径が約4cmを測る底部資料で、5脚をつくる。切り込みは高台の付け根までは及んでない。釉は灰白色のガラス質のもので、内底面には細かく密な貫入がみられる。また、内底面には5脚の重ね焼の際の痕が残る。素地は黄白色の細かなものである。

第3種は6に示す底部資料で、推算の底径は約3cmである。白濁色の失透釉で、内外面に細かな貫入が認められる。素地は黄白色のやや細かなものである。

第4種に属すものは7~11に示したものである。7は全形の窺えるもので、口径の推算が約9cm、高さが約2cm、推算高台径は約5cmを測る。小振りの資料といえる。口唇部はやや丸味を帯び、高台は疊付の方が内側へ傾く感じでつくられる。疊付の周辺には砂粒の熔着も見受けられる。灰白色の失透性の釉を施し、素地は灰白色の細かなものである。他は口縁部の資料で、いずれも推算口径の算出ができ、8・9は約14cm、10は約19cm、11は約11cmである。比較的バリエーションのある大きさとなっている。11は他の資料に比べ、深いイメージを与える。口唇部の形状は8がやや丸味を帯び、9・10は尖り気味、11は平坦に仕上げている。釉は8・11が白濁色の失透性のもの、9・10が灰白色の失透性のものである。素地

はいずれも灰白色の細かなものである。

12・13は底部資料である。12は疊付を平坦につくり、その外側を斜めに面取りするもので、13は疊付を斜めに整形するものである。推算の高台径は12が約6cm、13が約7cmと、いずれも7よりもやや大きめである。疊付の周辺には砂粒の熔着も認められる。釉は2点とも失透性のものであるが、12は白濁色、13は灰色味の強い灰白色を呈す。素地は12が乳白色の細かなもので、13は灰白色のやや粗いものである。

第5種は14・15に示す2点である。14は口唇部が舌状を呈し、底部は碁笥底状につくる。推算口径が約11.5cm、高さが2.5cm、推算底径が約6.5cmを測る。他の資料に比べ厚手のつくりである。釉は灰色味のある白濁色の失透釉で、素地は灰白色のやや粗いものである。15は薄手のつくりという点を除けば、口唇部形状や口径、釉・素地などの特徴は14とはほぼ同様である。

16・17は16世紀頃のものである。16は上端部が外反する口縁部資料で、口唇部を平坦に仕上げる。口唇部の周辺を釉刺ぎし、鉄釉を塗付している。小破片のため詳細は不明。釉は灰白色の失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。17は推算高台径が約11cmを測る底部資料である。高台は細く、やや内傾気味につくる。全釉のあと疊付の両側を斜めに削っており、疊付は尖り気味になる。内底は凹面を形成するようである。釉は白濁色の失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。

18・19は18～19世紀頃のものである。18は全形の窓えるもので、推算口径は約9cm、高さは2.5cm、推算高台径は約6cmを測る。高台は逆三角形状に低くつくり、腰部が若干膨らみ、口縁部上端で僅かに外反する。口唇部と疊付は丸味のある仕上げとなっており、両方とも全釉のあと釉刺ぎしている。疊付の内側には目砂の熔着が見受けられる。釉は乳白色の失透性のもので、素地は乳白色の細かなものである。19は直口口縁の資料で、推算口径は約9cmである。口唇部は尖り、18と同様その部分の釉を刺ぎとる。灰白色の失透性の釉で、素地は乳白色の細かなものである。

c. 小 碗

18～19世紀頃のものがほとんどで、型成形で口禿に類するものかと考えられる。特徴的な4点を第28図1～6に示した。1～3は口縁部の、4～6は底部の資料である。1は口縁部上端で若干外反するもので、2・3は直口口縁の資料である。3点とも口唇部が尖りその周辺は釉刺ぎされている。推算口径は1が約9cmで、2・3は約6cmである。同じ大きさのものが行政棟地区からも出土している。釉は1が白濁色の失透性、2・3は青灰白色の失透性のものである。素地はいずれも乳白色の細かなものである。

4～6は底部資料で、推定の高台径はいずれも4cm前後である。3点とも高台は逆三角形状で、4・5は疊付を釉刺ぎしている。また、4は外底面を露胎にしており、砂粒の熔着部も見受けられる。釉は4が青灰白色の、5・6が乳白色の失透性のものである。6は風化のためかやや茶色味を帯びる。素地は3点とも乳白色の細かなものである。

d. 小 杯

15～16世紀頃のもの、17～18世紀頃のものが得られている。量的には後者に属するものが多い。特徴的なものを第28図7～13に示した。以下に略述する。

7・8に示したものは15～16世紀頃のもので、八角小杯の口縁部資料である。口縁の山形部、胴部の面取り部が認められるもので、口唇部は平坦に仕上げている。7は8に比べ薄手である。小破片のため詳細は不明。2点とも黄灰白色の失透釉で、内外面に細かく密な貫入が認められる。素地は両者とも乳白色の細かなものである。

9～13は17～18世紀頃のものである。9は全形の窓えるもので、10～12は口縁部の、13は底部の資料である。9は推算口径が約3cm、高さが1.8cm、推算高台径が約1.4cmである。口縁部上端が若干外反するもので、口唇部は尖り気味になる。高台は逆台形状に低くつくる。乳白色の失透性の釉を全体に施すよう

である。疊付の周辺には砂粒の熔着が認められる。素地は乳白色の細かなものである。10・11も口縁部上端が外反するもので、11は比較的強く折り曲げるものである。11は推算口径の算出ができ約4.6cmを測る。2点とも灰白色の失透釉で、素地は乳白色の細かなものである。12は直口口縁の資料で、推算口径は約4cmである。口縁部上端の内側を斜めに削っており、そのため口唇部は尖る。灰白色の失透釉で、素地は乳白色の細かなものである。

13は底部の資料で、推算高台径は約1.8cmを測る。高台は逆台形状に低くつくる。全釉のあと疊付だけを釉刺ぎしている。疊付の内側には砂粒の熔着も認められる。釉は灰白色の失透性のもので、素地は灰白色の細かなものである。

e. 袋 物

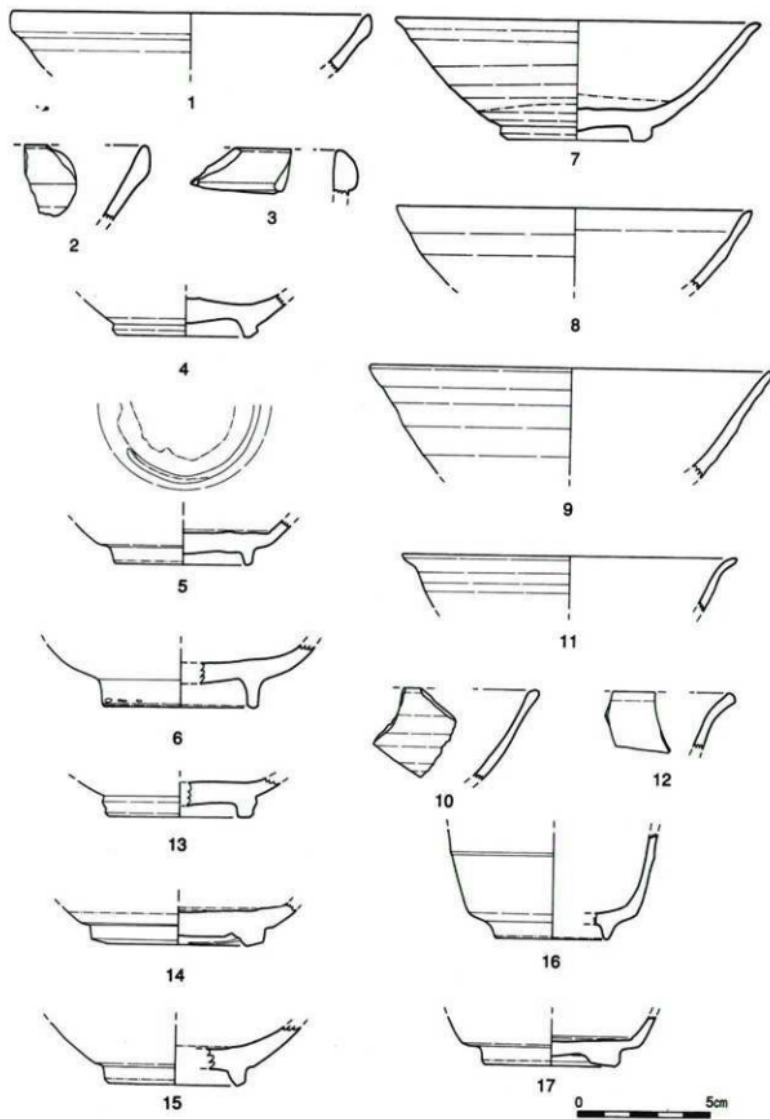
袋物になるかと考えられる資料が数点得られている。胴部と底部があり、口縁部は含まれてない。唯一の底部資料を第28図14に示した。高台脇から胴部の方へ直線的に外側へ開きながら向かうものである。高台はやや外側へ開き、疊付外面を斜めに面取りしている。疊付は平坦に仕上げ、安定感のあるつくりである。高台際をやや深く削り込み、外底面の削りは浅い。外面に調整痕が明瞭に残る。高台径は4.8cmである。

釉は綠味を帯びた灰白色の失透性のもので、本資料では内面にだけ施釉されている。細かく密な貫入がみられ、内底面には砂粒の熔着も見受けられる。素地は黄灰白色のやや細かなものである。

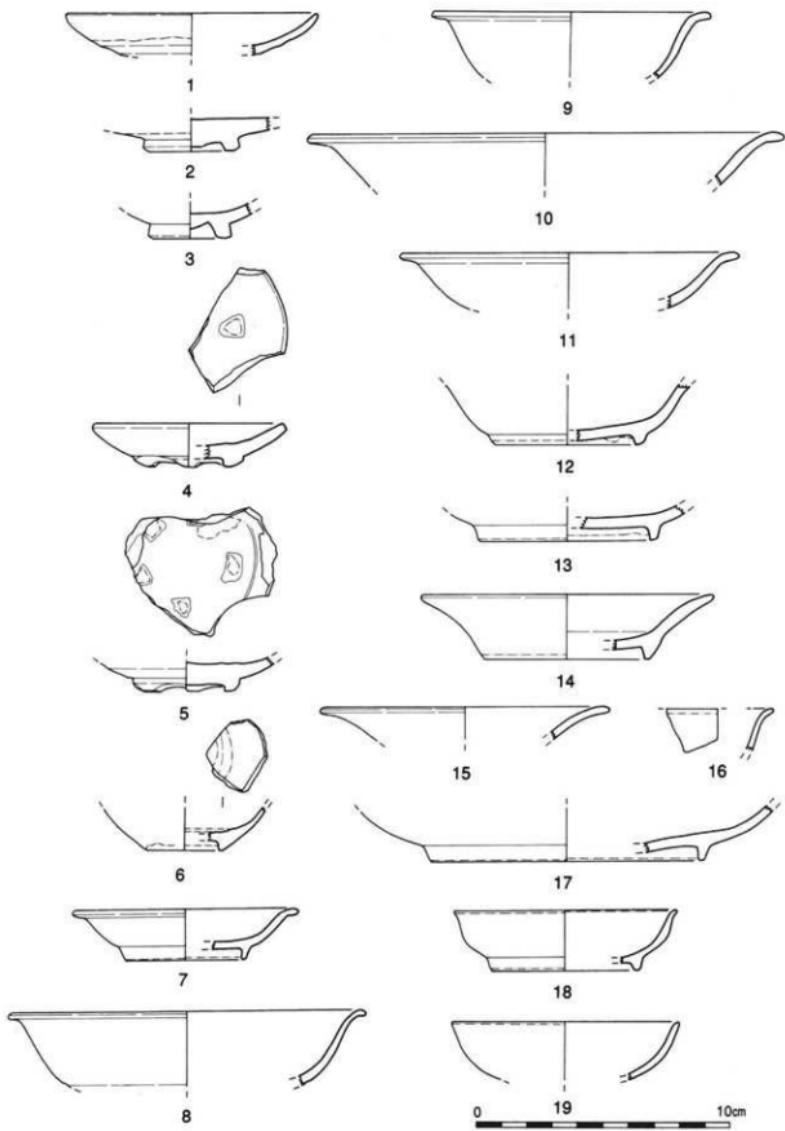
f. 灯明具

ヒヨウソクの底部が1点得られている。底径は3.5cmで脚部の高さは1.5cmを測る。底面部の方へラッパ状に開き、縁部を平坦に面を整えている。受け皿部の状況は不明。芯部は上部の方へ若干細くなる筒状につくり、一方側の面を半分割っている。高さは2cm、上端部の径が0.7cm前後、下端部の径が1.0cm前後を測る。底面は上げ底状になり、周縁部が地につく。中央部は直径0.6cm前後の孔がみられ、脚台部は空洞になっている。

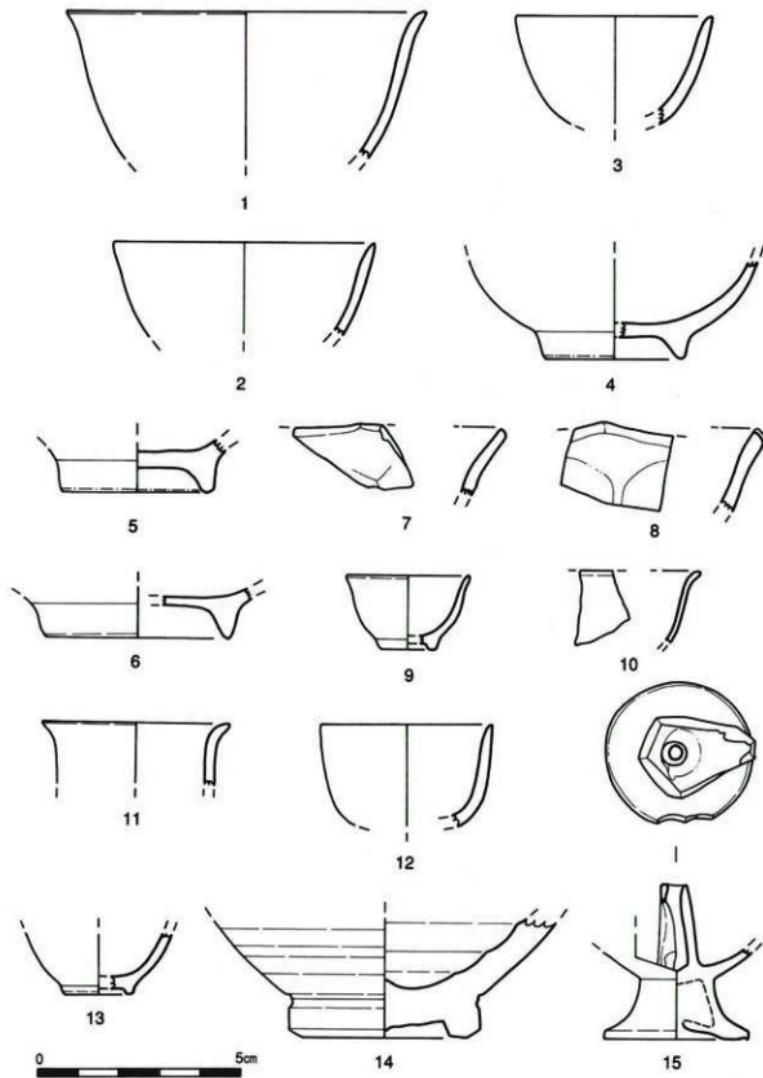
淡灰白色の失透性の釉が底面部を除き総釉されるようで、底面の縁には釉垂れがみられる。素地は乳白色の細かなものである。18~19世紀頃のものようである。



第26図 白磁 1 (碗)



第27図 白磁 2 (皿)



第28図 白磁 3 (小碗・杯・袋物・灯明具)

第3節 染付

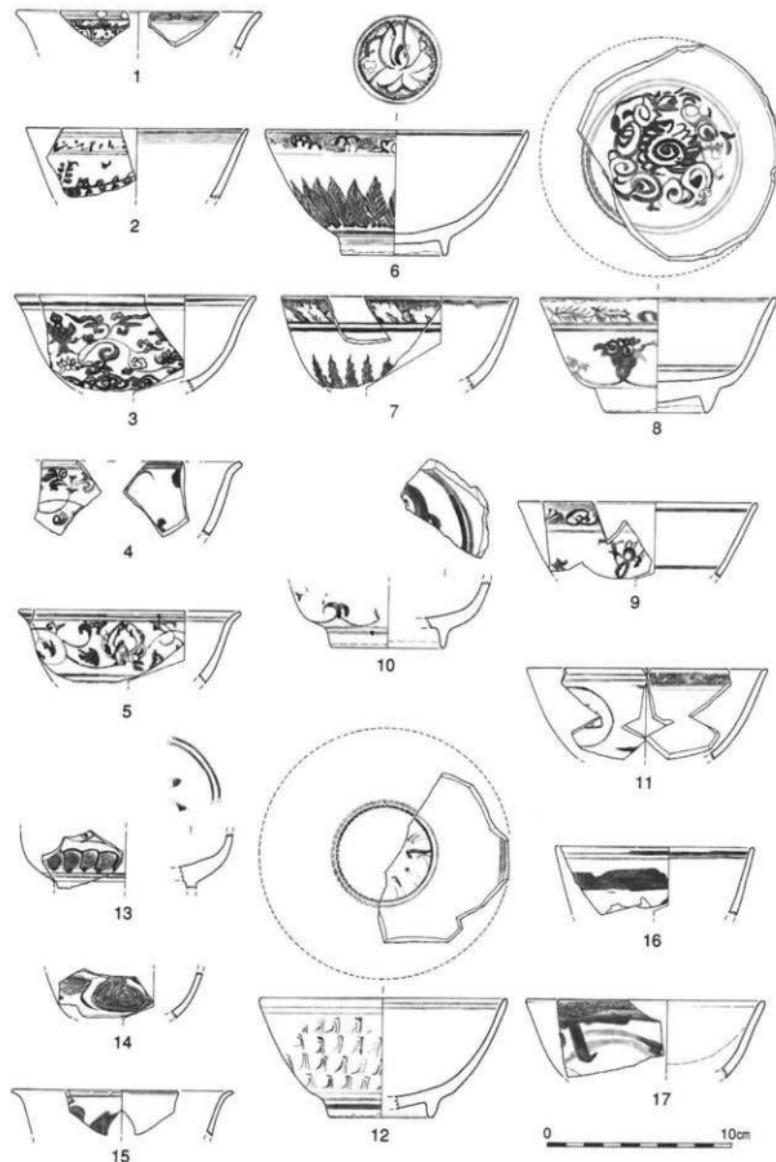
総数1350点と輸入陶磁器の中では最も多く得られているものの、ほとんどが小破片の資料であり、全形の窺える資料は碗や小碗・皿などに若干見受けられるだけである。得られた資料を時期的な面からみると15世紀後半～19世紀頃までと非常に幅があるものの、量的には17世紀後半以降のものが多いようである。以下、詳細は第4表の観察一覧に示した。

第3表 染付出土状況

出土地	場所	A区						B区			C区		
		第1 種	第2 種	第3 種	第4 種	第5 種	第6 種	小 計	第1 種	第2 種	第3 種	小 計	合 計
西陣	口縫部	7	2	18	25	2	5	58	1	1	1	66	
	脚部	4	12	24	17	4	2	116	3	3	123		
	底部	8	6	19	5	2	2	97	1	1	38		
	完形	2	1	1	1	1	1	5	0	0	3		
	口縫部	3						3	0	0	3		
	脚部	1	1	5				7	0	0	7		
	底部	2	7	52	17			75	2	2	78		
	完形	39	38	18				150	12	12	162		
	底部	27	2					29	6	6	35		
	完形	2	1					1	0	0	1		
	口縫部	3	29	30	12			71	1	6	1	83	
	脚部	5	65	65	19			149	10	10	144		
	底部	1	20	28	5			35	1	1	19		
	完形	2	1					0	1	1	1		
	口縫部	1	20	5				35	8	6	45		
	脚部	1	7					8	2	2	8		
	底部	2						2	0	0	2		
	完形	8	3					11	1	1	12		
	底部	2	1					2	0	0	2		
	口縫部	1	2	1				2	0	0	2		
	脚部	1	1	2				3	1	0	3		
	完形	1						1	0	0	1		
小鏡	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1						1	1	1	3		
	脚部	1						1	0	0	1		
	底部	1						1	1	1	3		
	完形	1						1	0	0	1		
	口縫部	1											

第4表a 染付觀察一覽

单位：cm

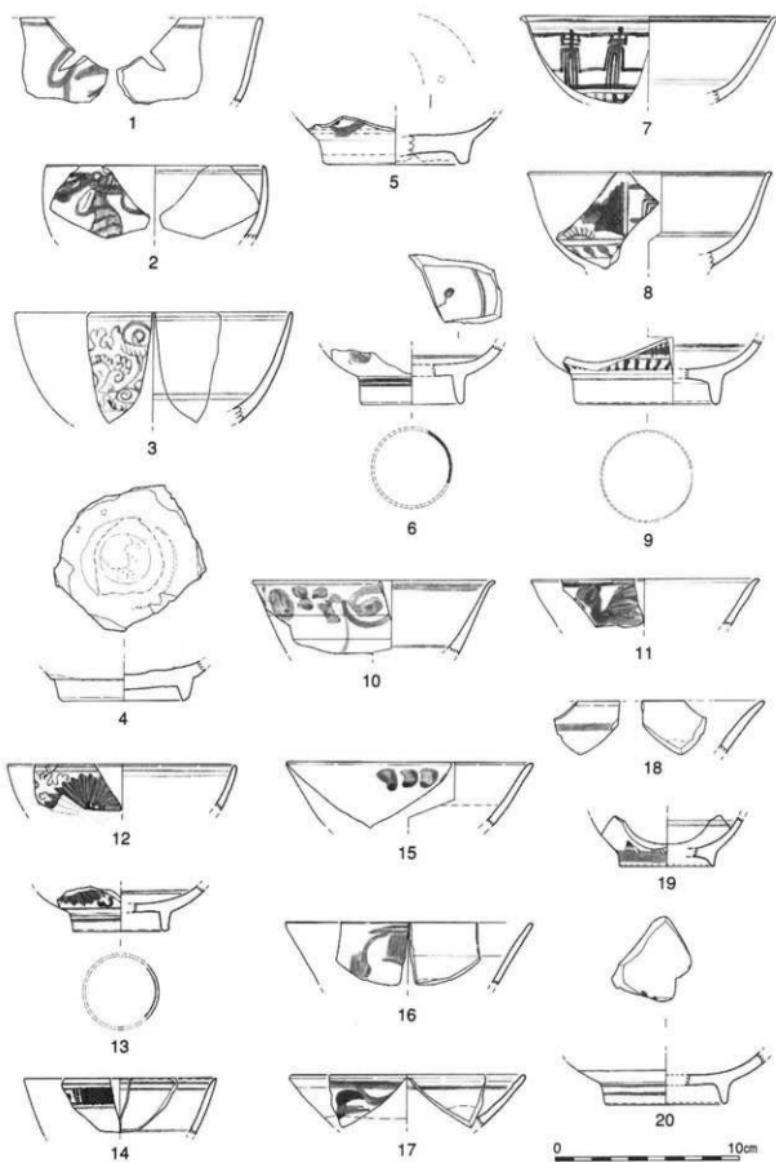


第29図 染付 1 (碗)

第4表b 染付観察一覧

単位: cm

回版	番号	部位	口径底径	特徴	年代	出土地	備考
1	鏡	口縁部	-	直口縁。種部から直線的に外側へ開きながら口縁部に至る。口 部は尖り気味になる。文様は口縁部の内外面に1本の男線を施す。 外側の種部には文字模様の文様がみられるものの、判然としない。	1TC後 半~18 C	A B C	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。灰色の 部分もみられる。呉須はやや絞味を帯びた発 色でない。素地は灰白色のやや粗いものである。 福建・広東系。
2	鏡	口縁部	11.8	直口縁。種部がほとんど底面に向う。口縁部は尖 り気味。文様は口縁部の内側に2本の圓線。外面に不明な文様が 認められる。	1TC後 半~18 C	B A C	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の發 色は純い。素地は乳白色で細かい。
4	鏡	底部	4.6	高台附から直線的に開きながら立ち上がるもので、高台は逆三角 形状につく。置付は斜めに仕上げる。	1TC後 半~18 C	A B C	青灰白色の釉が施され、外面は高台周囲まで、内 面と種部下方までと内底面中央部に施す。素地は 灰白色的細かいものである。
3	鏡	口縁部	15.0	直口縁。高台附からやわらかな弧を描いて口縁部に至る。口縁部は尖 り丸みを帯びる。文様は内側とも口縁部と種部下方にそれぞれ 2本の圓線を配する。	1TC後 半~18 C	A B C	青灰白色の釉で、外面には気泡が目立つ。破片の 全面に施す。呉須の發色は純い。素地は灰白色で 細かい。
5	鏡	底部	7.8	種部がある限りままで、置付に立ち上がりにくるものである。 高台は逆台形状をつくり、置付に立ち上がりで整形する。文様は外面の 種部に丸文の一部が認められる。	1TC~ A~30 IHC	B A C	淡青灰色の釉を施すが、置付とその外側及び高台 部と種部があり、内底面の中央部に施される のがこから種部は露地のようである。素地は黄白 色のやや粗いものである。
6	鏡	底部	5.4	種部がある限りままで立ち上がる。高台は置付の方へ斜く上 なるように高く、置付は平坦にする。置付の外側を斜めに 面取りしている。外側の高台部および内面の種部下方に界線を施す。 ナメ、内底面に草花文。外側の種部は部分的に施す。	1TC後 半~18 C	A B C	青灰白色の釉が置付を除き全施されているが、全 体に窺っている。呉須の發色は比較的の良好である。 素地は白褐色の細かいものである。
7	鏡	口縁部	14.2	外反口縁。種部のカーブがややくつく。直方時に立ち上がって口 縁部に向かう。置付は上端が若干不規則で傾く。文様は外側の種部に 蓮瓣文のくずれもの、胸部と舟文と花文を交互に配す。内面 部に2本の界線を施す。	1TC頃 I~31	A B C	青灰白色の釉が純い。素地は灰白色のやや 細かいものである。福建・広東系。
8	鏡	口縁部	13.2	外反口縁。種部のカーブがややくつく。直方時に立ち上がって口 縁部に向かう。置付は上端が若干不規則で傾く。文様は外側の種部に 蓮瓣文のくずれもの、胸部と舟文と花文を交互に配す。内面 部に2本の界線を施す。	1TC頃 I~30	A B C	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。呉須の發 色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。福 建・広東系。
9	鏡	底部	7.6	種部が比較的ないるを描いて立ち上がる。高台は割合く厚く、 高く、しゃりとくるよう。置付は内側に接着有す。置付は 半平に、両側に斜面に面取りしている。文様は高台部と内面種 部下方に2本の圓線。外底面に1本の界線、外底底部に舟字・梅 花散らし文を配す。	1TC頃 I~30	B A C	青灰白色の釉を純物のあと置付とその周辺を釉剥 がしている。呉須の發色はやや淡い。素地は乳白 色の細かいものである。
10	鏡	口縁部	13.2	外反口縁。種部から直線的に外側へ開いて口縁部に向かい。口縁 部は若干外反する。外反部はなく、内側に接着有す。口縁部 は丸味を帯びる。文様は外側の口縁部に通草文と草花文を配す。 内面の口縁部と種部に界線を配す。	1TC末 I~30	B A C	淡青灰色の釉が破片の全面にみられる。呉須の發 色は比較的の良好。素地は灰白色のやや細かいもの である。福建・広東系。
11	鏡	口縁部	12.4	外反口縁。種部から直線的に外側へ開いて口縁部に向かい。口縁 部はわざわざなく反する。口唇部は丸味を帯びる。文様は外側 部だけと口縁部に上の界線、底部に鳥文(?)が施される。	1TC末 I~34	A B C	淡青灰色の釉が破片の全面にみられる。気泡が目 立つ。呉須は純く発色し、黒ずむ部分がある。素 地は灰白色の細かいものである。
12	鏡	口縁部	11.9	直口縁。種部からスムーズな曲線を描いて口縁部に至る。口縁 部は平坦につく。文様は内側の口縁部に2本の界線を施す。 外底面に舟字の文を配す。	1TC~ I~31	A B C	淡青灰色の釉が破片の全面にみられる。呉須はや や緑色になる。内面は灰白色のやや 細かいものである。
13	鏡	底部	5.2	種部が若干膨らむので、高台は方柱性に高めにつくる。高台の内 面と中央部付近に若干凹凸、凹面をなす。置付は平坦で、そ の斜面を斜めに面取りしている。文様は外底の周囲、高台外 縁部下方および内面の種部下方に男線を2本施し、外側の 腕部に筋文を施す。	1TC~ I~31	A B C	淡青灰色の釉が施されるが、置付及びその外側を 釉剥ぎする。呉須は緑色っぽい発色では淡い発 色。素地は乳白色の細かいもの。
14	鏡	口縁部	10.4	直口縁。種部から外側へ直線的に外側へ開いて口縁部へ至る。口縁部 は斜めに整形している。文様は外側の口縁部に四方文字を配す。 内面の口縁部に舟字祥なども界線を配す。	1TC~ I~32	A B C	淡青灰色の釉を施す。口唇部は釉剥ぎする。呉須 の発色は淡い。素地は白褐色のやや細かいもので ある。型成形。福建系。
15	鏡	口縁部	13.4	直口縁。種部から口縁部へ直線的に開くもので、口縁部を舌状 につけた。文様は外側の口縁部に幅広の点状の文様を複数づつ 配す。	1TC~ I~34	A B C	青灰白色の釉を施すが、内面は脚部下半は露地の ようである。呉須の發色は純い。素地は灰白色の 細かいものである。
16	鏡	口縁部	13.4	直口縁。種部から直線的に開きながら口縁部へ向かうものであ るが、口縁部の近くに若干外側へ膨らむ。口唇部は舌状に仕上げ ている。文様は外側にのみみられる。	1TC末 I~31	A B C	暗灰白色の釉で外面は全面にみられるが、内面は 種部以下は露地である。呉須の發色は純い。素地 は灰白色のやや細かいものである。福建・広東系。
17	鏡	口縁部	12.8	直口縁。種部から直線的に外側へ開き口縁部に至る。口縁部は 尖る。内面の口縁部に舟祥など厚くなる部分がみられる。そ の直下に1本の界線を配す。外側には口縁部と福緒(約6mm)の 接線を施す。その下方に舟文と花文を施している。	1TC末 I~30	A B C	灰白色の釉を施すが、内面と外側とも脚部下 半は露地のようである。呉須は露地が多いのか縫 ぱく発色、黒ずむ部分あり。素地は灰白色の細 かいものである。福建・広東系。
18	鏡	口縁部	-	直口縁。種部から直線的に外側へ開く。口唇部は舌状を呈す。 文様は外側の口唇部下約1.5cmの箇所に5mm幅の椎輪を1本施す。	清	A B C	釉が白く漏らした感じで釉色は判然としない。呉須 は淡く発色するが、釉が漏っているため不明瞭。 素地は灰白色のやや粗いもの。脚部下は露地のよ うである。
19	鏡	底部	5.2	種部が膨らまざるにスムーズに立ち上がっていく。高台は逆三角形 状に外側へ開くようにつくる。置付は尖り気味。文様は高台外 縁部に筋線を施す。高台際に松葉文を留ます。内面は脚部 に幅広の界線がみられる。	18C~ I~21	B A C	青灰白色の釉を施す。置付の部分だけ釉剥ぎし ている。呉須の發色は淡い。素地は乳白色の細 かいものである。型成形のロハグ。福建系。
20	鏡	底部	6.4	種部が若干膨らむもののようで、高台は逆三角形状に幅く高くつ く。置付は尖り気味に整形している。文様は外側の種部下方、 高台外縁に界線を配す。内面は種部下方に界線を配し、内面に花 文を施すようである。	1TC頃 I~31	A B C	青白色的釉を施す。置付とその内側の釉を剥ぎ取 っている。呉須の發色は淡い。素地は乳白色の細 かなものである。



第30図 染付 2 (碗)

第4表C 染付観察一覧

単位:cm

版番	器種	部位	底径	高さ	特徴	年代	出土地	備考
1	小 口 縁 部	8.6	外反口縁。縁部から直線的に開きながら口縁部へ向かい、上端で比較的強く外反する。口唇部は平坦。文様は内外面の外反部に2本の界線を描く。外反の口縁部に部分的に施文する。	15C	A I-32 第3層	青灰白色の輪が全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は白褐色の細かいものである。		
2	小 口 縁 部	9.1	外反口縁。肩部から直線的に開きながら口縁部に至り、上端部が外反する。口唇部は平坦に仕上げる。文様は内外面の肩部に草花文。外面の口縁部に墨文文帯。内面の口縁部に墨文文帯。内面の口縁部に墨文文帯を配す。	15C~ 16C	A I-33 溝状通 焼土層 混じり	淡青白色の輪。呉須の発色は淡い。素地は白褐色の細かいものである。		
3	小 口 縁 部	9.6	直口口縁。縁部は直線ひずみスムーズに口縁に向かうもので、やや内側気味になる。口唇部は丸味を帯びる。高台は方柱状につくり、上端部が4.3と4.5に分かれ、外反の口縁部に2本の界線、肩部に花唐草文を配す。内面は口縁部に1本、見込みに2本の繩線を施らし、内底面にも施文する。	16C前 半~16 C中頃	A I-51 第5層 焼土層 混じり	淡青白色の輪を縦輪のあとと墨付及びその両面を輪刺ぎしている。呉須は淡く、発色。素地は乳白色の細かいものである。		
4	小 口 縁 部	8.2	直口口縁。縁部からやるやかにカーブし、口縁部へ直線的に立ち上る。口唇部は丸味を帯びて仕上げる。高台は5段の逆台形状につくり、上端部が4.2と4.4に分かれ、墨付は平坦にする。文様は外面の口縁部に四方桜文様の文字を配す。	16C後 半~17 C前半	A I-31 第3層	青灰白色の輪を縦輪のあとと墨付を輪刺ぎする。高台の内外に砂粒の着が多い。呉須の発色淡く、黒ずむ部分あり。素地は乳白色の細かいものである。		
5	小 口 底 部	3.6	高台はやや内傾する感じで、刺と縦ぐつくるられる。墨付は斜めに仕上げる。文様は外面の高台筋、高台筋、高台外面に墨線を施らし、内底面に樹下花草文を配す。	16C後 半	A I-31 第3層 黄褐色 混じり	淡青白色的輪を施したあとと、墨付を輪刺ぎする。呉須の発色は淡い。素地は白褐色の細かいものの外底面に字を配すが「富」だけが確認できる。		
第 6	小 口 縁 部	8.1	外反口縁。縁部が丸味を帯び、そこからほぼ直方向に立ち上がり、口縁部上端で外反するもの。口唇部は平坦に仕上げる。文様は外側の口縁部に1本の界線を施す。内面に梵文文配す。	16C後 半~17 C	A I-32 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は白褐色の細かいものである。		
	7	小 口 縁 部	11.4	直口口縁。肩部からやるやかな底を置いてやや直方向に口縁部へ至る。口唇部は丸味を呈す。文様は内外の口縁部に1本の界線を施す。外側の肩部に梵文文配す。	16C~ 17C前半	A I-34 第2層	青灰色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや純い。素地は乳白色の細かいものである。	
8	小 口 底 部	4.4	高台はやや内傾する感じで、刺と縦ぐつくるられる。墨付は斜めに仕上げる。文様は高台外筋、外底面に2本の界線を施す。内面に梵文文配す。	16C~ 17C前半	A I-32 第2層	淡青白色的輪を施すが墨付部は輪刺ぎしている。呉須の発色は純い。素地は乳白色の細かいものである。		
	9	小 口 縁 部	8.8	外反口縁。廉手のもので、縁部下方に段を設ける。段の部分からゆるやかにカーブし、外側へ開き気味に口縁部へ向かい、口縁部は若干外反する。口唇部は平坦にする。段の下では厚くなる。文様は外面にだけみられ、口縁部には2本、段の部分に1本の界線と文字を配す。	清朝	A I-33 第2層	淡青白色的輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は良好である。素地は乳白色の細かいものである。並地振糸。	
10	小 口 縁 部	—	直口口縁。縁部からやかにカーブして口縁部に寄る。口唇部は尖る。文様は外側の口縁部に1本の界線を施す。内面に梵文文配す。	17C~ 18C	B I-28 赤褐色	淡青白色的輪を施すが、口唇部は輪刺ぎしている。呉須の発色はやや淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。		
	11	小 底 部	4.8	縁部からやや丸味を帯びる。高台は透三角形状につくり、墨付は斜めに仕上げる。文様は外面の高台筋1本の界線、高台筋に墨井と墨井に2本の界線と文字を配す。	18C	B I-29 明系	青灰色の輪を縦輪のあとと、墨付部を輪刺ぎしている。呉須の発色は純い。素地は白褐色の細かいものである。	
12	小 口 縁 部 ある い は 小 杯	9.7	外反口縁。縁部から口縁部へほぼ直線的に至り、上端部をゆるやかに外反させる。口唇部は尖る。文様は外面の口縁部に2本の界線、肩部に2本線による草花文を配す。	18C~ 19C	A I-32 第3層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かいものである。		
13	小 口 縁 部	9.4	外反口縁。肩部から口縁部の方へ大きく外反するもので、口唇部は平坦に仕上げている。文様は外面の口縁部に1本の界線を施す。内面に梵文文配す。内面は口縁部に四方桜文様の文様を配す。上方の界線は口唇部までおよんでいる。	18C~ 19C	A I-34 焼土層	淡青白色的輪が破片の全面にみられる。細かな気泡が密にみられる。呉須の発色は比較的良好である。素地は乳白色の細かいものである。		
14	小 口 縁 部	8.6	外反口縁。縁部はそれほど膨らまずに口縁部へ向かい、上端部で若干外反する。口唇部は尖り気味。文様は内面の口縁部と縁部、外面の口縁部と高台に界線を施す。外側の肩部には唐草文を配す。	19C	B I-10 第2層	青灰白色的輪を縦輪のあとと口唇部の輪を剥ぐ。呉須はやや緑味を帯びて発色。素地は乳白色の細かいものである。福建系。		

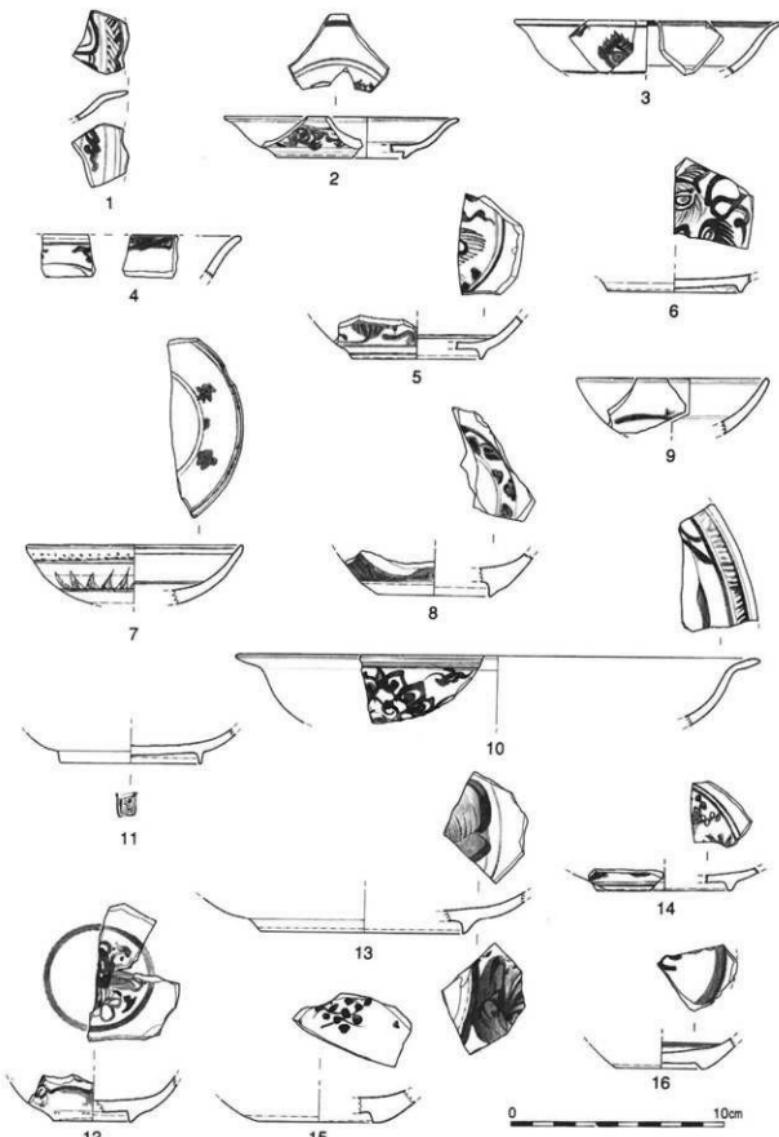


第31図 染付 3 (小碗)

第4表d 漆付観察一覧

単位: cm

版 面 番 号	書 類 部 位	口沿 底座 蓋部	特徴	年代	出土地	備考
1	四 方 縁 部	口折れの棲花器。口折れ部の縁は不明瞭。内側脚部は若干の凹凸を形成。その凹面と口唇部の抉り部が一致するようである。口唇部は平用にいる。文様は内面の口折れ部に草花、脚部に唐草文、脚部の内側に墨書き文を配し、口部に2重墨を配り、つなぐ。	14C後 ～15C 前	表探	淡青白色の軸が破片の全面にみられる。呉須の発色はやや淡く、黒ずむ箇所もみられる。素地は灰白色のやや細かいものである。	
2	四 方 底 部	11.4 6.1 1.9	外反口縁。裏面が丸みを帯びる。高台側の脚部の内側に墨書きがあり斜度をもつてつくり、内側の面はほぼ同じに削る。呉付けはなく、平坦に上げる。文様は外面部の口縁部、脚部、高台側に界線を隔らし、内面に墨書き文を配す。内面は口縁部に1本、内底面の脚部に2本の墨書きを施し、内底面にも墨書きする。	15C後 半～16 C中葉	A A-32 C中葉	青灰白色の軸を施し、墨付およびその外側、外底面の周辺までを釉削ぎする。呉須の発色は淡く、黒ずむ部分あり。素地は淡灰白色のやや細かなものである。
3	四 方 縁 部	11.4 6.1 1.9	外反口縁。裏面が丸みを帯びる。高台側の脚部の内側に墨書きがあり斜度をもつてつくり、内側の面はほぼ同じに削る。呉付けは丸味を帯びる。文様は内面に墨書き文を配す。内面は口縁部に1本、内底面の脚部に2本の墨書きを施し、内底面にも墨書きする。	15C後 半～16 C中葉	A A-32 C中葉	やや緑味を帯びた淡灰白色の軸が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡く、緑味を帯びる。素地は乳白色の細かなものである。
4	四 方 縁 部	11.4 6.1 1.9	外反口縁。口縁部に上掛がゆるかに外反するもので、口唇部は尖る。外反部の外側面をやや深く削り、そのため最も深い部分となる。文様は外面部に界線と墨書き、内面の口縁部に四方墨文が中間部に記される。	15C後 半～16 C中葉	A A-32 C中葉	淡青白色の軸が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は淡灰白色のやや細かなものである。
5	底 部	8.1	脚部がほとんど伸びたままで立ち上がっていくもので、高台は逆三脚形につく。脚部ははく、平坦である。文様は外面部の脚部に内相墨書き、高台外面に2本の界線、内面の脚部下方に2本の界線。内底面は玉筋墨文を配す。	15C後 半～16 C中葉	A A-32 C中葉	やや緑味のある淡青白色の軸を施し、墨付およびその内側を釉削ぎする。呉須の発色は淡い。素地は淡灰白色の細かなものである。
6	底 部	6.3	高台は墨書きの方々右側にくるようにつくる。呉付けは平坦に仕上げる。文様は高台外面に界線を配すが、その部分の軸が厚く不明瞭。内底面は墨書き文である。	15C後 半～16 C中葉	A A-32 C中葉	青灰白色的軸を施し、墨付およびその周辺を釉削ぎする。高台内側周辺には砂粒の着色も見受けられる。呉須の発色はやや淡く、黒ずむ箇所もみられる。素地は淡灰白色の細かなものである。
7	四 方 縁 部	10.4 6.3	基部底。ゆるやかな弧を描いて口縁部へ至る。直口口縁で口唇部は丸く仕上げている。文様は外面部の口縁部に波浦文等、脚部に墨書きを配す。内面は口縁部に波浦文でなく。脚部に人形を配し、そのまま下方に2本の界線を施す。	15C末 ～16C 中葉	A A-31 C第3層 下部砂 漠じり	青灰白色的軸を施し、外面の腰部下方に墨軸の切れ目がみられる。呉須の発色は淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。
8	底 部	3.8	基部底。文様は外面部に墨書き文を施す。内底面の周辺には開孔をあけて界線を隔らし、その中に墨書きの小文様を互い違いに施してある。内底面の墨の界線は2本。	15C末 ～16C 中葉	A A-31 C第3層 下部砂 漠じり	青灰白色的軸を施し、腰部下方から底部内側半分などを釉削ぎする。呉須の発色は純い。素地は乳白色の細かいものである。
9	四 方 縁 部	8.2 6.3	直口口縁。腰部がゆるやかな弧を描いて口縁部に至る。口唇部は平坦にして、内面の脚部下方には2本の界線を施す。外面脚部には折れ墨の文様を施す。	15C後 半～16 C中葉	A A-31 C第3層 下	淡青白色的軸で、細かい気泡が目立つ。破片の全面に施削されている。呉須の発色はやや緑味を帯びる。素地は灰白色のやや細かなものである。
10	四 方 縁 部	6.3	折れ墨の口縁。腰部はそれをほどこしながら、やや正面方に立ち上がる。高台は墨書きで口唇部を仕上げている。文様は内面の折れ墨線に四方墨文と2本の界線、脚部に墨書き文を配す。外面上には折れ墨部に3本の界線、脚部に牡丹唐草文を施す。	16C	A A-32 C中葉	青灰白色的軸を絞ねるのと口唇部を釉削ぎする。口唇部にはさび軸を施す。いわゆる口紅タイプ。呉須の発色は淡い。素地は灰白色のやや粗いものである。景徳鎮系。
11	底 部	6.6	高台際からスムーズなカーブで立ち上がる。高は細く逆三角形状につくり、内側の面はほぼ垂直で中央に二重縁で四角に墨取りされた中に「福」字を書いている。	16C	第3層 下部 施土 漠じり 溝状遺 構	淡青白色的軸を施しており、墨付と高台内側半分を釉削ぎする。外底面の呉須はやや粗がって発色。素地は乳白色のやや細かなものである。
12	底 部	3.6	高台際からゆるやかな弧を描いて脚部に向う。高台は墨書きの方へ傾く。墨軸がやや濃くなる感じがあるが、くぼみ墨で施す。呉付けは平坦で、その外側を斜めに面削りする。文様は外面部の脚部に草花文、内底面に1本の墨書きとその中に十字墨文を施す。	16C前 半～17 C前半	A A-32 C中葉	軸は青灰白色でやや濃った感じのものである。墨付およびその周辺を釉削ぎする。内底面には細かい蜜入があり。呉須の発色は淡く、丸点の部分は黒ずんでいる。素地は墨書き文のやや細かなものである。
13	底 部	—	高台際からゆるやかな弧を描き、やや外側へ開き気味に立ち上がりっていく。高台は逆三角形状につくり、やや内側へ傾く。文様は内底面、外底面の脚部に花文を配し、外面部の高台際に1本の界線、内底面の周縁に2本の界線を施すようである。	16C前 半～17 C中葉	A A-32 C中葉	やや緑味を帯びた青灰白色的軸で、墨付の周辺を釉削ぎする。呉須の発色は純い。素地は灰白色のやや粗いものである。
14	底 部	6.4	高台を逆三角形状に墨書きの方へ傾く。内側の面はほぼ垂直にし、外側の脚部は斜めになっている。そのため高台は内側へ傾くする感じになっている。呉付けは平坦にして、脚部を若干斜めに面削りする。文様は外面部の脚部に草花文、高台外側に2本の界線を配し、内底面に2本の界線と梅竹文が認められる。外底面にも界線の一筋がみられる。	16C後 半～17 C前半	A A-31 C第3層 黄褐色 混じり	淡青白色的軸を施し、墨付およびその周側を釉削ぎしている。呉須の発色は淡く、丸点の部分は黒ずんでいる。素地は灰白色のやや細かなものである。景徳鎮系。
15	底 部	5.4	基部底。文様は内底面に梅文のような文様がみられる。	16C	A A-31 C第4層	青灰白色的軸を施す。腰部下方から墨付まで釉削ぎする。呉須の発色は純く、丸点の部分は黒ずんでいる。素地は灰白色のやや細かなものである。
16	底 部	4.2	基部底。文様は内底面にだけられ、幅広の界線とその中に施文している。破片のため文様は不明。	14～17 C前	A A-32 C第3層	青灰白色的軸を施し、腰部下方から墨付、外底面まで露呈する。呉須の発色は純い。素地は灰灰白色的やや細かなものである。

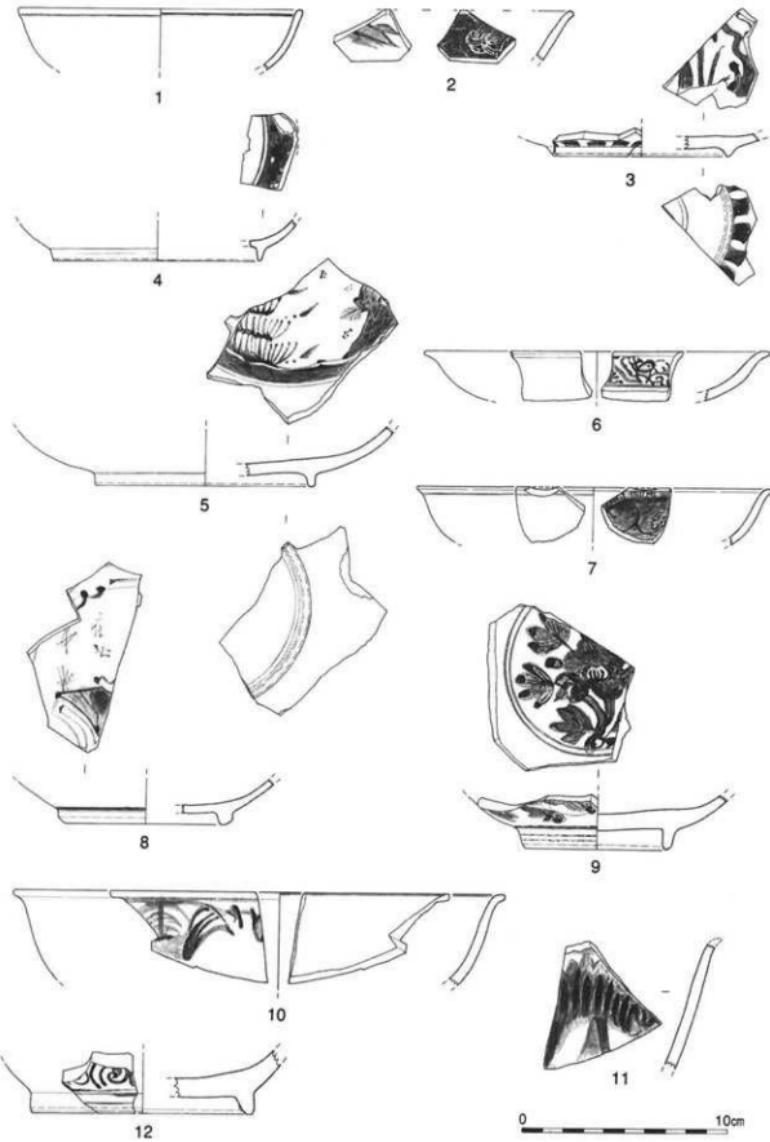


第32図 染付 4 (Ⅲ)

第4表e 染付観察一覧

単位:cm

回版	番号	部位	口縁底延長	特徴	年代	出土	備考
1	1	口縁部	13.8 ? 時期 高さ	直口縁。腰部がほとんど強らずにやや直方向に口縁部へ至る。 口唇部は丸を帯びる。文様は内外面の口縁部に1本の界線がみられる。	17~18	A	淡青白色の輪で若干圍った感じがする。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	17C~	A	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色のやや粗いものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色のやや粗いものである。
2	2	口縁部	8.4 底部	直口縁。腰部から口縁部へ直線的に開くもので、口縁部を若干厚くする。 - 直口縁。口唇部は丸くなる。文様は内外面にダイ 技法による花文を配し、外側には波文文 ² を描かれる。	17C~	A	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色の細かなものである。
3	3	底部	10.2 底部	直口縁文のくずしたものと配し、外底面には2本の墨線がみられる。 - 高台面は墨面が施されるようである。	17C後	A	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色の細かなものである。
				-	半~18	J-28 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は純い。素地は灰白色の細かなものである。
4	4	底部	10.2 底部	高台面から墨面にやかな輪を描いて直方向に立ち上がるものの、高台面に墨面に墨を施す。 - 腹付は丸形。文様は高台外側に2本の界線、内底面の周縁に2本の界線、腰部にも施文。腰部のものはダメ。	17C後	A	青灰白色の輪を施し、内外側に細かく買入あり。 - 腹付の周囲は輪削ぎする。呉須の発色はわりと良い。素地は灰白色の細かなものである。
				-	半~18	I-32 第2層	青灰白色の輪を施し、内外側に細かく買入あり。 - 腹付の周囲は輪削ぎする。呉須の発色はわりと良い。素地は灰白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪を施し、内外側に細かく買入あり。 - 腹付の周囲は輪削ぎする。呉須の発色はわりと良い。素地は灰白色の細かなものである。
5	5	底部	10.6 底部	高台面からゆるやかなカーブを描き、外側に開きながら立ち上がる。 - 高台は方形状に低くつくり、腹付の周縁を斜めに面取りする。 - 腹付は平頭。文様は内底面に樹下人物文を配し、外底面の縁部と高台面に界線を配する。	17C~	B	青灰白色の輪を施し、腹付およびその外側を輪削ぎする。呉須の発色は比較的良好。素地は灰白色のやや粗いものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪を施し、腹付およびその外側を輪削ぎする。呉須の発色は比較的良好。素地は灰白色のやや粗いものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪を施し、腹付およびその外側を輪削ぎする。呉須の発色は比較的良好。素地は灰白色のやや粗いものである。
33	6	口縁部	17.2 底部	外反口縁。腰部からゆるやかなカーブで口縁部に至り、口縁部に斜めの輪を外反させる。 - 口唇部は尖る。文様は内外の口縁部に1本の界線とその間に波状草文を施す。 - 腹付に下方にも男擦あり。	17C~	A	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
7	7	口縁部	17.3 底部	外反口縁。腰部からゆるやかなカーブを描いて口縁部に至り、上部の腰部が若干外反する。 - 口唇部が若干丸味を帯びる。文様は内外の口縁部に斜めの輪を施す。 - 腹付に1本の界線を施し、内面の胸部にタ: 技法による花文を配する。	17C	A	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
8	8	底部	7.7 底部	高台面から直線的に開くよう立ち上げていく。高台は瓶底より底辺にかけて斜めに面取りする。 - 腹付は平頭。文様は高台面に1本の界線が描り、内底面には「志共」書に中 ¹ を記す。	17C	A	淡青白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	淡青白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	淡青白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。
9	9	底部	7.7 底部	腰部があまり膨らまずに立ち上げていくものである。高台はやや内側へ傾く感じで方柱状につくり、腹付の胸部を斜めに面取りする。 - 腹付に外側を大きく斜めに面取りする。腹付は結構平坦。文様は内底面に2本の界線とその中に花文を配する。 - 腹付に外側を大きく斜めに面取りする。文様は内底面に草花文、高台面及び高台外側に界線を配す。	15~16	表裏	青灰白色の輪を施し、腹付およびその両側を輪削ぎする。呉須の発色は純い。素地は灰白色のやや細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
10	10	口縁部	22 底部	腰部があまり膨らまずに立ち上げていくものである。高台はやや内側へ傾く感じで方柱状につくり、腹付の胸部を斜めに面取りする。 - 腹付は平頭。文様は内底面に2本の界線とその中に花文を配する。	17C~	A	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
				-	18C	A-31 第2層	青灰白色の輪が破片の全面にみられる。呉須の発色は淡い。素地は乳白色のやや粗いものである。
11	11	口縁部	11 底部	口縁部上端が欠けているが、状況からするとこの外反口縁の資料か。 - 異形的には腰部から直線的に外側へ開いて口縁に至るものとのようである。文様は外側面にだけみられ、口縁部に界線、胸部に大きな花文風のものを描く。	17C~	A	緑色輪を帯びた青灰白色的輪で、破片の全面にみられる。呉須の発色は純く、やや緑色を帯びる。素地は乳白色的やや細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	緑色輪を帯びた青灰白色的輪で、破片の全面にみられる。呉須の発色は純く、やや緑色を帯びる。素地は乳白色的やや細かなものである。
				-	18C	A-31 第2層	緑色輪を帯びた青灰白色的輪で、破片の全面にみられる。呉須の発色は純く、やや緑色を帯びる。素地は乳白色的やや細かなものである。
12	12	底部	11 底部	高台面から腰部へスムーズな曲線を描いて向かうものである。高台はやや内側へ傾く感じで方柱状につくり、腹付の胸部を斜めに面取りしている。文様は高台面および高台外側に界線を帯びる。腹付は平頭で、両側が急で全体に外側へ開くような印象を受ける。腹付は平頭で、両側が若干斜めに面取りしている。文様は高台面および高台外側に界線を帯びる。腰部に溝文を連續的に施す。	15~16	J-28 第2層	淡青白色的輪で、腹付およびその両側を輪削ぎする。呉須の発色はやや純い。素地は灰白色の細かなもの。高台内側および外底面に著しく砂粒が密着する部分あり。



第33図 染付 5 (皿・鉢・袋物)

第4表1 染付観察一覧

単位:cm

版番	器種	新度	部位	特徴	年代	出土地	備考
1	小口杯 縁部	3.5	縫合型縫折れのもので、外底部の中央に隆起線が離る。口唇部は平坦。 文様は外表面隆起線の上方に如意頭模様文、下方に草花文。内面の口縁 部に1本の界線を配す。	15C~ 16C前半 第3層	A B-31	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。眞頃の発色 は薄く、やまとむ部分もある。素地は乳白色の細かいもの である。累進繊糸。	
2	小口杯 縁部	3.9	縫合型縫折れか?。外底部の上位に隆起線が離る。口唇部は平坦 文様は内外面の口縁部に1本の界線。外表面隆起線の下方に能 的に施文。	15C後 半~16 C前半 第3層	A B-32 C-31	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。眞頃の免 色は純い。素地は白陶器の細かいものである。累進 繊糸。	
3	小底杯 縁部	3.9	縫合型縫折れの底部。1とは逆に口縁部の下方に如意頭模様文を 配す。高台部に1本の界線。内底面は2本の界線と梅の組が認め られる。	15C~ 16C前半 第2層	A B-31	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。高台は欠 損しており不明。眞頃の発色は純い。素地は乳白 色の細かいものである。累進繊糸。	
4	小口杯 縁部	4.1	外反口縁。腹部から直縫織に開くように口縁部に向かい、口縁部 をゆるやかに外反させる。口唇部はなる。文様は外面上にだらん 右、口縁部に世界を1本施し、脇間に山水文がみられる。	15C~ 16C前半 第3層	A B-31	青灰白色の釉が破片の全面にみられる。眞頃の免 色はやや純い。素地は乳白色のやや細かなもので ある。	
5	小口杯 縁部	4.1	外反口縁。腰部の下方からほぼ直角方向に立ち上がり、口縁部に縫 折り曲げるよう外反させる。口唇部は尖る。文様は外面上の口縁 部と腰部下方に界線を配し、外面の口縁部、腰部の下方には界 線を配す。腰部には累進繊糸。	15C後 半~16 C明茶	A B-29 C-29 明茶	青灰白色的釉が破片の全面にみられる。眞頃の発 色は純い。素地は白陶器のやや細かなものである が細い。	
6	小底杯 縁部	2.3	高台は細く、内側へesseするようにつくる。口唇部は平坦に仕上げ る。文様は外面上の高台部頭及びその上方に1本の界線が切り、腰 部には草花文の一部がみられる。内底面の口縁部に1本の界線を配 し、内底面には「福」字を配してい る。	14C~ 15C前半 第3層	A B-24	淡青白色的釉を施すが、腹付およびその周囲は物 剥がす。内底面には釉が剥落するはじけられた感 じの所がみられる。眞頃の発色は純い。素地は 白陶器の細かなものである。	
7	小口杯 縁部	8.2	直口口縁。腰部からスムーズに口縁部を呈する。口唇部は尖る。 文様は外面上にだらんられ、口唇部に波状文と界線、腰部の下方に界 線と蓮弁文が認められる。	17C~ 18C A-31 第4層	A B-31	青灰白色的釉が破片の全面にみられるが、焼成不 良でやや光沢が失われている。眞頃の発色は薄み び弱い。素地は乳白色のやや粗いものである	
8	小口杯 縁部	2.1	外反口縁。形成され、腰部は直角方向に立ち上がり。口縁部上端 を右子外反させる。文様は口唇部下2mmから脇部にかけてみられ て、廻紋文が認められる。	17C~ 18C 表裏	淡青白色的釉を施すが、口唇部は無釉である。眞 頃の発色は比較的良い。素地は乳白色の細かなもの である。		
9	小底杯 縁部	2.1	外反口縁。形成され。腰部は直角方向に立ち上がり。口縁部上端 を右子外反させる。文様は口唇部下2mmから脇部にかけてみられ て、廻紋文が認められる。	17C~ 18C B 1-28 茶褐色	淡青白色的釉を腹付を除き無釉。眞頃の発色は比 較的良好。素地は乳白色的細かなものである。8 と同一個か?		
第 四 十 四 表	10 小底 部 34 現 有 る い は 小 杯	2.4	腰部から直角方向立ち上がるがくつきものである。高台は逆三角形 状やや外反・頭状が気味につくる。口唇部は斜めにしている。文様 は外面上の脇部に草花文を配し、その下方から高台外縁に3本の界 線を配す。外底面には「月」字を配す。	18C~ 19C A-31 第3層	A B-31	淡灰白色的釉を絶釉のあと腹付を釉割ぎする。眞 頃の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かなもの である。	
	11 高足 部 杯	-	腰部がやや急カーブをなし、直方向に立ち上がっていく。文様は 内外面の脇部に2~3本の界線がみられ、内底面および脚部の腰 部にも施されるが不規則である。	18Cか ら 第3層	A B-31	青灰白色的釉が全面にみられる。眞頃の発色は純 い。素地は灰白色のやや細かなものである。	
	12 高足 部 杯	3.3	上方に直縫織を1本から脇部下方から底面部へラッパ状に開 くものである。直縫織を脇部に形成し、底面部を角を削いて斜 て底面部に成る。底面部から脇部と3重の界線がみられ、中央の被だ けが頭につく。中央部は2段の孔があげられている。腰部の高 さは約1.5cmである。腰部の脇部の頭、直縫織の下、腰部下方 に縫合型縫折れがある。	14C~ 15C E-29 灰色	A B E-29	淡青白色的釉を脚部およびその 中空部は無釉である。脚部は白く漏った感じに なっている。眞頃の発色は烈然としない。素地は 灰白色のやや粗いものである。	
	13 高 反 部 杯	3.2	底面部の下方に、形状がちつりなど10種類ほど見当じてある。 底面部に焼成の痕の痕跡がみられる部分があり、文様は中央部 と下方に幅広の界線が1本づつ認められる。	14C~ 15C A-31 第3層	A B-31	青灰白色的釉を脚部およびその 中空部は無釉である。脚部は白く漏った感じに なっている。眞頃の発色は烈然としない。素地は 灰白色のやや粗いものである。	
	14 瓶 口 縁 部	1.2	外反口縁。口縁部下方からゆるやかに大きく外反する。口唇部は 舌状を呈す。文様は内面の口縁部に2本の界線、外面の口縁部を 1本の界線を配す。	明 A E-31 第3層 下部 残り	A B-31	青灰白色的釉が破片の全面にみられる。眞頃の 発色はやや淡い。素地は乳白色的細かなもの である。	
	15 瓶 口 縁 部	1.6	直口口縁。簡状を呈すもので、口唇部は尖る。文様は外面に巻 き状の草花文を配す。	14C~ 15C A-31 第3層	A B-31	淡灰白色的釉が破片の全面にみられる。眞頃は 絆割ぎで発色。素地は灰白色のやや細かなもの である。	
	16 瓶 口 縁 部	-	脇部の鏡穴か。文様は外面のみみられる。上方に界線、脇部に 牡丹唐草文?を配している。	17C~ 18C A B-34 第3層	A B-34	淡青白色的釉が破片の全面にみられる。眞頃の發 色はやや淡い。素地は乳白色的細かなものである	
	17 瓶 口 縁 部	1.9	直口口縁。簡状を呈すもので、口唇部は舌状を呈す。文様は外面 に口縁部に2本の界線を隔てる。	清朝か A B-31 第3層	A B-31	青灰白色的釉を施すが、口唇部を釉割ぎする。眞 頃の発色は淡い。素地は乳白色的細かなものである	
	18 瓶 口 縁 部	-	脇部の破片か。内面にクロコ痕が認められる。文様は外面に草花 文?がみられる。	清朝か A B-32 第3層	A B-32	青灰白色的釉が破片の全面にみられる。眞頃の發 色は純く、無む部分あり。素地は灰白色の細かなもの である。	
	19 瓶 底 部	5.8	高台は逆三角形状にやや内側へすぼむ感じでつくり、腹付の両側 を斜めに取り出す。腹付は平坦。文様は高台部に1本の界線 がみられるだけである。	清朝か A B-32 第3層	A B-32	淡青白色的釉を施すが、全体的に磨かれた感じで ある。腹付およびその周囲を釉割ぎする。眞頃の發 色はやや淡い。素地は淡灰白色的細かなものである	
20 瓶 部 底	14.0	などらかな内側の頭から水平方向へ脇が延びるもので、かえしの 部分はやや内側氣味である。かえしの内側は凹面になる感じで 斜位に折れ、内底面との脇が認められる。かえしの脇部は 丸柱を帶びる。文様は脇部の表面に雷文等を描き、甲唇の表面 に草花文を配す。	15C後 半~16 C東壁	A B-35, 36 東壁	淡灰白色的釉を脇から甲唇および平内面に施し、脇 下部からかえしの脇の外側に施す。眞頃の発色は淡 い。素地は淡灰白色的細かなものである。		
21 瓶 底 部 蓋	-	そろばん玉の宝珠で、底膨らむ部分は丸をもってくつられ ている。高さは約1cmである。内底には宝珠を接合した脇の みの部分が受けられる。文様は外面にだけ認められる。宝珠の 部分にはうずき文が施され、甲唇の部分には宝珠から放射状の線 がみられる。	16C後 半 A B-33 第3層	A B-33	淡青白色的釉が表面だけにみられ、裏面は露胎と なっている。宝珠部の脇だけがやや漏る。眞頃の発色 はやや淡い。素地は乳白色的細かなものである。		



第34図 染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋)

第4節 褐釉陶器

200点近く得られているものの、ほとんど小破片の資料で全形の窺えるようなものは見受けられない。時期的には15世紀前後のものが主流のようで、器種的にはほとんどが壺形に属するものである。その他に量的には僅少であるが水瓶、茶入壺、瓶類、すり鉢などの器種が見受けられ、比較的多くの器種が確認できた。壺形の大きさには大小がみられ、小さいものは口縁部が玉縁状に肥厚するものが多く、大きいものは口縁部が方形状を呈すものが主体のようである。特徴的なものを第35図・第36図に示した。以下、器種別に簡記する。

a. 壺

先述したとおり大きさに大小があり、小型のものを第35図1~7、大型のものを第36図3~7に示した。破片のものがほとんどで、全形の窺えるものは見受けられない。

第35図1~7に示したものは、推算口径が10cm前後を測るもので小型壺になると考えられるものである。1は素地や器面調整などから同一個体と考えられる口縁部と胴部の資料から、全形を推定復元してみた。それからすると口径が約9cm、高さが約17cm、底径が約10cmと想定され、胴部中央のやや上方に最大径がある。胴部の最大径が高さよりも若干大きく、寸詰まり気味の感じを受ける。口縁部は玉縁状の肥厚を呈し、頸部は「8」の字状に若干下方へ開く。そこからゆるやかに膨らみ、そのままスムーズな感じで底部へ移行する。肩部の上方には4ヶ所にブリッジ状の外耳が付される。薄手のつくりで、釉は現資料でいえば外面から内面の口縁部に施釉され、内面の頸部以下は露胎となっている。内面の肩部上方には指頭痕もみられる。素地は黒色や白色を呈す鉱物の微砂粒を密に含む細かなものである。

2~5は口縁部の資料であるが、破片のため肩部以下の状況は不明。口縁部の状況はそれぞれ若干異なる。2は口縁部上端を極端に折り曲げ肥厚口縁のようにみせるもので、その直下から胴部へ移行していく。3は口縁部上端が外側へ張りだすように肥厚し、その直下に僅かに頸部をつくり胴部に移行する。この2点は口縁部がすぼまるという似たような状況にあり、推算の口径も2が約10cm、3が約9cmと似通っている。4は2・3と違い外反口縁の資料で、口縁部上端の肥厚は微弱である。推算の口径は約12cmと前二者よりやや大きい。3は口唇部を平坦にするが、2・4は丸味を帯びる。いずれも黒味の比較的強い釉を施すが、4は口縁部の周囲に釉の剥がれている部分が目立つ。外面から内面の口縁部に施釉される。素地は灰黒色の細かなものである。

5は直方向に立ち上がる頸部(7mm前後)が認められるもので、口縁部上端は断面が略台形状の肥厚を示す。口唇部は平坦にし、外側はわりと角張るが内側は丸味を持って仕上げている。推算口径は約13cmと最も大きい。釉は黒味の強いもので、2~4と同様な施釉範囲であるが、外面の頸部の釉を剥いでいる。素地は灰黒色の細かなものである。

6は底部の資料である。推算底径が約10cmであり、ここに示すようなグループの底部になるかと考えられる。底面からの立ち上がり部の後は比較的明瞭で、全面に施釉されている。素地は暗灰色を呈す部分と暗茶褐色を呈す部分がみられる。

7は1~6のグループよりは大きめになるかと考えられる肩部の資料である。10mm近い厚みがあり、素地は灰白色の精緻なものである。縦横の沈線で区画された中に草花文などを配すよう、本資料では葉の部分が確認できる。暗緑色の釉を表裏面に施釉するが、裏面は薄く施している。

第36図3~7に示したものは大型の壺になると考えられるもので、3・4は口縁部の、5は胴下半部の、6・7は底部の資料である。3・4は似通った器形・口径・施釉状況・素地の具合を示すものである。口縁部上端が概ね逆「コ」の字状になり、口唇部が約2cmと幅広く斜めに整形されている。内面は下端部

が内側へ突き出し、口縁部内面は凹面を形成する。その直下から「八」の字状に聞くように2cm前後の頸部があり、そこから外側へ大きく張りだすように肩部へ移行する。頸部外面には3が2本、4が1本の筋が認められる。推算口径は約19cmを測る。表裏面に施釉されており、3は暗緑褐色、4は暗黄褐色を呈す。両者とも表裏面に細かく密な貫入がみられる。4は肩部に大粒の胎土目の熔着が3箇所認められる。素地は暗灰色のやや粗いもので、大きめの鉱物粒が散見される。

5は胴下半部の資料で、上端部の推算径が約32cm、下端部の推算径が約22cmを測る。表裏面には凹線様の調整痕がみられ、暗黄褐色の釉が表裏面に施釉されている。素地は暗茶褐色のやや粗いもので、粒の大きめな白色の鉱物が散見される。

7は底部の資料で、推算底径は約12cmを測る。底面は上げ底状になり、底面からの立ち上がり部は若干くびれた感じになる。表裏面の底面近くまで凹線様の調整痕がみられる。暗黄褐色の釉が表裏面に施釉されるが、底面部は無釉である。底面部には胎土目の熔着も認められる。素地は暗灰色のやや粗いもので、粒の大きめな白色の鉱物が散見される。

5・7は3・4のグループに属する胴部および底部資料かと考えられる。

6は上記4点とは異なるグループの底部資料である。底面からの立ち上がり部が若干くびれ、それから外側へ聞くように胴部へ向かう。底面は縁部の約1cmを平坦にし、そこから中央部の方へ上げ底状にしている。推算底径は約18cmを測る。現資料に施釉される部分は見受けられない。表面は赤褐色を呈し、裏面は灰褐色を呈す。素地はやや細かく、砂粒を密に含む。

b. 水甕

第36図1・2に示すものである。口縁部の資料で、2点とも推算口径が約28cmを測るものである。1は口縁部が横長の長方形状に肥厚するもので、口唇部が2.5cm前後と幅広くなっている。口唇部は水平方向になり両端に1本づつ凹線を廻らす。また、肥厚部外面はほぼ中央にやや深めの凹線を廻らし、下端部を若干間隔を開けて上方に押し上げ、波打つ感じにしている。その直下の頸部には肥厚部の接着痕が比較的明瞭に残る。内面はやや内擣気味になっている。黒味の強い釉を薄く塗付するように施している。素地は灰黒色のやや細かなもので、白色の微砂粒が密に含まれる。

2は口縁部がT字状に肥厚するもので、口唇部は斜めに平坦にしている。口唇部の両側はやや丸く仕上げ、内面は内擣気味になっている。内面は滑らかで比較的丁寧な仕上げとなっているが、外面は肥厚部直下にラフな削り痕がみられるなど仕上げはやや雑な感じを受ける。釉は黒味の強い暗茶褐色のもので、内外面全釉の後、口唇部を軽く釉剥ぎしている。内外面には釉垂れの部分が見受けられる。素地は灰黒色のやや粗いものである。本資料は1に比べ器壁が薄く、鉢の可能性も十分考えられる。

c. 茶入壺

1点だけ確認でき、第35図8に示した。口縁部上端が外側へ張り出し、口唇部が幅広くなる。外側の縁部は上下から斜めに整形しており、中央部に稜を有す。口縁部の張り出し部下方から内側へゆるやかなカーブを描くように約15mmの頸部がみられ、そこから肩部が張り出していくものようである。推算口径は約12cmを測る。器厚は3mm前後と薄手のつくりで、素地は暗茶褐色の精緻なものである。ヌ-33第3層下部から出土。

d. 瓶

第35図9~11に示すもので、9は肩部の、10・11は底部の資料である。9は3mm前後の薄手のつくりで、表面にだけ暗黄褐色の釉を施している。裏面は成形の際の調整痕が明瞭に残る。破片の上端部の推算径が約6cm、下端部の推算径が約8cmである。素地はやや粗いもので、赤味を帯びた灰褐色を呈す。10はペタ底のもので、ゆるやかにカーブを描きながら立ち上がってく。推算底径は約7cm。現資料では外

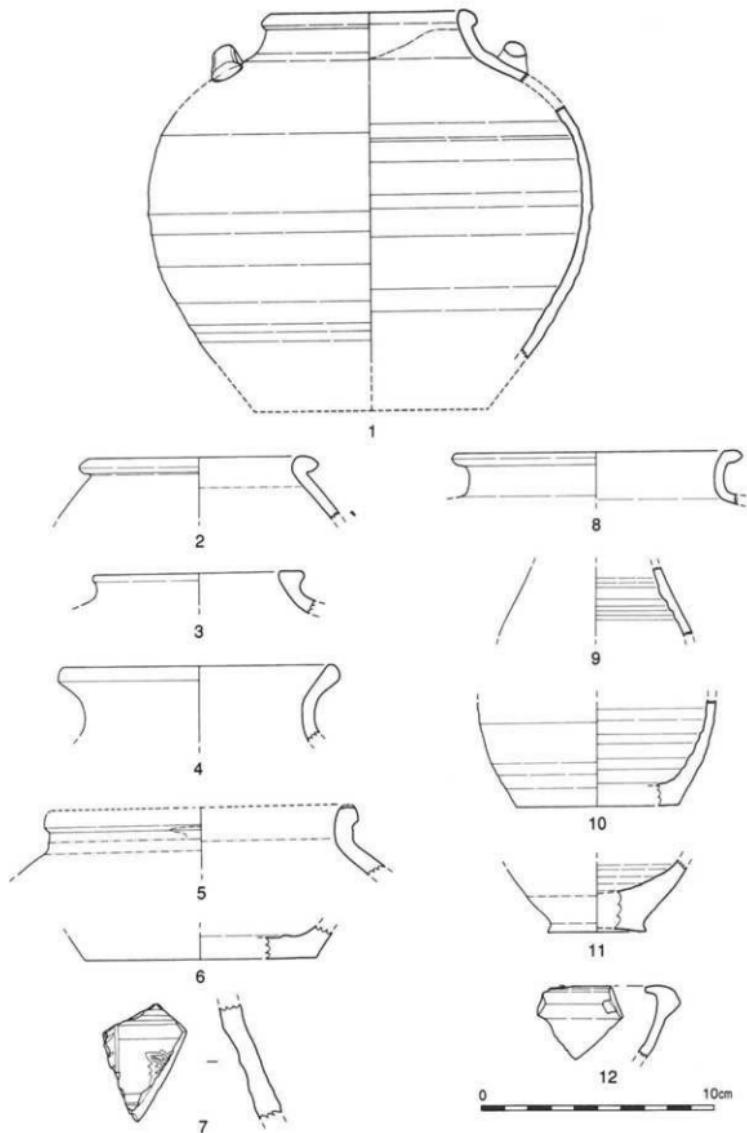
面無釉になっており、裏面に黒味の強い釉が塗付される。素地は灰褐色のやや細かなもので、底面部は橙褐色を呈し、その上方は赤味を帯びた灰褐色を呈す。11は底面部から約5mm直方向に立ち上がり、そこから外側へ開いて胴部に移行する。底面部には糸切り痕が明瞭に認められる。推算底径は約4cmである。暗黄褐色の釉が外面の腰部下方までみられ、そこから底面部にかけては露胎となっている。内面は無釉。素地は暗茶褐色の細かなもので、粒の粗い砂粒が比較的目につく。9はハ-33南壁、10はヒ-31第3層、11はヘ-32搅乱部から得られている。

e. 握 鉢

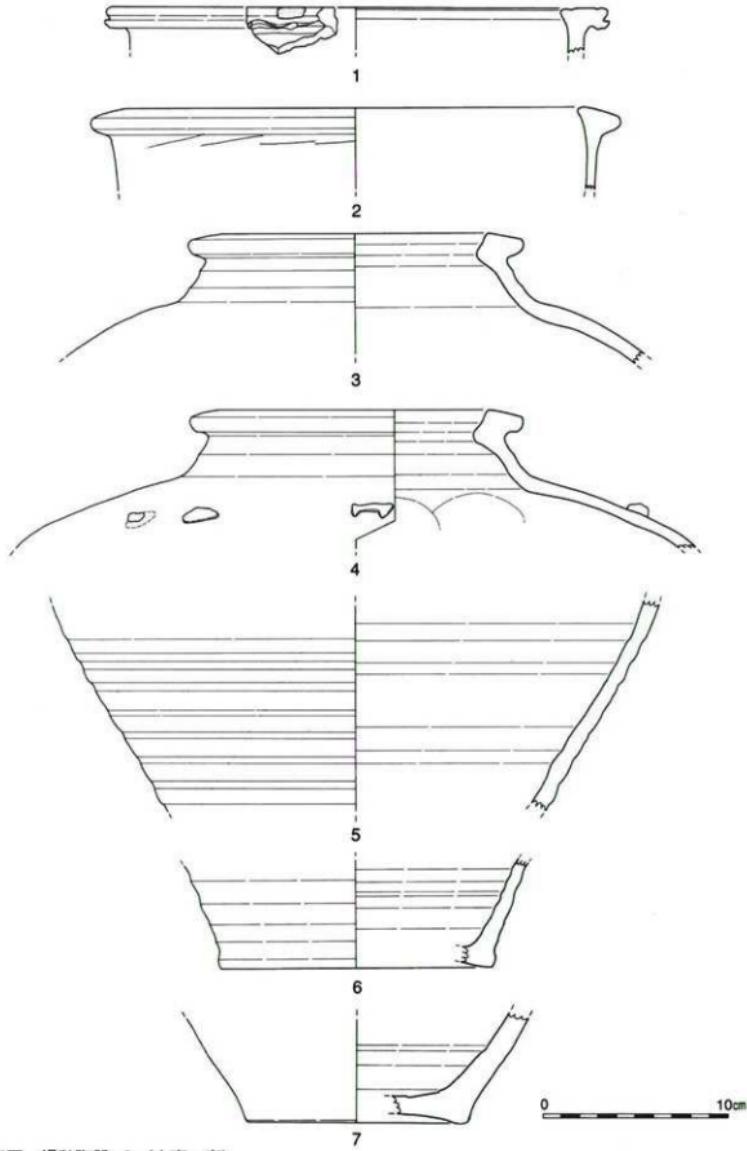
第35図12に示した1点だけ確認できた。口縁部が鳥の嘴状に内側へ飛び出すようにつくられ、外端部も三角形状に張りだす。口唇部は角度を変えて削り整形しており、その境目では稜をつくる。特徴的な口縁部のつくりで、推算口径は約16cmを測る。釉は黒味の強いもので、外面から口唇部まで施釉するが、口唇部は釉刺ぎして整形している。口縁部の内側へ飛び出している部分の裏側に釉垂れがみられる。口唇部の内側縁部に砂粒の接着する部分がみられる。内面は無釉で、下方からかきあげられた標目が7本認められる。素地は灰褐色のやや細かなものである。ヒ-33第3層の出土。

第5表 その他の陶器等出土状況

種類	器種	時期	部位	A区							B区							合計							
				搅乱	第1層	第2層		第3層		第4層		第5層		第6層		燒土		小計	搅乱	第1層	第2層		第3層		小計
						b	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
褐釉陶器	壺		口縁部			1			3			1		1		5			1			1		1	6
	胸部																							1	
	底部		1						1							1		1						3	
	小壺		口縁部					1																0	
	すり鉢		口縁部																					1	
	小 計					1	0	2	0	5	0	1	1	1	0	10	0	0	3	0	0	3	13		
	小杯		胸部	1	1	2											4							0	
		18C~19C底部														0			1					1	
	天目		完形	1		1										2								2	
	小碗	18C~19C	底部					1									1							0	
	?		胸部														0	1						1	
	?	14C~16C	胸部													2								0	
		底部														3								3	
	小 計					2	1	4	0	1	3	1	0	0	0	12	1	0	1	0	0	2	14		
瑠璃	碗		底部					1									1							0	
中国			胸部	2	7	6	1		2	18								2						20	
	?		口縁部			1										1								1	
			胸部	1		1										2								2	
	青磁染付	小碗	口縁部				1									1								1	
			胸部	2		3										5								5	
	小碗		口縁部			2										2								2	
			底部			2										2								2	
	碗	18C後半~19C	口縁部			1										1								1	
		底部				1										1								1	
	小 計					2	1	1								4								4	
	鐵釉染付	碗か	胸部	2	1	1										1								1	
	小碗	18C~19C	口縁部			1										1								1	
	小碗	17C後半~18C	胸部	1		2	1									3		1		1			4		
			底部	2		1										0		2		2			2		
			胸部	1												1								1	
	小 計					5	4	15	1	1	0	0	0	0	0	26	0	0	4	0	0	4	30		
ペトナムタイ窯	鉢		胸部						1							1								1	
	?		底部													0		1						1	
	磁器物の蓋		口縁部	1		3										4								4	
	土器	半練	口縁部			1		2								3								3	
	小 計					2	0	4	0	3	0	0	0	0	1	10	0	0	2	0	0	2	12		



第35図 褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・摺鉢)



第36図 褐釉陶器 2 (水甕・壺)

第5節 色 絵

量的にはそれほど多くない。ほとんど小破片の資料であるが、第37図6に示した皿は全形の窺えるものである。時期的には16世紀～19世紀頃と比較的幅がみられるものの、18世紀頃のものが主体のようである。器種的には碗、小碗、皿、小杯、蓋などが認められ、出土量からするとわりとバリエーションに富んだ内容といえる。全体的に絵付けの色が剥げ落ちており、判然としないものが多い。特徴的なものを第37図1～9に示した。以下、器種別に簡記する。

a. 碗

1～3に示したもので、1・2は口縁部、3は胴部である。これからすると胴部から口縁部の方へ開き気味に至り、口縁部上端で若干外反する器形のようである。口唇部は尖り気味。大きさは不明。文様は1が丸文、2が唐草文が外面に認められ、1は赤と青、2は赤と緑の配色のようである。3は内面に花文が陽刻されているが、花の内側や周縁部に配された色は退色し判然としない。素地は1・2が淡灰白色の細かなもので、3は淡灰白色の粗いものである。

b. 小 碗

4・5に示すもので、4は口縁部の、5は底部の資料である。4は胴部の方から開き気味に口縁部に至り、口縁部上端が若干外反する。口唇部は尖り、その部分の釉を剥ぎ取っている。推算口径は約8cmを測る。文様は外面に草花文が配され、内面は点だけが認められる。青・赤・緑の色が使用されているようである。5は型成形と考えられるもので、推算高台径は約5cmを測る。高台は逆三角形状で低い。疊付は平坦につくるが、内側の線は丸味を帯びる。疊付から外底面にかけては露胎である。文様は内面に青・赤の色を使い草花文を配している。4・5とも素地は乳白色の細かなものである。

c. 皿

6・7に示したものである。6は半欠品の資料で、全形の窺えるものである。推算口径が約7cm、高さが2cm、推算底径が約5cmを測り、小皿の部類に入る。高台は逆三角形状で低く、腰部がやや丸くなり、外側へ開き気味に口縁部に至る。口縁部上端で僅かに外反し、口唇部は尖る。全釉のあと口唇部だけを釉剥ぎしている。文様は内面に赤・緑・黄色の配色により花文を描く。外面は無文。外底面に文字様の凹凸部が認められるが、判然としない。素地は淡灰白色の細かなものである。7は推算高台径が約9cmを測る底部資料である。高台は細く方柱状につくるが、疊付部は破損している。そのため疊付部の状況は不明。器形的には高台際からかなり外側へ開くものようである。文様は外面および内底面に草花文が認められ、外底面に弧状の線が確認できる。赤色の部分だけがかすかにその色を留め、他の色については判然としない。素地は淡灰白色の細かなものである。

d. 小 杯

8に示す底部資料で、推算高台径は約3cmを測る。高台は逆三角形状に低く、小さくつくる。内面はほぼ垂直になるものの、外面は疊付の方へ斜めになっており、内側へすばむ感じになっている。疊付は斜めに整形している。腰部のカーブは急で、そこからやや直方向に立ち上がっていくようである。文様は外面の高台際に2本の界線を配し、胴部に草花文?を施す。内底面には蛇ノ目釉剥ぎした部分に蓮弁文くずれが認められる。いずれも赤色による絵付けである。また、外底面には呉須による銘の一部が認められるものの、判読はできない。全釉のあと疊付と高台の内側を釉剥ぎし、内底面も蛇ノ目釉剥ぎしている。素地は淡灰白色のやや粗いものである。景德鎮系。

e. 蓋

9に示す1点だけ確認できた。撮み部および縁部とも破損しており、形状や大きさなどは不明。表裏面

とも施釉されており、表面にだけ呉須による草花文が施される。染付の草花文をなぞるように色絵付けされるが、完全に剥げ落ちている。呉須の発色は淡い。素地は乳白色の細かなものである。

第6節 三 彩

量的には僅少である。総て小破片の資料であり、器種や器形など判然としない部分が多い。特徴的なものを第37図10~15に示した。これらを素地や成形および施釉の状況などの特徴をみると、10・11のように内外面に白化粧し施釉するもの、12~14のように外面だけ白化粧し施釉するもの、15のように外面だけ施釉するが白化粧をしないものの3種に分けられるかと考えられる。これは器種・器形の違いによるものかと思われる。

10・11は素地が黄白色でやや粗く、ロクロ成形により仕上げており、内外面とも白化粧を施している。白化粧の施される内外面に施釉される。しかし、両者ともかなり釉が剥げ落ち、特に内面は著しい。ただ、11の外面は良好に釉が残る。10は外面のはば全面に綠釉を施し、破片の右下方の隅に黄色の釉が線状に認められる。11は外面に黄色の釉を配した花文がみられ、その上方に僅かに綠釉の部分が残る。

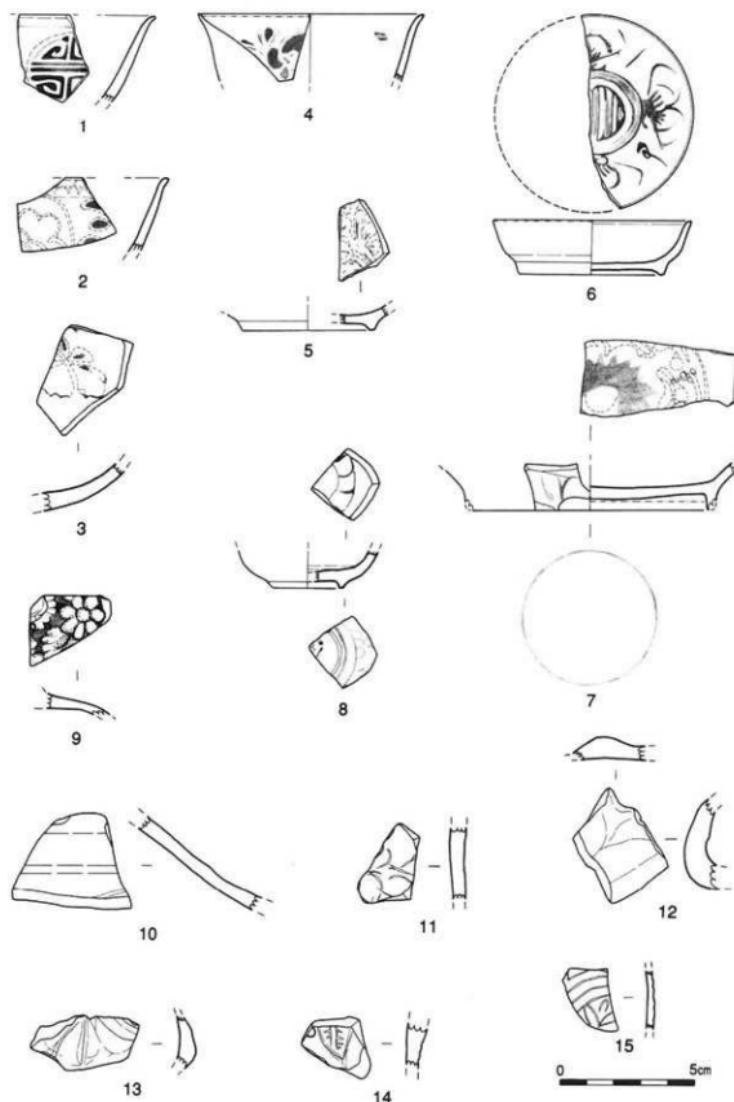
12~14は素地が黄白色でやや粗く、内面にわりと指頭痕を有す凹凸面がみられることから型成形のものと考えられ、外面にだけ白化粧を施す。白化粧の施される外面だけに施釉しており、内面は露胎である。12は無文の部分のよう、綠釉が施される。釉の剥げ落ちている部分が散見される。13は文様の部分のようであるが、かなり釉が剥げ落ち判然としない。14は他の2点に比べ、釉の保存状況が良好である。葉っぱ様の文様が陽刻され、その部分に黄色の釉、上下に綠釉が施されている。

15は素地が淡灰白色でやや細かく、磁質である。内面にロクロ成形の際の調整痕が明瞭にみられる。他の資料に比べ非常に薄手のつくりで、白化粧は施されない。外面に4本の沈線と線彫りの花文が配され、綠釉が施釉される。内面は露胎。

第7節 瑠璃釉

10点と量的には僅少である。18世紀~19世紀頃のものがほとんどで、器種的には小杯や小碗・碗・瓶などが見受けられる。得られたものは小破片の資料ばかりであり、全形の示せるものは第38図1の1点だけである。特徴的なものを第38図1~7に示した。全体的な特徴を記すと小杯・小碗は型成形によるものである。また、施釉の状況は外面に瑠璃釉、内面に白磁釉のものがほとんどであるが、6は口縁部内面まで瑠璃釉を施す。小杯の場合には1のように外底面まで瑠璃釉が施釉されるものや3のように底面部は露胎にするものなどが見受けられる。素地は淡灰白色の細かなものがほとんどである。以下、個々のものについて簡記する。

1~3は小杯である。1は全形の窺えるもので、口径が約4cm、高さが2.2cm、底径が約2cmを測る。高台は逆三角形状に低くつくり、疊付は丸味を帯びる。腰部が若干カーブし、やや外側へ開く感じで口縁部に至る。直口口縁で、口唇部は若干内傾するように仕上げている。また、外底面は平坦であるが、内底面は中央部が盛り上がる。疊付の周囲には熔着物が見受けられる。2は直口口縁の資料で、推算口径が約5cmを測る。胸部からやや直方向に立ち上がり、口唇部はやや丸味を帯びる。口縁部上端の内面に浅い溝状の凹部が廻る。外面の瑠璃釉は1よりも黒味が強い。3は推算底径が約2cmである。高台はつくらず、



第37図 色絵と三彩

腰部下方のくびれ部の端を斜めに面取りし、そこから外底面が若干凹むように削っている。瑠璃釉は腰部下方までの施釉で、底面部は露胎にしている。

4・5は小碗かと考えられるもので、4は胸部、5は底部の資料である。4は腰部の推算径が約6cmを測り、腰部から直方向に口線に向かうものようである。外面の瑠璃釉は鮮やかな発色である。5は底部の資料で、推算の高台径は約5cmを測る。高台は逆三角形状を呈し、疊付は尖り気味になる。瑠璃釉は高台外面までの施釉のようで、外底面のものは釉垂れの部分と考えられる。全体的に光沢が失われている。

6・7は袋物の資料で、6は口縁部、7は胸部である。2点とも小破片のため詳細は不明。6は外反口縁の資料で、口唇部は平坦に整形している。また、頸部よりも口唇部の方が厚くなっている。

8に示すものは著しく熔変した碗の資料である。釉の状況が判然とせず、疊付および外底面の釉から瑠璃釉の可能性が高いと考えられここに示した。破損面もガラス質の釉状のものが覆っている。高台は方柱状につくり、疊付の外面を斜めに面取りする。疊付は平坦に仕上げている。推算の高台径は6cm弱である。

第8節 その他の陶磁器

ここで扱うものは翡翠釉、黒釉、青磁染付、鉄釉染付など出土量が僅少なものをまとめた。前二者は陶器で、後二者は磁器である。本来的にはそれぞれ項を改めて記述すべきものであるが、今回はとりあえずここに一括して記述することにした。それぞれの出土状況は第5表のとおりで、特徴的なものを第38図9~20に示した。

1. 翡翠釉

1点だけ確認でき、9に示した。外反口縁の資料で、口唇部は平坦に整形している。内外面に白化粧を施したあと翡翠釉が施釉されるが、風化のためか釉の剥落が目立つ。特に裏面では著しい。素地は橙褐色のやや細かなものである。ノー31トレンチ出土。

2. 黒釉陶器

14世紀~16世紀頃のいわゆる天目茶碗が得られている。大きめのもの2点を10・11に示した。10は腰部の、11は底部の資料である。10は高台際の水平な割り部の推算径が約6cmを測り、そこから直線的に外側へ開きながら立ち上がっていく。内面は全釉であるが、外面は胸部下半以下は露胎である。内底面は一段低くなるように削られており、胸部下方と内底面の境に棱が認められる。素地は灰白色のやや粗いもの。ヒー31第4層の出土。

11は推算の高台径が約4cmを測るものである。割れ面に素地の合わせ目が明瞭に認められ、高台のつくりだしも割りと難である。外底面の割りは浅く、丁寧ではない。外面2ヶ所に高台まで釉垂れしている部分がみられ、内底面では図の右側の方に釉が厚くなっている。黒釉の表面の大部分がのぎめ様の茶褐色を呈す。素地は灰白色のやや粗いもの。ナー32第4層の出土。

3. 青磁染付

ほとんど18世紀~19世紀頃のもので、碗と小碗だけが確認できた。12~17に示した6点で、12~14は口縁部の、15~17は底部の資料である。いずれも第2層からの出土である。口縁部の3点をみると、いずれも腰部から口縁部の方へ直線的に開くものようで、12は直口口縁、13・14は外反口縁である。12は口唇部が舌状を呈し、13・14は口唇部が尖る。13は推算口径の算出ができ、約10cmを測る。また、後者の2点は前者よりも若干薄手である。施釉の状況は3点とも外面に淡緑色の青磁釉を施し、口唇部から内面にかけては淡青白色の透明釉を施釉している。内面には呉須による文様が認められ、いずれも口縁部に

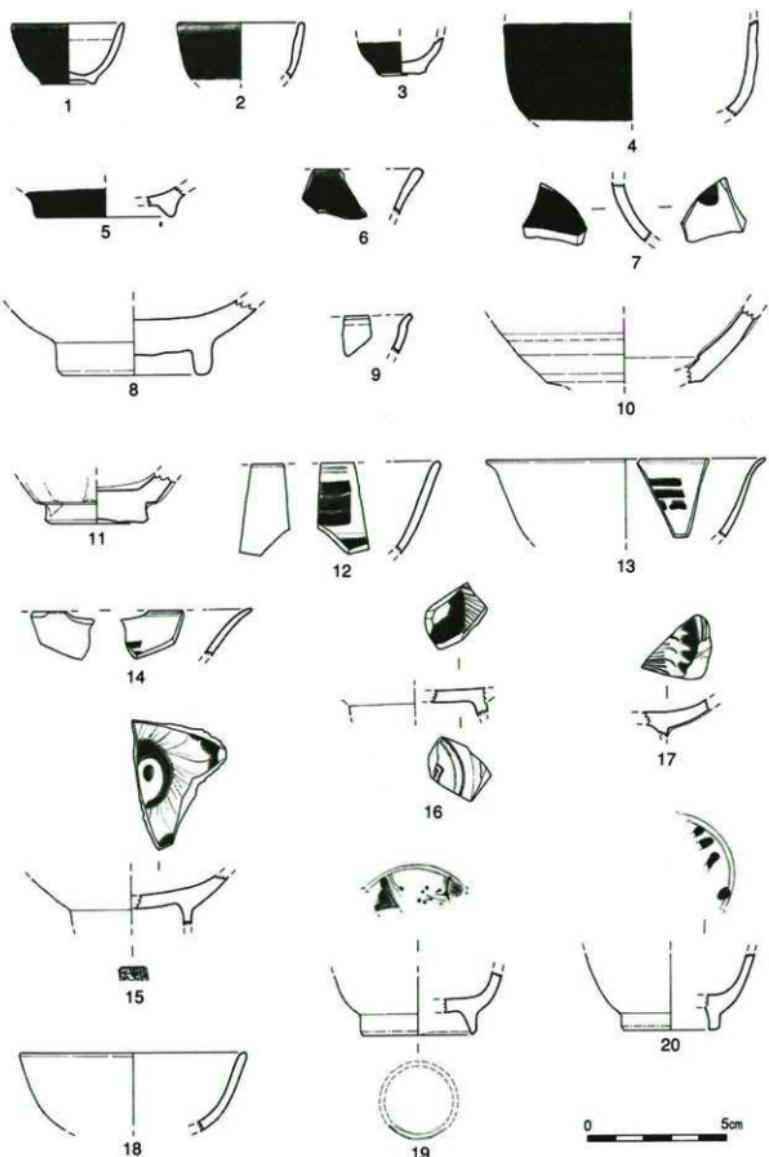
2本の界線を廻らし、胴部に算木文風の横位文を配す。12は腰部にも施文する。3点とも呉須の発色はやや淡く、素地は乳白色の細かなものである。

15~17に示した底部資料は、いずれも腰部のあまり膨らまないものようである。高台は破損しており、形状など不明である。15は高台際の推算径が約4.5cmである。施釉の状況は3点とも淡緑色の青磁釉が高台外面まで施され、内底面と外底面に淡青白色の透明釉を配す。内底面に文様を描き、外底面にはスタンプを押しているものの、破片のため構図など詳細は不明。いずれも呉須の発色はやや淡い。素地は乳白色の細かなもの（15・16）と淡灰白色の細かなもの（17）が見受けられる。

4. 鉄釉染付

18世紀~19世紀頃のものがほとんどで、碗と小碗が確認できた。18~20に示すもので、18は口縁部の、19・20は底部の資料である。この3点をみると外面に茶褐色（20は黒褐色を呈す）の鉄釉を施し、口唇部から内面および高台内に青灰白色の透明釉を施釉する。疊付外面を斜めに面取りしており、その部分の釉は剥ぎ取られている。文様は内底面と外底面が対象になっている。素地は灰白色のやや細かなものである。

18は腰部がゆるやかにカーブして、やや開き気味に口縁部へ向かう直口口縁のものである。口唇部は舌状を呈し、推算口径は約8cmである。ヌー32第2層の出土。19は高台脇からやや直方向に立ち上がるもので、高台は逆三角形状につくる。疊付は平坦で、狭い。内底面に2本の界線と山水文が、外底面に2本の界線が認められる。呉須の発色は鈍い。推算高台径は約4cm。ヌー32第1層の出土。20は腰部からやや外側へ開き気味に立ち上がっていくもので、高台は逆三角形状につくる。疊付は平坦で、狭い。疊付の内側には釉溜まりになっている部分も見受けられる。内底面に2本の界線と文様を施すが、破片のため構図は不明。呉須の発色は鈍く、内側の文様は黒ずんでいる。推算高台径は約3.5cm。ハーア30灰茶褐色の出土。



第38図 瑞璃釉、その他の陶磁器（青磁・鉄釉染付）

第9節 東南アジアの陶磁器

東南アジア産の陶磁器として取り扱った資料は、タイの半練（土器）、タイの鉄絵、タイの褐釉、ベトナム産染付（中国南部を含む）である。以下、タイ産陶磁・ベトナム産染付の順に記述を行なうことにする。

1. タイ産陶磁

タイ産陶磁の種類として半練（土器）の蓋と身、鉄絵合子の蓋と身・壺・褐釉陶器壺などである。一応、半練（土器）もここに含めた。

a. 半練（土器）

半練（土器）の蓋の破片が4点得られていて、4点とも落し蓋である。その他に叩きのある胴部の小破片が1点出土している。以下にその特徴を記述する。

・蓋

第39図1は蓋の直径が12.4cmを測る。蓋端部を折り曲げて仕上げているが、断面を隅丸の三角形状に施で削り出して調整するのが本品の特徴である。内面は折り曲げの先端部分に施削りを加えている。蓋甲は施削りを加えて丸味を出している。色合いは黄褐色を呈し、焼成は脆弱である。胎土は細かく、混入物として淡茶色・茶褐色・黄白色の鉱物と粗い石英などを多量に含んでいる。ハ-33第3層より出土。

同図2は蓋径が、11.4cmを測る。蓋端部を折り曲げ、折り曲げた端部を丁寧に仕上げている。断面は三角形状に施で削り調整している。蓋甲も施削りで調整する。色合いは黄白色を帯びている。焼成は良好で硬い。胎土は細かく、混入物として淡灰色・茶褐色と、灰褐色の鉱物と粗い石英や白色鉱物を多量に含んでいる。ヘ-31搅乱層より出土。

同図3は蓋径が11.2cmを求めた。蓋端部を折り曲げ、折り曲げた端部を平坦に仕上げた後に端部近くに削りを入れて窪ませている。同様な手法で蓋甲縁端近くに削りを浅く入れて、窪ませている。他は施削りとナデで調整する。色合いは明黄茶色を帯びる。焼成は良く、硬い。胎土は細かく、混入物として淡茶色・茶色の鉱物と細かい石英を多量に含んでいる。ヌ-32第3層下部。

同図4は蓋径が、10.2cmを求めることが出来た。蓋端部の仕上げ方や蓋甲縁端近くに削りを入れて仕上げる手法は同図3と共通している。蓋甲の調整は施削りとナデが観察できる。色合いは明黄茶色を呈する。焼成は堅緻である。胎土は細かく、混入物として淡灰色・茶色・褐色の鉱物と粗い石英が多量に含まれている。同図3と同一個体である可能性も考えられるが判然としないところである。ヌ-32砂利敷層直上より出土。

・身

第39図5は身の破片で全体的に摩滅するが、外面に平行叩きを入れている。内面には当て具の使用による浅い楕円形状の窪みがみられる。色合いは淡灰色を帯びている。焼成は他と比較して良好で硬い。胎土は精選されているが、粗い石英と白色の物質・灰褐色の鉱物を少量ながら含んでいる。ヌ-32第3層。

b. 鉄絵合子

合子の蓋や身（底部）と壺の底部とみられるものが得られている。その内訳は蓋が4点、身は1点であった。

・蓋

第39図6は蓋の最大径が8.3cmを測る。外面には鉄釉で圓線・綫線・斜め・格子状の文様を描いた後に灰白色の透明釉を施している。細かい貫入がみられる。素地は淡灰白色の細粒子で、粗い黒色や灰色の鉱物を少量含んでいる。フ-32第3層上部より出土。

同図7は最大径が10cmを測った資料である。外面には鉄釉で重円文・綫沈線文・斜位の格子文を描いて

いる。釉色は黄味がかった灰白色の透明釉である。素地は淡灰白色の細粒子である。素地に細かい黒色や白色の鉱物が僅かに混入している。ハ-33第3層より出土。

同図8は最大直径が10cmを求めた。外面には鉄釉で重円文・綴沈線文・斜め格子文を描いている。釉は淡灰青色を帯びた失透釉である。素地は粗粒子で、淡灰白色を帯びている。素地に細かい黒色や白色の鉱物を多量に含んでいる。ハ-33第3層より出土。

同図9は最大直径が11.3cmを測る。外面は鉄釉で丸文に斜位格子文と花文を描く。釉色は淡灰青色を帯びた透明釉である。素地は淡灰白色の粗粒子で、粗い黒色や白色の鉱物を多量に含んでいる。出土地点および出土層は不明である。

・身

第39図10は身の高台破片で、高台径は7cmを求めた。高台は「ハ」の字状に開き、高台脇から疊付まで鉄釉が塗られている。高台の内削りは平坦に且つ丁寧に削り取っている。見込みには同心円状のロクロ痕の上から白色の釉を施している。素地は白味の強い灰色の細粒子である。微細な黒色の鉱物などを多量に含んでいる。ハ-28灰茶褐色土層。

c. 鋼釉陶器壺

第39図11は口径が18cmと求めることが出来た大型の壺とみられるもので、口縁が大きく外反し、玉縁状に肥厚する。肥厚は折り返して成形している。頸部のみ薄い茶紫色の釉を施す。口縁と頸下部には茶褐色の失透釉を施している。内面は茶褐色の釉を施しているが、黄白色に躍変している。素地は明るい灰紫色の粗粒子で、粗い茶色や白色の鉱物と細かい石英を多く含んでいる。ノ-30・31溝状遺構内焼土混じりより出土。

同図12は高台径が7.4cmを測る壺の破片資料である。高台の内削りは浅く、丁寧に仕上げている。釉は施されていないが、内面見込みのロクロ痕から壺として判断された。素地は淡灰色の細粒子で、細かい黒色鉱物を多く含んでいる。ハ-29茶褐色土層より出土。

2. ベトナム産染付

ベトナムもしくは中国南部の染付をここでは取り扱った。確認された器種は鉢・碗・皿の3器種のみであった。

a. 鉢

第39図13は高台径7.6cmを測る大振りの鉢とみられる染付で、見込みに灰緑色の呉須で花文を描く。釉色は淡灰白色の透明釉で内面及び高台脇まで施している。高台の内削りは深く、丁寧に平坦に仕上げている。素地は淡灰白色細粒子である。見込みには重ね焼きの際に使用した胎土目の目痕がみられる。同定の結果、本品は17~18世紀代に位置付けられているようである。産地はベトナムである。ヌ-33第1層より出土。

b. 碗

第39図14は推算口径が12.4cmと求められた染付の内彎碗である。両面の口縁には灰緑色の呉須で圓線を施している。釉色は淡灰白色の釉を施すが、外面は釉色がくすんでいる。貫入は外面にのみ細かく入っている。素地は淡灰白色の微粒子である。土取り場のセクションベルトから出土。(産地はベトナムもしくは中国南部)。

c. 皿

第39図15は口縁が僅かに外反する厚手の皿である。口縁の内外面に圓線を施し、外面には花文?と雲文とみられるものを描いている。呉須は淡青色と濃紺を帯びているものを用いている。釉色は淡黄白色の釉で両面に施している。両面に荒い貫入がみられる。素地は白色の細粒子で、半磁胎となっている。16世

紀代に位置付けられているようである。出土地点及び層位は不明。（产地はベトナムである）。

3. 小 結

タイの半練は、前回、蓋の撮み（1点）と追加の新資料で蓋3点、身3点の計7点が得られている。今回のものは蓋4点、身1点の5点であり、湧田古窯からは合計12点の資料が得られていることになる。今回の資料で第39図1の蓋端部を折り曲げて、断面を隅丸三角形状に削り而成形しているものが注目された。このタイの半練は、今のところ14世紀末から17世紀までの時代幅があるが⁶、一般的には16・17世紀の遺跡から多く出土している傾向にあることが窺える。出土量も120点近くあり、グスクや集落跡などから出土している。

タイの合子は伊原遺跡・今帰仁城跡などで出土していて、タイの半練に次いで多く出土しているが、金武正紀氏による緻密な論文では、タイ産大型褐釉陶器四耳壺については、「今後、グスクやグスク相当期の遺跡からの報告が増えると考えられる。」としている。最近では、南風原町の宮平ノロ殿内遺跡などから出土している。伝世品としては竹富島の喜宝院蒐集館や玉城村中央公民館で確認することが出来た状況などから、広く県内に流布していることが予想されるところである。

ベトナム産染付の皿・鉢については、1995年2月下旬に来日したハノイ国立考古学研究所歴史考古部門長 鄭高想（TRINH CAO TUONG）氏に同定をして戴いた。記して謝意を表わす。

註

註1. 金城亀信「グスク出土の“その他の土器”・“移入系土器”について」『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員会 1991年。

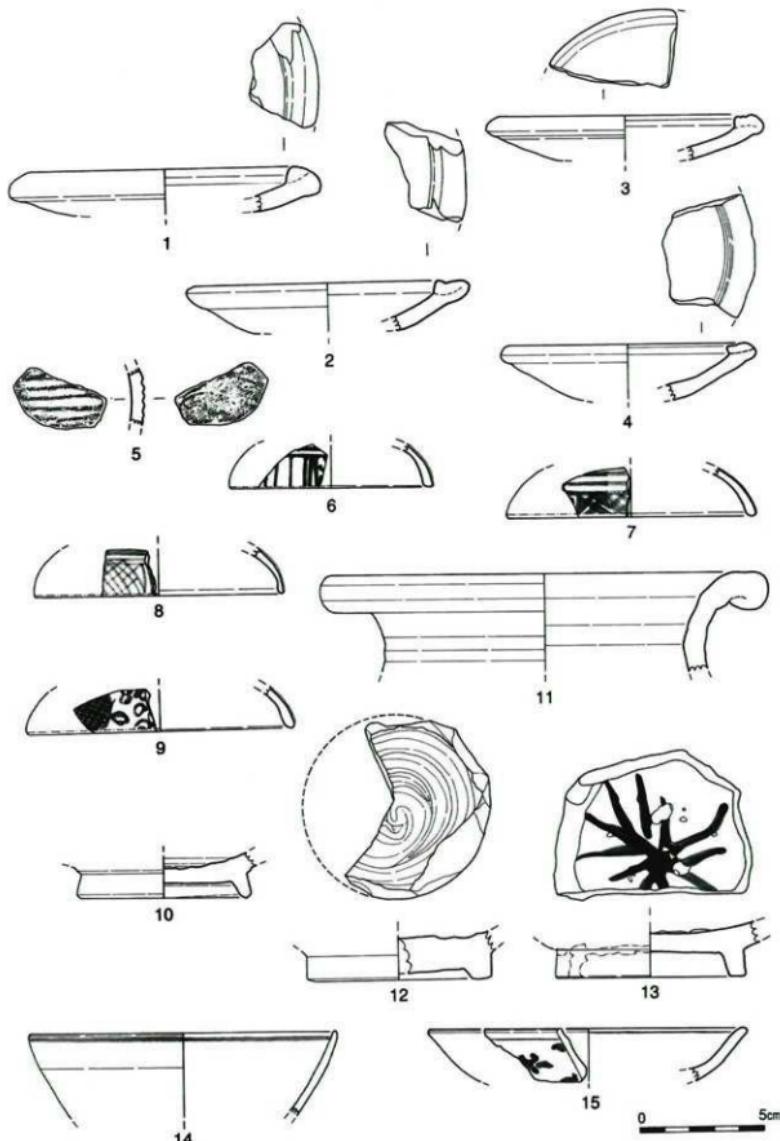
註2. 鳥袋 洋ほか『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986年。

註3. 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年。

註4. 金武正紀『沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁』『貿易陶磁研究』No11 日本貿易陶磁研究会 1991年。

註5. 南風原町教育委員会『南風原町の遺跡』 1993年。

註6・7 県文化課の金城亀信が現地で確認した。



第39図 東南アジア陶磁器

第10節 本土產陶磁器

第40図～第42図に主要なものを示した。本報告では図上復元が可能な遺物を紹介することとし、明治期以降の遺物は今回の報告では割愛する。遺物については大橋庄二氏の御教示を賜た。

本遺跡出土の本土産陶磁器の産地は、肥前産および肥前系（薩摩系の可能性があるものを含む）によって占められる。製品の大部分は染付であり、青磁・白磁及び陶器は染付の出土量に比して希少である。年代は16世紀代から19世紀後半まで各時期の製品が出土しているが、特に17世紀後半～19世紀後半の製品の出土が目立つ。

各遺物の詳細な年代・特徴・産地などについては第7表を参照されたい。以下年代順に各区の概要を述べる。

第6表 本土產陶磁器出土狀況

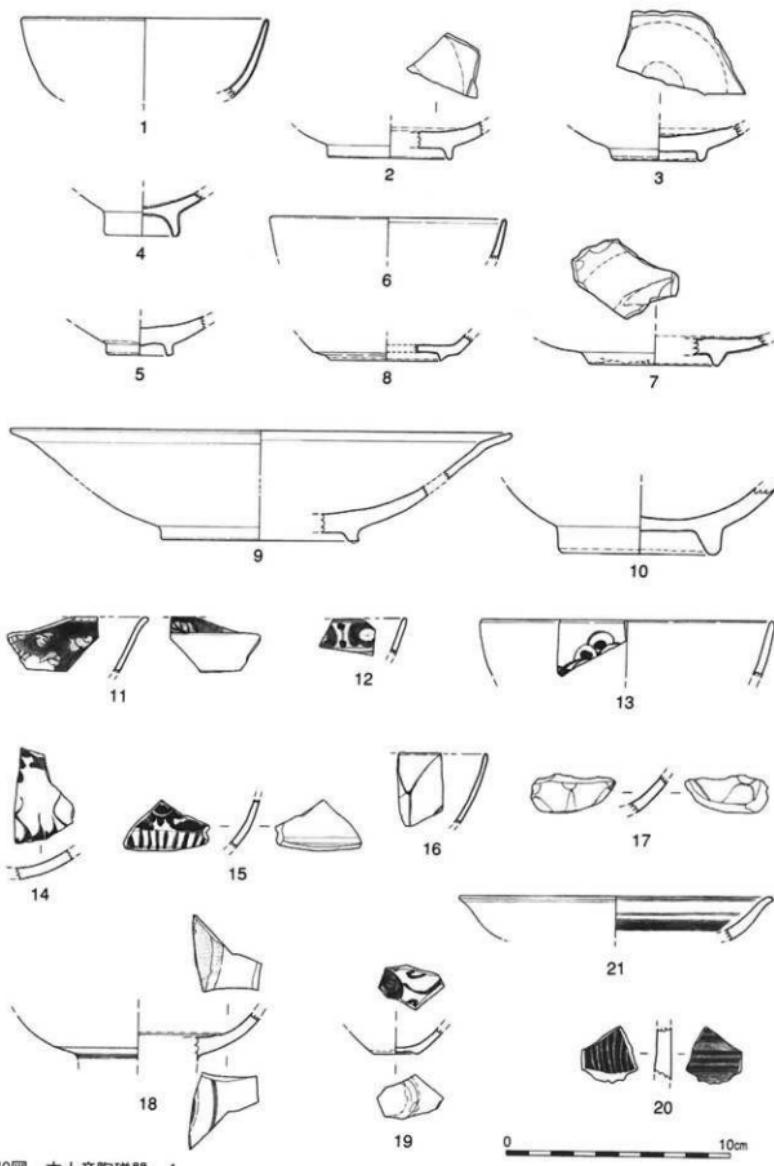
種類	種類	選別	A												B												合計
			小計	第1種	第2種	第3種	第4種	第5種	小計	第1種	第2種	小計	木	不	計	小計	第1種	第2種	小計	木	不	計	木	不	計		
肥前灰葉	小柄	■	1						1			1			1											1	
肥前灰葉	■	■	1						1			1			1											1	
肥前灰葉	■	■	1						1			1			1											1	
内野山茶	小柄	■	1						1			1			1											1	
内野山茶	■	■	1						1			1			1											1	
内野山茶	不明	1							1			1			1											1	
肥前灰葉	■	■	1						1			1			1											1	
伊万里	■	■	1						1			1			1											1	
伊万里	小柄	■	1						1			1			1											1	
伊万里	■	■	2						2			2			2											2	
竹	不明	1							1			1			1											1	
竹	■	■	1						1			1			1											1	
竹	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
色絵	■	■	1						1			1			1											1	
常滑焼	小柄	■	1						1			1			1											1	
常滑焼	急須	■	1						1			1			1											1	
常滑焼	急須裏	■	1						1			1			1											1	
常滑焼	小菴	■	1						1			1			1											1	
常滑焼	不明	1							1			1			1											1	
型紙刷	■	■	1						1			1			1											1	
型紙刷	小柄	■	1						1			1			1											1	
型紙刷	■	■	1						1			1			1											1	
型紙刷	■	■	1						1			1			1											1	
麻笛松	小柄	■	1						1			1			1											1	
麻笛松	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	開口	■	1						1			1			1											1	
二本絆	小柄	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1											1	
二本絆	■	■	1						1			1			1												

注 ①16℃未^一17℃初^二、1580^三—1680^四、17℃^五半^一18℃^六、18℃^七半^一19℃^八、19℃^九—18℃^十、18℃^{十一}—17℃^{十二}。

第7表a 本土産陶磁器観察一覧

単位: cm

図版 番号	器形	部位	口径 底径 厚さ	素地	特徴	出土地	備考	
1	碗	口縁部	10.8 — —	淡灰白色 でやや粗 い	口縁部が外側へ開き気味になり上部で僅かに外反。口唇部は尖り気味で、内側の様は比較的明瞭。	警察機 F-2層 第2層	肥前系 18c	
2	碗	底部	5.6 — —	淡灰白色 でやや粗 い	低く、細い高台で、絶輪のあと疊付の軸を搔き取り整形。疊付の内側やや斜め。また、内底面は蛇の目状に微砂粒が認められる。	A — — 33 第3層	肥前系 18c	
3	碗	底部	4 — —	淡灰白色 でやや粗 い	低く、細い高台で、絶輪のあと疊付の軸を搔き取り整形。疊付の外側を斜めに面取り。内底面は蛇の目状に微砂粒が認められる。	A — — 33 第2層	肥前系 18c	
10	碗	底部	6.8 — —	乳白色で 細かい	安定感のある高台で、逆三角形状に疊付の方へ厚さを減じる。絶輪のあと疊付の軸を搔き取り、両側を斜めに面取り。	本土産 18c か	本土産 18c か	
4	碗	底部	3.2 — —	黄灰白色 でやや粗 い	絶輪のあと疊付部を軸削ぎ。高台の内側はやや丸みを持つ。疊付は平坦で、その外側を斜めに面取り。内外面に細かな貫入があり。	B A-30 系褐色土層	肥前系か 1 7c前半	
5	皿	底部	3 — —	黄白色で やや粗い	高台は小さく、やや外側へ開く。疊付は平坦で、外側を斜めに面取り。内底面は露胎。内外面に細かく密な貫入あり。軸は白く麗る。	中国か	中国か	
40	碗	口縁部	10.6 — —	灰白色で やや粗い	口縁部が開き気味、外面の上部を若干削る。口唇部は舌状。	A A-32 第1層	内野山窯 青緑釉 17c ~18c前半	
7	皿か	底部	5.8 — —	淡灰白色 でやや粗 い	高台は逆三角形状に低くつくり、疊付は平坦。疊付の内側を斜めに面取り。絶輪のあと疊付部を軸削ぎ。内底面は蛇の目状に軸削ぎ。	A — — 31 第1層	肥前系 18c	
9	皿	口縁部 ～底部	8.8 — 4.9	暗褐色で やや粗 い	高台際からほぼ直線的に外側へ開く。口縁部が角度をもって外反し、口唇部は舌状を呈す。高台は丸く方形形状につくり、疊付は平坦。口縁部上端の内外面および口唇部は露胎。疊付と高台内側も露胎。疊付に胎土の焼着あり。	A A-33, E-32 第4層, 第 3層	唐津系?	
11	碗	口縁部	— — —	乳白色で 細かい	口縁部上端が若干外反し、口唇部の軸を搔き取る。口唇部はやや丸みをもつ。外面の脇部にダミ技法の花文を配す。内底は口縁部に同様な技法により施す。	伊万里系 表探	伊万里系 表探	
12	碗	口縁部	— — —	淡灰白色で やや粗 い	直口口縁で、口唇部は平坦。外面の口縁部に四方攢文?。内底は無文。絶輪のあと口縁部を軸削ぎ。其須の発色はやや淡い。淡青白色の透明釉で内外面に粗い貫入あり。	伊万里系 表探	伊万里系 表探	
13	碗	口縁部	13.2 — —	淡灰白色で やや粗 い	直口口縁で、口縁部が若干開く。口唇部は舌状。文様は外面に施すが、横図は不明。其須はやや黒ずんで発色。淡灰白色的透釉。	肥前系	肥前系	
15	碗	胸部	— — —	淡灰白色で やや粗 い	表面に蓮瓣文を施すとその上に1本の團線を配し、その上方にタコ唐草文を施す。内面に2本の團線。其須の発色は比較的良好。淡青白色の透明釉で、内外面に粗い貫入あり。	伊万里 18c 半~19c中	伊万里 18c 半~19c中	
16	碗	口縁部	— — —	白濁色で 細かい	口縁が若干内凹。口唇部舌状。薄手。外面に網目文。其須の発色はやや淡い。淡青白色の軸で、内外面に粗な貫入が密。	A E-34 第2層	伊万里 17c 中~17c後	
17	碗?	胸部	— — —	乳白色で 細かい	内外面とも下方に團線、その上方に網目文を配す。其須の発色は淡い。軸は淡青白色の透明釉。	伊万里 17c 中~17c後 表探	伊万里 17c 中~17c後 表探	
18	碗	胸部	— — —	淡灰白色で 細かい	外面の下方および高台外面に1本づつ團線が認められる。其須の発色は淡い。内底面は蛇の目状に軸削ぎ。	肥前系か	肥前系か	
19	杯?	底部	2 — —	白濁色で 細かい	基筒底模の底部で、疊付周辺だけ軸削ぎ。内面に施文しているが、横図は不明。其須の発色は比較的良好。淡青白色的透釉。	伊万里系 特殊	伊万里系 特殊	
20	盤?	胸部	— — —	暗茶褐色で 細かい	画面とも白化粧を施したあと筋状のもので搔き取り、暗緑色の軸を施す。	唐津系? A A-31 第2層	唐津系? A	
8	皿	底部	5 — —	乳白色で 細かい	高台面で明瞭な縦を有す、いわゆる櫻折れの資料。高台は小さく、低く、外底面の削りが深い。絶輪のあと疊付を軸削ぎし、斜位に整形。内底面に丸文様の繪付を施すが、すべて剥げ落ちている。	本土産色絵 明治頃 第1層	本土産色絵 明治頃 第1層	
14	皿	胸部	— — —	白濁色で やや粗 い	内面に草花文?を施す。其須の発色は比較的良好。	伊万里	伊万里	
21	皿	口縁部	14 — —	乳白色で 細かい	口縁部上端で若干外反。口唇部は舌状を呈し、外側の後は比較的明瞭。外面の口縁部および脇部に團線を1本づつ贈らし。脇下部にはダミ技法様のものが施される。其須の発色は純い。	伊万里 表探	伊万里 表探	
41	1	碗	底部	7.8 — —	淡灰白色で 細かい	しっかりした高台をつくるが、疊付部堅重。外面高台際に1本の團線と上方に略「S」字状の縱線を約5mm間隔で配す。いずれも朱色。	A I-34 第1層	色絵
2	皿	口縁部 ～底部	15.6 8.2 3.1	淡灰白色で 細かい	高台は低く、疊付、内側を斜めにする。口縁部上端が外反し、口唇部は尖り気味。絶輪のあと疊付部を軸削ぎ。内底面の下方に1本の團線と上方に縱横の縞で区画した中に格子文を配す。薄く朱色が残る。	I-33 第2層	色絵	
3	皿か	底部	6.2 — —	乳白色で 細かい	逆三角形状の低い高台。内底面に青色による花文。絶輪。	A I-33 第1層	18c後半~19c色絵	

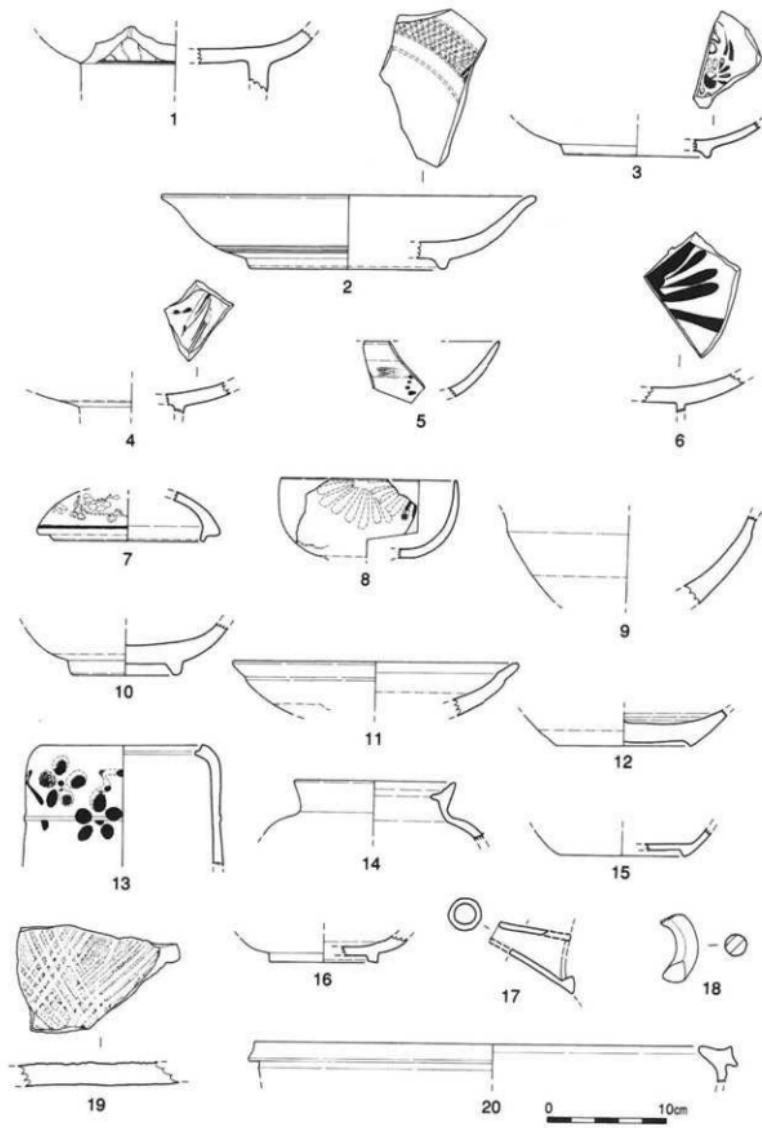


第40図 本土産陶磁器 1

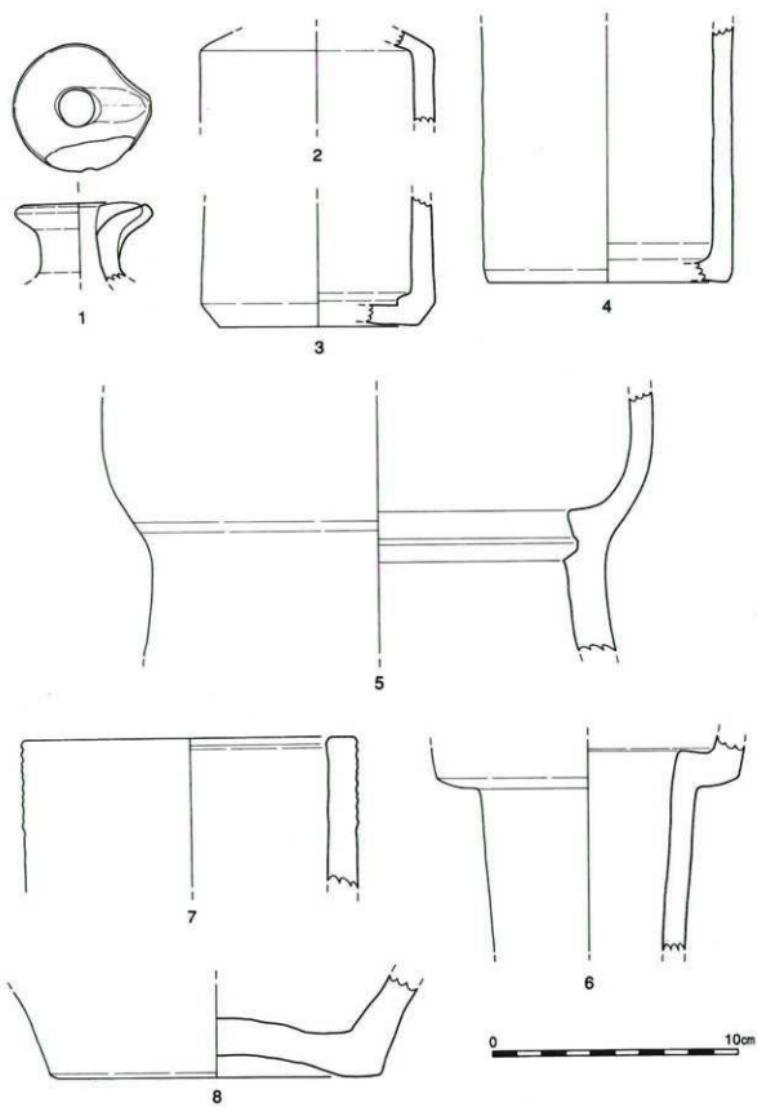
第7表-b 本土産陶磁器観察一覧

単位: cm

図版番号	器形	部位	口径底厚	素地	特徴	出土地	備考
第41図版	皿か皿	底部	4.2	黄白色でやや粗い	高台脇まで施釉。内底面に地文様の草文を鉄鉢で施し、赤色の繪付けを施す。外外面とも細かく密な貫入あり。	A 3-32 第1層	京他系(肥前可能性あり)18c
	碗か皿	口縁部	-	黄白色でやや粗い	ゆるやかな弧を描き口縁部は尖る。破片の全面に釉が見られる。外面の脇部に茶と緑による繪付を施す。	警察機 黒褐色土層	関西系 18c代
	碗か皿	底部	-	黄白色でやや粗い	高台は細く、高台脇から外底面は露胎。灰釉を施し、内底面に赤と緑の繪付けで花文を描く。	警察機 黒褐色土層	関西系 18c代
	蓋	口縁部	6.2	灰白色で細かい	縁に沿うように肉厚による繊維線を1本巻らし、甲部に繪付けで花文を配すが、色は不明。受け部と接する部分を除き総釉。	A 7-31 第2層	肥前系?
	碗	口縁部	1.4	黄白色で粗い	脇部が膨らみ、口縁部は内湾気味。口唇部は平坦。外面の口縁部に菊花の花文を施らす。朱色の繪付けが、ほとんど剥げている。外面の腰部以下を除き総釉。外外面に細かく密な貫入あり。	A t-33 第2層	京焼系?
	碗?	脇部	10.2	灰白色でやや粗い	外面の上方で不明瞭な後がみられ、そこから上部が薄くなる。腰部下外縁は露胎。釉は剥落した感じになっている。	A J-31 第3層	沖縄産灰釉
	碗	底部	4.4	灰白色で細かい	高台は逆三角形状で、置付は平皿。外面を斜めに面取り。高台脇から外底面は露胎。内外面とも密な貫入あり。	A n-32 第3層	沖縄産灰釉
	皿	口縁部	12.2	灰白色でやや粗い	口縁部近くで厚さを減じ、そこから口縁部にかけて縁を意識している。口唇部は丸味帯びる。内外面とも腰部以下は露胎。	A J-33 第1層	沖縄産灰釉
	袋物?	底部	5.6	淡黄色でやや粗い	筋笥底の袋物か。内面と外底面に透明釉を施し、外面に緑釉を施す。腰部下方から外底面の縁にかけて釉剥ぎ。	表採	本土産?
	茶入れ?	口縁部	6.8	茶褐色の微粒子。	脇部が若干凹む筒形。口縁部上端が急に内傾し、蓋受け部をつくる。脇中央部に陽彫線、脇部に梅?文を配す。	A 7-31 埋品	常滑焼?
第42図版	急須?	口縁部	6.8	~	脇部が外側へ直線的に開き、脇部が球状に膨らむ。内側の蓋受けは脇部の中ほどで、黒味を帯びる。頸部と肩部の境い目は四線様。	B 7-29 明茶	常滑焼?
	~	底部	5.2	~	基筒底。	A J-30, 31 第2層	常滑焼?
	~	底部	4.6	~	高台は低く、小さく、置付は若干凹む。腰部が丸味をもつ。	A J-31 第2層	常滑焼?
	~	注口部	-	~	~	A J-33 第2層	常滑焼?
	~	把手	-	~	~	表採	常滑焼?
	鍋?	口縁部	21	灰褐色の露胎で、微砂粒の混入が目立つ。	口縁部を内側へカギ状に突出させ、その外側に断面が方形の突部を囲らせる。凸帯の外側は凹線様。口唇部は幅広く平坦で、蓋受け様になる。内面は弧状。内側の突出部は舌状。	A n-33 第3層	土器 中世か(鎌倉・室町?)
	瓶子	口縁部	5.6	灰白色的粗粒子。	円筒形の瓶子。頭部が直線的で短く、口縁部は逆「L」字状。一端を下側から持ち上げ、注き口をつくる。明茶褐色の釉を施す。	表採	
	~	脇部	9.4	灰褐色の粗粒子。	円筒形の瓶子の脇部。表面は明茶褐色、内面は緑釉を施す。	表採	
	~	底部	9.0	明灰色の粗粒子。	円筒形の瓶子の底部(ベタ底)。底面からの立ち上がり部を斜位に面取り。外側に氣泡が目立つ。内面は露胎。	表採	
	~	底部	10.0	灰白色的粗粒子。	円筒形の瓶子の底部(ベタ底)。底面からの立ち上がり部を斜位に面取り。明茶褐色の釉を施す。立ち上がり部直上にマークあり。	表採	
第39図版	不明	脇部	18.6	楕褐色の粗粒子。	燒き締めの陶器で、全体形は不明。「S」字状を呈し、上部はやや丸味を帯びる。下部は直線的で厚くなる。内面カギ状で、受け部か。	B 井戸前排水溝埋乱	
	蓋?	底部	9.5	灰褐色の粗粒子。	底面部の縁を1.5~2.0cmほど平坦にし、そこから中央部へは上方押上げる。立ち上がり部は比較的明瞭な角を有し、その近くまで施釉。底面部及び内面は無釉。外底面に十字のマーク線のものあり。	A J-37 溝状遺構焼土混じり	
	土管	脇部	12.0	-	類例は御所跡にある。	A J-31 燒土混じり	



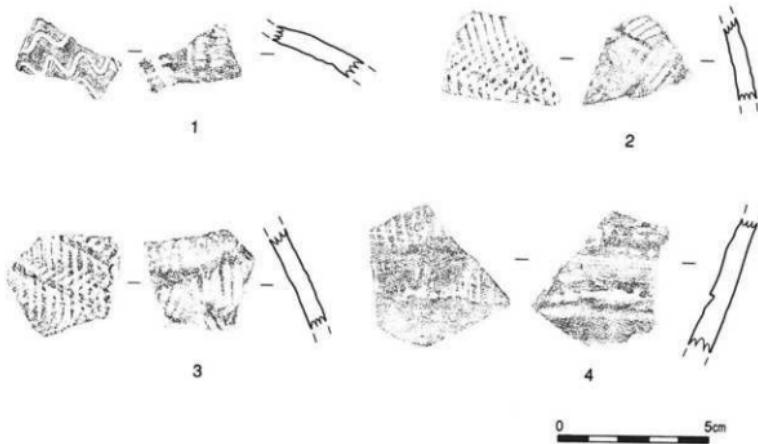
第41図 本土産陶磁器 2



第42図 本土産陶磁器 3

第11節 須 惠 器

4点得られており、第43図1～4に示した。いずれも灰黒色の器肌を有し、胎土に白色の微砂粒を多く含むという特徴がみられ、南島須恵器の範疇で捉えられるものと考えられる。4点とも小破片のため器種・器形などの詳細は判然としない。1は表面に3条の波状沈線文が認められるもので、壺形の肩部付近の資料かと考えられる。裏面には當て具の痕が残る。他は無文の胸部資料で、表面には綾杉状の叩き痕、裏面には當て具の痕が残るものである。4は表面にナデ、裏面に線状痕が仕上げとして施れており、叩き痕や當て具の痕は2・3ほど明瞭ではない。2・3は全体的な特徴から同一個体の可能性もある。



第43図 須 惠 器

第12節 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器として分類したものは、器の表面に釉を掛けたものであり、一般的に「上焼」と呼称されるものを中心とするものが主体である。

今回出土した沖縄産施釉陶器の器種は、碗・小碗（茶碗を含む）・小杯（盃）・小皿・大皿・小鉢・大鉢・酒器（俗称：カラカラ）・急須・鍋・合子・秉燭・火取・香炉・瓶子・花瓶・壺（茶入壺・油壺を含む）・片口鉢の18種類が確認されている。これらの器に釉掛けされた釉の種類として、灰釉・鐵釉・透明釉・鉛釉・瑠璃釉・綠釉の6種類が基本的な釉色となっている。その他に素地に白色や茶色の化粧土を塗付した例や、白色のものには白化粧を施した後に透明釉を施す例がある。茶色の化粧土のものは鐵釉（褐釉を含む）を施釉するものがある。茶色の化粧土のまま放置する例は前回の報告では多い傾向にあったが、今回

の資料にはこれが確認できなかった。釉の掛け分けについてみると、三彩では明青色・濃青色の呉須系統と黄緑色・黄茶色の鉛釉系統、その他に淡緑色の線釉系統の釉が使用されているようである。三彩を施した器種として小碗・急須（大型急須を含む）で確認されている。次に呉須を施した線彫りの染付（釘彫染付）の例では、碗・茶碗で認められている。

施文具や文様の種類としては、線彫り（釘彫を含む）・備描き・片切り彫りなどで草花文・格子文・縦沈文線文・斜沈線文・交差沈線文などを描くものと筆描き（指などを含む）で草花文・花樹文・巴文・花文・竹葉文などを描くものがある。その他に陰刻された文様に白色土（白色釉？）を文様に埋め込む白土象嵌（三島手）の資料も今回、再確認された。象嵌された器の種類として小碗・合子・火取・香炉・急須の5種類が認められた。

以下、各器種の器形や釉色（施釉手法）などの分類については、基本的に前回報告の分類概念を踏襲して行ったが、新しいタイプの出現や分類概念の再検討が生じていることが確認されたので、分類及び分類概念の見直しを行ったのでこれも以下に記述することにする。個々の特徴については観察表第9表a～hまでに呈示した。分類概念については前回のものを再録し、新しく確認したタイプを追加する方法で記述を行う。

a. 碗

器形や施釉などからI～VII類に分類できた（分類概念の変更や追加等については、IV類のd種とV類のc種を追加）。

・I類（灰釉無文碗）

直口口縁の碗で高台脇から口縁にかけて、外側に開きながらストレートに移行する器形である。高台が高い無文碗である。いわゆる灰釉碗と称されるものである。施釉の手法は「フィガキー」である。（第44図1～4）。

・II類（灰釉有文碗）

外反口縁の碗で高台脇から外側に幾分丸味を持たせる器形である。見込みを浅く窪ませるのも特徴のひとつである。外面に鉄釉で草花文を描く。（第44図5）。

・III類

外反口縁の碗であるが、外反の度合に強弱があった為、釉掛けや釉の掛け分けなどでa～cの3種類に分けた。以下にその特徴を略記する。

a種…外面鉄釉、内面灰釉。見込みに丸文と圓線を鉄釉や白釉で描く。（第44図6～8）。

b種…両面鉄釉、フィガキーで施釉。見込みに鉄釉で丸文を描く。（同図9）。

c種…外面鉄釉、内面透明釉（下地に白化粧土）。（同図10）。

・IV類

口縁の外反の度合いは微弱となり、直口する碗も含まれている。釉色の違い（掛け分け）や施釉の範囲にも変化が見られたので、a～cの3種類に細分した。これらに共通する点は両面を総釉した後に内底面や疊付の釉を除去することである。

a種…外面淡青色、内面透明釉（白化粧）。外底面に透明釉を施す線釉の碗。（今回は検出されなかった）。

b種…両面透明釉（白化粧）。外底面に透明釉を施す。有文と無文があり、有文の場合は線彫りや丸彫りで丸文に三葉文・花文などを組合わせる。中には文様に呉須を施す「釘彫染付」も含まれている。（第44図11・12）。11は口縁に淡青線釉を掛け分けて施す。

c種…両面鉄釉。外底面も鉄釉を施している。（今回は未検出）。

d種（新設定）…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）を施すもの（同図13）。

・ V類

外反する碗で他と器形は共通するが、白化粧土の施し方などに違いが見られたので、a～cの3種類に分けた。これも両面に総釉後に内底面や疊付の釉を除去する点でIII類と共通する。

a種…外面透明釉（白化粧）、内面透明釉。（今回は未検出）。

b種…外面透明釉、内面透明釉（白化粧）。このタイプには有文と無文があり、有文の場合は線彫りで草花文を描いた後に文様へ呉須を施す。（今回は未検出）。

c種（新設定）…両面に透明釉と白化粧を施す。（同図14）。

・ VI類

このタイプは、口縁造りから外反口縁・内彎口縁の2種類に分けられるが、両者は口縁の造りが微妙な違いである為、釉色や施釉などの方法でa・bの2種類に分けた。（今回は未検出である為、a・b種の細分類については省略する）。

・ VII類

外反口縁と内彎口縁の2種類が含まれているが、両面及び外底まで白化粧を施した後に呉須を主体に飴釉・綠釉などで草花文・花文などを描き透明釉を施す。この中には三彩腕や赤絵が含まれている。これらの類似点は両面に総釉した後に内底面や疊付の釉を除去することである。（同図15～17）。今回は赤絵の碗が検出されなかったことを付記する。

b. 小碗

茶碗としての利用が主体とみられたので、碗と区別した。小碗も器形や施釉などを基本にI類～V類に大別し、必要に応じて細分した。（今回はV類b種とVI類を新しく設定した）。

・ I類

外反と内彎の小碗がある。前者はa種、後者をb種として2種類に分けた。

a種…両面透明釉（白化粧）のものと外面透明釉、内面透明釉（白化粧）を施すものを主体とするが、器にアクセントをつける為に飴釉と綠釉を施したものがある。釉の掻き取りは総釉後に見込みと疊付の釉を除去するものと疊付の釉のみ除去するものが含まれている。この手は口縁が外反するものである。（第45図18～23）。

b種…両面透明釉（白化粧）を施すものと外面に鉄釉・透明釉、内面が透明（白化粧）を施釉するものがある。有文と無文の両者があり、有文の場合は呉須や白釉で花文・渦巻文などを描く。この種は内彎する小碗である。（同図24・25）。

・ II類

I類a種と同様に外反する小碗である。外反の度合いには強弱の変化が認められる。施釉の手法などから2種類の変化が認められた。これは外面鉄釉・内面透明釉（白化粧）のタイプと外面鉄釉・内面透明釉のみを釉掛けするタイプのものである。いわば異色の釉を掛け分けているものである。（同図26・27）。

・ III類

内彎気味の有文の小碗である。文様の構成や器形などから三鳥手の範疇に入るものとみられる。文様は圓線・菊花文・綾沈線を描いた後に鉄釉？もしくは茶色の化粧土で象嵌を施す。（同図28）。

・ IV類

腰部を箆削りで面取りした小碗で、口縁が外反する。有文と無文があり、後者のものが多い。釉掛けは両面に透明釉（白化粧）を施すものを基本とするが、透明釉（白化粧）以外に黄緑色や淡緑色の飴釉でアクセントをつけるものがある。異色の釉で器に加飾するものも文様の一種として把握し、このグループに含めた。この分類概念に今回、瑠璃釉を追加することにした。（同図29～31）。

・V類

V類は肩部が「く」の字状に折れ、口縁で外反する。文様は線彫りによる圓線と刻文を描いた後に白土で象嵌を施す。このV類を新しく、a・bの2種類に細分し、a種は前述の白土象嵌のもの、b種は無文で外面に鉄軸、内面は透明釉（白化粧）を施すものとした。器形は両者とも共通する。V類a種は今回未検出である。V類b種は第45図32に示したものである。

・VI類

新しく設定したタイプの小碗で器形が円筒状となる茶碗である。両面に透明釉（白化粧）を施す。

c. 小杯（盃）

前回は小杯が一例のみ確認されていたので、分類を実施しなかったが今回は器形や施釉・釉色などで変化が認められたので、I~III類に大別した。また、必要に応じて細分した。以下に分類概念を記述する。尚、前回のものはIII類に分類したい。

・I類

口縁が僅かに外反する小杯である。釉色や施釉方法などからa~cの3種類に細分した。

a種…両面とも淡緑灰色や淡緑黄色の透明釉を施すもので、灰釉の無文小杯である。（第46図34・35）。

b種…両面とも透明釉（白化粧）を施す。施釉手法はa種と類似する。（同図36）。

c種…外面は灰緑色の透明釉、内面が透明釉（白化粧）を施す。外面に白色の釉で斜位の点描で季文を施す。（同図37）。

・II類

II類はI類と器形を比較した場合、高台からの立ち上がりで丸味を保持しながら内側に閉じ気味に胴上部へ移行する点で異なっている。しかし、施釉手法はI類c種と共通する。II類は外面淡灰白色の透明釉、内面が透明釉（白化粧）を施している。（第46図38）。

・III類

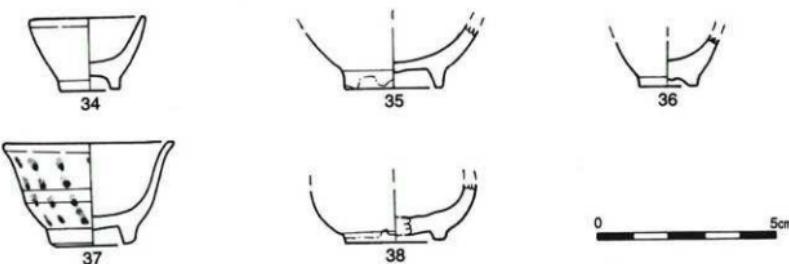
II類と同様の内彎タイプの小杯で、両面に濃緑色の釉を施す。（今回は未検出）。

d. 小皿

銘々皿の可能性もあったので大皿（盛り付け）と区別し、小皿として独立させて分類したものである。小皿は器形や施釉手法などからI類~V類までに大別し、状況に応じて細分したが今回、III類c種の新設定、IV類a・bとV類a・bの分類の見直し及び追加があったので、従来の分類に追加して付記する。

・I類

I類には内彎するものと外反もしくは直口するものに分けられる。内彎する小皿は有文である。外反



第46図 沖縄産施釉陶器 3 (小杯)

もしくは直口するタイプの小皿は無文であった。これらの特徴以外に施釉手法などから a ~ c の 3 種類に分けた。今回、この I 類は出土していないので、I 類 a 種 ~ c 種の分類概念を省略した。

・ II 類

口縁の造りは口縁端部に指圧を加え稜花状に仕上げる小皿で、口唇に施削りを加え面を取るものである。釉掛けの状況などから a ~ b の 2 種類に分けた。

a 種…両面に透明釉（白化粧）を施す。外底面にも施釉。内面に呉須で雲文？・花文などを描く。

線彫りの場合は草文・圓線を描いた後に呉須で文様に沿って筆書きを行っている。（第47図39）。

b 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。無文と有文があり、有文の場合は線彫りによる圓線を描く。

今回、b 種の出土はなかった。

・ III 類

口縁の外反が微弱な小皿である。施釉や釉色などの組み合わせの違いで a ~ b の 2 種類に分けられる。今回、新たに c 種を追加して、a ~ c 種の 3 種類に細分した。

a 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。無文の小皿である。中には口縁端に三角形状の突起を貼り付けた灯明皿と判断できるものが含まれているが、釉色の変色や煤の付着がない為、灯火以外に使用されたものと理解されたので本種に含めてある。（第47図40・41）。

b 種…a 種と同様に鉄釉・透明釉（白化粧）を施すが、内面に綠釉の筆書きで花文状に施す三彩小皿である。今回は出土していない。

c 種（新設定）…a 種と同様に口縁端に三角形の突起を貼り付ける点で共通しているが、施釉手法や釉色で違いが認められる。この種は外面が灰緑色、内面は透明釉（白化粧）を施すものである。（同図42）。

・ IV 類

内彎の小皿で、両面に鉄釉をフィガキー手法で施している。IV 類を a ~ b の 2 種類に分類した。従来のフィガキー手法のものを a 種とした。（第47図43）。b 種は a 種と同様の鉄釉を両面に施すが施釉で a 種のフィガキーとは異なり、見込みの釉を蛇ノ目状に搔き取っている。（同図44）。

・ V 類

赤絵小皿で、両面に透明釉（白化粧）を施した後に赤茶色や明緑色の釉で草花文を描いている。この V 類を a ~ b の 2 種類に細分した。a 種は従来の赤絵小皿である。b 種は新しく設定したもので、施釉の方法は透明釉（白化粧）を両面に施している点で a 種と共通しているが本品は無文である。V 類 a 種は今回出土されていない。V 類 b 種は第47図45に図化したものである。

e. 大皿

盛り付け用の皿とみられるものを大皿と仮に分類した。口縁形態や釉色も変化に富んでいる為、I 類 ~ IV 類までの 4 種類に大別し、必要に応じて細分した。今回、新たに細分類の中で I 類 d ~ e 種と IV 類 d ~ e 種を追加した。

・ I 類

内彎する大振りの皿で、施釉などの状況から a ~ e の 5 種類に細分した。

a 種…両面に透明釉（白化粧）を施す。白化粧を施した後に鉄釉で圓線・斜沈線を筆書きする。大振りの内彎皿である。（今回は未検出である）。

b 種…外面透明釉、内面透明釉（白化粧）を施すものと両面に透明釉（白化粧）を施すものが含まれている。内面に線彫りの丸文に継沈線文・波文などを施したものや文様に淡緑色・淡茶色の釉を施すものがある。外反のきついものとゆるく微弱に外反するものがある。（今回は未検出である）。

c 種…両面に透明釉（白化粧）をフィガキー手法で施す。大振りの内彌皿である。（これも未検出である）。

d 種（新設定）…両面に透明釉を施し、鉄釉で圓線や斜沈線を筆描きする内彌の大皿である。施釉方法はフィガキー手法で施すものである。高台のみ出土している例からこの手法であることが読み取れるところである。（同図46～48）。

e 種（新設定）…直口気味の大皿で、両面に透明釉を施す。内面には濃緑色の釉で圓線を描く。（同図49）。

・II類

口縁端部に指圧を加えて稜花状に仕上げる。両面に透明釉をフィガキー手法で施す。内面には鉄釉で圓線を2本描いた後に圓線の間に白色の釉を施している。また、見込みには鉄釉で丸文を描く。（今回は未検出）。

・III類

口縁が肥厚する大皿で、疑似肥厚口縁タイプと肥厚口縁のタイプの2種類がある為、施釉・釉色などからa・bの2種類に分類した。今回は未検出のものである為、a・bの細分分類の概念を省略する。

・IV類

この手の大皿は口縁を三角形状に肥厚させて仕上げているので、釉の掛け分けや釉色などからa～cの3種類に細分したが、新たにd・eの2種類を追加した。

a 種…外鉄釉、内面透明釉。外鉄の釉は高台脇で止まり、内面が総釉後に蛇ノ目状の搔き取りを行っている。（今回は未検出）。

b 種…両面に鉄釉や透明釉をフィガキー手法で釉掛けする。見込みに丸文や圓線を鉄釉・茶色の化粧土で描いている。（第47図50～53）。

c 種…外鉄釉、内面透明釉（白化粧）。外鉄は高台脇で釉が止まる。内面は総釉後に蛇ノ目状の搔き取り、内面及び内底面に青緑色の釉で花文を表現する。（今回は未検出）。

d 種（新設定）…口縁が三角形状に肥厚するもので、施釉は外鉄が透明釉（白化粧）、内面は灰緑色の釉を施す。内面に白色の釉で花文を描く。（同図54）。

e 種（新設定）…施釉の手法がd種とは反対で、外鉄は灰緑色の釉を施し、内面に透明釉（白化粧）を施釉する。内面が白化粧のみで終了し、透明釉の釉掛けを忘れたものもこれに含めることにした。文様は灰緑色の釉で点描による花文を表現する。（同図55）。

f. 小鉢

本品は口縁形態や製作手法などでI類からIII類に分類し、必要に応じて細分類を実施したが、今回、新資料の発見でI類とII類の分類概念の見直しと追加分類が生じたので、これを追記することにする。

・I類

このタイプは口縁部で「く」の字状に屈曲し、口縁が外側に開き傾いている。鍔付きの口折れ小鉢で、口縁内面は蓋を受けやすくする為に窪みをつける。高台脇からの立ち上がりの状態や施釉手法などからa～cまでの3種類に細分したが、資料の新発見で新たにd・e種の2種を追加した為、I類はa～eの5種類が確認されることになった。また、I類c種の分類概念に新たに呉須や鉛釉で文様を描くことも追記して、分類の幅を広くした。

a 種…両面に黄緑色の釉を施す。外鉄に線彫りによる刻文・圓線・斜沈線（梯描き）を施した後に白色釉（化粧土？）を文様に象嵌する「三島手」の手法である。（今回は未検出）。

b 種…両面は透明釉（白化粧）を総釉した後に疊付を露胎させたり、内底釉を蛇ノ目状に搔き取ってい

る。（第48図56）。

c種（分類の見直し）…両面ともb種と同様に透明釉（白化粧）を施す。内面の線彫りの格子文と波濤文を描いた後に呉須や鉄釉（飴釉の可能性あり）を文様に施すものと呉須と飴釉で文様を描くものもある。（同図57）。

d種（新設定）…両面に鉄釉を施すもの。口縁形態はI類a～c種とは若干、異なり「口折れ」となる。（同図58）。

e種（新設定）…両面に黄緑色の釉を施す。文様は白色の釉で交互に点文を飛びカンナ様に描く。（同図59）。

・II類

腰部が「く」の字状に折れる面取りの小鉢である。面取りは口縁から腰部まで範で面を削り取り、面数を八面にして仕上げている。内面は面同士の折れの部分（面の角）に青緑色の釉を流し花弁を表現しているものであるが、今回II類をa・bの2種に分けることにした。a種は前述した面取りの腰折れ小鉢、b種は釘彫染付で、両面とも透明釉（白化粧）を施すものである。（第48図60）。a種は今回検出されなかった。

・III類

この手は口縁が内側に強く内傾する内彎の小鉢である。施釉手法や器形の変化などからa～cの3種に分類した。今回、このIII類は出土していないので、各種の分類概念を割愛する。

9. 大鉢

大振りの鉢を仮称して大鉢とした。他器種との特異な点として高台に1・2個程度の孔を穿っている。紐通しの小孔とみられる。口縁部の特徴を掲げると外反口縁、肥厚口縁、輪花状口縁などが認められる。口縁形態や釉の状況などからI～IV類に大別される。これに新しく出土したタイプを追加・設定することにした。追加のタイプはI類にd～fの3種類、V・VI類は追加の設定となった。

・I類

口縁形態から口縁を外反させるもの、口縁を三角形状に肥厚させるもの、口縁を逆「L」字状に肥厚させるものの3つのタイプに細分できる。このタイプにd～fの3種を追加した。

a種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。口縁を外反させて口造りを行って。 （今回は未検出）。

b種…外面鉄釉、内面透明釉。口縁を三角形状に肥厚させる。（同図61）。

c種…外面に鉄釉、内面が透明釉を施す点はb種と共通するが、口造りが口縁を逆「L」字状に肥厚させている。また、綠釉で花文を表現する点などで相違がみられる。（同図62）。

d種（新設定）…両面とも透明釉（白化粧）を施す。口縁が僅かに外反する。（同図63）。

e種（新設定）…両面とも透明釉を施すものと外面鉄釉、内面に透明釉を施すものがある。口縁は逆「L」字状に肥厚する。（同図64～66）。

f種（新設定）…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）を施す。口縁は外反し、口唇端部が尖るものである。

施釉の手法はI類b種と同様に施しているが、釉色の違いや白化粧の有無で分けられる。（同図67）。

・II類

この大鉢は口縁の内端部に指圧を加え輪花状に仕上げている。施釉や釉掛けなどからa・bの2種類に分けられるが、今回未検出の為、細分したa・bの記述を省略する。

・III類

口縁の肥厚が大きくなり、大鉢I類c種より強調される。口縁は逆「L」字状に肥厚させるが、肥厚の

突出が外側に撮り出される為に、鉢状の口縁となる。施釉や釉色の違いなどから a・b の 2 種類に分けられた。

a 種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。内面に青緑色や鉄釉で花文を描く。外面に凸帯状の陽囲線を施す。（第48図68）。

b 種…両面とも鉄釉をフィガキーの手法で施釉する。内面に茶褐色の化粧土で丸文と圓線を描いている。（同図69）。

・IV類

高台から丸味を保持しながら胴上部まで立ち上がらせた後に口縁を内側にきつく内彎（内傾）させる大振りの鉢である。外面には鉄釉を施し、内面に透明釉（白化粧）を施しているものであるが、今回は検出されていない。

・V類

口縁の肥厚は他と比較して肥大化するもので、口縁の肥厚を折り返して製作するものや口唇に波状の凸帯を施すものがある。a・b の 2 種類に分類した。両者とも明青緑色の釉を両面に施す点で一致する。

a 種（新設定）…口縁が逆「L」字状に肥厚する。肥厚は折り返して製作する。（第48図71）。

b 種（新設定）…口縁が「く」の字状に肥厚し、口唇が幅広となる。（同図72）。

・VI類

この手は火鉢の可能性が高いものである。両面に透明釉（白化粧）を施す。口縁形態が特異であり、胴部から逆「ハ」の字状に開き、口縁で「く」の字状に折り曲げて垂直に近い状態で口縁を成形している。文様は呉須で、波濤文を口縁に描き、胴部へは草花文？などを描いている。（第48図73）。

h. 鍋

鍋は口頸部が「く」の字状に折れ曲がり、底部に三角錐状の突起を貼り付けたものである。これらの鍋は口縁の造りや把手の貼り付けなどから I 類と II 類に分類した。II 類については未検出の為、分類概念を削除した。

・I類

器形は胴下部で彫れ、胴中央から若干、内側に閉じ気味になりながら頸部へ移行する。口縁部で外反させている。底部は丸底で三角錐状の突起を 3 個貼り付けている。紐状の把手を口縁に貼り付ける点でも II 類と区別出来る。釉色は茶褐色・黄緑色・灰緑色の透明釉を両面に施している。（第49図74～77）。その他に第50図91～95・98・99に図示した鍋の蓋も出土しているが、身の分類と一致させるのは困難であったので、一部を除いて蓋の分類は実施しなかった。

i. 酒器

いわゆるカラカラと俗称されるもので、その用途は酒入れである。器形や文様の有無で a・b の 2 種類に分けられるが、今回、種類も豊富となったので、従来の a・b 種を I 類 a・b と改め、II・III 類を新しく設定することにした。以下に記す。

・I類

器形や文様の有無で a・b の 2 種類に分類した。

a 種…無文の酒器で、胴部に丸味を持たせて頸部で極端に細まっている。口縁は酒を入れやすいように口縁を外側に一端強く突出させた後に口縁端部を撮り上げている。（今回は未検出）。

b 種…有文の酒器である。胴部中央で算盤玉のように成形させる為、屈曲がきつくなっている。文様は丸彫りによる緻密な綴沈線と圓線を施す。（第49図82）。

・Ⅱ類

今回、新しく設定したタイプである。器形は円筒形に近いものと円筒形のものがある。口造りからa～cの3種類に細分した。

- a種（新設定）…肩部を「く」の字状に折曲させるので、両面に透明釉（白化粧）を施す。（同図78）。
- b種（新設定）…口縁を内方向に直角にきつく折り曲げている。外面は透明釉（白化粧）。内面が透明釉のみである。（同図79）。
- c種（新設定）…口縁を内側にきつく折り曲げる為、形態は鉤状となる。外面は青緑色の釉、内面が透明釉を施している。（同図80）。

・Ⅲ類

吊鐘状の酒器で今回、初めて確認されたタイプである。高台は「ハ」の字状の幅広高台である。外面に鉄釉を施す。内面は無釉で露胎する。（同図83）。

Ⅰ. 急須

急須の蓋と身を文様や釉色などから両者（蓋と身）を一致させた分類概念を記述する。分類概念は前回報告した身の分類でⅠ類～Ⅲ類と3種に分けたものに今回、Ⅳ～Ⅵ類を追加することにした。蓋を含めて分類することにした。各類の項目の後に括弧で部位名等をかこんで表示する。また、レイアウトの関係上、図番号・遺物番号が飛び交うことを付記する。

・Ⅰ類（身・蓋共通）

無文の急須で、底部に三角錐状の突起を3個貼り付けて脚とするものである。釉色や釉掛けの相違からa・bの2種類に分けた。

- a種…両面に透明釉を施す。外面は口唇と底面を除き施釉し、内面は口縁のみ露胎する。（未検出）。
- b種…外面に黒釉を施し、釉は外面が口縁から胴下部まで施している。内面は頸部の釉垂れを除き露胎する。（第50図86・第53図136～141）。

・Ⅱ類（身・蓋共通）

有文の急須で、異色の釉で文様などを表現するものや線彫りによる格子文・圓線・丸文などを描いた後に異色の釉を文様に掛けているものがある。このタイプは全て三彩急須として把握できるものである。三彩急須の範疇に入るものとして考えられた。（第50図87・第53図142・143）。

・Ⅲ類（身）

三島手の急須である。外面や把手の部分に線彫りによる沈線・圓線などを描いた後に白土を文様に埋め込んでいる（象嵌技法）。第53図144・145。144は象嵌はないが白土の変わりに釉を文様に施す。文様の構成は象嵌のタイプと一致した構成である為、このタイプに含めた。白土の象嵌を忘れた可能性が高い。

・Ⅳ類（身・蓋共通）…新設定

染付の急須であり、この中には釘彫染付も含めてある。蓋は外面（蓋甲）が透明釉（白化粧）、内面は白化粧のみである。一方、身は両面とも透明釉（白化粧）を施している。（第50図88・第53図146）。

・Ⅴ類（蓋のみ）…新設定

蓋甲の文様や施釉などからa・bの2種類に分けた。蓋甲の裏面は両者とも露胎である。

- a種…蓋甲は透明釉（白化粧）を施す。3本単位の櫛描きの沈線を施す。（第50図89）。
- b種…蓋甲は透明釉のみを施す。線彫りの圓線と沈線を施し、沈線間を菊花文のスタンプで施している。（同図90）。

・Ⅵ類（身のみ）…新設定

注ぎ口のみが出土しているが、瑠璃釉である為、設定した。大型急須には瑠璃釉が確認されたので、小

型の瑠璃釉急須の存在が濃厚となった。（第53図147）。

k. 合子・水滴

合子と水滴？の蓋とみられるものが2点出土している。合子の蓋は白土象嵌の三島手のものである（第50図100）。水滴？の蓋は呉須で「天」の字を筆書きしたものである。（同図101）。その他に水滴（第52図127）の底部片とみられるものが1点出土している。器形は側面觀が扁橢円形状となるもので、底造りは基筒底状に仕上げている。

l. 乗燭

「ウドンモー」と称されているもので、器内に灯心を支える切り込みのある円筒状の突起をもつものである。円筒状の突起は貼り付けである為、脚と身の製作過程にも注目し、I類a種—I類c種の3タイプに分類したが、改めてII類を追加し再分類を行うことにした。

• I類

a種…両面に灰緑色の釉を施す。口縁が直口し、脚上部から丸味を持っている。脚と身（器）は同一工程で製作され、脚から身までは一挙に造り上げている。（今回は未検出であった）。

b種…両面に灰緑色の釉を施す点は、I類a種と同じであるが、口縁を内側にきつく内傾させている。

脚は中空である為、脚と身は別工程で製作し、最終的に身と脚を貼り付けて完成させている。（今回は未検出である）。

c種…両面に黒釉を施す。器形はI類b種と類似するが脚が短く、身と脚は同一工程で一挙に造り上げている。（第51図102）。

• II類

このタイプは製作工程がI類a種に近い方法で仕上げているが、II類は外底面への穿孔がない点で区別できる。II類の特徴は外底面に高台を貼り付けている点である。両面に淡青緑色の釉を施している。（同図103）。

m. 火取

円筒状で高台を持つ器形のみである。外面に丸彫りによる圓線と緻密な綴沈線や波文を施すものと線彫りで圓線・綴沈線と型押しの三華文を施すものの2種があり、前者をa種とし、後者をb種としたが、今回、新たに内彫形の器形をもつものや施釉・釉色などから分類の見直しが生じたので、これを記す。

• I類

従来、単にa・b種として取り扱ったものであるが、ここではI類a・b種として改めた。また、b種の分類に追加資料を加え再度見直した。

a種…丸彫りによる圓線と緻密な綴沈線や波文を施すもの。（同図104・105）。

b種…白土で象嵌する三島手のもので丸彫りの疎密のある斜沈線と丸彫り・片切り彫りの短沈線・圓線を施したものである。（同図106・107）。

• II類

器形はI類と同様に円筒形のものであるが、施釉や釉色などからa～c種の3種類に分類した。

a種（新設定）…外面は淡灰緑色、内面が無釉。口縁内端が僅かに肥厚する。（同図108）。

b種（新設定）…外面は透明釉（白化粧）、内面が白化粧のみ施す。（同図109）。

c種（新設定）…両面に鉄釉と青白色の釉を掛け分けている。口縁内端が僅かに肥厚する。（同図110）。

• III類

口縁が内彫するタイプの火取で、施釉や釉色などからa～cの3種類に分けた。

a種（新設定）…外面は淡黄茶色や灰釉色の釉を施す。内面は露胎のものと透明釉のものがある。有文

と無文の二者があり、有文の場合は丸彫りの圓線を施している。（同図111・113）。

b種（新設定）…外面は鉄釉と淡灰白色の釉を掛け分けて施し、内面が露胎のもの。（同図112）。

・IV類

このタイプもⅢ類（新設定）と同様に内彫する火取である。丸彫りの圓線と交差沈線を施した後に白土で象嵌する三島手のものである。（同図114）。

n. 香炉

香炉については、前回、分類を実施していなかったので、ここでも分類の実施を見送ることにした。基本的な特徴を前回の報告から抜き出す。香炉は三足香炉で、底部は丸味のある平底や外底面に浅い抉りを入れ基筒底に仕上げるものがある。口縁はきつく外反するものや「く」の字状に折れるものがある。釉色や他の釉との掛け分けなどに変化が見られ豊富である。前回は三彩・灰釉・鉄釉・綠釉の香炉が確認されたが、今回は同図115の鉄釉（白化粧）を施すものと同図116の三島手（口唇に有軸羽状の文様を丸彫りした後に白土で象嵌するもの）が出土している。

o. 火炉

急須や鍋などを置いて炭火で保温（再加熱を含む）する炉で、両面の口縁端部に三角形状の大型の突起を貼りつけている。また、炭を入れやすくする為に、口縁は「U」の字状に抉り取っていたり、穿孔された把手を外面胴部に貼り付けているのも特徴である。把手には獅子面が施されているのも特徴である。獅子面が彫りによるものか型によるものかは今回確認できなかったが、状況から考えられたのは後者の型物の可能性であった。器形の変化などからⅠ類～Ⅲ類に分けた。今回の発掘調査ではⅡ・Ⅲ類は出土していないので分類概念を割愛する。Ⅰ類のみを記すことにした。

・I類

高台から丸味を持ったまま立ち上がり、胴上部から口縁は内側へ強く内傾する。全体的に丸味のある器形となっている。有文と無文の二者が確認された。有文の場合は口縁から胴部に片切り彫りの緻密な緋沈線を施している。釉色は黒褐色や茶褐色を帯びたものを両面に施していて、中には天目茶碗にみられる褐錆斑が認められるものもある。（同図117）。

p. 瓶子

瓶子は器形や釉色などの変化が著しい為、a～c種の3種類に分けられた。a種は外面に透明釉（白化粧）+綠釉+鉄釉を施した三彩の瓶子で、器形は胴長のナデ肩である。頭部から口縁方向に向かって細まつてくる。b種は外面に黒釉と透明釉を掛け分けて施している。頭部は細長く、胴部で丸味を帯びている。c種は両面に明茶色の釉を施し、器形が円筒形となる瓶子である。口縁は逆「L」字状に屈曲し、一端をつまみ出して注ぎ口とする。今回はb種（同図118）のみ確認された。その他に瓶子の口縁と胴・底部とみられるものが3点出土している。（同図121・122、第52図126）。126は糸切りの底である。

q. 茶入

薄手の茶入壺が1点出土している。怒り肩のタイプとみられるもので、両面に濃茶色の釉（鉄釉）を施している。口縁は小さい玉縁状の肥厚である。（第51図120）。

r. 花瓶

前回は大型の花瓶の底部片が1点出土していた。底造りは高台を「ハ」の字状に成形する脚状のものであったが、今回も、同様な成形で高台を造るものであり、1点のみ出土している。外面に鉄釉を施している。（同図119）。その他に花瓶の胴部片が3点（同図122・123・125）得られているので、これを図化した。

s. 油壺

この小壺は艶付け油用とみられるもので、すべて黒釉である。器形や底造りなどからa～cまでの3種類に分けた。a種は怒り肩気味の小壺で、高台外面を削り出し、底造りを意識して強調するもの。b種はナデ肩気味の小壺である。底造りはベタ底のままで終了しているもの。c種は肩部が屈曲するが、全体的には円筒形状に近い小壺である。底面のみ削り出して、疊付を造っているものである。今回はb・c種は確認されなかった。第52図127に図示したa種が1点出土している程度である。

t. 壺

器形や釉色などからI～III類の3種類に分類した。分類概念は以下に略記する。

・I類

外反する黒釉の壺である。全体的に丸味を帯びている。内面に茶褐色の化粧土を塗付する。今回は未検出である。

・II類

いわゆる嘉瓶と称されるもので、黒色の釉を施す。胴中央で一端細まる。今回は確認されていない。

・III類

広口の壺で、食用油専用の四耳壺である。耳は穿孔され縦長に貼り付けられる。（第52図130～135）。その他に第51図124と第52図128に図示した壺の底部片2点が得られている。前者は鉄釉を施し、後者は黄緑色の釉を施している。

u. 大型急須

大振りの急須で「アンビン」と称されているものである。前回出土した大型急須の釉色は全て黒釉を施しているものであったが、今回のものは釉色が、黒釉以外に透明釉（白化粧）と濃青色の釉などが使用され、三彩や瑠璃釉のものが初めて確認された。（第53図148～152）。

v. 片口鉢

同図153は高台脇から腰下部は大きく丸味をもちながら膨らみ、腰下部から口縁方向へは垂直に立ち上がり来る。器形は大振りの深鉢である。高台脇が僅かに残存する状況や口造りなどから片口鉢と分類した。口縁の両端が突出する為、口唇は幅広となっている。

w. 小 結

前回、報告（行政棟）した分類と今回、新たに設定し、追加したグループから湧田窯系の特徴のひとつであるフィガキー手法で、灰釉と鉄釉を施したものを器種分類ごとに抜き出してみることにする。これによって湧田窯系で、どのような器種を焼成したかをある程度、推定できるものと考えたからである。湧田から出土する上焼には壺屋窯系のものが混在し、両者を区別する為にも、ひとつの手掛かりとして湧田窯系の伝統的な手法と伝えられるフィガキー手法を基本に各器種の各分類から抽出することにした。

湧田窯系出土のフィガキー手法が、単純にフィガキー＝湧田焼ではなく、湧田窯系にはフィガキー手法+Xの手法も加味していくことが予想できる。フィガキー+X＝湧田窯系のXの要素のひとつは、多和田真淳氏の提示した朝鮮陶工の影響と判断した菊花の象眼等花三島風のものや釘彫染付の導入であろう。もうひとつは平田典通や仲村渠致元が中国・薩摩から導入された技法などを加えなければならないようである。これによって湧田窯系がどのような製品を製作していたかをある程度解明できるものとして考えるところである。

最初にフィガキー手法で灰釉（緑灰色・灰緑色・淡灰色・黄緑色など）を施した器種は、碗（I類・II類）、小杯I類a種、小皿I類a種、大皿（I類c・d種、IV類b種）、小鉢III類c種、大鉢III類b種、香炉（灰釉）の7器種10種類であった。

第8表a 沖縄産施釉陶器出土状況（行政棟と議会棟の比較）

■産施釉陶器出土状況（行政棟と議会棟の比較）

第8表b 沖縄産施釉陶器出土状況（行政棟と議会棟の比較）

埴施釉陶器出土状況（行政棟と議会棟の比較）

次にフィガキー手法で鉄釉（茶褐色・茶黒色など）を施した器種は、碗Ⅲ類b種、小皿Ⅳ類a種、大皿Ⅳ類b種、小鉢Ⅲ類c種、大鉢Ⅲ類b種、香炉（鉄釉）の6器種6種類であった。

以上がフィガキー手法による器種構成であるが、両者は小杯以外は共通してみられる。

三島手の技法について抽出することにするが、行政棟（報告済み）の第Ⅰ地区、第1瓦層から出土した火鉢には透明釉（白化粧）に三島手技法の櫛描き文と圓線を施した後に呉須を施したものが出土している。この火鉢の内面には青緑色の釉を掛けいて、17世紀中頃に比定される資料として考えられる。少なくとも17世紀中頃には、三島手技法以外に透明釉（白化粧）と呉須を施す手法や青緑色などを掛け分けていく技法がある程度、出現していたものとして今のところ考えられる。

三島手技法（白土象嵌や茶色釉の象嵌）で製作されたものや三島手の影響を受けたものを抽出するとその器種は、碗Ⅵ類b種、小碗（Ⅳ類・V類）、小鉢Ⅰ類a種、急須Ⅲ類、火取Ⅰ類b種、香炉（三島手）の6器種7種類で、前述したフィガキー手法（灰釉・鉄釉）の器種とは小碗・急須・火取の3器種はダブリがないことが判る。その他に多和田真淳氏が、釘彫染付も湧田窯系の特徴として考えておられたが、これについては紙数の関係上省略することにした。

今回、新たに確認された器種や追加などを行ったタイプは、碗（Ⅳ類d種、V類c種）、小碗（V類b種、VI類）、小杯（I・II類）、小皿（III類c種、IV類b種、V類b種）、大皿（I類d・e種、IV類d・e種）、小鉢（I類c・d・e種）、大鉢（I類d・e種、V類、VI類）、酒器（II・III類）、急須（V類・VI類）、秉燭II類、火取（II・III・IV類）の11器種28種類であった。それ以外に香炉の中に鉄釉（白化粧）を施すもの（第51図115）と三島手（口唇に有輪羽状の文様に白土の象嵌）を施すもの（第51図116）が確認されている。同様なことが大型急須の第53図147の透明釉（白化粧）・同図151の三彩・同図152の瑠璃釉が確認された。瑠璃釉は急須VI類にも認められている。今回の出土品の傾向をみると赤絵のものが確認されていたことが注目された。その他に第45図23の小碗I類（三彩小碗）と同図27の小碗II類の2点は素地に「荒焼」の陶土を用いて製作しているものが含まれていることが判明した。上焼用の陶土が不足した為に、一時的に荒焼の陶土を使用したのかあるいは試験的に焼いたのかどうかは判然としないところである。

最後に第51図120の茶入壺が今回、初めて確認されたことは貴重な発見であり、注目される資料として理解される。この手の茶入壺は今のところ報告例がないようである。

今回、フィガキー手法（灰釉・鉄釉）・三島手技法に注目したが、フィガキー手法や三島手技法は、首里王府によって1682年に壺屋に窯を統合した後も引き継がれていることが、『壺屋古窯群^{註5}』でも確認されている。1682年の壺屋統合後のフィガキー手法・三島手技法（象嵌）・釘彫染付の器種構成で器種が減少しているかを確認することが必要であろう。今後、素地も含めて検討すれば、湧田と壺屋がある程度の区別は可能かと考えられたが、時間的な制約で、今回は見送ることにした。

註

註1. 軸薬に浸して掛ける手法で、見込みと高台が露胎する点に特徴がある。

註2. 多和田真淳「琉球陶器の分類学的考察」『琉球の文化』創刊号 1972年。

註3. 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡（I）—— 県庁舍行政棟建設に係る発掘調査 ——」 1993年。

註4. 註2に同じ。

註5. 島 弘・玉城安明ほか「壺屋古窯群I—— 個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査 ——」 那覇市教育委員会 1992年。

第9表a 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位: cm

国・国版	番号	分類	口径 底径 高さ	輪(外面)	輪(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・賞入・施釉手法など	出土地点
第44 國	1	碗 I	11.0 —	淡灰色。透明 釉。	同左。	灰白色。微粒 粒子。	口縁は施釉。 同左。	口縁は丸味を帯び、口唇に鉢輪を施す。両面に細かい賞入。	ノ-30 第2層	
	2	碗 I	12.9 —	灰綠色。透明 釉。	同左。	灰白色。微粒 粒子。	縁部まで施釉。 同左。	口縁は尖り気味に難な施釉で成形。両面に細かい賞入。	表層	
	3	碗 I	7.0	淡黄色。透明 釉。	同左。	淡黃白色。微 粒粒子。半施釉	縁部まで施釉。 同上。	ワイヤーカー手法で、縁下部から高台は露鋸する。両面に細かい賞入。見込みは丸味を持たせて成形される。	ヒ-32 第2層 表層 露鋸	
	4	碗 I	6.4	灰綠色。透明 釉。	同左。	灰白色。微粒 粒子。	高台端まで施 釉。	無釉。	ワイヤーカー手法で、縁下部から高台は露鋸する。両面に細かい賞入。見込みは丸味を帯びる。	表層
	5	碗 II (底施釉)	—	青灰色。失透 釉。	同左。	灰白色。微粒 粒子。	縁部まで施釉。 同左。	口縁が僅かに外反する底施釉有窓。外面に鉢輪で草花 文を施す。	ノ-28 赤色土層	
	6	碗Ⅲa	—	灰釉。失透 釉。	同左。	灰白色。微粒 粒子。	縁部まで施釉。 同左。	縁部が僅かに膨らむ。内面に白色の釉で團塊を描く。 内面に細かい賞入。	ノ-30 第2層	
	7	碗Ⅲb	5.9	铁釉。 失透釉。	同左。	淡黃白色。微 粒粒子。半施釉	高台端まで施 釉。	全面施釉後に 内底輪を鉢ノ目状に焼き取る。見込みに白色釉で丸文 を描く。両面内側と縁部に砂目(石灰分?)が付着。	表層	
	8	碗Ⅲc	6.1	铁釉。 失透釉。	同左。	灰綠色。微粒 粒子。	同上。	全面施釉後に 内底輪を鉢ノ目状に焼き取る。見込みに丸文を 描く。両面内側と縁部に砂目(石灰分?)が付着。 見込みは丸味を持たせる。	フ-30 表層	
	9	碗Ⅲd	13.2 6.4	铁釉。透明釉 —	同左。	淡黃白色。微 粒粒子。半施釉	同上。	全面施釉後に 内底輪を鉢ノ目状に焼き取る。見込みに丸文を 描く。両面内側と縁部に砂目(石灰分?)が付着。	ノ-30 第2層	
第41 國 版	10	碗Ⅳc	11.9 —	铁釉。 失透釉。	透明釉。白化 釉。	淡黃白色。微 粒粒子。半施釉	口縁は施釉。 同左。	口縁は僅かに外反する。内面に細かい賞入。	ヌ-30 第2層	
	11	碗Ⅳb (底文)	14.0 —	透明釉。白化 釉。口縁は淡 青釉。	同左。	淡黃白色。微 粒粒子。	同上。	口縁の外反は微弱である。両面に細かい賞入。	ノ-30 表層	
	12	碗Ⅳb (右文)	10.0	透明釉。白化 釉。	同左。	淡灰釉。微粒 粒子。	同上。	口縁の外反はゆるやかで強弱。両面に細かい賞入。外 面に团塊の草花文を描いた後に鉢輪を施す。訂正記 付。	ヌ-32 第2層	
	13	碗Ⅴd	4.9	铁釉。 失透釉。	透明釉。白化 釉。	淡黃白色。微 粒粒子。	施釉後に骨付 物の釉を焼き取 る。	全面施釉後に 骨付物の釉を一部焼き取 る。	見込みの骨付物を鉢ノ目状に焼き取る。骨付物に砂目(石 灰分?)が付着。	表層
	14	碗Ⅴe	11.9 —	透明釉。 白化釉。	同上。	淡灰釉。微粒 粒子。	同上。	施釉下部で施 釉。	施釉下部に焼き取る。両面に細かい賞入。	ハ-30・31 第2層
	15	碗Ⅵ	12.6 6.0 5.9	同上。	同上。	淡黃白色。微 粒粒子。	同上。	全面施釉後に骨付 物の釉を鉢輪で 焼き取る。	口縁が外反する。底輪で草花文を描く。両面に細かい賞 入。	ハ-30 複合層
	16	碗Ⅶ	— 6.5	同上。	同上。	同上。	施釉後に骨付 物の釉を焼き取 る。	同上。	底輪で花文と巴文を描く。内面にも舟底で團塊を2 本描く。細かい賞入。	表層
	17	碗Ⅷ	13.8 6.5 7.2	同上。	同上。	同上。	同上。	底輪で前輪で花文を描く。花文は3ヶ所に配置。両面 に細かい賞入。見込みと舟底に砂目(石灰分?)が付 着。	ヒ-30 第2層 表層	
	18	小碗 I a	9.8	—	同上。	同上。	淡黃白色。微 粒粒子。	口縁は施釉。 同上。	無文の外反小碗。両面に細かい賞入。	フ-31 第2層
第45 國 版	19	小碗 I	4.2	同上。	同上。	淡黃白色。微 粒粒子。	施釉後に骨付 物の釉を焼き取 る。	施釉後に骨付 物の釉を鉢輪で 焼き取る。	見込みと舟底に砂目(石灰分?)が付着。透明釉が黄 色く、くすんでいる。両面に賞入。	ノ-30 表層
	20	小碗 I a	8.6	—	同上。	同上。	灰黒釉。微粒 粒子。	口縁は施釉。 同左。	舟底で團塊、口縁文と竹葉文を描く。両面に細かい賞 入。	表層
	21	小碗 I	— 3.8	同上。	同上。	淡黃白色。微 粒粒子。	施釉後に骨付 物の釉を焼き取 る。	施釉。	見込みに舟底で花文を描く。両面に細かい賞入。	フ-31 底輪
	22	小碗 I a	9.4	—	同上。	同上。	淡黃白色。微 粒粒子。半施釉	口縁は施釉。 同上。	施釉後に骨付 物の釉を焼き取 る。	ヒ-31 第2層
	23	小碗 I (底小 内 碗)	— 3.9	同上。	同上。	淡黃白色。微 粒粒子。底の深 度を用心する。	施釉後に骨付 物の釉を焼き取 る。	施釉。	施釉で團塊が刷毛で「舟進会」の跡や渦巻き文が施され ている。両面に細かい賞入。	表層
	24	小碗 I b	5.1 3.9 4.5	黄緑色。透明 釉。	同左。	淡黃白色。微 粒粒子。半施釉	同上。	同上。	口縁を外反させた時に口縁に丸頭りで削り出しを行な う。底輪で花文と巴文を描く。内面に細かい賞入。	ハ-30 赤色土層
	25	小碗 I b	7.1 3.5 4.2	灰綠色。透明 釉。	同左。	灰白色。微粒 粒子。	同上。	同上。	内面は舟底で調整器。 外縁に細かい賞入。	ヒ-30 井戸底
	26	小碗 II	8.4 3.9 4.7	铁釉。失透釉	同左。	淡黃白色。微 粒粒子。	同上。	施釉後に見込み の釉を焼き取 る。	口縁を外反させた時に口縁に丸頭りで削り出しを行な う。底輪で花文と巴文を描く。内面に細かい賞入。	ノ-30 第2層

第9表 b 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

国・國版	番号	分類	口径 底径 器高	施 (外側)	施 (内側)	著 地	施 施釉範囲 (外 側)	施 施釉範囲 (内 側)	器形・文様・貢入・施釉手法など	出土地点
第45 国・ 國版	27	小網Ⅱ	4.2	鉄輪、失透輪	白化粧のみ。	法螺色。相粒子。	高台部まで施釉。	施釉後に見込みの施釉部 / 著地に僅量入。	埠頭に施釉の差地を用意。透明繩が施されていない点が注目される。貢入はない。	A区ミ-34 第1層
	28	小網Ⅲ (象嵌)	—	淡茶色、失透輪	同上。	淡黃白色。相粒子。半相粒子。	口縁は施釉。同上。	埠頭に施釉の差地を用意。透明繩が施されていない点が注目される。貢入はない。	埠頭に施釉の差地を用意。長窓のある元糸文を保つ。施釉を施した後に削り取る。長窓と元糸文を保つ。埠頭に施釉の差地を用意。透明繩が施されていない点が注目される。貢入はない。	A区ハ-26 第2層 砂利遊び
	29	小網Ⅳ (圓取り)	8.4	透明繩、 白化粧。	同上。	淡黃白色。相粒子。半相粒子。	同上。	同上。	口縁を削りた後に埠頭直下に削りを入れて口縁を強調する。外縁は裏削りで、六角形(縦長で歪な)の面を取る。内面に細かい貢入。	不明
	30	小網Ⅴ (履道輪)	3.6	暗褐色、白化粧、 透明繩。	同上。	淡黃白色。相粒子。	施釉後に費付の施釉を僅量取る。	施釉。	外縁は裏削りで六角形(縦長で歪な)の面を取る。内面に細かい貢入。	A区ニ-31 チチ 樺原
	31	小網Ⅵ (鉄輪)	3.5	茶褐色、 失透輪。	同上。	灰白色。相粒子。	同上。	同上。	外縁は裏削りで六角形(縦長で歪な)の面を取る。内面に細かい貢入。	フ-27 明系色土層
	32	小網Ⅶb	—	鉄輪、 失透輪。	同上。	灰褐色。相粒子。	口縁は施釉。同上。	外底口縁で埠頭が「く」の字状に削れる。口縁外縁を裏削りで尖らせて仕上げる。内面に貢入。	フ-21 第1層	
	33	小網Ⅷ	7.8 7.0	透明繩、 白化粧。	同上。	同上。	施釉後に費付の施釉を僅量取る。	施釉。	釘割で「鉢」の鋸と模様不詳を描き、供食を文様に施す。外縁に大きな模様あり。	表探
第46 国・ 國版	34	小杯Ⅰa	3.0 1.7 2.0	淡緑灰褐色、 透明繩。	淡緑灰褐色。 透明繩。	淡灰白色。微粒子。	垂付、両面内 面、外底面が 裏削。	口縁直下に淡い施釉を入れ口縁の外反を強調する。両面に粗い貢入。両面に小さな気泡状の歪な凹が多くみられる。	不明	
	35	小杯Ⅰb	2.8	淡緑灰褐色、 透明繩。	同上。	灰白色。相粒子。	同上。	埠頭が非常に薄く、削選される。高台の造りも丁寧。埠頭下部は若干裏削りを施し外縁に開き気味。両面に粗い貢入。	ハ-29 樺原屋	
	36	小杯Ⅰb	1.6	透明繩、 白化粧。	同上。	白色。相粒子。半相粒子。	同上。	高台が削と比較して乳く、内削りを浅く。	不明	
	37	小杯Ⅰc	4.8 3.0	灰緑色、 透明繩。	同上。	淡褐色。相粒子。	施釉後に費付の施釉を僅量取る。	外底口縁。口縁直下に削りを入れて口縁を強調する。外縁に施釉の差地を用意。内面に元糸文を保つ。埠頭に施釉の差地を用意。内面に粗い貢入。	表探	
	38	小杯Ⅱ	2.8	淡灰白色、 透明繩。	同上。	淡灰白色。相粒子。	同上。	費付に褐色(石炭分?)が附着。外縁面及び縁込みに鉄粉で多くの黒色の斑紋が付着。鉄片などを粗ねじきの際、使用か。貢入はない。	ノ-29 希色土層	
	39	小皿Ⅱa	12.2	透明、 白化粧。	同上。	淡灰色。相粒子。	口縁は施釉。同上。	口縁周辺に凹凸で施釉を入れた櫻花状小路。口縁は施釉を削ける。両面に細かい貢入。	ノ-32 第1層	
	40	小皿Ⅱa	8.0	茶褐色、 失透輪。	同上。	淡褐色。相粒子。	施釉後に費付の施釉を僅量取る。	外底口縁。内面に貢入。	舟川前津木 樺原屋	
第47 国・ 國版	41	小皿Ⅲa	9.4 2.6	灰褐色、 透明繩。	同上。	同上。	口縁は施釉。同上。	外底口縁。内面に貢入。	ハ-30 希色土層	
	42	小皿Ⅲc	—	灰褐色、 透明繩。	同上。	同上。	口縁は施釉。同上。	口縁が僅かに外反する。内面に粗い貢入。	ノ-32 第2層	
	43	小皿Ⅳa	10.5	茶褐色、 失透輪。	同上。	同上。	埠頭下部まで施釉。	内壁の小皿。鉄輪をワイヤー手法で施す。貢入はない。	不明	
	44	小皿Ⅴb	10.2 4.4 3.2	茶褐色、 失透輪。	同上。	同上。	口縁のみ施釉	内壁の小皿。外底面から埠頭下部が削れる。費付と両面に施釉の跡があり取る。	メ-34 第1層	
	45	小皿Ⅴb	11.3	透明繩、 白化粧。	同上。	淡灰白色。相粒子。	口縁から埠頭まで施釉。	内壁の小皿。内面に鉄輪や斜線文を描く。貢入はない。	ノ-29 希色土層	
	46	大皿Ⅰd	—	透明繩、 淡緑灰褐色。	同上。	淡灰白色。相粒子。	口縁は施釉。同上。	内壁大皿。内面に鉄輪で圓錐や斜線文を描く。貢入はない。	ヒ-31 第2層	
	47	大皿Ⅰd	—	—	同上。	同上。	埠頭下部まで施釉。	内壁大皿。外面上に鉄輪で斜線文を筆書き。内面のみ細かい貢入。	ノ-32 第2層	
第44 国・ 國版	48	大皿Ⅰe	—	—	—	白色。相粒子	高台無輪。同上。	ワイヤー手法で施されたものとして考えられる。	ハ-30 希色土層	
	49	大皿Ⅰe	—	綠茶色、 失透輪、 透明繩。	淡灰褐色。相粒子。	淡黃白色。相粒子。	口縁は施釉。埠頭下部まで施釉。	直口灰茶色の大皿。口縁が僅かに肥厚。内面に濃緑色の釉で表面を2本塗る。	ノ-28 希色土層	
	50	大皿Ⅱb	20.0	濃茶色、 失透輪。	淡灰褐色。相粒子。	同上。	口縁は施釉。	口縁が三角形状に肥厚。貢入はない。	メ-33 第1層	
	51	大皿Ⅱb	—	淡茶色、 透明繩。	同上。	淡黃白色。相粒子。	埠頭下部まで施釉。	内面に鉄輪で圓錐を描く。外面上に細かい貢入。	ヒ-20 壁面	
	52	大皿Ⅱb	22.0	淡灰白色、 —	同上。	淡灰白色。相粒子。	口縁は施釉。同上。	口縁が三角形状に肥厚。両面に細かい貢入。	フ-31 第2層	

第9表c 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位: cm

国・國版	番号	分類	口径 底径 高さ	釉(外側)	釉(内側)	素地	施釉範囲 (外周)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・質入・施釉手法など	出土地点
第47 國 ・ 國版 44	53	大皿苦b	8.3 —	淡緑灰色。 透明釉。	同左。	淡黃白色。 織紋子。	高台脇まで施 釉。	下部脇まで施 釉。	フタガキ一手捺で施釉。見込みに淡系色の釉で丸文。 内面には淡系色の釉で蘿蔓。	ノ-30 第2層 燒土甕
	54	大皿苦c	24.0 —	透明釉。 白化釉。	灰綠色。	淡青色。 織紋子。	口縁は施釉。	同左。	口縁が三角形に肥厚。肥厚部下面に削りを入れて肥厚を強調。内面に白色の釉で花文を描く。	ノ-30 第2層
	55	大皿苦e	— —	灰綠色。	白化釉。	淡青色。 織紋子。	胴部は施釉。	同左。	透明釉の施しがない。内面に灰綠色の釉で花文を描く。	ノ-30 第2層
第 48 國	56	小鉢Ib	16.6 —	透明釉。白化 釉。淡黃色。	同左。	黃褐色。 織紋子。	口縁は施釉。	同左。	口縁部を「く」の字状に折り曲げた後に口縁部を内側に内包させる。両面に細かい貫入。	ヌ-30 表裏
	57	小鉢Ic	19.5 —	—	同上。	同上。	同上。	同左。	口縁部を「く」の字状に折り曲げた後に口縁部を内側に内包させる。内面に折損で区画文を描いた後に区画間に施釉を施す。	ヌ-31-32 燒土甕
	58	小鉢Id	12.8 —	铁釉。 茶褐色。	同左。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁部を「く」の字状に折り曲げた後に口縁部を内側に内包させる。外側の口縁部を丸めて削り併せて強調する。内面の區画は明瞭で線が入る。	ヲ-30 第2層
	59	小鉢Ie	— —	黄緑色。透明 釉。	同左。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁部は削り、口縁内部は三輪状に削出。外側に白色の釉で突起に点文を描く。両面に細かい貫入。	ヌ-31 不明
	60	小鉢Ib (剥離付)	— —	透明釉。白化 釉。淡黃色。	同上。	同上。	同左。	同左。	觸部の平面部は「へ」の字状に削出する。線彫りで区画文と交差沈刻を描いた後に其痕を售す。	表裏
	61	大鉢Ib	18.0 —	铁釉。 茶褐色。	同上。	同上。	同左。	同左。	口縁が僅かに肥厚する。内面に細かい貫入。	ヌ-31-32 茶褐色土層
	62	大鉢Ic	30.0 —	—	同上。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁部は「し」字状に削出させる。口唇は幅広である。口唇の中央付近から縁が削り分けられる。	不明
	63	大鉢Id	22.6 —	透明釉。白化 釉。淡黃白色。	同左。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁が僅かに外反する。内面に細かい貫入。	ハ-28 茶褐色土層 埋瓦
第 49 國 ・ 國版 46	64	大鉢Ie	26.0 —	淡青色。 失透釉。	同左。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。口唇外端近くに先取りの蘿蔓。両面に細かい貫入。	ハ-29 茶褐色土層 埋瓦
	65	大鉢Ie	25.0 —	淡緑色。 失透釉。	同上。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。口唇の中央付近から縁の掛け分け。内面は筆書きの解沈刻。	ハ-29 茶褐色土層
	66	大鉢Ie	9.4 —	铁釉。 茶褐色。	同上。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	見込みに淡緑色の釉で丸文を描く。内面に細かい貫入。	ノ-30 第2層
	67	大鉢II	22.0 —	白釉。 茶褐色。	同上。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁外端を突出させて、外反口縁とする。内面に茶褐色の釉で点文や斜向線を描く。	ノ-31-32 燒土甕
	68	大鉢苦a	24.8 —	淡青色。 失透釉。	同上。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。内面に細かい貫入。	ヲ-30 井戸敷排水渠
	69	大鉢苦b	27.0 —	铁釉。 淡緑色。	同左。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	逆「L」字状の口縁。縁が鋸歯状となる。	ハ-29 茶褐色土層
	70	大鉢I?	11.6 —	灰褐色。 失透釉。	同上。	淡青色。 織紋子。	高台のみ露胎。	施釉後後に縁を削り、口縁部に僅か取る。	内面は化粧土の上に淡青色の釉で蘿蔓と丸文を描く。	ノ-29 茶褐色土層
	71	大鉢苦a	26.0 —	明青緑色。	同左。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁の肥厚は削り返して逆「L」字状の肥厚とする。縁が部分的に壳げ落ちる。	ヌ-31
第 49 國 ・ 國版 46	72	大鉢苦b	— —	同上。	同上。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁で縁が止まる。	ノ-31 第3層
	73	大鉢苦	31.2 —	透明釉。白化 釉。淡黃白色。	同上。	淡青色。 織紋子。	同上。	同左。	口縁部を「く」の字状に折り曲げる。口縁に波瀾文と花文を施部に草花文入りと機回不詳を描く。	表裏
	74	鍋I	19.6 —	茶褐色。	同左。	淡青色。 織紋子。	同上。	口縁部に肥厚しめた後、口縁の縁を僅か取る。	口縁部を「く」の字状に折り曲げる。内面口縁の縁を僅か取った後に白化粧土を焼付。	ヌ-29 茶褐色土層
	75	鍋I	16.6 —	同上。	同上。	淡青色。 織紋子。	同上。	同上。	口縁部を「く」の字状に折り曲げる。	ノ-30 第2層
	76	鍋I	— —	淡青色。	同左。	淡青色。 織紋子。	同上。	同上。	口縁部を「く」の字状に折り曲げる。窓面による釉色の変化。	ノ-30 第2層
	77	鍋I	8.0 —	黑釉。	青苔色。	青苔色。 織紋子。	無釉。	同左。	底面に三角錐状の突起を貼り付ける。	ヌ-32 第2層
	78	酒器IIa	6.0 —	透明釉。白化 釉。淡黃白色。	同左。	淡青色。 織紋子。	残存部は施釉。	同左。	蓋受けの縁を僅かに取っている。両面に細かい貫入。蓋大きさ6.0cm。	ヌ-30 茶褐色土層

第9表d 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位: cm

国・國版	番号	分類	口径 底径 高さ	種(外面)	種(内面)	裏 地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第 49	79	酒器Ⅱb	10.0 — —	透明釉。白化 釉。淡黃白色。	淡黃白色。 微粒子。	淡黃白色。 微粒子。	残存部は施釉 同左。	口縁内面の釉を焼き取る。外裏に粗い貫入。最大直径 10.0cm。	フ-31 第3層	
	80	酒器Ⅲ	9.6 — —	青緑色。黄釉 剥け分け。	淡綠色。 透明釉。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同左。	口縁内面の凸脊上面の釉を焼き取る。下地に鉛釉を施す。	ノ-30 第2層
国 版 46	81	酒器	4.8 — —	茶褐色。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同左。	酒器の注入口。口唇内面を上方に突出させる。	ヌ-31
	82	酒器Ⅰb	— — —	茶褐色。新釉 剥け分け。	無釉。	淡黃白色。 微粒子。	同上。	無釉。	瓶部が算盤玉のように屈曲する。	ハ-31 新2層 砂利場じり
国 版 46	83	酒器Ⅱ	8.0 — —	茶褐色。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	高台部まで施 釉。	同上。	片脚底の器形。幅広の高台で臺付を斜位に割り出して成形。	ノ-30 第2層 瓦葺
	84	酒器底部	8.4 — —	茶褐色。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同上。	幅広の高台で、臺付を斜位に割り出して成形。	フ-30 新2層 焼土場じり
第 50	85	酒器底部	8.1 — —	同上。	同上。	同上。	同上。	同上。	幅広の高台で、臺付を斜位に割り出して成形。	ノ-30 第2層
	86	急須蓋Ⅰb	— — —	鉛釉。淡茶色	同上。	淡灰白色。 微粒子。	墨甲のみ。	無釉。	燒みが欠落。最大直径7.0cm。貫入はない。	ハ-31 煙灰場色 底じり
第 50	87	急須蓋Ⅱ (三羽)	— — —	透明釉。自化 釉。	同上。	同上。	同上。	同上。	燒みが欠落。最大直径5.8cm。粗い貫入。墨甲に直徑4 ~5mmの孔を打つ。明黄色。算盤色の釉を施す。	ハ-30~31 新2層
	88	急須蓋Ⅲ	— — —	同上。	白化釉。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同上。	白化釉を施した後に臺付の化粧鉛土を施す。	メ-32 第2層
国 版 47	89	急須蓋Ⅳa	— — —	同上。	無釉。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	無釉。	燒みが欠落。最大直径7.4cm。粗い貫入。3本足部の機 縫目で沈鉛を施す。	ノ-30 第2層
	90	急須蓋Ⅳb	— — —	同上。	同上。	白化。 微粒子。	同上。	同上。	燒みが欠落。最大直径5.6cm。粗い貫入。純形の口縁 と2本一組みの化粧。沈鉛焼で口元文。	ヌ-22 第1層
国 版 47	91	鍋の蓋	— — —	鉛釉。 淡茶色。	鉛釉。 茶褐色。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	墨甲近くは施 釉。	高台状の燒み。墨甲の内外面に施釉。脚は燒みの筋で 縫目で沈鉛を施す。	ノ-29 系縄毛土層
	92	鍋の蓋	— — —	鉛釉。 茶褐色。	無釉。	同上。	臺付を深き施 釉。	無釉。	高台状の燒み。相手の貫入がみられる。燒みの直徑6 cm。	フ-30 壁
国 版 47	93	鍋の蓋	— — —	鉛釉。 茶褐色。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	同上の筋まで 施釉。	同上。	高台状の燒み。最大直径6.8cm。	メ-33 第2層
	94	鍋の蓋	— — —	—	同上。	茶褐色。	墨甲の縫隙近 くは露底。	同上。	焼鉢が造「へ」の字状に屈曲。最大直径14.4cm。	ハ-29 灰茶色土層
第 51 国 版 48	95	鍋の蓋	— — —	同上。	鉛釉。 茶褐色。	灰褐色。 微粒子。	同上。	同左。	焼鉢が増厚する。焼鉢の脚を削面とも比較的丁寧に焼き 落す。最大直径17cm。	ハ-29 明茶色土層
	96	油燈蓋	— — —	鉛釉。 黄茶色。	無釉。	同上。微粒子。 死焼きの 露底。	同上。	無釉。	燒みが欠落。墨甲に4~5mmの孔を穿つ。焼鉢に丸形 りの露底。最大直径6cm。	ヒ-30
第 51 国 版 48	97	油燈蓋	— — —	鉛釉。 茶褐色。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	残存部は施釉	同上。	焼鉢に丸形りの露底を二条施す。最大直径12.4cm。	ノ-28 茶褐色土層
	98	鍋工の蓋	— — —	茶褐色。	同上。	淡灰白色。 微粒子。	燒鉢近くまで 施釉。	同上。	外周を真削りで脚を焼き落し、尖らせる。	表探
第 51 国 版 48	99	鍋工・Ⅱ の蓋	— — —	灰褐色。 透明釉。	自化釉のみ	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同上。	外周を真削りで脚を焼き落し、尖らせる。	ハ-28 高褐色
	100	合子の蓋 (三鳥手)	— — —	茶褐色。 透明釉。	無釉。	同上。	墨甲は施釉。	無釉。	焼鉢に丸形りの露底を二条施した後に白色の釉で表張。	フ-31 第2層
第 51 国 版 48	101	水湧々の 蓋 (臺付)	— — —	透明釉。 白化釉。	白化粧土が象 れる。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同上。	水漬などの落し置。再び「火」の字を墨書き。最大 直徑5.6cm。表少直徑3cm。	ナ-ニ-31 クチナ(虎)流り (虎流)
	102	象場Ⅰc	4.3 — —	鉛釉。 黄茶色。	同左。	同上。	高台縁まで施 釉。	無釉。	焼鉢の脚を削る。切り込みのある円筒状の灯心を貼り 付ける。外底面に直徑4.5cm、深さ1cm。外底面に粗い貫 入。外底面は赤切跡が明顯である。	ヒ-33 第2層
第 51 国 版 48	103	象場Ⅱ	3.7 — —	淡青緑色。 灰茶色。	同左。	淡灰白色。 微粒子。	高台縁まで施 釉。	同上。	焼鉢の脚を削る。外底面は切りの後に高台を脚付けて いるが高台の平面側は墨である。	表探
	104	火取	10.0 — —	鉛釉。 茶褐色。	同左。	淡灰白色。 微粒子。	同上。	同上。	円筒形の火取。丸底で圓錐形。2条と被施釉を施す。	ハ-29 灰茶色土層

第9表 e 沖繩產施釉陶器觀察一覽

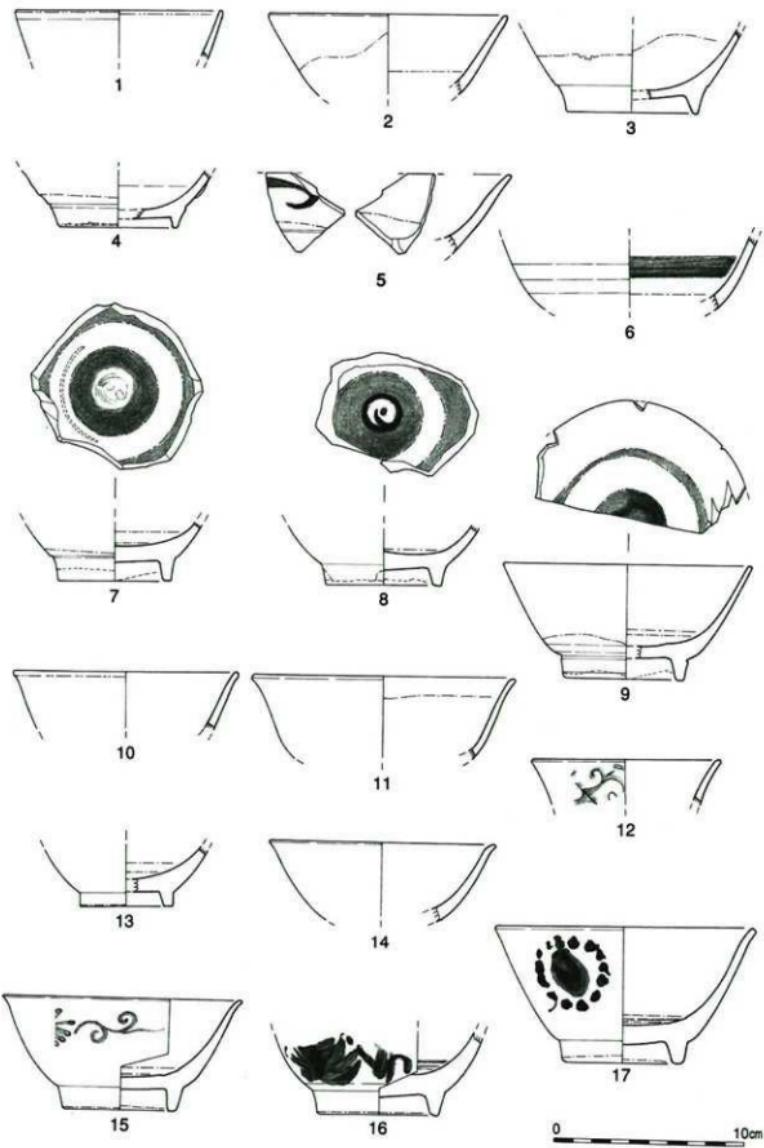
单位：cm

国・國版	番号	分類	口径 底面 器高	袖(外面)	袖(内面)	素地	施袖經透 (外面)	施袖經透 (内面)	器形・文様・貫入・施袖手法など	出土地点
第51 國	105	火取a	7.5	鉄袖。 茶褐色。	無袖。	法螺形。 織紋子。	袖下部の折れ まで施袖。	轟始。	円筒形の火取。丸窓で密巻の團扇を施す。	ネ-30・31 便
	106	火取b (三島手)	11.3	黄褐色	灰绿色。	淡黄白色。 織紋子。	口接外層のみ 施袖。	肩左。	口壳子の円筒形の火取。丸窓で密巻のある斜度絞文を施した後に白色の輪で象嵌。	ネ-32 第1層
	107	火取c (三島手)	6.8	同上。	無袖。	同上。	脇下部の折れ まで施袖。	轟始。	円筒形の火取。織彫りの團扇と片切彫りの短波線を施した後に白色の輪で象嵌。	ズ-34 第1層
	108	火取Ⅲa	10.6	淡灰綠色。 二重透彫。	同上。	淡灰白色。 織紋子。	口接は施袖。	同上。	円筒形の火取。口縁内側が僅かに肥厚。	ビ-33 第2層
	109	火取Ⅲb	8.2	透明袖。 白化袖。	白化袖。	淡黄白色。 織紋子。	袖内側に幾段の 輪を積み取る。	轟始。	円筒形の火取。白化袖は脇下部の折れまで施すが、透明袖は食付跡外底面まで施す。	ホタルイ色土器 (復元)
	110	火取Ⅲc	9.0	透明袖。 白化袖。	同左。	同上。	口接は施袖。	口縁端まで施 袖。	円筒形の火取。内面口縁は僅かに肥厚する。	表揮
	111	火取Ⅳa	11.7	淡青紫色。 鉄袖。	無袖。	法螺形。 織紋子。	同上。	同上。	内齊する火取。鉄袖が堅安か?	ネ-32 第1層
	112	火取Ⅴb (目付分け)	9.3	鉄袖。 淡灰白色 の袖の袖。	無袖。	淡灰白色。 織紋子。	脇中央部が露 出。	轟始。	内齊する火取。脇上部と下部に丸彫りの團扇。脇中央 部に片切彫の交差沈線。	ニ-22 第1層
	113	火取Ⅵa	-	灰緑色。 透明袖。	同左。	白底白。 織紋子。	口接は施袖。	同左。	内齊する火取。脇上部に丸彫りの團扇を2条施す。	ズ-43 第1層
	114	火取Ⅶ (三島手)	14.8	-	灰绿色。	同左。	同上。	同上。	内齊する火取。脇上部に丸彫りの團扇と交差沈線を施した後に白色の輪で象嵌。	ハ-30 第2層
第48 國	115	香炉	10.8	淡灰白色。灰 色。白化袖。	同左。	灰白色。 織紋子。	同上。	口縁のみ施袖	口縁が「く」の字状に屈曲。口唇に鉄袖を施す。	西壁
	116	香炉 (三島手)	16.3	黄褐色。 透明袖。	同左。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	口接は施袖。	口縁が「フ」の字状に屈曲。口唇に麻彫りや丸彫りで有刺文の羽衣文を施した後に白色輪で象嵌。	ホタルイ色土器 (復元)
	117	火炉I	-	黑袖。	同左。	同上。	同上。	同上。	内齊する火炉。内面口縁に三角形状の突起を貼り付け る。	ズ-29 基局色土器
	118	瓶子b	6.2	透明袖。 黑袖。	透明袖。	同上。	同上。	同上。	外反のゆるい瓶。底部に鉄袖で接ぎ口か。	フ-31 第2層
	119	花瓶	7.6	鉄袖。 茶褐色。	無袖。	淡黄白色。 織紋子。	脇上部に輪垂 れ。	内面は轟始。	「ハ」の字状の脚をもつ花瓶か。	ハ-34 第2層
	120	茶入	4.8	鉄袖。 淡茶色。	同左。	同上。	残存部は鉄袖	口縁のみ施袖	小さい玉縁の口縁で底部は軽く折れる。	グリット・ 壁と6不明
	121	瓶子?	2.9	鉄袖。 茶褐色。	同左。	淡黄白色。 織紋子。	同上。	同上。	脚の長い瓶子の瓶子?口縁で軽く外反させる。	ヌ-33 第1層
	122	瓶刷毛	-	無袖。	白色。 透明袖。	白色。 織紋子。	轟始。	残存部は鉄袖	瓶の刷毛部分。最大直径7.2cm。	ハ-20 壁上? 接柱
	123	花瓶刷毛	-	鉄袖。 灰茶色。	無袖。	灰白色。 織紋子。	高台端まで施 袖。	無袖。	高台が僅かに残る。内面の側面上に剥り目がみられる。	月井前耕木 路
	124	蚕造部	6.2	鉄袖。 黄褐色。	轟始。	淡褐色。 織紋子。	同上。	轟始。	丸味のある蚕?	メ-32 第1層
	125	花瓶底部	5.6	鉄袖。 茶褐色。	同上。	淡黄白色。 織紋子。	同上。	同上。	瓶長の花瓶とみられる。天日板に鐵袖。外底面にハマが付着か。	ハ-29 復元
第52 國・ 國版	126	瓶底部	7.1	灰綠色。	茶褐色。	淡黄白色。 織紋子。	瓶底近くまで 施袖。	轟始。	底から立ち上りはやや内側に閉じ気味に移行する。 糸吊り孔。口唇に黒がい貫入。	ヒ-31 第2層
	127	水注	4.4	淡灰綠色。	無袖。	淡灰白色。 織紋子。	瓶底近くまで 施袖。	轟始。	器形の割れ縫は羅円形底。底は帯箭底。外側に無い 貫入。	ズ-33 第1層
	128	盛底部	17.9	黃褐色。	同上。	同上。	高台端まで施 袖。	同上。	疊付は高台の外側を三角形状に剥り取って成形する。	ホ-31 復元
	129	油壺a	-	鉄袖。 茶褐色。	同左。	淡灰白色。 織紋子。	残存部は鉄袖	口縁のみ施袖	怒り青咲味の小壺。	ノ-30 第2層
	130	油壺 (油壺)	6.9	同上。	鉄袖。 茶褐色。	淡灰白色。 織紋子。	同上。	残存部は鉄袖	内側に握る形で、口縁「フ」の字状に肥厚する。口唇に 輪を引き取る。	ノ-29 明治

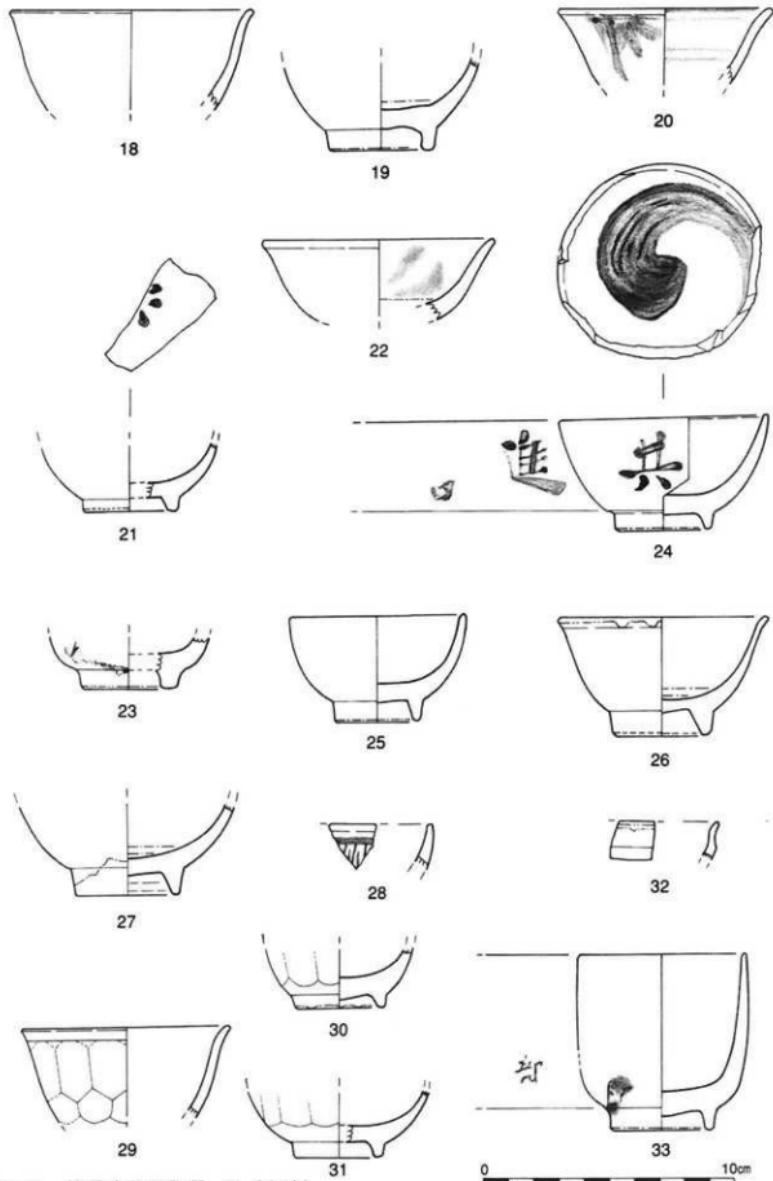
第9表f 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

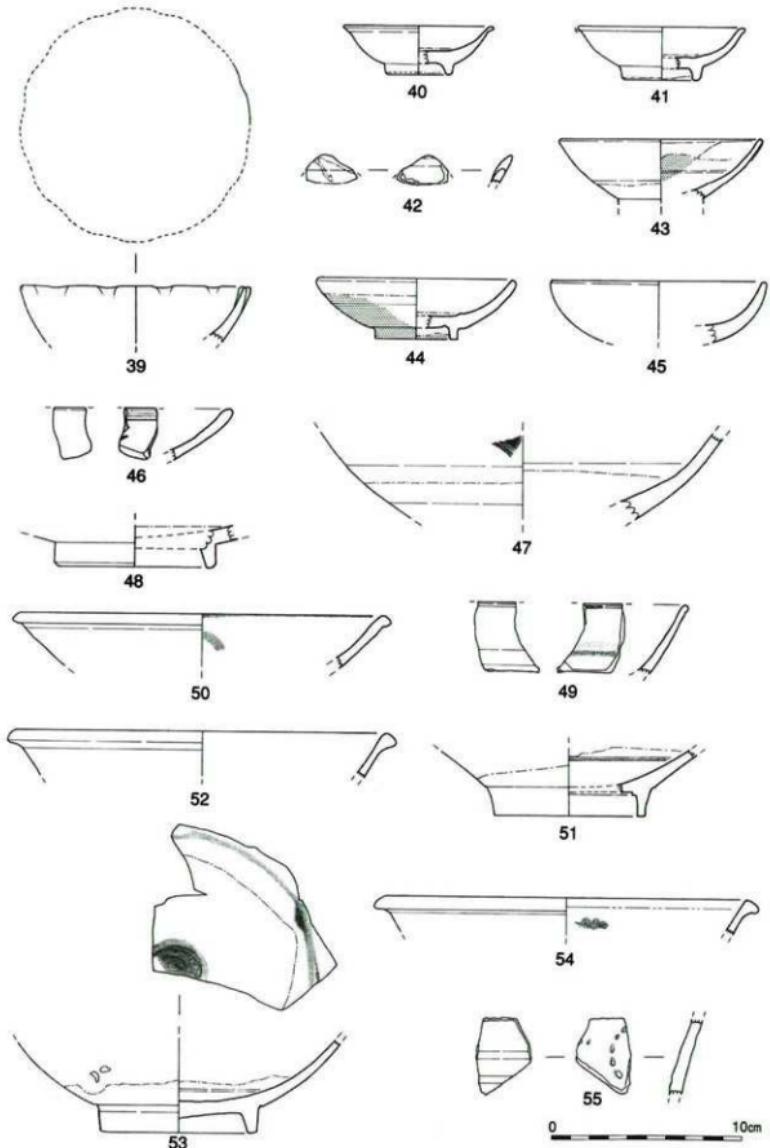
国・國版	番号	分類	口径 底径 器高	種(外面)	種(内面)	素地	施釉範囲 (外面)	施釉範囲 (内面)	器形・文様・貫入・施釉手法など	出土地点
第52國 ・ 國版 49	131	直口 (油壺)	10.3 —	鉄輪、茶葉色	灰系色	淡黄白色。 織粒子。	残存部は施釉	同左。	内側する直口。口縁が「フ」の字状に肥厚する。口唇の脂を搔き取って口壳とする。	ホ・ノ-31 波流土層
	132	直口 (油壺)	— 15.7	灰緑色。	茶褐色	同上。	萬台のみ露胎	同上。	大型の油壺の底部片。外底の施釉方法は筆もしくは指で実施。	ノ-30 第2層
	133	直口 (油壺)	12.3	鉄輪、茶葉色	灰緑色	同上。	萬台と外底 部が施釉。	同上。	同上。	ノ-30 第2層
	134	直口 (油壺)	11.6	同上。	同上。	灰白色。 織粒子。	萬台内面のみ 露胎。	同上。	同上。	ノ-30 灰層
	135	直口 (油壺)	11.0	鉄輪、黒褐色	黒褐色	同上。	素付を深き施 釉。	同上。	大型の油壺の底部片。外底の施釉方法は筆もしくは指で実施。外底の黒褐色の釉は天目茶碗にみられる。施釉斑がみられる。下面に茶色の化粧土を施す。	ナ・ニ-31 灰層
第53國 ・ 國版 53	136	急須Ib	— —	鉄輪、茶葉色	同左。	同上。	残存部は施釉	口頭部に残存	把手の外側に切り彫りの沈線を窓に施す。	ハ-29 茶褐色土層
	137	急須Ib	— —	無輪	同上。	同上。	露胎。	同上。	把手に直径6mmの孔を両側から穿つ。	ハ-29 茶褐色土層
	138	急須Ib	— —	同上。	同左。	淡黄白色。 織粒子。	同上。	残存部は施釉	内面に10~11mmの孔を穿った後に注き口を貼り付けている。	ヌ-34 第1層
	139	急須Ib	7.0	同上。	無輪	淡灰白色。 織粒子。	瓶下部まで施 釉。	露胎。	三足の急須で、三角形状の突起を貼り付けている。	ヌ-34 第2層
	140	急須Ib	4.6	鉄輪、茶葉色	同上。	淡灰白色。 織粒子。	同上。	同上。	三足の急須で、三角形状の突起を貼り付けている。外底面を磨いて取り剪切底に形成する。	ハ-30 波流
第54國 ・ 國版 54	141	急須Ib	7.8 8.5	鉄輪、茶葉色	同左。	灰色。織粒子	同上。	口縁を深き施 釉。	口唇の内面口縁に施釉されて露胎。把手外側に施 釉穴(或文と解釈)。把手の孔のサイズは直径 6mm。側面部に二ヶ所の孔(直径6~7mm)を穿つ。	フ-30 第2層焼土 波流
	142	急須II (三脚)	18.5	透明釉、白化 程。	同左。	淡黄白色。 織粒子。	残存部は施釉	口縁のみ施釉	口唇の釉を搔き取って口壳とする。露胎面と施釉面に より手触りが異なる。交差文を施した後外底と茶色の釉 を施している。	フ-30 第2層
	143	急須II (三脚)	7.6	同上。	同左。	同上。	口唇と底部は 露胎。	露胎のみ施釉	口唇が深く搔き取って口壳とする。露胎と窓下部に露胎。把手に 横裂の施釉。把手の直径6mm孔を穿つ。露胎に乳頭を施す。 側面部には施釉や染色の釉を貼り付けている。	ヒ-30 露胎より 波流
	144	急須II (三脚)	5.9	綠灰色。	露胎。	淡灰色。織粒子。	残存部は施釉	露胎。	口唇は露胎。露胎の窓縁と飛び出シによる別文を 施して底に白土で文様へ象徴。	ヒ-31 第2層
	145	急須II (三脚手 ?	5.8	透明釉、白化 程。淡緑白色	同上。	同上。	同上。	同上。	口唇は露胎。印花文。織目文の模様文。露胎の 交差文と露文を施した後に淡緑色の釉を文様に施す。文 様側面は淡島手(或文)の釉を貼り付けている。	フ-30 波流
第55國 ・ 國版 55	146	急須背 (油壺)	8.0	同上。	透明釉、白化 程。	淡灰白色。織 粒子。	同上。	裏受けの部分 のみ露胎。	口縁内面に裏受けの為の突起を造る。外側に直角で露 胎と波状文を施す。	表探
	147	急須背 (油壺)	—	濃青色、白化 程。	露胎。	淡灰白色。南 粒子。	同上。	露胎。	波状の横筋で内面に身と接着する際に使用した淡青 色の土が付着する。	表探
	148	大型急須	10.2	茶褐色。	同左。	淡黄白色。織 粒子。	同上。	露胎のみ施釉	把手の模様が確認される。口唇は口壳。	ノ-30 第2層
	149	大型急須	—	黑褐色。	同左。	同上。	同上。	同上。	把手の模様と波状の模様の部分が確認できる。	ノ-30 第2層
	150	大型急須	—	同上。	同左。	淡灰色。織 粒子。	同上。	残存部は施釉	把手の破片で幅は4.1~4.2cmを測る。横断面は扁平な 半円形を呈する。	ヒ-30~31 露胎
第56國 ・ 國版 56	151	大型急須 (三脚)	—	透明釉、白化 程。	同左。	淡黄白色。織 粒子。	同上。	同上。	把手の破片で幅は3.1cmを測る。淡青色・黃茶色・淡黃 色の釉を施す。	ヒ-29 茶褐色 (複数)
	152	大型急須 (複数)	—	濃青色。	同左。	白色。織粒子	同上。	同上。	幅2cm程度を有する把手の破片。横断面が三日月状を 呈する。中国製か。	不明
	153	片口鉢	7.1	茶褐色。	同左。	淡黄白色。織 粒子。	同上。	同上。	口唇は幅広での丸。口縁の断面が「T」の字状となる。 周間に堆い質。	フ-30 第2層



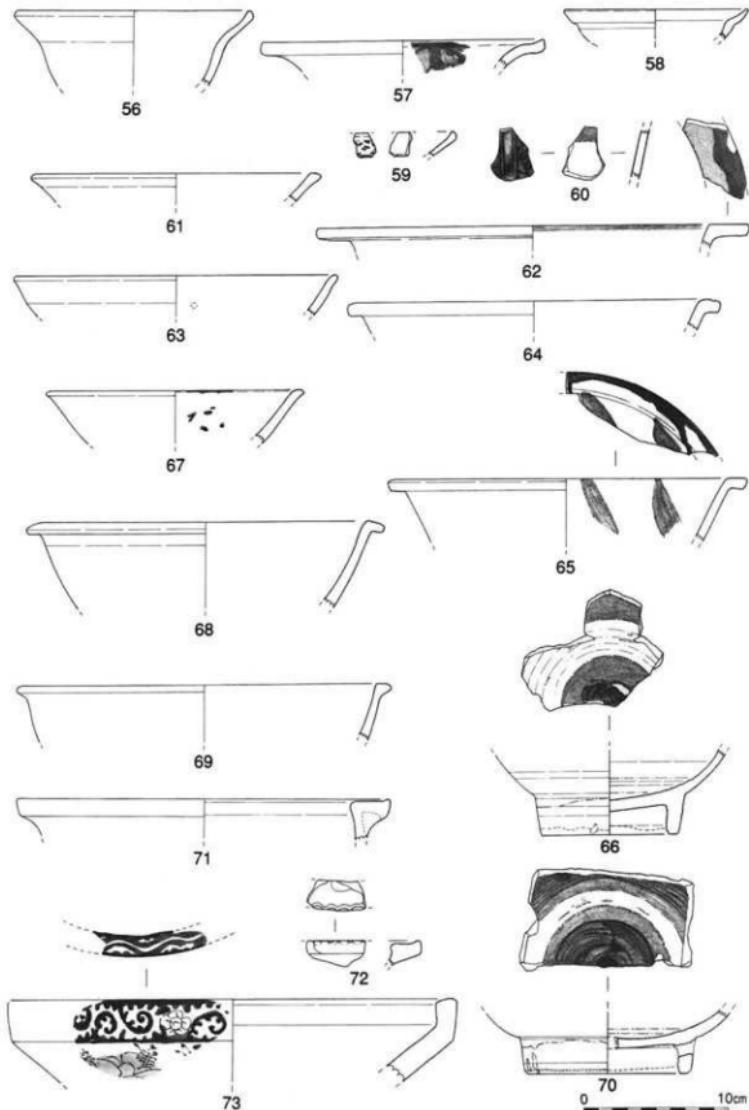
第44図 沖縄産施釉陶器 1 (碗)



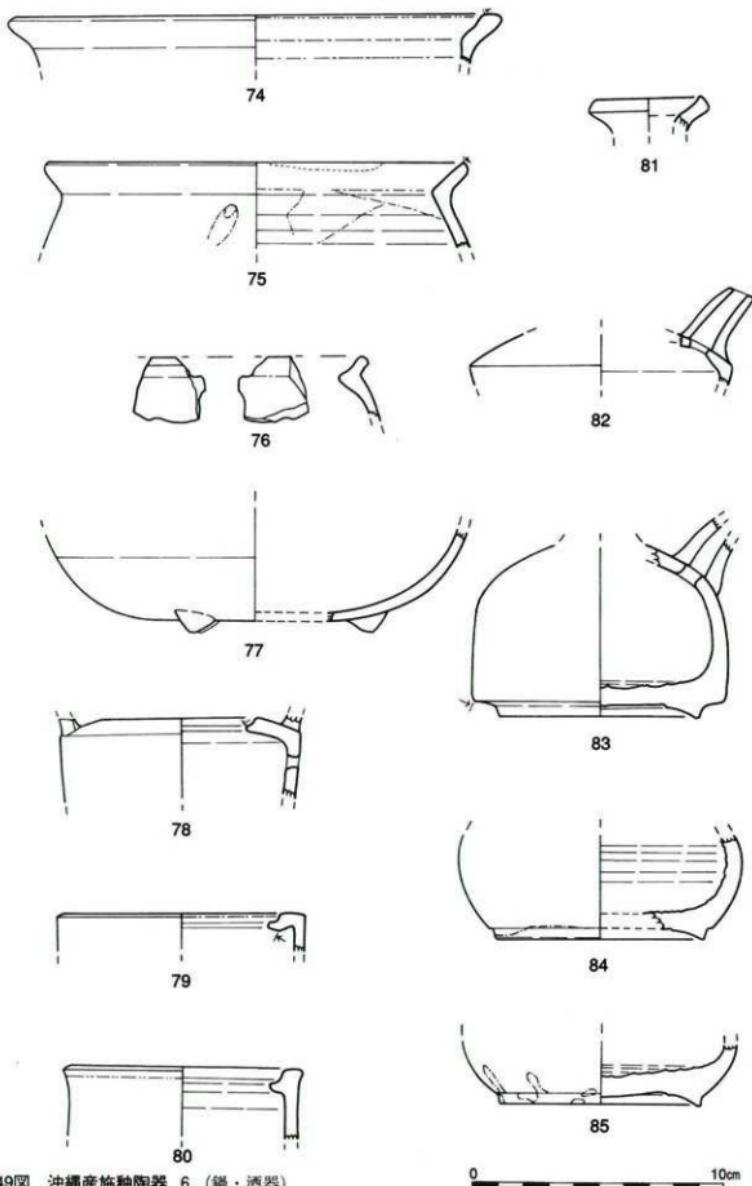
第45図 沖縄産施釉陶器 2 (小碗)



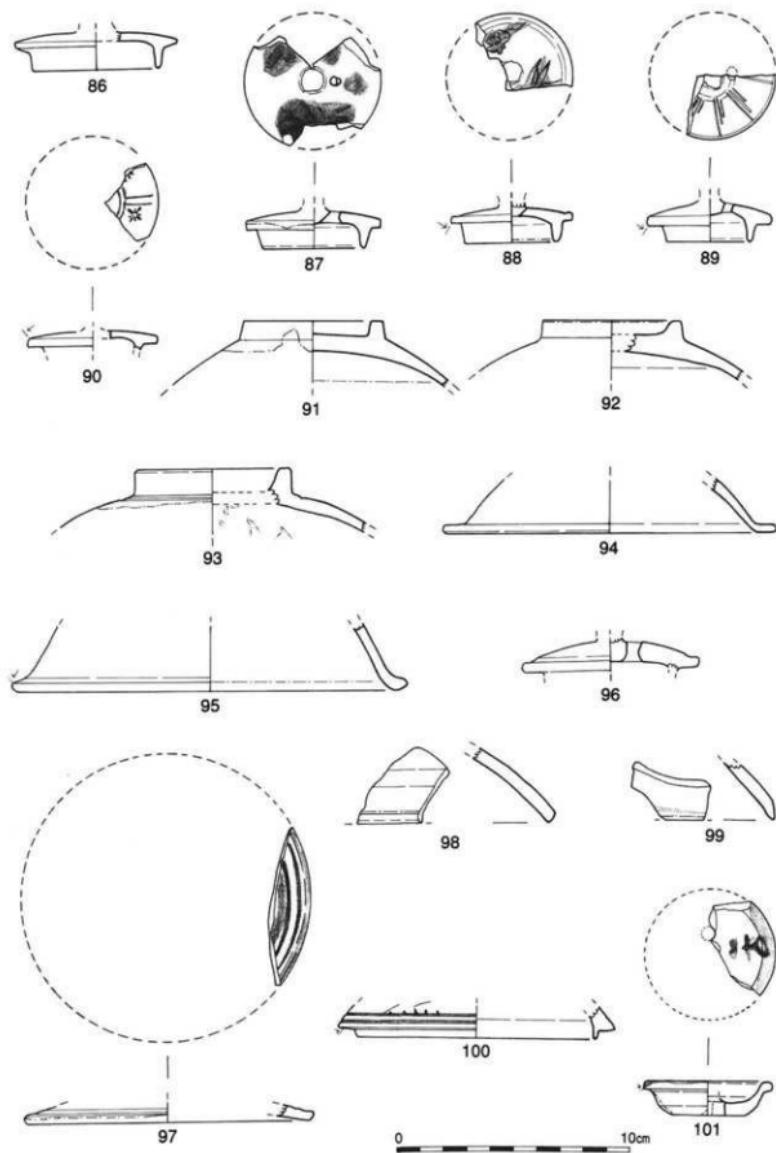
第47図 沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)



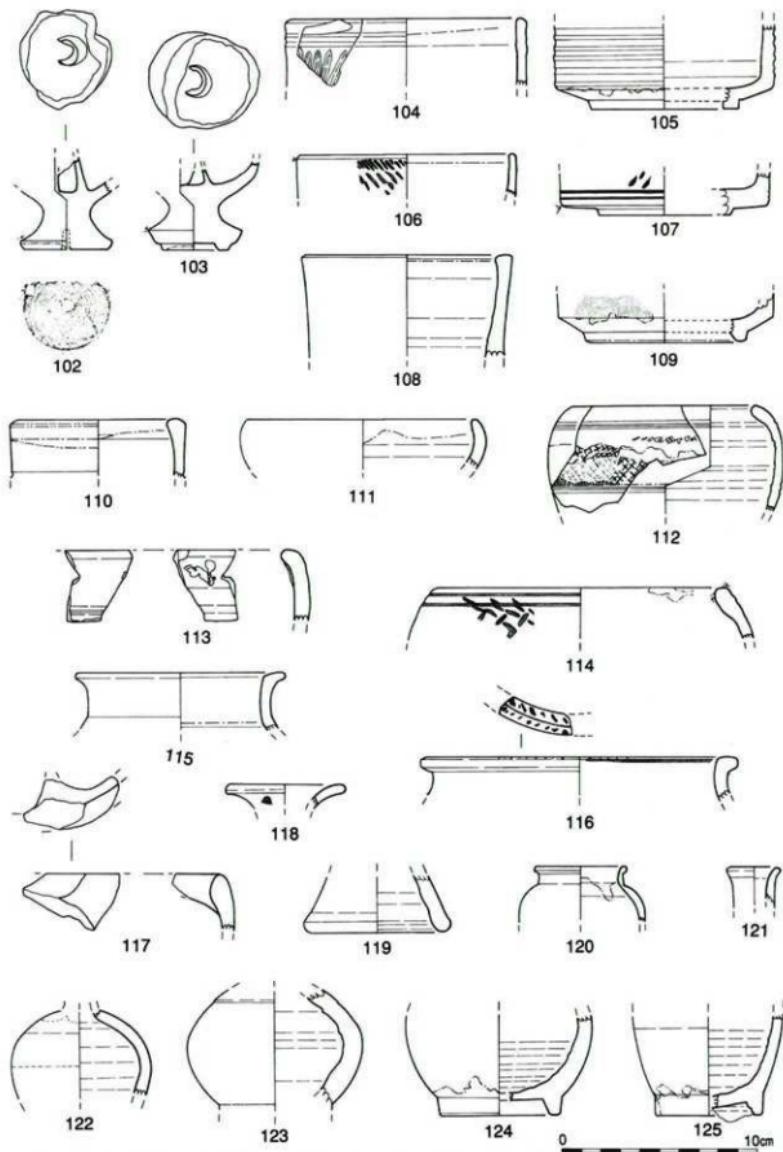
第48図 沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)



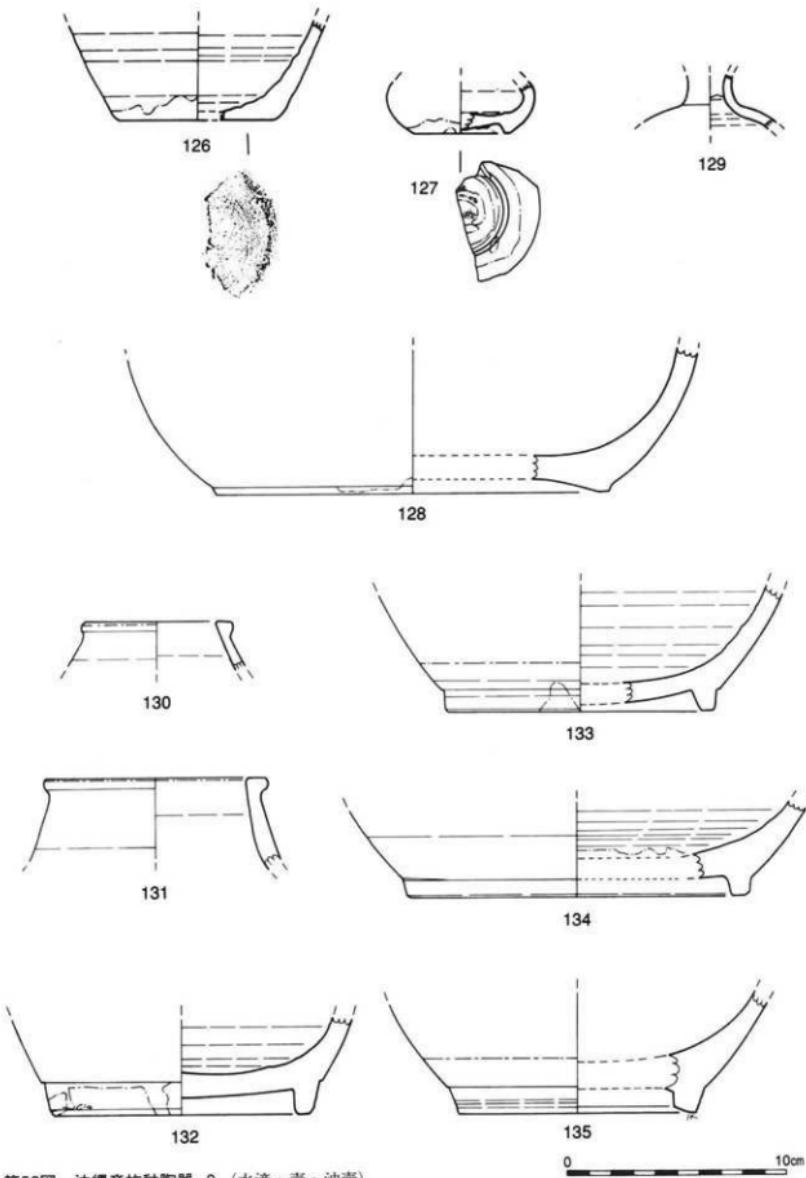
第49図 沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)



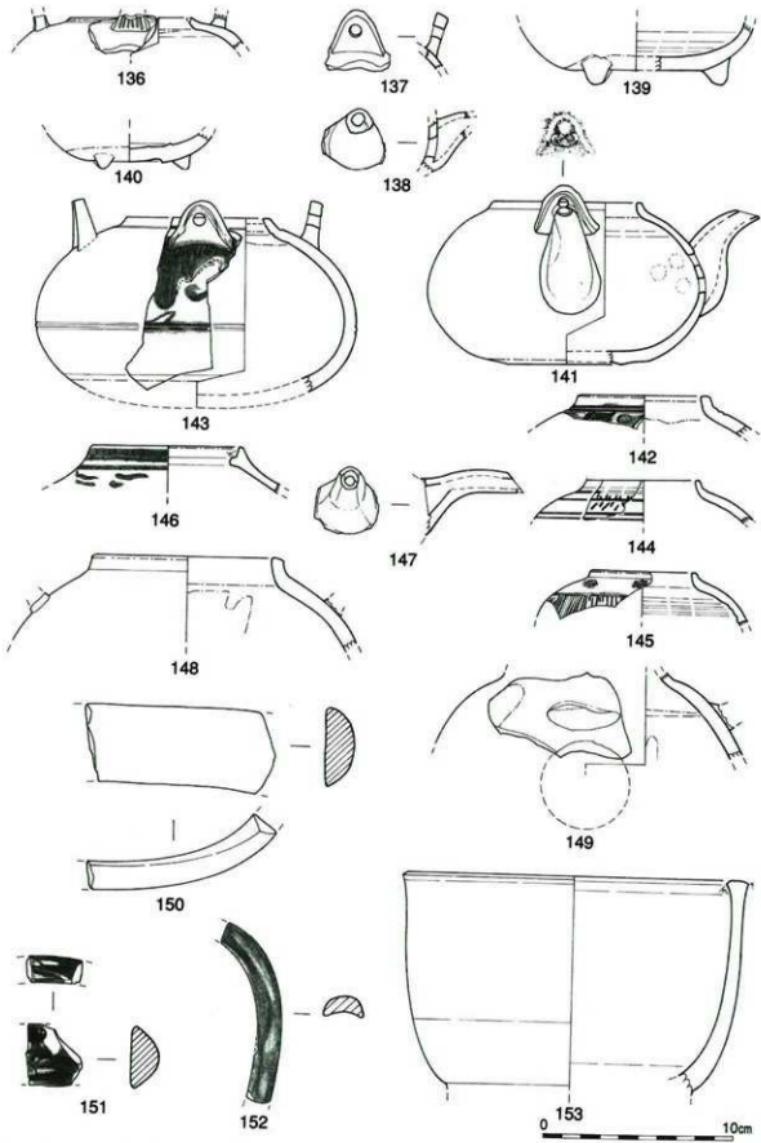
第50図 沖縄産施釉陶器 7 (蓋類)



第51図 沖縄産施釉陶器 8 (秉燭・火取・香炉・火炉・花瓶・茶入壺)



第52図 沖縄産施釉陶器 9 (水滴・壺・油壺)



第53図 沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)

第13節 沖縄産無釉陶器

1. 備前系摺鉢

備前系の摺鉢が2点得られている。正式な同定を得ていないので備前焼きとはせず備前系の摺鉢として報告することにした。(第54図1・2)

県内では今帰仁城跡・阿波根古島遺跡などで出土していて、グスクや集落遺跡からも出土していることが窺い知ることができるがその出土量は数少ない。今帰仁城跡出土のものは14世紀中葉のもの1点と15世紀末~16世紀に位置付けられる資料が3点得られている。湧田出土の摺鉢の口縁形態は今帰仁城跡出土の摺鉢で15世紀末~16世紀に位置付けられる資料に近いようである。伊東見氏の「15世紀から17世紀の備前焼」(講演記録)湧田出土の素地と近いものが存在することが判明したので、以下、講演内容を記す「…それから、胎土の問題ですが、Ⅲ期のものは山土をそのまま使ったりしていますが、Ⅳ期には水流しを行ったり、田の土を混ぜたり、きめの細かい緻密な胎土になってきます。…」、湧田出土のものは粗い石灰質砂粒と細かい石灰質砂粒などが混入している状況から判断すると備前焼そのものではないにしても前述した伊東氏の講演内容のV期の時期と平行する可能性があり、このV期は1550年前後からそれ以降(江戸時代を含むか)を考えられるところである。湧田出土の摺鉢は口縁形態などから16世紀中頃から17世紀前半頃と考えられるかもしれない。とにかく、正式な同定に期待される資料とみられる。これは瓦質土器の摺鉢や沖縄産無釉陶器の摺鉢に直接ないしは間接的に影響を与えたことが予想されるからである。

註

註1 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年。

註2 沖縄県教育委員会『阿波根古島遺跡』 1990年。

註3 伊東見氏『15世紀から17世紀の備前焼』『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年。

参考文献

・安里進・上原政昌・家田淳一『摺鉢編年からみた近世琉球窯業の展開』『あじまお』名護博物館紀要・3 名護博物館 1987年。

2. 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器の用途や器種が判明したものとして、摺鉢・壺・瓶子・水甕・厨子甕・水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉などであった。

個々の特徴は観察表(第10表)に示したが、ここでは前回、報告した分類概念を再録する。さらに今回、新しく確認された資料は、前回の分類に追加(見直し)もしくは新設定して記述することにした。今回出土していないものは、(未検出)などと分類概念中に記入することにした。また、検出されているものは図番号を記した。

a. 摺鉢

摺鉢は口縁形態などからI~Ⅲ類に大分類を行い必要に応じた細分類を実施した。以下、特徴のみを記す。

・I類

I類は口縁の造りや文様などからa~dの4種類に分けた。

a種…口縁を一端内彎させた後に口縁端部を掘み出して口縁を外反させているもの。(未検出)。

b種…口縁をハブラシ状に肥厚させた後に肥厚帯に圓線を施す。また、肥厚帯直下に範で調整し肥厚を強調するもの。(第54図3・4)。

c 種…口縁を「く」の字状に屈曲させる。肩部を意識した回転による指圧を深く入れて強調するもの。

(同図5～7・9)。

d 種…I類 c 種と同様に口縁を屈曲させるが、I類 c 種と比較して屈曲は微弱なもの。(同図8)。

・II類

II類は口縁を逆「L」字状に屈曲させる為、口縁が突出し、口唇も幅広となるものである。口唇に圓線を施すものである。(明確なものは未検出である。II・III類としたものが同図11・12に図示)。

・III類

脚台付きの摺鉢であるが、口造りはII類と共通するものである。(同図13～15)。

b. 壺

壺は口縁形態などからI類からIII類に前回、分類したが、今回追加や新しいタイプの存在が確認された為、IV類～VI類を新しく設定し、細分類を実施した。

・I類

I類は基本的にナデ肩の壺であるが、外反の度合でa・bの2種類に分けた。

a 種…外反のきつい玉縁口縁の壺で、肥厚帯下端を箆で削り取っているもの。(第55図16～18)。

b 種…a 種と同様に外反のきつい玉縁口縁であるが、a 種より肥厚が大きく肥大化するものである。

(未検出)。

・II類

本タイプはタマゴ形の器形を呈する壺であり、口造りが玉縁状に肥厚させる点でI類と類似するが全体の器形が異なっている。(未検出)。

・III類

本タイプは方形状の肥厚をもつものである。器形の微弱な変化からa・bの2種類に分けた。

a 種…口縁部を逆「L」字状に屈曲させ、肥厚帯下端を僅かに突出させているもの。(同図19・20)。

b 種…口縁部の屈曲はIII類a 種よりもゆるくなり、ルーズな肥厚を造る。(同図21・22・24～26)。

・IV類

今回、新しく設定したタイプの壺である。基本的に外反する壺で、口縁の肥厚ではなく、疑似肥厚タイプの口縁である。口縁部の外反の度合いなどからa・bの2種類に分けた。

a 種…口縁の外反がゆるいもの。(第55図27)。

b 種…口縁の外反がきついもの。(同図28)。

・V類

口縁の縦断面が「フ」の字状に屈曲するものであり、1点のみ出土している。(同図29)。

・VI類

口縁部を一端、外反させた後に口縁端部を上方に撮み上げ「カギ」状に成形する為、正面観が疑似肥厚となる。「カギ」状のものは蓋受けを兼ねたものとして考えられる。(同図30)。

・VII類

この種の壺は、全体的に大きく内側に内傾するもので、口造りからa・bの2種類に細分した。

a 種…口縁を垂直気味に仕上げ、口唇に丸味を持たせて成形するものである。(同図31)。

b 種…口縁の肥厚は折り返しでつくり、口縁の縦断面は歪な梯形状(方形状)の肥厚となる。(同図32)。本品に関して、素地などから移入品が考えられるところである。その他に壺の胴部や底部資料が得られている。(第56図33～35・41・45・46、第59図87・88)。

c. 瓶子

瓶子の口縁とみられるものが4点得られている。いずれも口縁がラッパ状に開き外反するものである。瓶子には厚手と薄手の2種類があり、前者の厚手のものをa種（同図36・37）とし、後者の薄手のものをb種（同図38・39）として分類した。その他に瓶子の胴部片や底部片が得られている。（同図40・42～44）。

d. 水甕

水甕も口縁部の形状などからI類～III類に分類し、状況によって細分類を実施した。

・I類

I類は頸・胸部で軽く内側に締り、口縁を屈曲させている。口縁は突出させた後に口縁下端を軽く撮み出している。（第57図47）。

・II類

本タイプも口造りなどからa・bの2種類に分けた。

a種…口縁を逆「L」字状に屈曲させる。全体的な器形としては垂直もしくは若干、外傾気味に直線的に口縁に移行するものが推定される。今回、a種の中に口縁が肥大化するものを含めることにした。（同図48）。

b種…口縁を屈曲させた後に口縁下端に釣状に仕上げて肥厚をつくる。口唇外端に繩目文を貼り付けている。（未検出）。

・III類

肥厚の形状などからa・bの2種類に分けられた。肥厚の肥大化の傾向が認められるものである。

a種…肥大化した方形状の口縁で、頸部で軽く締っているもの。（未検出）。

b種…肥大化した玉縁状の口縁。ナデ肩気味の甕が考えられる。（同図49）。

その他に甕の胴部片が2点得られている（同図50・51）か、水甕のものなのあるいは厨子甕のものなののかは判らなかった。

e. 厨子甕

厨子甕は、沖縄では「ジーシガーミ」と俗称されているものである。口縁形態などからI・II類に分類した。

・I類

全体的に胴上部から内側に内傾する甕で、口縁が玉縁状に成形されたもので、俗にボージャージーと称されるものである。（同図52）。

・II類

口縁の縦断面が長方形状に肥厚するものと口縁の肥厚が微弱なもの2種類が存在する。

a種…長方形状に肥厚するもので、頸部で締っているもの。（同図53）。

b種…口縁が肥厚しないで、口唇を幅広く成形する為、疑似肥厚とするもの。（同図54）。

その他に厨子甕の胴部片が3片得られている。（同図55～57）。

f. 水鉢

前回、口縁形態などからa・bの2種類に分類したが、今回、新しいタイプが確認されたので、これを追加し、分類を見直すことにしたが、従来のa種をI類に昇格させ、b種をII類として新しく分けた。

・I類

口縁形態からa・bの2種類に分けた。

a種…口縁の縦断面が「フ」の字状に折れるもので、口造りは一端、内側させた後に口縁を外側へ折り

曲げて肥厚をつくるもの。(同図58・59)。

b種…胴上部まで逆「ハ」の字状に開いた後に内側へ口縁を内傾させるもの。(同図60・61)。

・Ⅱ類

洗濯用の水鉢で、専ら下着洗いに使用された為、俗にメーチャーアラヤーと称されるものが主流である。

器形は摺鉢と類似するが摺り目の有無で区別出来る。口造りなどからa・bの2種類に分類した。

a種…口唇が幅広のもので、口縁の縦断面が「L」字状の形態をなすもの。(同図63・64)。

b種…口縁の縦断面が鍵状に折れるもので、口唇の幅はa種よりも狭いもの。(同図65)。

水鉢の底部とみられるものが2点出土しているもので、同図62に図示した。

g. 花鉢

前回出土した花鉢と素地・器色などの特徴が類似していて、素地に粗い軽石などを多量に含んでいて形が歪である。(第58図67)。

h. 鍋

蓋受けのための突起を造る鍋が出土した為、前回、未分類であった鍋を今回、a・bに分類することにした。

a種…胴上部が逆「ハ」の字状に開くもので、口頭部が微弱に折れるもの。(未検出)。

b種…胴上部がa種よりも内側に閉じるもので口頭部が「く」の字状にきつく折れるもの。(同図68)。

i. 突起および蓋などの資料

今回出土した突起および蓋などの資料として、急須の突起(同図69・70)・厨子壺の蓋(同図71・72)・鍋の蓋とみられるもの(同図73)・大型急須の把手とみられるもの(同図85・86)が得られている。中でも大型急須の把手とみられるものは、釉が他の器種と比較して厚く施されている。

j. 瓢底部

碗の底部片が1点のみ出土している。高台の造りが確りしていて高台脇に箆削りを加えている。(同図74)。

k. 灯明皿

本品は内彎するベタ底皿で、口唇や口縁内外に煤が付着する状況などから灯明皿として取り扱ったものであり、第58図75・76にこれを図示した。前回は1点のみ出土していた。

l. 小皿

器形は前述した灯明皿と同様にベタ底の内彎皿で、器形も灯明皿と類似するが、煤の付着した痕跡がないので、灯明皿と区別した。(同図77)。

m. 香炉

香炉の口縁と底部とみられるものが得られている。香炉には文様はなく、器形が円筒状のものである。(同図78)。香炉の底部には台形状の円盤を貼り付けている。(同図79)。

n. 火炉

火炉には円筒状の器形を保持するものと肩部が「く」の字状に折れるものがあり、前者の円筒状のものをI類(同図80)とし、後者のものをII類(同図81)とする。II類は口唇を浅く弧状に施し削り成形しているのが特徴のひとつである。

o. 器種不明。

類似例がない為、器種不明としたが、ある程度、可能性のある器種名を個々の観察表に記入した。

鉢などの可能性が考えられた資料は、第58図82・83に図示した2点であり、2点とも浅鉢かもしれない。壺などの可能性があるものは第58図84に示したもので、頸部のない無頸の内彎壺が予想されるが判然と

しないところである。

P. 小結

沖縄産無釉陶器の中で、摺鉢の各タイプの出土傾向を前回と比較してみることにする。今回、確認された摺鉢のタイプは I 類 b 種（第54図3・4）、I 類 c 種（同図5～7・9）、I 類 d 種（同図8）、III類（同図13・14）の3タイプであった。他に II・III類のいずれかに所属するとみられるものが2点得られている。（同図11・12）。I 類 c 種がもっとも多く4点を数えている。I 類 b 種と III類は各2点ずつ出土している。摺鉢の I 類 a 種・II類が今回は出土していない状況にあることが窺える。これらを安里進氏らの編年に対応させると湧田の I 類 b 種の一部と I 類 c 種の一部は安里進氏ほかの摺鉢Ⅰ式に近いもののが存在し、湧田の III類が安里氏らの摺鉢Ⅳ式に類似していることが判り、これによって湧田の摺鉢の時期を絞り込んでいくと I 類 b 種の一部と I 類 c 種の一部は、17世紀代、III類が19世紀後半～20世紀前半となる可能性が出てくるが、I 類 b・c 種と III類の間を埋めるものは前回、出土した I 類 d 種（17世紀後半～18世紀後半に比定されるもので、安里氏らの摺鉢Ⅱ式に比定）であるが、安里氏らの摺鉢編年Ⅲ式=18世紀後半～19世紀前半に位置付けられる資料は今回は確認されなかったが、仮に安里氏らの摺鉢編年Ⅲ式の範疇にはいるものとすれば、今回出土した摺鉢 I 類 d 種が含まれるかもしれないところである。

註

註1. 安里進・上原政昌・家田淳一「摺鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじま』名護博物館紀要・3 名護博物館
1987年。

註2. 同上。92ページ、古我地焼摺鉢 第7図23。

第10表 a 沖縄産無釉陶器観察一覧

団・国版	番号	器形	口径 横径 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
	1	壺・ 瓶・ 瓶底	24.0 —	外表面褐色の輪。 内面明茶色。	茶褐色の織粒子。細 い石灰質砂粒が微量 に混入。	外表面転換痕 内面転換痕。	口縁部で「く」の字状に折れ、口縁は垂直に立ち上がる。折れ部 （頭部）で回転窓を施すが消え切っていない。	B区メ-30 木の橋埋立
	2	壺・ 瓶・ 瓶底	— — —	外表面灰褐色 (無釉) 内面淡茶色。	淡茶色の織粒子。細 かい石灰質砂粒と微 細な茶色と茶色の物 質が少量混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り。 内面転換痕。	口縁部で「く」の字状に折れる。口縁は内側へ内傾する。口縁部 の上・下端近くを火焔でよく窪ませている。比翼背筋有。	A区ハ-33 第3層
	3	壺体・b	26.0 —	外表面灰褐色 (無釉) 内面明茶色。	茶褐色の織粒子。細 かい石灰質砂粒と微 細な茶色と茶色の物 質が少量混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り。 内面転換痕。	肥厚底にて凹削りを入れ、肥厚を強調する。肥厚部には斜面を人 れた回転窓前で南溝窓・2条施す。	A区ハ-39 堆
	4	壺体・b	— —	内表面灰褐色。 (無釉)	茶褐色の織粒子。細 かい石灰質砂粒と微 細な茶色と茶色の物 質が少量混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り。 内面転換痕。	口縁部に強烈な凹削りを入れた回転窓を1条施した後に南溝窓 の突起及び周辺に斜面削りを入れている。内面は7条一組みの 割り目を仄に入れている。	A区ノ-32 第3層
	5	壺体・c	31.0 —	外表面褐色の輪 内面明茶色。	茶褐色の織粒子。石 灰質の砂粒と微細 な茶色の物質が僅かに 混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り。 内面転換痕。	口縁部を逆「し」字状に彫成させ、頭部を深めに窪ませる。窓部で 頭部を意識して区別する。窓削りは頭部から下に施す。内面の割 り目の単位は不明。	A区フ-31 トレンチ第2層
第 54	6	壺体・c	36.0 —	外表面灰褐色。 (無釉) 内面明茶色。	明茶色の織粒子。細 かい石灰質砂粒が僅 かに混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り。 内面転換痕。	口縁部を「へ」の字状に折り曲げてある。口縁底にて脇部を弧引す る為の指切りを強くなる。内面の彫り目の単位は不明。	出土地不明。
第 55	7	壺体・c	37.6 —	外表面灰褐色(無釉) 内面淡茶色。	茶褐色の織粒子。細 かい石灰質砂粒が少 量混入。	両面とも回転痕と 回転窓ナデ。	口縁内面を仄く。頭部は「く」の字状に彫成され。口縁を外側に さきつ外反させる。内面に9条一組みの割り目を施す。	B区ノ-29 茶褐色。
國 版	8	壺体・d	32.0 —	両面茶褐色の輪。	明茶色の織粒子。幾 細な石灰質砂粒混入。	外表面転換痕と回転 窓見取り。	頭部の彫りは弱く後退である。 内面の彫り日の単位は不明である。	B区フ-29 ケープ唐 (ク ナ-渡辺)
51	9	壺体・c	— —	外表面黑色の輪。 内面明茶色。	暗い茶褐色の織粒子。	外表面転換痕。 内面転換痕。	口縁をさきつ折り曲げて外反させる。脇部下部に先彫りの窓縫を 1条施す。	A区ノ-31 復元品
	10	壺体・f	12.0 —	外表面褐色の輪。 内面明茶色。	濃い茶褐色の織粒子。 透入部は觀察できな い。	外表面転換痕と回転 窓見取り。内面転換 痕とナデ。	底面からの立ち上がり部にて窓削りを入れ浅く窪ませる。底面は 窓削りをナデせず。内面に6条一組みの割り目を入れる。脇部窓 に自然の彫り入り込んでいる。	第1層
	11	壺体・g・h	30.8 —	外表面光沢のある淡 黄色の輪。 内面淡茶色。	濃い茶褐色の織粒子。 透入部は觀察できな い。	両面とも回転痕。	福島の口唇で口唇に丸彫りの横線を施すが途中で切れる。 内面の彫り日の単位は不明。	B区ノ-30 東壁
	12	壺体・g・h	— —	外表面茶褐色。 (無釉) 内面明茶色。	暗茶色の織粒子。幾 細な石灰質砂粒が僅 かに混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り・クロロ痕。 内面転換痕。	脇部下部に回転窓削りを入れる。内面には10条一組みの割り目を深 く入れる。	A区ヒ-33 第2層
	13	壺體	14.0 —	外表面褐色。 内面明茶色。	濃い茶褐色の織粒子。 透入部は觀察できな い。	両面とも回転痕。	丸彫りのある「ハ」の字状の舞台。6mmの孔を外側から穿っている 脇部前面に身と接合する為に深目の櫛引きを入れる。	B区ノ-30 第2層
	14	壺體	16.0 —	両面とも火炎のあ る淡茶色の輪。	淡茶褐色の織粒子。 幾細な石灰質砂粒が僅 かに混入。	外表面転換痕。 内面転換痕。	「ハ」の字状の脚。脇付外場を掘取りした後に削り目を施す。脚に 片切り彫りの窓縫を施す。	B区ノ-29
	15	壺體	24.0 —	両面とも淡茶色 (無釉)	瓦質の脚。淡茶 色織粒子。幾細な石灰 質砂粒が僅かに混入。	両面とも回転痕。	「ハ」の字状の脚。孔を両面から穿った痕跡があるが、孔のサイ ズは何もない。	B区ノ-30 第2層
	16	壺・i・s	17.8 —	外表面淡茶色の輪 内面淡茶色。	淡茶褐色の織粒子。 透入部は觀察できな い。	外表面転換痕・回転 窓見取り。 内面転換痕。	透「ハ」の字状に外側に強く外反せず、肥厚部下部を窓削りで深 く取り切っている。脇部面に白色の陶土が細く、密に入る。	B区ノ-30 瓦
	17	壺・i・s	17.6 —	両面茶褐色と淡茶 色の輪。	淡茶褐色の織粒子。 透入部は觀察できな い。淡茶色の 織粒子が少量混入。	外表面転換痕・回転 窓見取り。	大きくるやかに外反する度で、肥厚部下部に幅7-9mmの窓削 り。脇部面に白色の陶土が細く、密に入る。孔は壁面に直角（動土日）が認められる。	A区フ-32 第3層
	18	壺・i・s	19.0 —	両面明茶褐色の輪	淡茶褐色の織粒子。 石灰質砂粒の粗い白 色織粒子が多少混入す る。	両面とも回転痕。 外表面に縦に窓削りを 施す。内面に窓削りナデ を施す。	腰面に外反する度。肥厚部に窓削りを加えるが確である。脇部面 に細くて規則的な白色陶土が発見的に入っている。	B区ハ-30 第2層

第10表 b 沖縄産無釉陶器観察一覧

器・国級	番号	器形	口縁 直径 (cm)	器色	素地	器面調整	文様など	出土地点
	19	壺口a	13.4 —	外表面灰褐色の釉、 内面明灰色。	茶褐色の微粒子。細 い白色や明黄色の軽 微物が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	腹部の長い窓で、口縁が造「し」字に肥厚する。肥厚部下端が僅 かに下方に突出する。	B区ハ-30 第2層
	20	壺口a	8.6 —	両面とも明黄色の 釉、口縁の輪がア ルバタ状となる。	茶褐色の微粒子。粗 い灰褐色の軽微物が僅 かに混入する。	両面とも回転擦痕。	腹部の長い窓で、口縁が造「し」字に肥厚する。肥厚部下端が僅 かに下方に突出する。口縁が内側に傾く為、回転擦痕の使用が考えられる。	B区ノ-ハ31 東内部玉置出土
	21	壺口b	20.6 —	外表面灰褐色の釉、 内面明灰色。	淡茶褐色の微粒子。粗 い白色の軽微物が僅 かに有り、(青色、黃 色)の軽微物が少量混 入。	両面とも回転擦痕。	腹部がやや短くなる小窓。口縁外端近くは削り取りで浅い溝線を 表現する。頭部に丸穴のある湯瓶型を施す。	B区ノ-29 新規色
	22	壺口b	14.0 —	外表面灰褐色の釉、 内面明灰色。	明黄色の微粒子。粗 い石英を多量混入。	外表面回転擦痕・回転 擦痕あり。 内表面回転擦痕。	腹部がやや短くなる小窓。頭部及び上部に回転擦痕を有れる為、横 窓の湯瓶型の仕上げとなる。	B区ノ-29 新規色
第 55 国 · 國 施	23	壺口	—	外表面灰褐色の釉、 内面明灰色。	茶褐色の微粒子。細 い石英を多量混入。	外表面回転擦痕・回転 擦痕あり。 内表面回転擦痕。	腹部下に回転擦痕を入れた後に回転擦痕で消す。上部にヘラ 記号「△」の字形。浅目の丸窓で3~4条の溝線を空に施す。頭 部での最大直径14.8mm。	未探
	24	壺口b	—	外表面灰褐色の釉、 内面灰褐色の釉。	茶褐色の微粒子。細 い石英を多量混入が 僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	ナデ背の窓、腹部に複数の凸窓を貼り付ける。	不明
	25	壺口b	11.6 —	外表面灰褐色の釉、 内面灰褐色。	茶褐色の微粒子。細 い石英を多量混入が 僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	腹部がやや短くなる小窓。口縁が「く」の字形に肥厚するが、 併ればルーズで丸味を帯びる。口部外端が上方に僅かに突出する。	A区ハ-31 東壁
	26	壺口b	14.6 —	外表面灰褐色の釉、 内面灰褐色。	茶褐色の微粒子。細 い石英を多量混入が 僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	口縁がゆるく外反し腹部の輪が長い窓、口縫部の屈曲はルーズで丸 味を帯びる。口部外端が上方に僅かに突出する。	A区ノ-31 第2層
第 53	27	壺口a	13.6 —	外表面灰褐色の釉、 内面灰褐色。	茶褐色の微粒子。粗 い石英を多量混入と淡 茶色の軽微物が少量混 入。	両面とも回転擦痕。	腹部が僅かに丸味をもって突出する。	A区ノ-32 第2層
	28	壺口b	—	両面とも灰褐色 (無釉)	灰褐色の微粒子。細 い石英を多量の軽微物 が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	腹元部擦痕の為、素地及び内側面は灰褐色を帯び損傷と見劣ら ずしている。	A区ノ-34 第2層
	29	壺V	14.0 —	両面褐色の釉。	茶褐色の微粒子。粗 い石英を多量の軽微物 が僅かに混入。	両面とも回転擦痕。	口縁を「フ」の字形に折り曲げるため、口唇は幅広となる。	A区ノ-31 トレンチ
	30	壺口	16.8 —	両面とも灰褐色。 (無釉)	淡茶褐色の微粒子。深 入部にはほとんど見え ない。	外表面回転擦痕・回転 擦痕あり。 内表面回転擦痕。	酸化後焼成骨牌面は淡茶褐色で両面が灰褐色となる。口造りが特 徴的である。肥厚部直下に削りを入れる。一旦、須世器と見劣 る資料である。	不明
	31	壺口a	15.0 —	外表面灰褐色。 (無釉)	茶褐色の微粒子。 混入部はほとんど見え ない。	両面とも回転擦痕。	内側する窓で、口縁を垂直に盛み上げて仕上げている。	不明
	32	壺口b (移入品?)	20.2 —	両面灰黒色の釉。	濃茶褐色の微粒子。 粗い石英を多量に混 入。	外表面回転擦痕・回転 擦痕あり。 内表面回転擦痕。	口縁の肥厚は折り返し造りで垂直形状につくる。肥厚部下端及び直 下に削りを入れる。骨牌面に織目状に白色の陶土が入る。中国、東南アフリカの骨牌陶器かもしれない。蓋地がよく判らない。	A区ハ-31
第 56 国 · 國 施	33	壺胴部	—	両面灰褐色の釉。	細かい石英を少量混 入。	両面とも回転擦痕。	脣部に横耳を貼り付ける。梅はヒビ割れ状態となっている。	A区ノ-32 第3層
	34	壺底部	—	外表面灰褐色の釉。 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。 石英質微粒子が幾箇に 混入する。	外表面回転擦痕と削 り入り、内面ロクロ痕、 底面黒色。	底面からの立ち上がりの臺所に削りを入れる。	B区ノ-30 埋灰
	35	壺底部	—	両面灰褐色。 (無釉)	茶褐色の微粒子。 粗い石英と石英質の 軽微物が僅かに混入す る。	外表面回転擦痕。回転 擦痕より、内面ロクロ痕、 底面黒色。	底面は重ね焼き後の切り離しで、底面の縁辺は剥離面となっ ている。	未探
	36	瓶子a	12.0 —	片面灰褐色の釉。 内面灰褐色。	濃茶褐色の微粒子。 細かい茶色の軽微物 が僅かに混入する。	両面回転擦痕。	口縁は大きく外側に斜めにせざる。口唇が円凸となる。骨牌面 は小孔が無数にできバタキ状となる。口縁近くで脚厚が厚くなっ ている。	B区ハ-30 第2層

第10表 c 沖縄産無釉陶器観察一覧

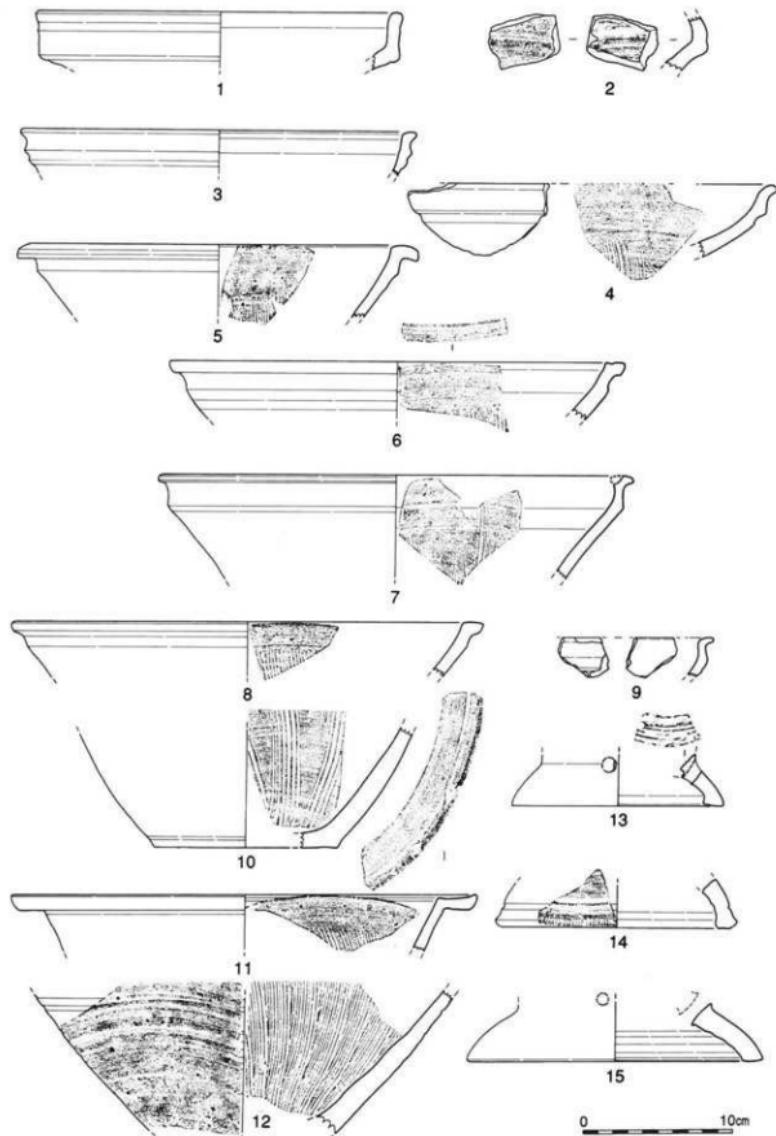
国・固版	番号	器 形	口径 直径 (cm)	器 色	来 地	器調査	文 横 な ど	出土地点
第 56 国 墓	37	瓶子 A	8.6 —	画面茶褐色。 (無釉)	明黄色の微粒子。輕い灰が量多く含まれる。	画面回転痕。	口縁を大きく外側に外傾させる為、口唇が外向きとなる。 口縁近くで器厚が厚くなっている。	A区フ-31 第2号
	38	瓶子 B	7.0 —	画面灰褐色の瓶。 内面は途中まで施釉。	濃い茶色の微粒子。 内面人物はほとんど見えない。	画面回転痕。	口縁を大きく外側に外傾させる為口唇が外向きとなる。器壁が4~6mmと薄い。	A区ヒ-31 第3号
	39	瓶子 C	7.6 —	外表面及び内面口縁 は淡黄褐色の釉を施す。 内面は暗褐色。	淡黄褐色の微粒子。 僅に石質の微粒子が混入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。内面回転痕。	口縁を大きく外側に外傾させる。口唇は尖り気味に形成する。 器厚は4~7mmと薄い。頂上部に無い場合縫を5条施す。	B区 井戸前排水樋乱
	40	瓶子 頭部	— —	外表面茶褐色の瓶。 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。石 灰が混入。細かい茶 色の微粒子が少量化入 する。	画面回転痕・回転 剥離割り。	最大径径9cmを測る。胴上部から頭部へ縮まっていく。張の長い 瓶が予想される。	A区ノ-31 トレンチ
	41	壺腹部	— —	外表面淡灰色の壺。 内面淡茶褐色。	茶褐色の微粒子。僅 く人物はほとんどみえ ない。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	タマゴ形の器形が予想される壺である。胴上部に縫織が一条残 されている。	表揚
	42	瓶子 頭部	— 5.8	外表面淡褐色の瓶。 内面灰褐色。	茶褐色の微粒子。石 灰が混入。細かい灰 色の微粒子が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	底面からほぼ垂直に立ち上がりそのまま内側に開き気味に立ち上げた後に内 側に閉じ気味に丸を付けて胴部へ移行する。底面には切り落しの跡がみられ る。	A区ヌ-31 第1号
	43	瓶子 底部	— 9.0	外表面茶褐色の瓶。 内面灰褐色。	茶褐色の微粒子。微 細な石質が僅かに含 まれる。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	底面から立ち上がりはやや外側に開き気味に立ち上げた後に内 側に閉じ気味に丸を付けて胴部へ移行する。底面は凹凸があり、誰な感じを受ける。底面には淡褐色の釉が付着する。	B区ミ-29 灰茶褐色
	44	瓶子 底部	— 5.2	外表面淡褐色。 内面淡茶色。	灰褐色の微粒子。僅 く人物はほとんどみえ ない。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕と削印	底面から立ち上がりはやや外側に開き気味に立ち上げた後に内 側に閉じ気味に丸を付けて胴部へ移行する。底面の調子は滑 で施した後にナメ感が消え切っていない。	A区ニ-34 第2号
	45	壺腹部	— 7.4	外表面茶褐色の瓶。 内面淡茶褐色。	茶褐色の微粒子。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	外底面を浅く削り出す。立ち上がりの箇所に深い削りを加大高台 状に仕上げる。	A区ハ-31 第2号
	46	壺底部	— 5.8	外表面茶褐色の瓶。 内面赤茶色。	茶褐色の微粒子。微 細な石質が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	高台をもつ。外底面及び高台外側は丁寧に仕上げる。裏付は薄 で小さな起伏がある。	B区ミ-29 茶褐色
第 57 国 墓	47	水甕 I	— —	外表面明褐色。 (無釉)	茶褐色の微粒子。微 細な石質が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面凹凸の不明	幅広の口部。口縁下端を軽く彫み出して突出させる。把厚帯下端 に片切り彫りによる縫織を2条施す。	A区ヌ-31 地蔵堂
	48	水甕 II	— —	外表面茶褐色。 (無釉) 内面暗褐色。	茶褐色の微粒子。茶 色の微粒子が僅かに混 入する。	両面とも回転痕で ある。(調整)内面の 手筋の方法が人目付 かれてはいる。	口唇の幅が6.5mmを測る資料。文様は口唇外縁と口縁の両面に片 切り彫りや丸彫りで縫織を施す。	表揚
	49	水甕 II b	23.0 —	両面とも茶褐色の 瓶。	茶褐色の微粒子。微 細な石質が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	把厚帯中央から下に織る回転剥離割り。把厚帯下に深目の削りを 入れる。	B区ヒ-30 復元屋
	50	腰文 壺 頭部	— —	外表面淡褐色。 (無釉) 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。微 細な石質が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	底部で織る要とみられる資料。外面に丸彫りの縫織と先の平た い又次工具で底文状を描く。	B区ヒ-30 第2号
	51	腰文 壺 頭部	— —	外表面茶褐色。 (無釉) 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。石 質の微粒子が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕。	側部に三角彫刻の凸筋を貼り付けた後に均一的な調子で凸筋を下方に押し倒して織口袋の文様をつくっている。	B区ノ-29 灰茶褐色
	52	肩子 壺 I	31.0 —	外表面黒褐色の瓶。 内面淡褐色。	茶褐色の微粒子。細 かい石質と茶色の微 粒子を基盤に含んでい る。外表面はアーヴィ ング面積はアーヴィ	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕	口縁は玉筋状の肥厚を造る。外面は片切り彫りの縫織を把厚帯下 に3条施し肥厚を強調する。	A区ニ-33 第1号
	53	肩子 壺 II a	38.2 —	外表面茶褐色の瓶。 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。石 質の微粒子が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。 内面回転痕	把厚帯下方に丸彫りの縫織を2条施す。同帯下端は削りを加え ている。側面上にも片切り彫りの縫織を1条施している。	B区ヌ-28 復元
	54	肩子 壺 II b	43.2 —	両面灰褐色。 外表面支拂棒に茶 褐色の釉を施す。	茶褐色の微粒子。石 質の微粒子が僅かに混 入する。	外表面回転痕・回転 剥離割り。	口縁外縁を削りて突出させる。口縁に片切り彫りの縫織を3条施す。 側面上に凸筋を1条貼り付ける。	A区 ヒ-32・33 第3号

第10表 d 沖縄産無釉陶器観察一覧

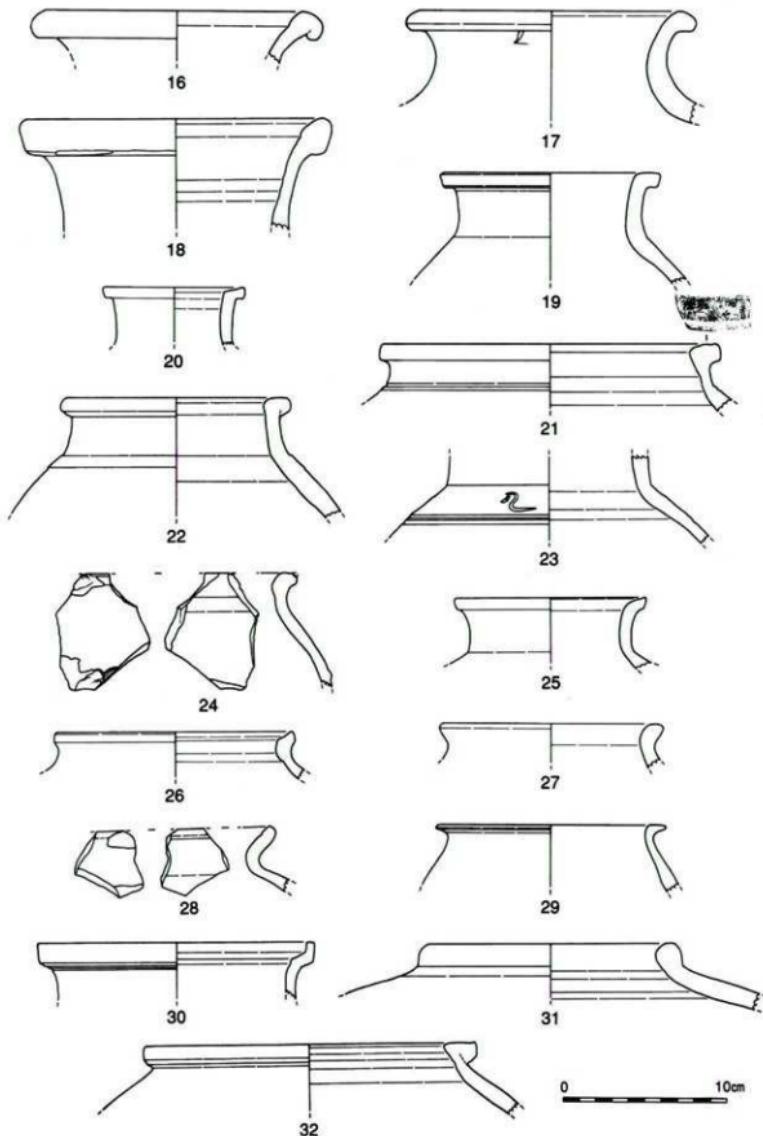
団・団番	番号	器 形	口径 直徑 (cm)	器 形	产地	表面調査	文様など	出土地点
東 国 ・ 西 班 55	55	肝子彫刻部	—	外表面灰白色。 (無釉)	赤茶色の微粒子。 底入物はほとんど見えない。	表面回転擦痕・回転 削り。内面回転擦痕。	脚上部に圓錐と先の平たい叉状工具で液状文を捺さその直下に凸 起を貼り付けている。この凸起の面には丸取りの彫痕を1条施して いる。	B区ノー30 第2層
	56	肝子彫刻部	—	外表面褐褐色の釉。 内面浅褐色。	赤茶色の微粒子。 底入物は褐色の粘土が僅かに混入。	表面とも回転擦痕。	外面に垂れとみられるものを貼り付けている。	B区ノー30 第2層埋乱
	57	肝子彫刻部	—	外表面青褐色。 (無釉)	褐色の微粒子。 細かい赤と茶褐色の 底入物が僅かに混入。	表面不規則なナダ。 内面回転擦痕。	同上。	B区ノー29 明茶色
	58	水杯 Ia	21.0	両面に茶褐色の釉。	明褐色の微粒子。 底入物は赤が僅かに混入。	表面回転擦痕。内面 回転擦痕・クロロ痕。	口縁は三角形に肥厚する。脚上部に一本一組みで擦痕きの液状 液状文を描く。口唇に重ね焼きの為の白色土が付着。	西壁
	59	水杯 Ia	24.6	外表面灰白色と明 茶褐色の釉。 内面浅褐色。	明褐色の微粒子。 底入物は僅かに混入。	表面回転擦痕・回転 削り。内面回転擦痕・ロクロ痕。	口縁は三角形に肥厚する。肥厚帶直下に片切り取りの意で深く 削りを入れる。5本一組みの液状液状文を描く。	表採
	60	水杯 Ib	—	両面とも灰茶色。 —	赤茶色の微粒子。 底入物はほとんど見えない。	表面とも回転擦痕。	内面口縁で、内面が僅かに肥厚する。片切り取りの圓錐を2条施して 内面に彫刻後に擦痕を加える。削りの面取りの痕跡がみられる。	A区ナ・ニー タ・チャ邊り (埋乱)
	61	水杯 Ib	19.0	外表面灰褐色(無釉) 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。 底入物はほとんど見えない。	表面回転擦痕・回転 削り。内面回転擦痕。	無文の内面本鉢。外表面は削り後に擦痕を加える。削りの面取りの痕跡がみられる。	B区ハー 30・31
	62	小鉢底部	13.4	外表面茶色の釉。 内面茶褐色。	褐色の微粒子。細 かな石英質と無い青 褐色の底入物が僅量混 入。	表面回転擦痕・回 転擦痕。 内面回転擦痕・ロクロ 痕。	茶色の釉は外表面近くまで施す。外表面は削りで終了する。	B区ハー30 青茶色抹水溝邊 底
	63	木鉢 IIa	31.4	両面とも茶褐色。 口唇は茶褐色。口 縁に口唇の一部に 茶褐色の釉。	明褐色の微粒子。細 かい石英質と無い青 褐色の底入物が僅量混 入。	表面回転擦痕・回 転削り。内面回転擦 痕。	口唇外端近くに片切り取りの圓錐を施す。肥厚帶直下と脚上部 に削りを入れて「く」の字状の彫痕をつくる。	B区ノー29 茶褐色。
	64	木鉢 IIa	31.6	外表面光沢のある灰 茶色の釉。 内面明褐色。	赤茶色の微粒子。 底入物は難辨でさな い。	表面とも回転擦痕。	口唇外端近くに片切り取りの圓錐を施す。肥厚帶直下と脚上部 に削りを入れて「く」の字状の彫痕をつくる。	B区ホー28 埋乱
東 国 ・ 西 班 65	65	木鉢 IIb	42.0	外表面灰褐色。 内面灰褐色。 口唇外端と口縁に 茶褐色の釉。	茶褐色の微粒子。 底入物は難辨でさな い。	外表面回転削り・回 転擦痕。 内面回転擦痕。	肥厚帶下部を削り面取りとし、岡部下端と身の間に片切り 取りで深く抉り取っている。外表面は口縁の一部を除き、削削 りで終る。	表採
	66	木鉢底部	17.2	両面とも明褐色。 (無釉)	明褐色の微粒子。 粗粒な石英質。無い青 褐色や茶褐色の底入 物が混入。	表面回転削り・回 転擦痕。 内面回転擦痕。	外表面は削り後に擦痕を加える。底面からの立ち上りの箇所には 削前との差異を示していない。水や泥の痕跡を示すのでここを考えられるとこである。	A区ホー・ノー31 灰土層
	67	花鉢底部	16.4	外表面灰褐色。 内面茶褐色。	灰褐色の微粒子。粗 い石英質と石英質の 底入物を多量に混入。	外表面回転削り・ナ ダ・面取り。 内面回転擦痕。	外表面に幅2mmの丸柱で斜線を施す。斜削りは高台の外表面、裏 面内面に施されている。斜削削の内面は茶褐色の陶土。芯板 は茶褐色で底面は「埋土」を使用する為、芯部は気泡や空気が陶土 に多く混入した状態で形成され、アバット状となる。	表採
	68	鍋 b	16.0	外表面下面が明茶 色の釉。 (無釉)	赤茶色の微粒子。底 入物は茶褐色を僅かに含 む。	表面回転擦痕。 内面回転擦痕・回 転削り。	内面の口部面に収受けの突起を造る。	B区ハー29 灰茶色
	69	急須突起	—	外表面灰褐色。 (無釉)	赤茶色の微粒子。底 入物は石英質が微量に含 まれている。砂質 は「埋土」となる。	表面削り・ナダ・ 面取り。 内面回転擦痕。	貼り付けの突起は削削りで複数回に面取りした後にナダや指圧で 成形する。孔は直径6mmを測り、外側から内方向へ穿っている。	B区ハー30 第2層
	70	急須突起	—	両面茶褐色の釉。	茶褐色の微粒子。底 入物は茶褐色の釉。 茶褐色の底入物が僅量に含 まれる。	表面削り・ナダ・ 面取り。 内面回転擦痕。	正面丸頭形の突起を貼り付けている。直径5.5mmの孔を外側 から穿っている。身の突起を貼り付ける。貼り付け箇所には手探 り痕で外方向に削目を入れている。	B区ハー30 茶褐色土層
	71	肝子彫刻	—	臺上面に茶褐色の 釉。 脚下部、短脚 色。 内面明褐色。	茶褐色の微粒子。底 入物は茶褐色の釉。 茶褐色の底入物が僅量に含 まれる。	表面回転擦痕・回 転削り。 内面回転擦痕。	脚子彫の脚付きの臺。身との接り止めの墨所は三角形に突出す る。この三角形の突起に片切り取りで深く抉り取っている。	B区ノー30 表裏
	72	肝子彫刻	—	臺上面明褐色。 脚下部茶褐色。 内面茶褐色。	明褐色の微粒子。石 英質と茶褐色の釉が僅 かに混入。	表面回転削り。 脚下部茶褐色。 内面回転擦痕。	肝子彫の脚付き臺。基部の丸味は深く、身と蓋の接り止めである 突起は大きい。最大直径12mm。	B区フー29 明茶色

第10表 e 沖縄産無釉陶器観察一覧

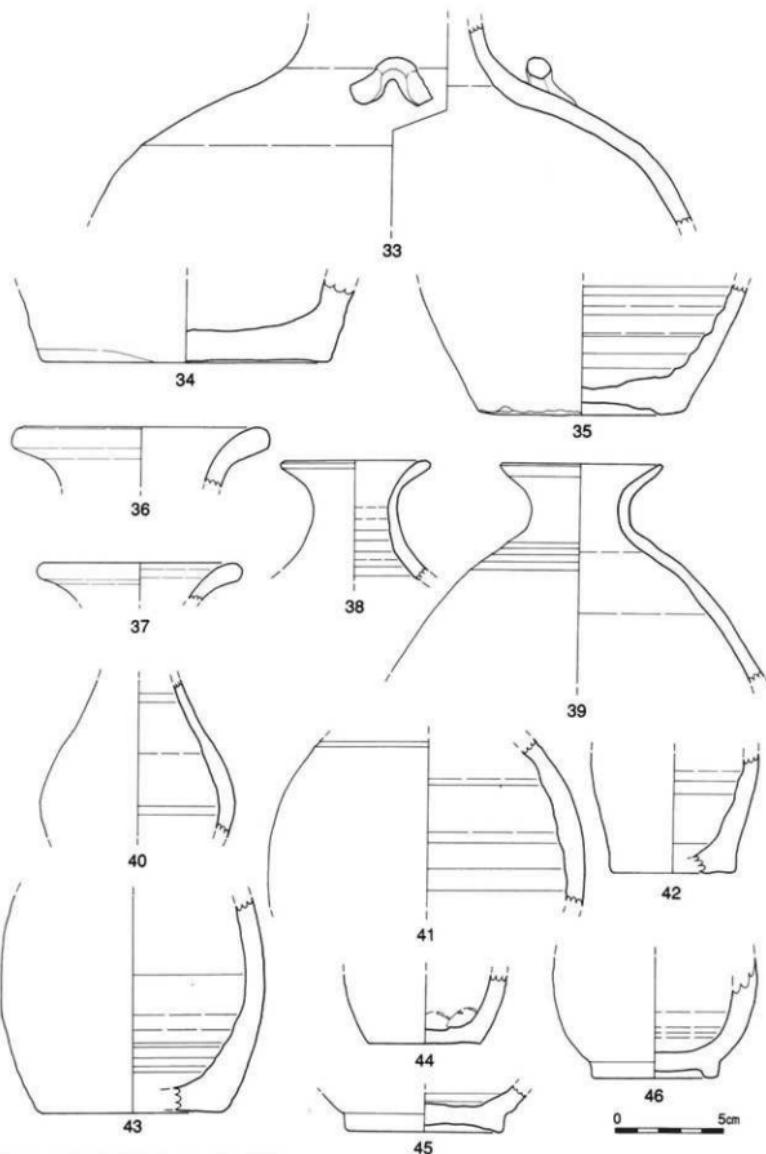
団・国版	番号	器 形	口径 横径 (mm)	器 色	素 地	器面調整	文 様 な ど	出土地点
第 58 国 版	73	鍋の蓋?	-	素地及び灰白状の 突起褐色の粒が 部分に残存。素地 は茶褐色。 内面明褐色。	素褐色の微粒子。 微小な石英や石灰質 の微粒が幾つかながら 混入。	素面回転磨削り。 回転磨削。内面回転 磨削。	高台状の突起は逆「ハ」の字状に上方に開き、調整は見削りを主 に施す。突起の最大直径は6cmを測る。	A区ノ-31 茶褐色。
	74	鍋底部	4.4	外表面明褐色、茶褐色 (無釉)。内面 明褐色。	素褐色の微粒子。微 細な石灰質の粒や粗 い貝片などが少量 混入する。	外表面回転磨痕・回転 見削り。 内面回転磨痕。	高台部は造形のまま終了する。見込みには重ね焼きの胎土目 (青い石英と石灰質粒子)がみられる。	B区ツ-29 明系色。
	75	灯明皿	11.0 5.8 2.0	外表面茶色。(無釉) 内面明褐色。	明褐色の微粒子。石 灰質の微粒が多少に混 入する。	外表面回転磨痕・回転 見削り。 内面回転磨痕。	内面口縁のベタ底面。外底面は切り離しの際削離する。立ち上がり の側面に見削りを入れる。口縁の内外端及び口部に擦が化成し付 着する。	B区ツ-30 壁。
	76	灯明皿	11.0 5.2 2.3	両面素茶色。(無釉)	灰褐色の微粒子。微 細な石灰質の粒が微 量から混入。	外表面回転磨削り・回 転磨痕。 内面回転磨痕。	内面口縁のベタ底面。外底面は同心円状に墨削りを施す。内面口 縁と口部に多量の擦が付着し、灰化している。	B区ホ-30 北壁表層
	77	小皿	10.8 4.6 2.6	外表面茶色。 内面明茶褐色。	素褐色の微粒子。微 細な石英が僅かに混 入する。	外表面回転磨痕・回転 見削り。 内面回転磨痕。	内壁する小皿。外底面は切り離しの際に削離。	A区ホ-31 第1層。
	78	香炉	11.0 -	外表面明茶褐色の釉。 内面表面茶色。	素褐色の微粒子。微 細な石英が僅かに混 入する。	外表面回転磨痕。 内面回転磨痕・ロク ロロ。	円錐形の香炉。内面口縁が僅かに肥厚する。外面の釉の大半は先 づけ落ちている。	A区ハ-32. 第1層。
	79	香炉底部	10.4	両面明茶褐色の釉	素褐色の微粒子。微 細な石英や少量化 した茶色の鉱物が僅かに 混入する。	外表面回転磨削り・回 転磨痕。 内面回転磨痕・ロク ロロ。	円錐形の香炉。外面は釉を施した後に底部近くに墨削りを入れ る。墨削りと墨取りを同時に実施。外底面は墨削り後に内盤状の 隙を貼り付けている。	B区ハ- 30・31 第2層。
	80	火炉	22.4 -	外表面明白色の釉。 内面明褐色。	明褐色の微粒子。微 細な石灰質や茶色の 鉱物などが僅かに混 入する。	外表面回転磨痕・荒削 りロクロロ。 内面回転磨痕。	円錐状の火炉。口縁近くで器壁が僅かに厚くなる。	B区ヘ-29 茶褐色。
	81	火炉Ⅱ	10.2 -	外表面灰茶色の釉。 内面深褐色。	明褐色の微粒子。微 細な石英や茶色の 鉱物などが僅かに混 入する。	両面とも回転磨痕。	口唇を浅目に弧状に削り取っている。内面に釉の垂れがみら れる。背面面に白色の陶土が繊維様に入り込んでいる。	A区ホ-31 焼瓦。
	82	器種不明 鉢?	20.0 -	外表面素褐色の釉。 内面灰褐色。	灰褐色の微粒子。微 細な石英質の粒や茶 色の鉱物などが少 量混入。	両面とも回転磨痕。	口縁を「へ」の字状に折り曲げている。口器は見削りで丸味を出 している。背面面は気泡が多くアバタ状となる。	A区ヌ-34 第2層。
第 59 国 版 57	83	器種不明 鉢?	22.0 -	外表面灰茶色の釉。 内面素茶色。	素褐色の微粒子。微 細な石灰質の粒が少 量含まれている。	外表面回転磨痕。 内面回転磨痕。	口縁が僅かに崩反る。口唇は斜位に形成する。	A区ヒ-32 トレンチ第3層。
	84	器種不明 鉢?	21.6 -	両面素褐色の釉。	濃茶褐色の微粒子。石 灰質の微粒子などが 少量混入。	両面とも回転磨痕。	内面口縁で口唇のみ見削りを施す。口唇は削りで尖らせている。	B区ノ-30 焼土裏面。
	85	把手 大型急須?	-	両面回緑色の釉。	茶褐色の微粒子。混 入人物はほとんどみら れない。	両面ともナダケ。 両面割り。	幅3.8~4.1cm、厚さ1.0~1.4cmの把手の破片。釉を施す。釉には 細かい真人がみられる。	表様
	86	把手 急須	-	両面とも茶褐色の 釉。	淡い茶褐色の微粒子。混 入人物はほとんどみら れない。	両面ともナダケ。 両面割りともナダケ。	幅2.2cm、厚さ0.8~1.0cmの把手の破片。	A区ホ-31
	87	壺、 壺の底部	19.8	外表面茶色。 (無釉)。 内面明褐色。	淡茶色の微粒子。粗 い石英、石灰質砂 岩が僅かに混入。	外表面回転磨痕・回転 見削り。 内面回転磨痕。	外底面は墨削りを施す。底面の株辺に削りを入れ面取り。立ち上 りの部分にも墨削りを施す。	A区ニ-34 第2層。
第 60 国 版 57	88	壺底部	23.6	外表面茶色の釉を施 すが大半は先に落 ちる。内面灰褐色。	明茶色の微粒子。粗 い砂粒などを少量に 混入。	外表面回転磨痕・回転 見削り。 内面回転磨痕。	外底面はナダケ面を施すが、大部分は剥離面である。背面面は アバタ状で部分的に大きな鉱物の跡がみられる。	A区ホ- 32・33 第3層;裏面。



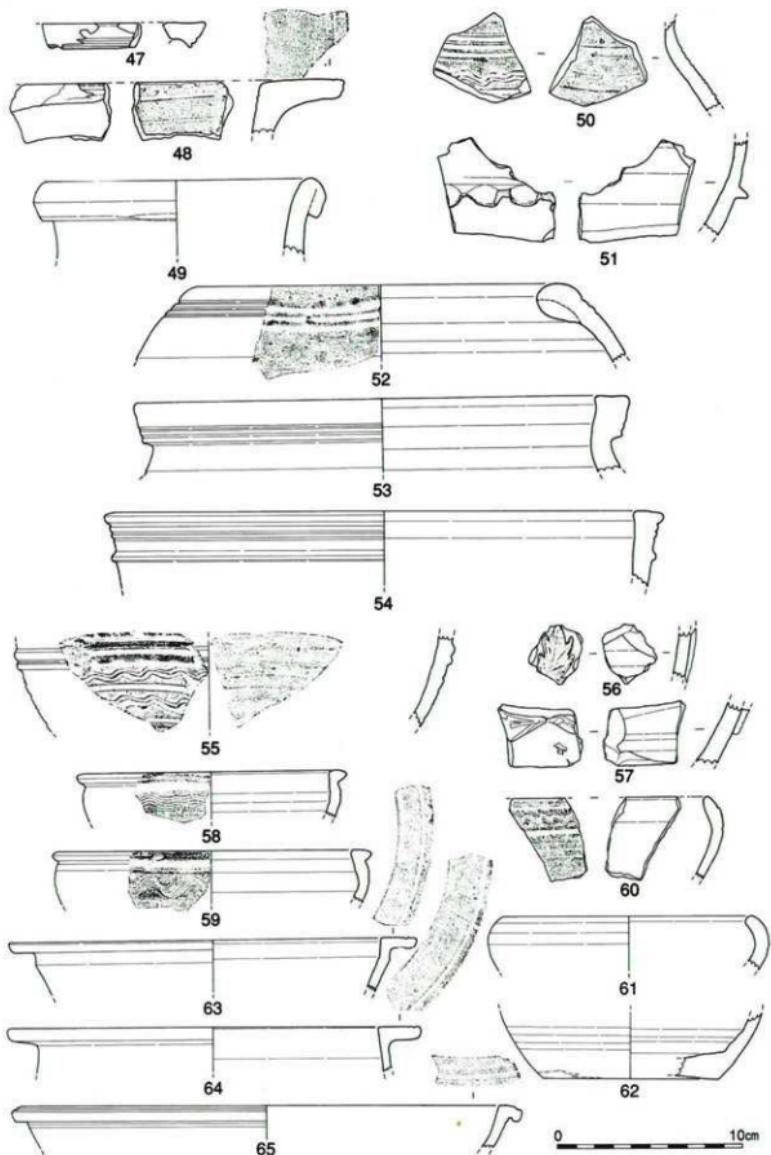
第54図 沖縄産無釉陶器 1 (措鉢)



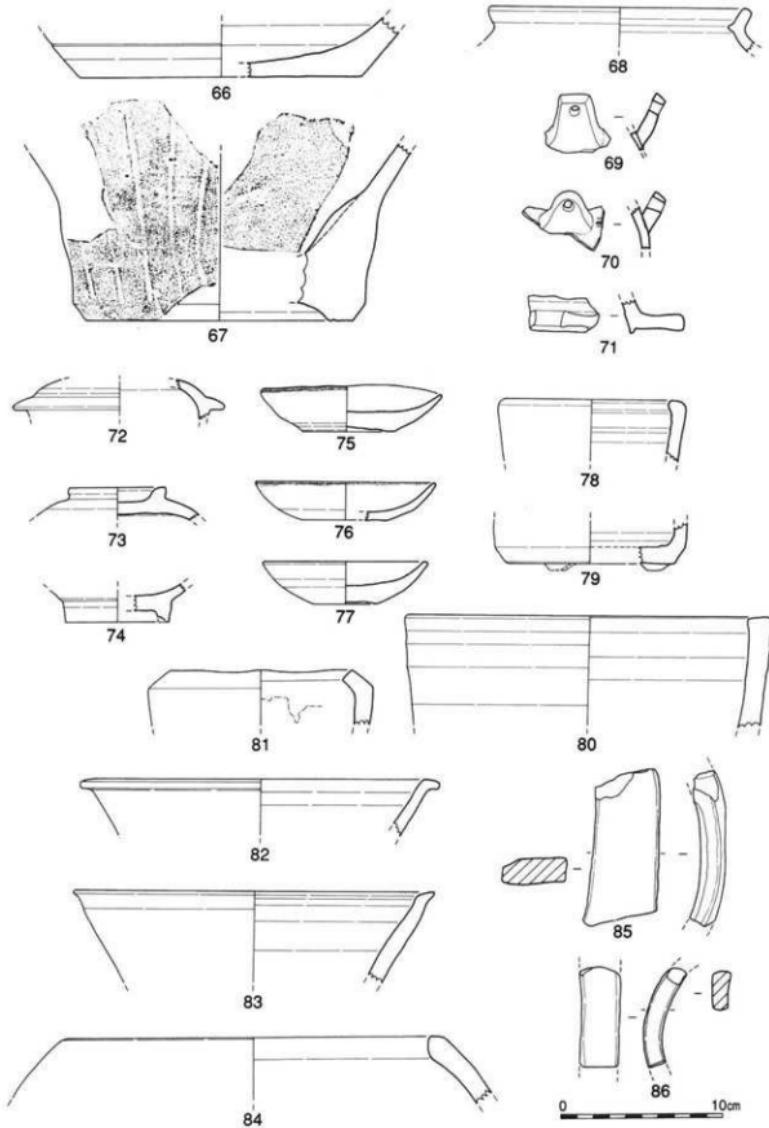
第55図 沖縄産無釉陶器 2 (壺)



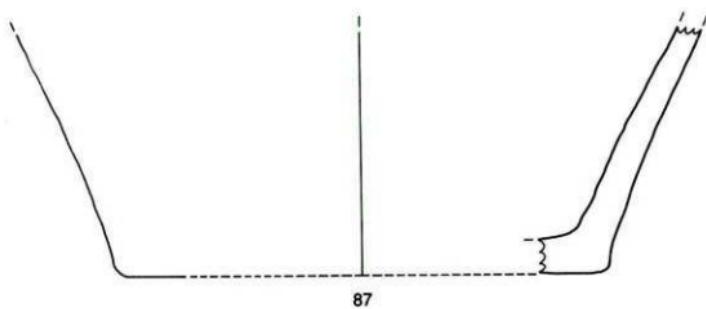
第56図 沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)



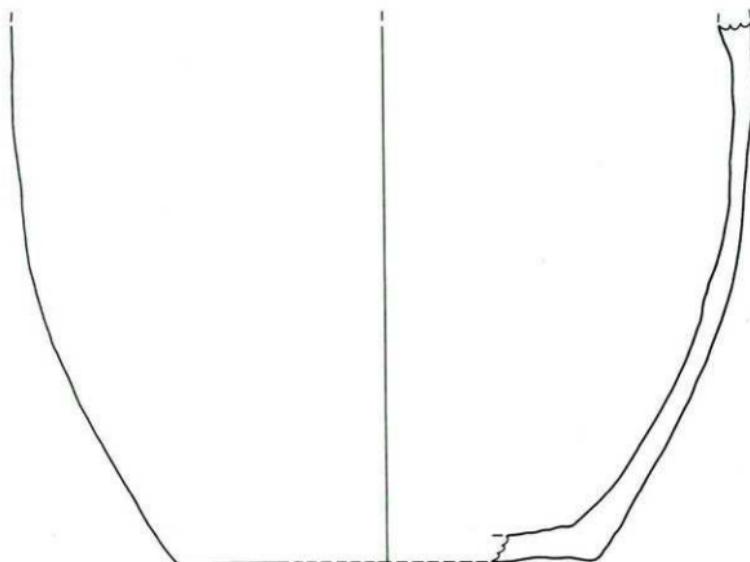
第57図 沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢・小鉢)



第58図 沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の把手)



87



88



第59図 沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部)

第14節 土 器

土器は2器種が確認され、個数も2点である。壺の破片と鍋の復元資料である。以下、壺・鍋の順に特徴を記述する。

a. 壺

第60図1は壺の頸下部から胴上部にかけての破片である。傾きの具合や器面の調整などから壺であることが確認できた。器面調整は外面が丁寧なナデで仕上げている。内面は剥離や摩耗の為、判然としない。色合いは外面が黒褐色、内面は淡橙色を帶びている。胎土は泥質で粗いが、焼成は良く、硬い。混入物として0.3~1mm程度の貝殻片を多量に含んでいる。他に粗い茶色の物質・微細な石英・サンゴの細片が含まれている。外器面は混入物の剥落で、アバタ状を呈する箇所が認められる。A区ヌー33第4層より出土。

b. 鍋

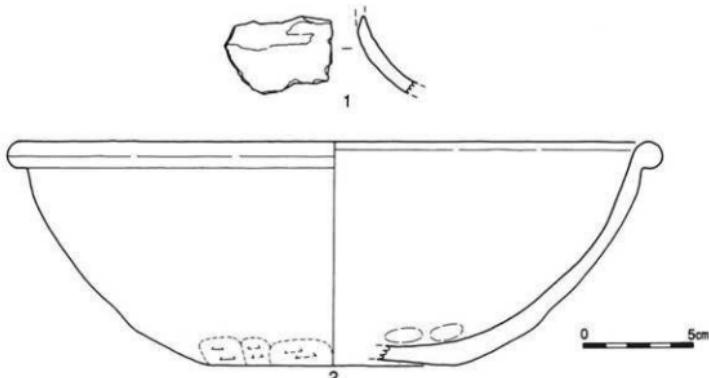
同図2は外底面及び胴下部が煤けている状況から鍋として判断した。器形は浅鉢形（サラダボール状）を呈し、外底面からの立ち上りは外側に大きく開き、丸味を持たせて口縁下端まで移行している。口縁に大きな玉線状の肥厚を造る。器面は両面ともアバタ状を呈している。調整は外面はナデが主体であるが、外底面および底面からの立ち上りの箇所に窓削りを施した後にナデを加えている。内面は外面よりもやや丁寧なナデを加えている。他に僅かながら指圧痕が認められる。器色は両面とも黄褐色を呈している。外面の胴下部及び外底面は煤けて茶褐色に変色している。胎土は泥質で細かい。焼成は良好で硬い。混入物として石灰質の粗砂粒（0.3~1mm程度）を少量含んでいる。他に粗い茶色の物質を僅かに含んでいる。復元されたサイズは口径29.9cm、底径11.2cm、高さ10.3cmを測る。A区ニー31・32第6層から出土している。

今回出土した土器が、どの時期に所属するかが重要である。ゲスク土器に所属するのかあるいは宮古や八重山で登場している沖縄産陶器の影響を受けた宮古第二式土器やバナリ焼の時期と平行するかである。

註

註1. 安里進「(特別寄稿) 沖縄陶器の影響を受けた宮古式土器について」 やちむん 第5号 やちむん会 1975年。

註2. 金武正紀「土器→無土器→土器 (八重山考古学編年試案)」 南島考古 No 14 1994年11月。



第60図 土 器

第15節 陶質土器

陶質土器の器種として鍋・火炉・水鉢・鉢（深鉢・浅鉢）・急須・小壺の6器種の他に鍋と急須の蓋が確認されている。前回、手焙（火舍）としたグループは、今回は火炉の中に含めることにした。

鍋は沖縄では「サークーナービ」として俗称されるものである。これらの陶質土器は壺屋においては「アカムネー」・「アカモノー」と総称される土器群である。^(註1)

陶質土器の主な特徴として胎土は精選され、その成形が輻輳引きで、薄く仕上げるものである。器種は明橙色・明黄色などを帯びるもののが主流である。焼成が悪く脆いものが多く、中には陶器に近い陶土で硬く焼成するものもある。今回、復元された資料は1点も得られていないが、県内の各遺跡出土のものでの特徴を記述しながら、湧田出土の資料を処理することにした。個々の特徴については、第11表a～eに示した。

a. 鍋

鍋については、全体的な傾向からすると口頭部で「く」の字状に折れ曲り、口縁に粘土紐状の把手を貼り付けていて、丸味のある底部である。最近の例では、安仁屋トゥンヤマ遺跡出土の沖縄産陶器が、陶質土器と同種であることが判明していて、安仁屋トゥンヤマ遺跡のものには三角錐状の突起を3個貼り付けて足とするものである。この鍋には三足の足がつくものと足のないものの二者が存在する可能性がある。

鍋の身は第61図1～5に図示し、鍋の蓋は第61図13・第62図16～18に図化した。

b. 火炉

火炉については基本的に壺屋古窯群で良好な資料が得られていて、島弘氏の分類概念に従じて湧田の資料を取り扱うことにする。^(註2)

島弘氏分類の火炉はI群～III群に分類されていて、II群のみa～c種の3種に細分類されている。この分類に湧田出土のものを充てることにする。各群の分類概念は、「壺屋古窯群I」(1992年)を参照されたい。

I群は第61図6に示す1点である。II群aが同図7～9に図化した3点である。II群cは同図12に示した1点である。他は把手(同図10・11)の資料と底部(同図14)である。把手資料の11は阿波根古島遺跡で出土した火炉(阿波根古島遺跡では火舍b類中に含まれているもの)で、頭部が長く、口縁を玉縁状に肥厚させるタイプの把手と同一のものである。同種の器形で同様の把手を貼り付ける例は御細工所跡からも出土している。今後この手のものをひとつの群として把握できるものとして考えたいところである。

c. 水鉢

沖縄では「ミジクブサー」と通称されていることが御細工所跡で確認されていて同一器形のものが出土している。湧田のものは第62図19・20に図示したものである。2点とも口縁部に櫛描きの波状文と丸彫りの圓線を施す。

d. 鉢

鉢としたものには、深鉢形で花鉢?の口縁とみられるものと浅鉢の口縁?とみられるものの2点である。第62図21に図化したものが花鉢?とみられるもので、口縁内面が肥厚し、その断面形態は「て」の字状の肥厚となる。同図22は浅鉢?の肥厚口縁で、口造りが21と共通した手法で実施されている。

e. 急須

急須には2種の口縁形態が確認されている。口縁形態などからI・II類に分けることにした。

・I類

I類は前回出土したタイプのもので、口縁が微弱に肥厚し、非常に短い頭部を持つ。全体的な器形は

「ハ」の字状に内傾し、胴下部が丸味を帯びるものである（同図24・25）。島弘氏分類のAタイプの範疇に所属するとみられるものであろう。

・II類

II類は、壺屋古窯群^(註6) Iや伊良波西遺跡^(註9) 出土したタイプで、壺屋古窯群の例からすると口縁の肥厚はなく、口頸部で「く」の字状に折れ、口縁をほぼ垂直（微弱に内傾するものと外側に外傾するものなどもある）に仕上げ頸部が1cm前後と長くなっているものである。（第63図36・37、第62図27・29）。島弘氏分類のBタイプに所属するものとみられるものである。

その他に把手破片（第62図26・30）やI・II類から除外される小型の急須の注ぎ口が1点得られている。（同図28）。その他に急須の蓋及び撮みの破片が^(註10)（同図31～34）4点得られている。

f. 壺

非常に薄く仕上げた薄手の小壺とみられるものが2点得られている。第63図38は口縁が僅かに外反するもので小壺とみられる。同図39は口縁が僅かに内側に内傾させている。これも小壺とみられる。

その他に橙茶色の化粧土を外面から外底に塗付した厚手の壺の底部（同図40）が1点得られている。

g. 土製品

球体状の製品が1点得られている。遊具として考えたいところであるが、最近になって当真嗣一氏の論文によると、この種の土製のものも火矢（ヒヤー）の弾丸とする説もある。

h. 小結

陶質土器の中には素地の焼成において軟質と硬質がある。軟質のものが一般的であり、軟質のものは手や指先に粉末化した素地が付着する。硬質のものは陶器質やそれに近い陶土を使用するもので、これを使用した器種は、火炉Ⅰ（第61図6）・火炉Ⅲ（同図12）・火炉底部（同図14）・鉢（第62図21・22）・急須把手（同図26）・急須Ⅱ（同図27）・急須（同図28）・鍋の蓋（同図34・35）であった。

當時、火や火種を保存する火炉に硬質のものが多い。また、煮沸用の急須や鍋にも僅かながら硬質のものが使用されている。鉢については口径が25～33cmと大きい為、軟質では、大型のものは強度の面からも破損する確率が高いものと考えられる為、必然的に硬質の陶土を使用したものと考えられるところである。

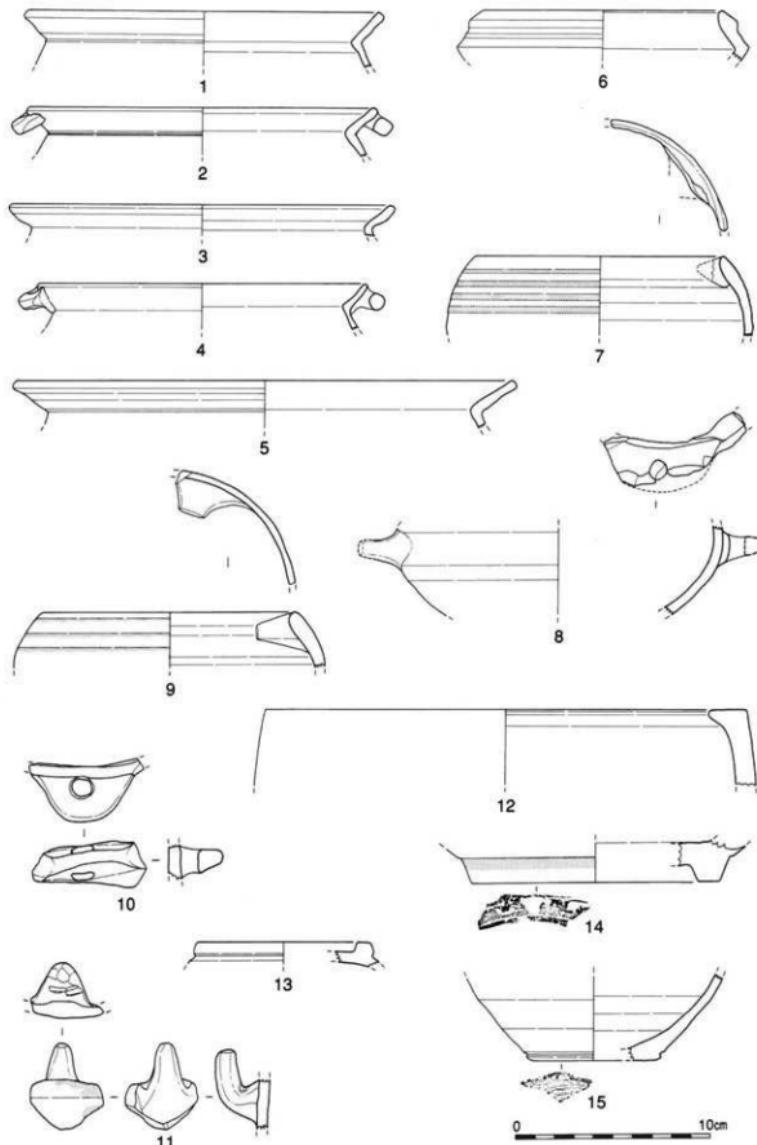
火炉の素地や焼成などについては、阿波根古島遺跡（火舎と報告）でも指摘したとおりの結果となつたが他器種でも確認されたことは意義ある発見であった。

第11表 陶質土器観察一覧

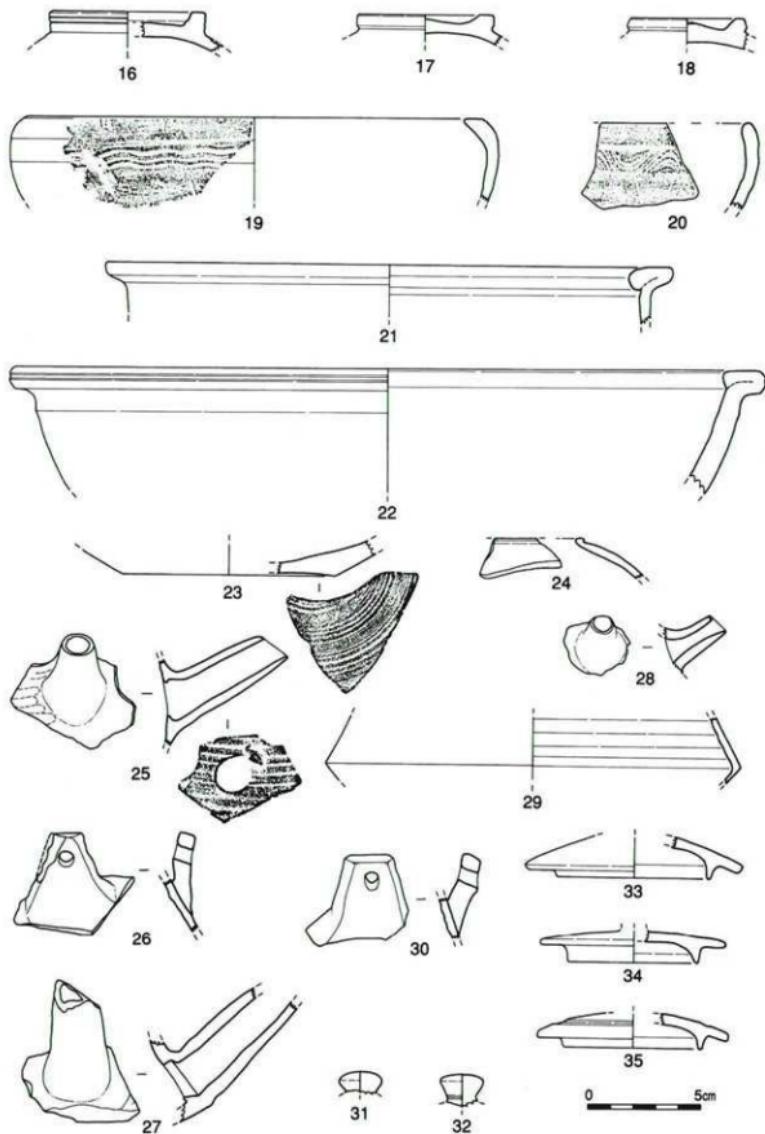
単位: cm

団・国級	番号	分類	口径(底面)	名 調 (秀)	器表調査 (外)	器表調査 (内)	泥 取 制	文 紋 等	備 考	出土地
国	1	縦	18.4 —	淡褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・B	なし	口縁部で「く」の字状に擦痕し外反する。口縁底部で側面に壓迫する。	ノ-30 第2層
	2	縦	19.0 —	明褐色	回転擦痕・回転 擦痕	同上	A・B・C	口縁に絞状把手 頭部	口縁部で「く」の字状に擦痕し外反する。口縁底部に壓迫する。頭部に取りをつけた舟形を強調する。口縁底部に壓迫する。	不明
	3	縦	19.8 —	明褐色	回転擦痕・回転 擦痕	同上	A・B・C	なし	口縁部で「く」の字状に擦痕し外反する。口縁底部に壓迫する。	ノ-30 第2層
	4	縦	17.0 —	淡褐色	回転擦痕・回転 擦痕	同上	A・B	口縁に絞状把手 頭部	口縁部で「く」の字状に擦痕し外反する。口縁底部が擦痕で膨らむ。	ノ-30 第2層
	5	縦	26.0 —	同上	回転擦痕・回転 擦痕	同上	A・B・C	なし	口縁部で「く」の字状に擦痕し外反する。外縁の口縁及び底部に擦痕を有する。	ノ-30 第2層
国	6	大切I	13.2 —	淡褐色	同上	同上	A・B	口縁に丸彫りの 頭部	口縁部で「く」の字状に擦痕し外反する。内縁する。陶器質に泥土を混ぜて使用する。	ノ-30 第2層
	7	大切II	12.8 —	明褐色	回転擦痕・ロク ロ擦痕	回転擦痕・ロク ロ擦痕・ナゲ	A・B・C	ワリ紋に白色 土材	ワリ紋に白色土材に内縁する口縁。内縁口縁に突起を貼り付けるがが繋がる。	ノ-30 第2層
	8	大切II	—	同上	回転擦痕・ロク ロ擦痕・ナゲ	回転擦痕	A・B・C	例の孔のある 丸彫りの頭部片	内縁口縁に突起を貼り付けるがが繋がる。	ノ-30 第2層
	9	大切II	13.0 —	同上	回転擦痕・ロク ロ擦痕・ナゲ	回転擦痕	A・B・C	内縁口縁に突起 孔	内縁口縁に突起を貼り付けるがが繋がる。内縁口縁に直角彫形を有する突起を施す。	ノ-29 明褐色
	10	大切II Ⅱ	—	同上	回転擦痕・ナゲ	回転擦痕	A・B・C・D	例の孔のある 丸彫りの頭部片	内縁口縁の頭部で直径1cmの孔を上方から埋入する。陶器に直角彫形を有する。頭部を削り取る。頭部に泥土を混ぜて使用する。	ノ-29 第2層
版	11	火印把手	—	淡褐色	回転擦痕・ロク ロ擦痕	ロク ロ擦痕	A・B・C・E	内縁に突起 「L」字状に折り曲げた三角彎形の突起を貼り付ける。	「L」字状に折り曲げた三角彎形の突起を貼り付ける。	ロ-32 第2層
	12	火印把手	24.8 —	明褐色	回転擦痕・回 転擦痕直	回転擦痕	A・B・C	なし	口縁部に内縁に突出する舟形。透「L」字状となる。陶器に泥土を混ぜて使用する。	ノ-29 第1層
	13	縦の裏	9.0 —	同上	回転擦痕・回転 擦痕	同上	A・B・C	両台形の把手	両台形の把手を削り出してつくる。把手表面に削りを入れる。	ノ-30 北壁
	14	鉢形	13.8 —	明褐色	回転擦痕	ロクロ擦痕	A・B・C	両手に白色土材	両台形の把手を削り出し。把手表面に泥土を混ぜて使用する。	ノ-33 第2層
	15	器種 不明 鉢形	6.8 —	明褐色	回転擦痕・回転 擦痕	回転擦痕	A・B・C	なし	足立ちの所に泥土を混ぜて入れる。外縁面に切妻の頭部がある。	サ-2-31 第2層
第	16	縦の裏	6.0 —	明褐色	回転擦痕・回 転擦痕	同上	A・B・C	両台形の把手	把手の内側は薄く、削り出した際にズレが生じ難い時に仕上げる。	ノ-30 第2層
	17	縦の裏	6.0 —	明褐色	同上	同上	A・B・C	両台形の把手	把手の内側は薄く難く削り取る。把手表面に泥土を混ぜて入れる。	ホ-31 山麓地
	18	縦の裏	5.0 —	淡褐色	同上	同上	A・B・C	両台形の把手	把手の内側は丁寧に削位に削り出す。	吉井前神水 飛龍
	19	本鉢	20.8 —	淡褐色	同上	同上	A・B・C	様様きの波打 丸彫りの頭部の頭	内縁口縁で直角を成す仕上げる。縦目三本。	サ-2-31 —
	20	本鉢	—	淡褐色	同上	同上	A・B・C	同上	内縁口縁で直角を成す仕上げる。縦目五本。	ノ-30 埋乱
国	21	縦	25.0 —	淡褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・B・C・G	なし	口縁部で「く」の字状に擦痕で内縁に舟形である。口縁部に舟形である。	ホ-33 山麓地
	22	縦	33.8 —	淡褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・B・H	口縁に丸彫りの 頭部	口縁部で「く」の字状に擦痕で内縁に舟形である。舟形である。	ホ-31 山麓地
	23	横斜面帯	11.4	淡褐色	頭状状頭整 回転擦痕	頭状状頭整	A・B・C	なし	外縁に大きめ直角的に擴く底部。	ノ-30 第2層
	24	急瘤I	—	淡褐色	回転擦痕	ロクロ擦痕	A・B	なし	腹部で内縁に丸彫りをもせる。口縁は削り出して、把手をつくる。	ホ-31 第3層
	25	急瘤II	—	明褐色	ナゲ仕上げ	同上	A・B・C	なし	丸彫りのある頭部の直ぎ。注口は先端で1cmを測る。内縁に頭部1.5cmと1.0cmを2つ。	ホ-31 第2層
国	26	急瘤把手	—	淡褐色	ナゲ・透彫り	同上	A・B・E	直角彫形の把手	把手を削り出す。把手のサイズは直角1.5cmを測る。陶器質の把手を削り出す。	ホ-32 第2層
	27	急瘤II	—	同上	同上	同上	A・B	なし	「く」の字状に削り出された直角の把手。注口は先端で1.5cmを測る。内縁に頭部1.5cmと1.0cmを2つ。	ホ-28 明褐色尾
	28	急瘤III	—	淡褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・C	なし	注口は削り出された直角の把手。注口は先端で1.5cmを測る。内縁に頭部1.5cmと1.0cmを2つ。	ホ-22 第1層
	29	急瘤II柄輪	—	明褐色	ロクロ擦痕	ロクロ擦痕	A・B・C	なし	「く」の字状に削り出された直角の把手。注口は先端で1.5cmを測る。内縁に頭部1.5cmと1.0cmを2つ。	ホ-20 明褐色土層
	30	急瘤把手	—	同上	ナゲ・透彫り	同上	A・B・C	横彫形の把手	横彫形の把手(1.6~7cm)を外縁から穿っている。	ノ-24 明褐色
版	31	縦の裏	—	淡褐色	回転擦痕	—	A・B	なし	横彫形の把手。直角は1.0cmを測る。	表模
	32	縦の裏	—	淡褐色と淡灰色	回転擦痕 回転擦痕	—	A・B・C	なし	横彫形の把手。直角は1.0cmを測る。	表模
	33	縦	19.0% —	明褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・B・C	なし	丸彫りのある縦甲。内縁スペリ止めの突起の外側は丸彫りを加える。	ノ-28 明褐色
	34	縦	19.0% —	明褐色	同上	同上	A	なし	縦甲やセリ止めに斜めに成形。内縁のスペリ止めの突起の外側に削りを入れる。陶器質は土色で焼成する。焼土仕上げ。	ノ-30 第2層
	35	縦	19.0% —	淡褐色	同上	同上	A・C	縦甲の丸彫り・縦 彫り	やや丸味のない縦甲。陶器質は土色で焼成する。焼土仕上げ。	ノ-32 第2層
国	36	急瘤II	9.6 —	淡褐色	同上	同上	A・B・C	なし	口縁で内縁にゆるく削り曲げて、口縁をやや内縁に内縁させる。	表模
	37	急瘤II 堅版	—	明褐色	同上	回転擦痕	A・B・C	なし	頭部に削りを入れる。口縁底でゆるく削り曲げた後に實部をゆるく削り戻す。	ホ-32 第2層
	38	垂	—	明褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・B・C	なし	把手の外観偏差。	ホ-32 第1層
	39	垂	—	淡褐色	回転擦痕	回転擦痕	A・B・C	なし	把手の歪み。	ホ-31 —
	40	垂底堅版	9.6 —	橙褐色	回転擦痕	同上	A・B	なし	立ち上がりがやや内縁に傾り欠陥に直角的である。外縁及び内縁に褐色化粧土を貼付。	ハ-28 系褐色化粧
版	41	垂底堅版	—	淡褐色	ナゲ	ナゲ	A・B・C	なし	底径が1.1~1.3cmを測る。	表模?

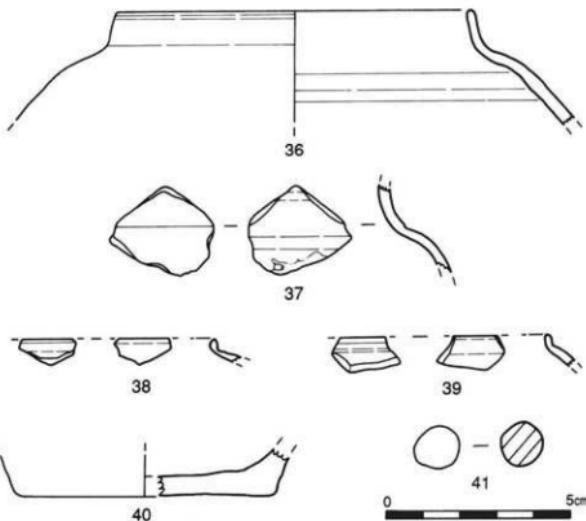
注: 混入物は多い難に記した。混入物のAは苦桙(細胞化)、Bは赤色物質(細胞)、Cは石灰質微粒。Dは小形の巻貝、Eは微細な貝片、Gは白色の構造陶土、Hは粗い石英。



第61図 陶質土器 1 (鍋・火炉)



第62図 陶質土器2（鍋の蓋・水鉢・急須・蓋・撮）



第63図 陶質土器3（急須・壺・球状製品）

註

- 註1. 宮城萬正 「陶器、第三章 生業 那覇市史資料編 那覇の風俗 第2巻中の7」 1979年。
- 註2. 島袋 洋 「安仁屋トゥンヤマ遺跡」 沖縄県教育委員会 1992年。
- 註3. 島 弘はか 「鹿屋古窯群Ⅰ」 那覇市教育委員会 1992年。P118～P119参照。
- 註4. 金武亀信はか 「阿波根古島遺跡」 沖縄県教育委員会 1990年。
- 註5. 金武正紀・島 弘はか 「御細工所跡」 那覇市教育委員会 1991年。
- 註6. 註5に同じ。
- 註7. 註3に同じ。
- 註8. 註3に同じ。
- 註9. 島 弘・大田宏好はか 「伊良波西遺跡」 犬見城村教育委員会 1986年。
- 註10. 註3に同じ。P117～P118を参照。
- 註11. 当真嗣一 「火矢について」 『南島考古』第14号（学会創立25周年記念特集号） 1994年。
- 註12. 註4に同じ。

第16節 瓦質土器

瓦質土器で確認された器種は、鉢（植木鉢、こね鉢、摺鉢、深鉢、浅鉢）、壺、鍋、水盤、大皿、碗、火炉、竈、香炉、茶釜の10器種であった。その他に置き物や用途不明のものが得られている。また、瓦質土器と陶質土器の中間タイプが今回確認された。このタイプの器種は、急須・鍔釜・皿の3器種であった。これについても本項で取り扱うことにする。個々の特徴については、観察表に呈示した。

a. 鉢

① 植木鉢

植木鉢については、文様構成などから a ~ d 種の4種類に分けた。

a 種…口縁はほぼ垂直となり、内面口縁の肥厚は微弱である。口縁外面に2条一組みの凸帯と空間をあけて凸帯を1条施すものである。（第64図1）。

b 種…口縁内面が僅かに肥厚し、口縁の外面に凸帯を2条施すが、凸帯間を窓で削って調整している。凸帯直下に蓮花文と菊葉文を施す。（同図2・6）。

c 種…口縁は胴部から丸味をもった状態で移行する為、口縁が内側する。内面口縁の肥厚はない。口縁端部と胴上部に凸帯を各1条ずつ廻らし、凸帯間に菊花文と菊葉文を施す。（同図3）。

d 種…底面からの立ち上りはやや内側に閉じ気味に直線的に胴下部まで移行し、胴中央で僅かに丸味を出して口縁まで移行する。口縁は内側へ強く内傾させる為、内面口縁が大きく突出し、肥厚する。凸帯は3条施されていて、2条一組みのものが口縁に廻らされ、1条は胴下部に廻らされている。両凸帯間を埋める為に、菊花文や菊葉文を施す。（同図4・5）。

② こね鉢

こね鉢は口縁の形態などから a ~ d 種の4種類に分類した。

a 種…口縁が垂直に近い状態で成形されているもの。（第65図7・8）。

b 種…口縁が内側に軽く内傾するものと微弱に内傾するものがある。（同図9・10）。

c 種…口縁が内側に一端、内傾させた後に口縁を僅に外反させるもので、口唇外端が尖る。（同図11）。

d 種…口縁の成形は a 種と同じように垂直に近い形態であるが、内面口縁が僅かながら突出（肥厚）する点で異なっている。（同図12）。

③ 摺鉢

摺鉢もこね鉢と同様に口造りなどで、a ~ e 種の5種類に分けた。

a 種…口縁を微弱に内傾させるもの。（第66図13・14）。

b 種…口縁の傾きは a 種と類似するが、口縁内面が突出（肥厚）するものである。（同図15）。

c 種…口縁の傾きは a 種と類似するが、口縁下端が胴部側からの窓削りで調整される為、同部位の断面は鋭く尖った三角形状となるもの。（同図16）。

d 種…口縁が内側に軽く内傾させるものである。口唇内端を尖らせるものも含まれる。（同図17・19）。

e 種…口縁の造りは c 種とは異なり、口縁側からの削りで三角形状の尖りを造る。口縁端部で丸味を持たせているもの。（同図18）。

その他に摺鉢の底部片が2点（同図20・21）得られているが、同図20は例外的に底面からの立ち上りが内側に強く縮り垂直に近い状態で立ち上っているものである。

④ 深鉢

深鉢としたものは第67図32・33・36に図示した3点で、32は胴部がやや開き気味に口縁近くまで移行

させた後に口縁を軽く外反させている。33は胴部で丸味を持たせた後に頭部で軽く縮めてから口縁を微弱に外反させている。36は肩部で「く」の字状に屈曲させているが、稜が潰れて丸味を帯びる。口縁はきつく折って外反させている。

⑤ 浅鉢

浅鉢は器形や口縁形態などから以下に記すように a ~ i 種の 9 種に分類した。

- a 種…口縁の断面が「く」の字状に折れ、口縁が大きく外側に倒れるもの。（第67図34）。
- b 種…口縁はゆるく外反し、肩部が丸味をもつもの。（同図35）。
- c 種…底面から直線的に開きながら肩部まで移行し、肩部に明瞭な稜をつくる。肩部から頭部では一端内側に縮めてから口縁を外反させている。口縁内面にも肥厚を造るもの。（同図37）。
- d 種…胴部から丸味を持たせて肩部まで移行させ、大きく内彎させた後に口縁を内傾気味につくるもの。（同図38）。
- e 種…底面からやや内側に閉じ気味に丸味を持たせて口縁近くまで移行させた後に口縁をきつく内側に内傾させている。口唇は丸味を持たせて成形する。口縁と胴部との区別は圓線で行なわれているもの。（第68図39）。
- f 種…立ち上りの形状は e 種と類似するがやや丸味が欠けていて、口縁の折れも e 種より微弱である。口縁と胴部との区別を圓線を施すことによって行なわれている。口唇を平坦に仕上げる点で e 種と異なっている。（同図41）。
- g 種…底面からの立ち上りは、口縁まで直線的に移行させている。口縁に幅広の圓線を施して、口縁を強調しているもの。（同図42）。
- h 種…底面から開き気味に口縁まで移行させるものと胴中央で内側に閉じるものがある。両者は口縁を稜花状に仕上げる点で共通している。（同図43・44）。
- i 種…口縁に縄目状凸帯と圓線を施し、口縁を強調するもの。（同図45）。

b. 壺

壺は復元可能な資料がない為、口縁形態などで分類した。a + b の 2 種に分けた。

- a 種…口縁がゆるく外反し、口頭部の屈曲はゆるやかである。（第67図22~25）。
- b 種…口頭部できつく屈曲させる為、口縁が大きく外傾する。（同図26~28）。

有文の胴部片（同図29）が 1 点得られていたので、これを図化した。

c. 鍋

鍋の口縁破片が 2 点得られている。第67図30は口縁が外側に開き外反するものである。同図31は胴部から垂直に頭部まで移行し、口縁を軽く外傾させている。口縁内面が浅く窪む。

d. 水盤

水盤としたものは第68図46と50に図化したものである。46は口縁に縄目文と圓線を施している。50は底面からの立ち上りに丸味を持たせて開き気味に口縁まで移行させている。口縁内面が肥厚し、口唇に陽圓線を施している。

e. 大皿

大皿としたものは、高さが 4.8~6.6cm、口径が 20.8~25cm、底径が 15.6~20cm の範囲内に収まるものを

大皿とした。器形は底面から直線的に口縁まで移行するもの（同図48・49）や底面からの立ち上りで一端、くびれるもの（同図47）の2種類が存在する。

f. 碗

碗には大きくみて、口縁が内彎するもの（第68図40・51）と口縁が直口するもの（同図52）の2種類が存在する。口縁形態から前者は内彎口縁碗、後者を直口口縁碗として分類できる。その他に高台のある底部片が得られている。（第70図69・70）。

g. 火炉

火炉として取り扱ったものは外面に有孔の把手を貼り付けるものである。中には内面にも身を受ける為の鉢状の突起や三角形状の突起をもつものもある。（第69図53・54・57）。

h. 爐

円筒状の器形を保持するもので、口唇の一端を三日月状に突出させている。（同図55）。

i. 竈

竈として判断したものは、焚口の内面が煤けている点や焚口の縁辺に粘土を貼り付けて縁どりを行なっているなどの点からである。（同図56）。

j. 香炉

香炉には三足香炉と方形状の香炉が得られている。三足香炉は、第69図58・59と第70図68に図示したものである。方形状の香炉は第69図60～63に示す4点の底部片と第70図75に示す口縁である。

k. 茶釜

茶釜の蓋と胴部片が得られている。茶釜の蓋（第70図64）としたものは、蓋中央に孔を穿っているものである。胴部片は2点得られていて鉢を保持する点が特徴である。茶釜の蓋と身は前回も出土している。

l. 蓋

壺などの蓋とみられるものが1点得られている。落し蓋である。（第70図65）。

m. 用途不明

用途が判然とせず不明なものが3点得られている。（第70図71・72・81）。

n. 把手・撮

把手や撮の破片が3点得られている。把手（第70図73）は大型のもので、炉などのものかもしれない。撮（同図74）も大型であり、壺などの蓋の撮かもしれない。もう1点は棒状の把手？（同図77）とみられるものであるがその器種は、判然としない。

o. 置き物

手捏や型に入れて製作されたものである。獅子の耳（第70図76）と足（同図77）の破片が2点得られ

ている。型物とみられるものは2点（同図79・80）得られているが、現段階ではどのような動物になるかは想像がつかない。

P. 陶質土器との中間タイプ

器形の形態や形状が、陶質土器や瓦質土器にも認められないものや、器形が瓦質土器で、胎土は陶質土器にみられるものなどを中間タイプとした。確認された器種は急須（第70図82・83）、銚釜（同図84）、皿（同図85）の3器種であった。これら3点は輪轉成形であり、急須と銚釜は焼成も良く硬い。皿のみ焼成が悪く脆い。皿は指頭に粉末が付着し、陶質土器の胎土と一致している。

9. 小 結

前回の報告では、瓦質土器については、各器種の分類を実施する時間的な余裕もない状況であったが、今回もまったく余裕がない状態にある。前回の行政棟からは器種として、甕・鉢（植木鉢、こね鉢、水鉢、浅鉢、摺鉢）・壺（長頸壺、短頸壺）・炉（手焙、火舎を含む）・香炉・碗・杯・皿（灯明皿）・銚釜・漏斗の10器種が確認されていたが、議会棟の発掘調査では、鍋・竈の2器種が確認された。前回、報告した器種の中で鉢の水鉢及び浅鉢（洗）は、今回の分類では浅鉢の中に含められるグループである。浅鉢（盤）は今回、水盤としたものに属する。また、小型の浅鉢の一部からは大皿として仮に分類したものもある。とにかく、これらについては、湧田の最終的な報告となる警察棟で具体的に行なわれていくものであろう。

今回、注目されたものを1・2点記述してまとめとする。最初に植木鉢の中でa種（凸帯文のみで構成）とc・d種（凸帯文と菊花文+菊葉文の構成）が新しく確認された。従来のタイプはb種のみである。前回の報告では、蓮花文と唐草文としたが、今回、蓮花文と菊葉文とした。これは、菊花文と菊葉文を施したc・d種の葉文とb種の葉文が類似していることから唐草文を菊葉文とした。これらの状況からb種の前段階のタイプとしてa・c・d種の3タイプが先行することが、今のところ予想出来る（以下、菊花文+菊葉文を菊花文とし、蓮花文+菊葉文を蓮花文とする）。つまり菊花文から蓮花文の流れである。また、植木鉢の菊花文や蓮花文は、円筒状の陶土に文様を彫り込んで、これを外器面に押しつけながら円筒文を転して施していることが明らかとなっている。この手法を仮に「円筒印文」と称することも可能であろう。

湧田古窯からは萬曆33年（1605年）^{註1)}の銘入り瓦質土器（浅鉢）^{註2)}が出土していて、瓦質土器は17世紀初頭まで確實に存在することは明らかとなっていることを付記する。

註

註1. 沖縄県教育委員会 「湧田古窯（I）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－」 1993年。

註2. 発掘担当者のひとりである島袋 洋から教示を戴いた。

註3. メソポタミアのウルク期（紀元前3000頃）になって円筒印章が始まるが、はじめはスタンプ形印章であったようであり、原始農耕社会において発明された印章は紀元前5000年紀の後半に遡る。農耕生活による余剰物質の増大、交易の発達などが、印章の発生をうながしたものとして考えられている（西谷真治『図解考古学辞典』1980年）。ここでは円筒印章とは使用せず、円筒印文と假称したが、将来、類例資料が増加すれば、湧田窯（生産者集団）の印章として把握できるものとして考えられる。把握できれば湧田窯の円筒印章（生産者集団）として考えたいところである。

註4. 註1と同じ。（P138～P141を参照）

第12表 a 瓦質土器観察一覧

単位: cm

団・国版	番号	分類	口径 底径 厚さ	色 調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	底 和 斜	文様等	備 考	出土地点
第 64 國 ・ 國 版	1	楕木鉢a	— — —	暗灰色	回転擦痕 ロクロ痕	回転擦痕 ロクロ痕	A・B・D	波状凸唇	口縁端部の波状凸唇のみ口唇部に認められ、他の部分は丸打付。	A区ハ-32
	2	楕木鉢b	34.4 — —	淡褐色	回転擦痕 回転擦削り	同上	A・C	波状凸唇・葉 花文・斬妻文	凸唇部に斬妻文を入れる。口縁端部の波状凸唇は口唇部外縁を回転擦削りで削り出して成形する。下方の波状外縁も削りだして成形する。	A区エ-33 第3層
	3	楕木鉢c	31.2 — —	明灰色	回転擦痕 荒削り	ロクロ痕	A・B・C	波状凸唇・葉 花文・斬妻文	ロクロ痕は口縁下部よりつまみ出して成形する。	A区ヒ-31 第3層下部
	4	楕木鉢d	35.4 16.2 19.8	淡灰色	回転擦痕 回転擦削り	回転擦痕・ロ クロ痕・ナデ	A・B・C	波状凸唇・葉 花文・斬妻文	ロクロ痕部をつまみ出して凸唇を成形する。	A区ヒ-31 第3層地土混じり
	5	楕木鉢d	37.6 22.6 18.1	明橙色	回転擦痕・ナ デ・荒削り	回転擦痕・粗 痕	A・C	波状凸唇・葉 花文・斬妻文	ロクロ痕部をつまみ出して凸唇を成形する。文様部下端の波状凸唇の下端は波がナデ消されている。	A区ノ-31 第3層下部 の塊
	6	楕木鉢 底部b	— 50.3	暗灰色	同上	回転擦痕・ロ クロ痕・ナデ ・指圧	A・B・C	波状凸唇・葉 花文・斬妻文	外底面は荒削りと荒ナデで調整する。	A区ヒ-31 第3層地土混 じり
第 65 國 ・ 國 版	7	こね鉢a	— — —	淡茶色	回転擦痕・ナ デ・指圧・荒 削り	回転擦痕・指 圧・ロクロ痕	A・C		ロクロ痕が垂直に立ち肩部で「く」の字状に押れる。	B区ノ-29
	8	こね鉢a	28.0 — —	淡灰色	回転擦痕 回転擦削り	同上	A・C・D		ロクロ痕がほぼ垂直に立ち肩部で「く」の字状に屈曲する。	B区ノ-29 明灰色土
	9	こね鉢b	36.0 17.0 12.3	明灰色	回転擦痕・ナ デ・ロクロ痕	回転擦痕・ナ デ・ロクロ痕	A・C・B		ロクロ痕を内側へ微弱に傾ける。外底面は荒削りとナデを施す。また、底部で「木」とも判断できる。文様を基く。	A区ノ-31 波状擦痕 土壤じり
	10	こね鉢b	29.2 18.0 12.2	淡灰色	ナデ・荒削り ・萬ナデ	ナデ・指圧 ・萬ナデ	A・C・D		ロクロ痕が内側に軽く内傾させる。ロクロ痕の両面に萬ナデを施す。外底面は複数の荒削りを施す。	不明
	11	こね鉢c	23.2 — —	灰褐色	回転擦痕・萬 ナデ・ナデ	ナデ・萬ナデ ・回転擦痕	A・C・D	内面に丸削りの擦痕	ロクロ痕を失らす。内面ロクロ痕に擦痕とみられるものを施すが判然としない。	A区ヒ-31 ・32層の層
	12	こね鉢d	34.2 16.0	淡褐色	回転擦痕・ナ デ	ナデ	A・C		ロクロ痕が内側へ微弱に傾むける。仕上げは丁寧である。外底面は荒削りを「木」に施し、平均に仕上げている。	A区ヒ-31 第3層地土混 じり
第 66 國 ・ 國 版	13	壺鉢a	30.2 14.8 13.5	淡灰色ー 淡黄灰色	ナデ・萬ナデ	回転擦痕・ナ デ	A・C・D・B	6条一組みの 擦り目	ロクロ痕が内側に内傾する。仕上げは丁寧である。仕上げの内面に「己」のヘラ記号を施す。	A区キ-31 第3層下部
	14	壺鉢a	23.5 13.8 9.1	灰褐色	ナデ	ナデ・指圧	A・C・B	10条一組みの 擦り目	ロクロ痕が内側に内傾する。外底面は荒削りで平面に仕上げているが、両面は摩耗する。	A区ヘ-32 複数
	15	壺鉢b	29.8 17.0 12.2	淡灰色	ナデ・萬削り	ナデ	A・C	11条一組みの 擦り目	ロクロ痕が内側に内傾する。外底面は荒削りで平底に仕上げているが、両面は摩耗している。	A区ネ-31 第3層
	16	壺鉢c	23.9 13.6 11.6	淡灰色	同上	ナデ・萬削り	A・C	6条一組みの 擦り目	ロクロ痕直下に荒削りを入れて削り出して折れを強調する。外底面は摩耗する。	B区ニ-30 第3層
	17	壺鉢d	30.0 16.6 10.9	褐色	同上	ナデ・回転擦 痕	C・A	7条一組みの 擦り目	ロクロ痕が内側し、表面が外側に強く突出する。外底面は荒削りを施すが、摩耗傾向にある。	A区ネ-32 複数
	18	壺鉢e	28.2 — —	明灰色	同上	ナデ・萬削り	C・B	4条一組みの 擦り目	ロクロ痕は身から削り出して成形されている。ロクロ痕部は丸打付をさせている。	A区ノ-32 第3層地土混 じり
第 67 國 ・ 國 版	19	壺鉢d	27.6 15.0 11.4	淡褐色		ナデ	C・D・B	5条一組みの 擦り目と2条 一組みの擦り 目	肩上部に荒削りを入れて斜面を突出させている。ロクロ痕部は斜面に取り入れて仕上げる。ロクロ痕が尖る。	A区ナ-32 第3層下部
	20	壺鉢	19.0 14.1	淡褐色	ナデ・萬削り ・擦痕	擦痕・ナデ	C・B	9条一組みの 擦り目	底面から身のうちとは地と比較して内側へ強く擦り重ねに凹む形態でそのままの擦痕直下に移行する。木目跡の形態となる。内面に輪郭線が認められる。外底面は荒削りを施す。	A区ヒ-32 第4層地土混 じり

注: 浸入物は多い順に記した。浸入物のAは雲母(細片化)、Bは石英、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石灰質粒、Eはモミガラ、Fは黒色粘土、Gは白色の陶土。

第12表 b 瓦質土器観察一覧

単位: cm

国・國版	番号	分類	口径 直径 高さ 等高 等高	色 調 (外)	器面調査 (外)	器面調査 (内)	直 和 斜	文様等	備 考	出土地点
基 66 国版 64	21	壺鉢形	— 15.6	灰褐色	ナゲ・裏削り	ナゲ	C・B	6条一組みの 櫛目	内底面の櫛目は格子状に施す。	A区ホ-32 第6層
	22	壺 a	24.1 — —	明褐色	同上。	ナゲ・直圧	A・C・B・D		口縁がゆるく外反せる。口縁部を直し削り落して口 唇を尖らせている。	A区ニ-32 第6層
	23	壺 a	18.0	淡褐色	ナゲ	ナゲ	A-C-D		口縁を大きく外反させる。口唇は直削りで平坦に調整 するが、削りが徹底していない。	A区ニ-32 第6層
	24	壺 a	11.0 —	淡灰褐色	圓軸彫痕	圓軸彫痕	C-D		口縁をゆるく外反せる。丁寧な仕上げである。口唇 を尖らせているが削りではなくまみ出しである。	B区ワ-29 第6層
	25	壺 a	12.4 — —	淡灰紫色	同上	不明 (田軸彫痕?)	C		胎生が精選されている。口縁が軽く外反する。	A区ナ-31 — 桃土洗じり
	26	壺 b	16.4	明褐色	ナゲ	ナゲ・裏削り	C-A-D		口縁の外反はきつい。頭部に「メ」と「ノ」の縦合 わせのヘラ記号がみられるものが施されている。	A区ナニ-31 第5層
	27	壺 b	14.8 —	灰褐色	ナゲ	ナゲ	A-C	6条一組みの 縦線の波状紋	口縁の外反はきつい。口縁部の屈曲は「く」の字状と なる。内底に輪郭線が認められる。	A区ナ-33 第3層下部
	28	壺 b	10.6 —	淡灰褐色	ナゲ・裏削り	ナゲ	C-A		口縁の外反はきつい。口頭部の屈曲が最もきつく屈狀 となる。	A区ナ-31 第2層
	29	壺側部	— —	明褐色	ナゲ	ナゲ・ 圓軸彫痕	A-D-G	丸削りの圓軸 はが	模様不詳のものを圓軸直上に施す。焼成は比較的に良 く、陶器質の仕上がり、質問面は白色で開口部が磁状に入 る。最大腹径16.8cm、輪積は低。	A区ニ-34 第2層
	30	鍋	29.0 —	明黄色— 茶褐色	無痕	ナゲ・直圧	A-C		大きめ外側に開く、外反口縁である。	A区ノ-34 第3層砂利層
國 版	31	鍋	24.0 —	黒褐色	ナゲ・無痕 削り	同上	A-C		口縁内面が浅く窪む。	A区ノ-33 第5層ニセ 土洗じり
	32	深鉢	24.6 —	灰褐色	同上	ナゲ・深痕	A-C-D		腹下部に削りを入れて底ませた後にナゲを加えている。 腹下部からやや開き気味に口縁まで立ち上ってくる。 口縁が僅かに外反する。底盤は丸味が考えられる。	A区ホ-33 — — 第3層
	33	深鉢	19.4 —	淡灰褐色	ナゲ・無痕	同上	C-A		口縁が僅かに外反する。頭部は丸味を帯びている。頭 部に削りが付着する。	A区ホ-31 第3層
	34	浅鉢 a	— —	明茶色	ナゲ・裏削り	ナゲ	A-C-D		外側する浅鉢で口縁が「く」の字状に屈曲する。口頭 部に削りを入れる。	B区ワ-27 第3層
	35	浅鉢 b	— —	明褐色	ナゲ	同上	C-A		口縁が外反し、肩下部は丸味を持つ。	A区ナ-32 第3層下部
	36	深鉢	32.0 —	灰茶色—褐色	ナゲ・裏削り	同上	C-B-D	口唇に圓縫	口縁よりも脇の張る深鉢。胴上部で33.8cmを測る。	A区ニ-34 第3層
	37	浅鉢 c	27.6 22.0 9.4	明茶色	ナゲ・ 圓軸彫痕	圓軸彫痕	A-C		口縁よりも脇の張る浅鉢。外底面は圓削りを加えてい る。	A区ホ-31 桃土洗じり
	38	浅鉢 d	20.0 —	淡灰褐色	圓軸彫痕	同上	C-D		大きめ内側で丸味を出す浅鉢である。口縁部に浅 いみみを入れて、口縁と質問を区別する。口縁はやや 内側気味である。	A区ナ-33 第3層
	39	浅鉢 e	26.3 22.6 8.8	明灰褐色	圓軸彫削り ナゲ?	ナゲ	C-D-B	口縁に丸削り 圓縫	口縁が内側に内側する為、内底面が肥厚する。外底 面は圓削り。	A区ホ-31 第2層
	40	瓶 (内側口縁)	18.5 14.6 10.4	淡灰褐色	裏削り・ナゲ	ナゲ・直圧	C-A		底面からは直面に立ち上り一端くびれさせて、胴下 部から外側にやや開き気味に丸味を持せて胴上部へ移 行する。口縁は丸味を持てて内側を施す。	A区ノ-31 深底圓縫 土洗じり
國 版	41	浅鉢 f	23.8 21.0 7.8	明褐色	ナゲ・圓軸 彫痕	ナゲ	C-B	丸削りの圓縫	底面から内側に開き気味に立ち上り、そのまま 底面に開き気味でそのままで丸味を持てて口縁までそ のまま削りを施す為、口縁が僅かに内側する。外底面 は削りが丁寧に施された後にナゲで調節する。	B区ワ-21 複雜易筋 色泥じり
	42	浅鉢 g	29.8 23.0 12.5	明灰褐色	同上	同上	C-B	幅広の圓縫	底面から内側に開き気味に立ち上り、そのまま 底面近くまで移行する。口縁を意識して幅広の圓縫 を施す。外底面は削りを施した後にナゲで施す。	A区ニ-34 第6層

注: 混入物は多い順に記した。混入物のAは雲母(細片化)、Bは石英、Cは茶色、灰褐色の物質、Dは石灰質砂鉄、Eはモミガラ、Fは黒色鉱物、Gは白色の陶土。

第12表 c 瓦質土器観察一覧

単位: cm

団・団版	番号	分類	口径 底径 高さ	色 調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	混和割	文様等	備考	出土地点
第68団版	43	浅鉢 b	27.98 — —	淡灰色	ナデ・裏削り ・指圧	ナデ・面圧	C・B	口縁を棱花状 に仕上げる	唇部は透「ハ」の字状に開くが、側下部を削りで屈曲 させている。口唇の平面部は波状となる。	A区ヒ-31 第3層下端土 塊じり
	44	浅鉢 b	24.6-26.4 18.4 8.7	明灰色	同上	ナデ・面圧 ・裏削り	C・B	口縁を棱花状 に仕上げる	唇部は透「ハ」の字状に開くが、側下部を削りで屈曲 させている。外底面は削りで平坦となるが摩耗している。	A区ヒ-31 第4層焼土塊 じり
	45	浅鉢 i	29.8 21.4 8.0	淡黄灰色	ナデ・裏削り ・裏削り	擦板	C・B	楕円状凸部と 丸形リム	唇部は透「ハ」の字状に開き頭上部で僅かに丸味をも たせている。口唇の純内文は口縁部をつまみ出して 凸部をつくる。外底面は削りで平坦化させている。	B区ノ-30 燒土塊じり
	46	水盤	30.8 28.4 5.0	淡灰色	ナデ・裏削り	ナデ	C・B	純目文と丸形 リムの連続	底面から脇部までは内側に稍凹味で僅かに丸味を持 たせている。外底面は摩耗するが、削りを入れた様で ある。	A区ニ-31 第3層
	47	大皿	24.8 19.0 4.8	淡灰色	同上	ナデ	C・B		底面からの立ち上りの幾面に削りを入れてくびきさせ ている。外底面を丁寧に平坦に仕上げている。	A区ホ-33 壁の壁面
	48	大皿	20.8 15.6 4.8	淡黄色	ナデ・裏削り ・擦板	ナデ	C・B		底面からの立ち上りは内側に稍凹味で直線的であり、 そのままくねくねに移行する。外底面は裏削りを施し てナデを加えるが、ナデも薄である。	A区ヒ-31 第3層土塊 じり
	49	大皿	24.8 19.6 6.5	淡橙色	ナデ・裏削り	ナデ	E・D・B		底面から立ち上りは内側に稍凹味で直線的であり、 そのままくねくねに移行する。外底面は裏削りを施し てナデを加えるが、ナデも薄である。	A区ヒ-34 第2層
	50	水盤	33.0 25.8 5.3	灰褐色	ナデ	ナデ	C・D	口縁に陽撫觸	底面から立ち上りが僅かに丸味を持って口縁まで移行 する。口縁内面が内側に突出する。	A区エ-22 燒土塊下端地 土塊じり
	51	瓶 (内管口付)	13.6 — —	淡灰色	ナデ	ナデ	C・D		口縁部で軽く削れ曲る。口縁を内側に僅かに内傾させ る。	A区ワ-31 瓶底
	52	瓶 (直口付)	13.0 10.0 5.2	灰褐色	ナデ	ナデ	C・D・B		僅かにくびれの認められる瓶で、内側に稍凹味で直 線的な器形。輪摺り痕が認められる。	第2層
第69団版	53	火炉	27.3 16.0 10.5	明褐色	ナデ・裏削り ・指圧	ナデ	C・B	有孔の把手	底面から内側へ斜き勾矧(直線的)に胴中央部まで移行した後 に内側へ直線的に横に斜めで移行する。把手の孔のサイズは直径 1.2cm、厚さ0.7mmで標準的である。	A区ワ-32 第2層
	54	火炉	21.6 — —	灰褐色	ナデ・裏削り	ナデ	C・D	有孔の把手	口縁内面に形状の弱い透った後に西面外縁を深く抉 り、その後の部分に口縁を貼り付けている。口縁は不 規則な丸孔を3つと下から重ねている。	不明
	55	炉	24.8 — —	灰色	同上	ナデ・裏削り	C・D・B		円筒形略の印で口唇の一部が三日月状に突出させて いる。	A区ホ-31 瓦中
	56	竈	— — —	明褐色	ナデ	ナデ	C・A		竈の口部の破片とみられ、焚き口の周辺は粘土を貼り つけて継ぐ。天井が僅かに残っている。焚口の内面 が僅かに残る。	A区ホ-31 地盤底瓦
	57	火炉	— — —	明灰色-一層 —	ナデ・裏ナデ ・削り	ナデ・面圧・ 削り	C・B	貼り付け脚	内底に1cm程度、あく解り取った後に直角三角形容の突 起を貼り付けている。右側面は抉り(口縁から38.5mm の距離)9mmの孔を3つと下から重ねている。	A区エ-33 壁の壁
	58	香炉	16.0 7.2	淡灰色	ナデ・裏削り	ナデ・面圧	C・A	足を貼り付け る	底面からは直線的にやや外傾しながら口縁まで移行 する。三角形容の足がある。	B区ハ-30 -31
	59	香炉	11.2 9.8 8.0	淡褐色	ナデ	裏削り	C・D・B	足を貼り付け る	底面からは直線的にやや外傾しながら口縁まで移行 する。内底に1cm程度、あく解り取った後に直角三角形容の突 起を貼り付けている。	A区エ-33 トレンシナ 青白地
	60	香炉	— — —	灰褐色	ナデ・裏削り	ナデ	C・D・B+A		外底面及び底面は丁寧に仕上げ。底面から垂直に立ち上 るが、底面は裏削りで平坦に仕上げる。	A区エ-34 青白地 (茶褐色混 じり)
	61	香炉	— — 4.4	淡灰色	同上	剥離の為不明	C・B・A		外底面は複数の面とナデで調整。外面は裏削りとナデ で丁寧に仕上げる面と雖に仕上げる面が混在する。	B区ノ-29
	62	香炉	— — —	灰褐色	同上	ナデ	C・B・A		底面の縁辺に削りを入れて蓋をつくる。	不明
	63	香炉	— — —	灰褐色	同上	ナデ・裏削り	C・B		底面からやや外側に開き気味に直線的に移行させて いる。削りとみられる箇所が認められるが判然としない。	A区ワ-32 トレンシ内
第70団 版68	64	茶釜の臺	— — —	明灰色	ナデ・裏削り	同上	C・D・B		外側底径12cm、内底直径9cm。蓋甲に直径14mmの孔 を穿つ。内底の縁止めは削り取って仕上げる。	A区ニ-34 第1瓦層

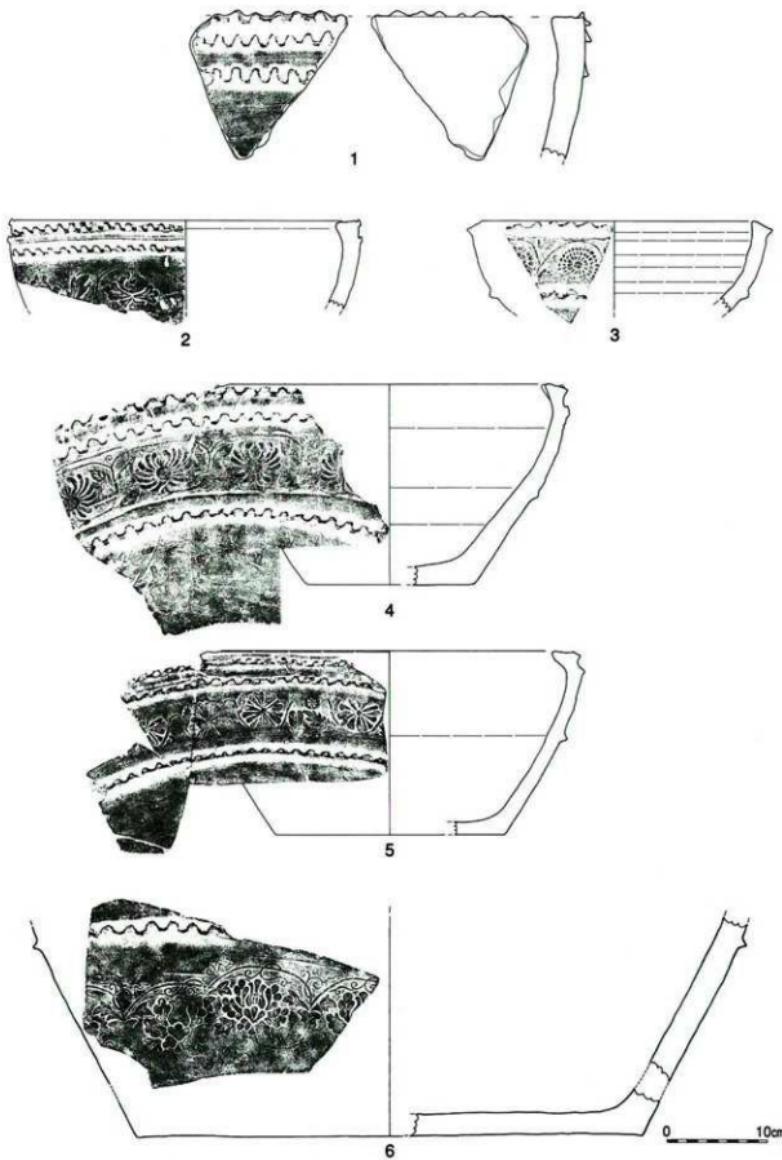
注: 混入物は多い種に記した。混入物のAは雲母(細片化)、Bは石美、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石灰質砂粒、Eはモミガラ、Fは黑色鉱物、Gは白色の陶土。

第12表 d 瓦質土器観察一覧

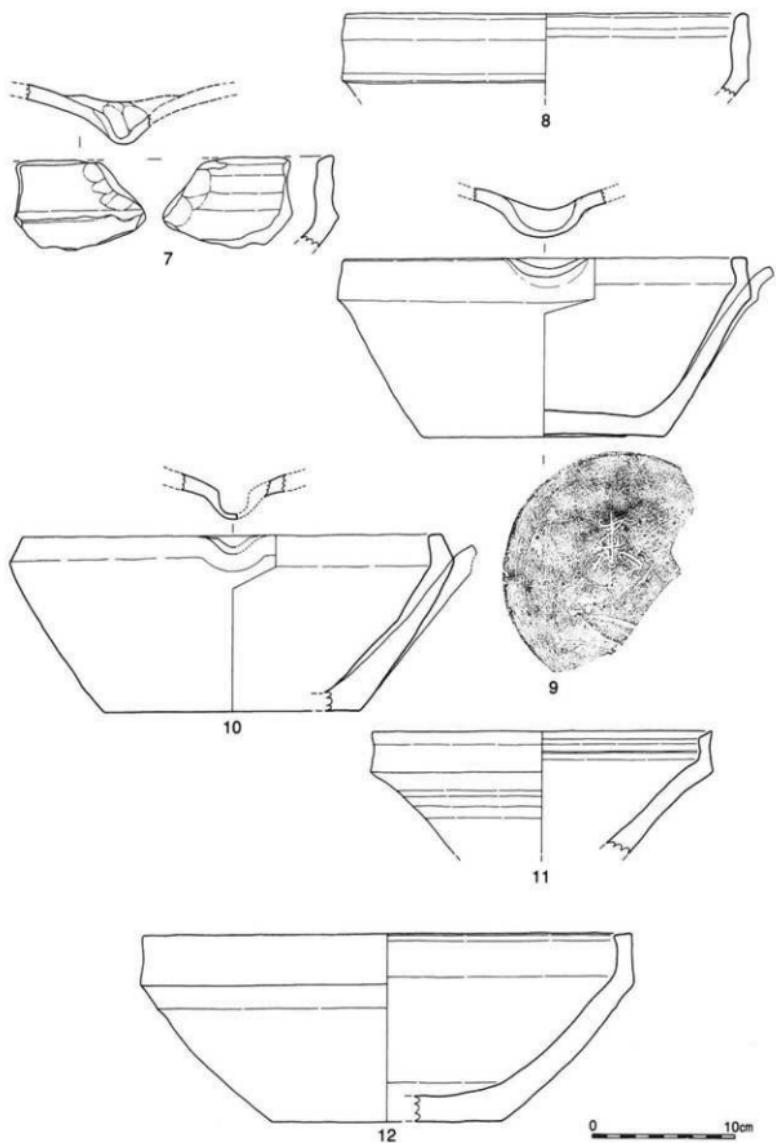
単位: cm

区・版番	番号	分類	口徑 直径 高さ	色調(外)	器面調整(外)	器面調整(内)	混和剤	文様等	備考	出土地点
第12表 d 瓦質土器観察一覧	65	落し蓋	—	淡褐色	ナデ・裏削り 指圧	ナデ・削り・ 指圧	C・A・B	縫を貼り付け る	凹レンズ状の臺で外側が盛み、内側が丸味を帯びてい る。直径は10.2cmを求めた。	A区31・32 壁の盤
	66	蓋面	—	灰褐色	同上	ナデ	C・A	調を造る	鋸歯部までの復元直径18.8cm。斜上面は端部で丸味を 出している。丁寧な調整で仕上げる。	試掘4
	67	蓋面	—	明灰色	同上	ナデ	C・B	調を造る	鋸歯部と斜上面を仄く。輪摺み技法。	A区メ-32 第3層下部砂利面
	68	香炉	15.6	淡灰色	ナデ	ナデ	C・B	足を挿り出し て造る。	外底面を深く抉り取って高台状に仕上げた後に足をつ くる形に捺りとっている。	A区ヒ-32 トレンチ第3 層
	69	瓶	—	明灰色	ナデ・黄ナデ	ナデ	C・B		高台を削り出して造り。高台脇から丸味を持たせてい る。	A区ヌ-34 東上層地 土成り
	70	瓶	8.6	暗褐色	同上	ナデ	C・B・A		高台を削り出して造り。高台脇から丸味を持たせてい る。	A区ヌ-32 砂利層
	71	用途不明	9.6	暗褐色	ナデ・黄ナデ	織目	A・B・C		外底面は裏削りの後にナデを施したようである。	土取り場の 壁の盤
	72	用途不明	6.6	灰褐色	ナデ	ナデ	C・B・A		内面に直径2.2cmの丸い痕みがある。	A区ノ-31 トレンチ
	73	把手	—	淡褐色～ 黄褐色	ナデ・擦痕 指圧	—	C・B・D		厚さ2.2cm、幅3.3cm、長さ10.5cmを測る。	A区ヌ-31 ・32壁の盤
	74	瓶	—	灰黒色	ナデ・黄ナデ	—	C・D・A		長径4.8cm、短径4.5cmを測る。	A区ヌ-32 第3層
第13表 e 瓦質土器観察一覧	75	香炉	—	明茶色	同上	ナデ	C・A・B	波形文と半円 弧文	香炉の口縁で凸筋を口縁に貼り付けた後に丸削りや片 切り削りで蕩の波形文と半円弧文を描く。	A区ヌ-31 ・32壁下部清流 遺構
	76	蓋き物	—	明黄色	同上	—	C・B		動物の耳の部分とみられるもので、耳の中を歪ませて いる。	B区ヌ-30 ・31層
	77	把手?	—	明灰色	ナデ	—	C・D・A		円筒状の把手?などが考えられるもので、先端部で直 径2.7～2.9cmを測る。	A区ニ-31 第1層
	78	蓋き物	—	灰黄色	ナデ・裏削り ・擦痕	—	C・B	波形文と沈線 による横文	蓋き物(帽子とみられる)の足とみられる。脚の部分 に波形文。	A区ノ-32 第4層地土
	79	蓋き物	—	明黄色	ナデ・裏削り ?	指圧・ナデ	C・B・A	凸筋文	凸筋をついた後に凸筋の両端にさらに縫どりの為の 小さな凸筋をつくる。	A区ニ-34 第4層
第14表 f 瓦質土器観察一覧	80	蓋き物	—	淡灰色	同上	裏削り・指圧	C・B	凸筋文	凸筋及び凹筋の状況から型物とみられる。	A区ヌ-32 壁土成り
	81	用途不明	—	灰褐色	ナデ・裏削り ?	ナデ・裏削り ・指圧	C・B・A		厚さ8.5mmの土製品で、練泥は窓で削り出して尖らせた 後に実窓を窓で削りとっている。	A区ヌ-33 壁の盤
	82	急須	14.4	明褐色	回転擦痕・ナ デ・擦痕	回転擦痕・ナ デ・裏削り?	A・B・C	内面口縁に凸 筋	胴上部から擦痕を深めさせた後に口縁をほぼ直角に立 ち上げている。口縁内面に轟受けの突起を造る。	A区ヒ-31 第3層下部地 土成り
	83	急須	—	明褐色	同上	同上	A・B・C	内面に凸筋	同図82と同一體像とみられる。	A区ヌ-30 ・31 第2層
	84	鉢蓋	—	淡褐色	回転擦痕・ナ デ・裏削り	ナデ・擦痕 ・指圧	B・C・A	縫を貼り付け る	縫は棒状の断面を呈し、削りや回転擦痕で丁寧に仕 上げている。	A区ヒ-31 第4層地土成 りの下
第15表 g 瓦質土器観察一覧	85	皿	12.0	明黄色	裏削り・ナデ	回転擦痕	A・C・D		内縁口縁の皿。	B区ヌ-29 灰茶色土層

注: 混入物は多い順に記した。混入物のAは實母(細片化)、Bは石英、Cは茶色・灰褐色の物質、Dは石質實粒、Eはモミガラ、Fは黒色鉱物、Gは白色の陶土。

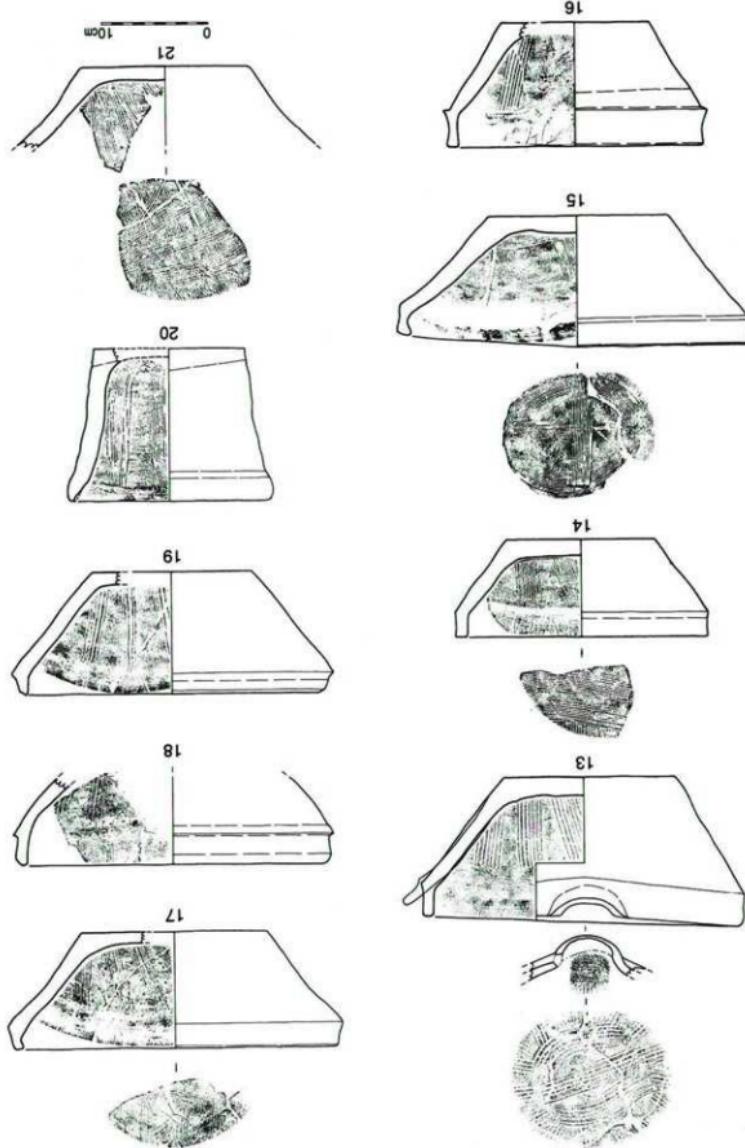


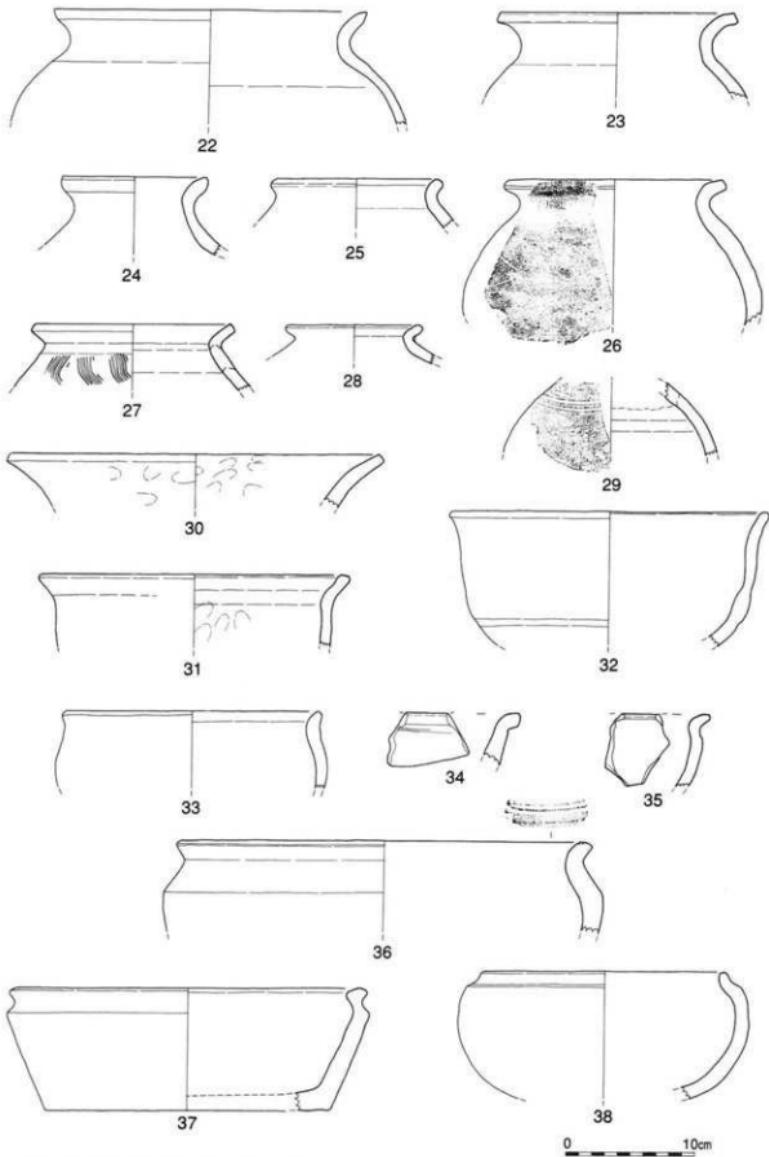
第64図 瓦質土器1 (植木鉢)



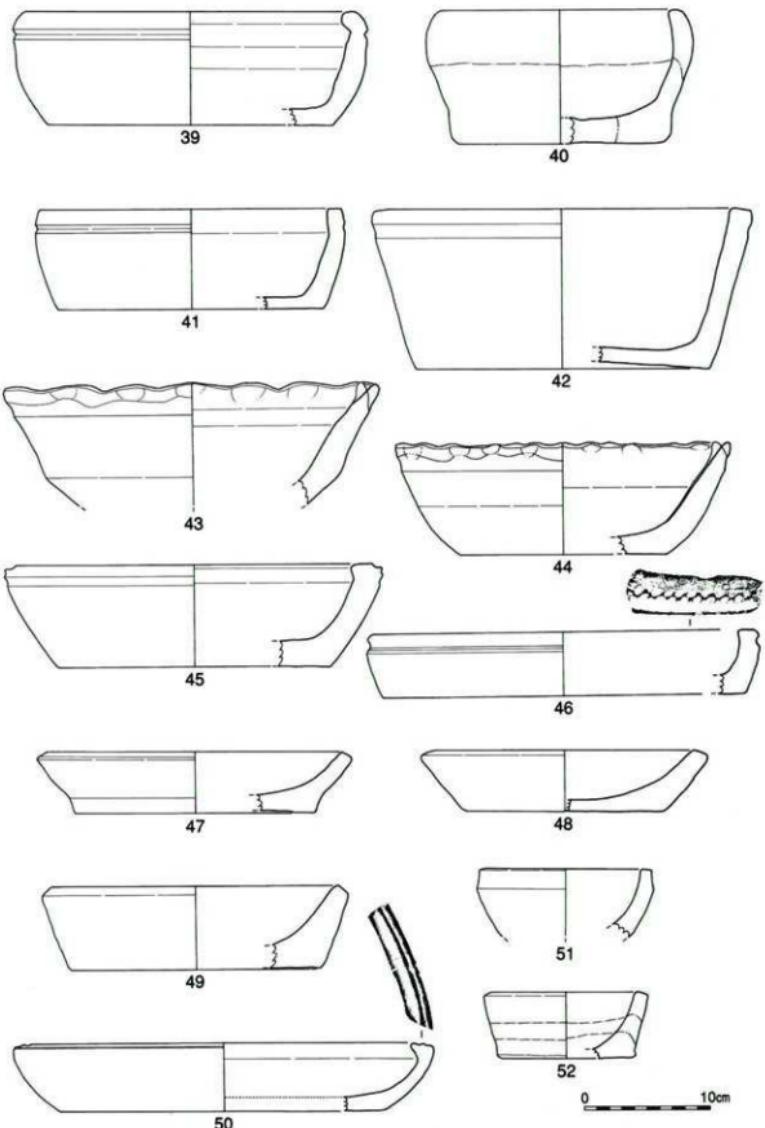
第65図 瓦質土器2（こね鉢）

第66圖 瓦質土器 3 (鋸鉗)

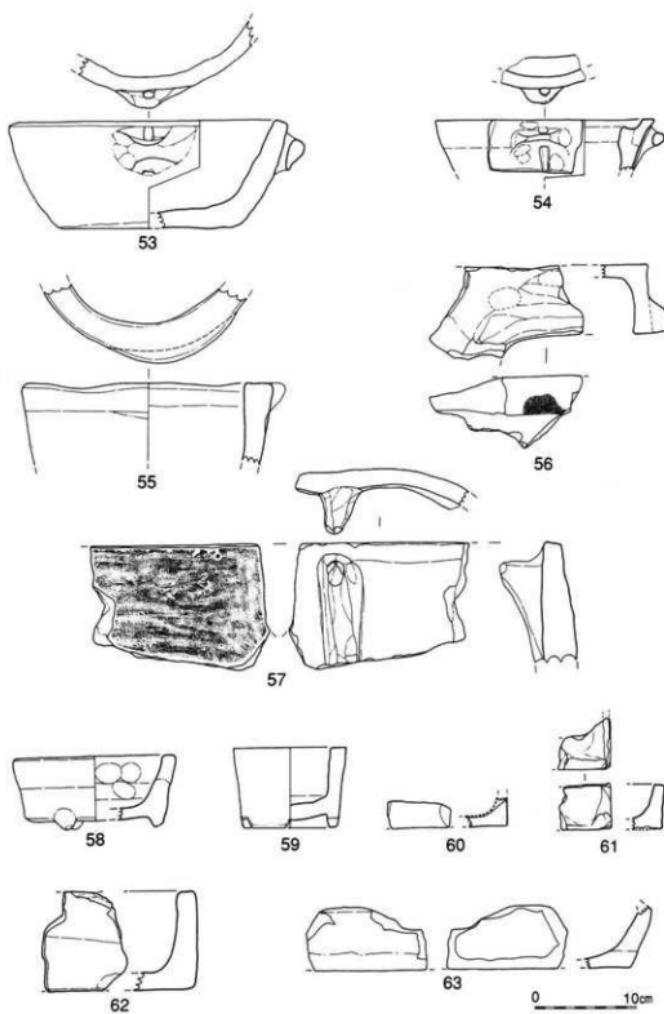




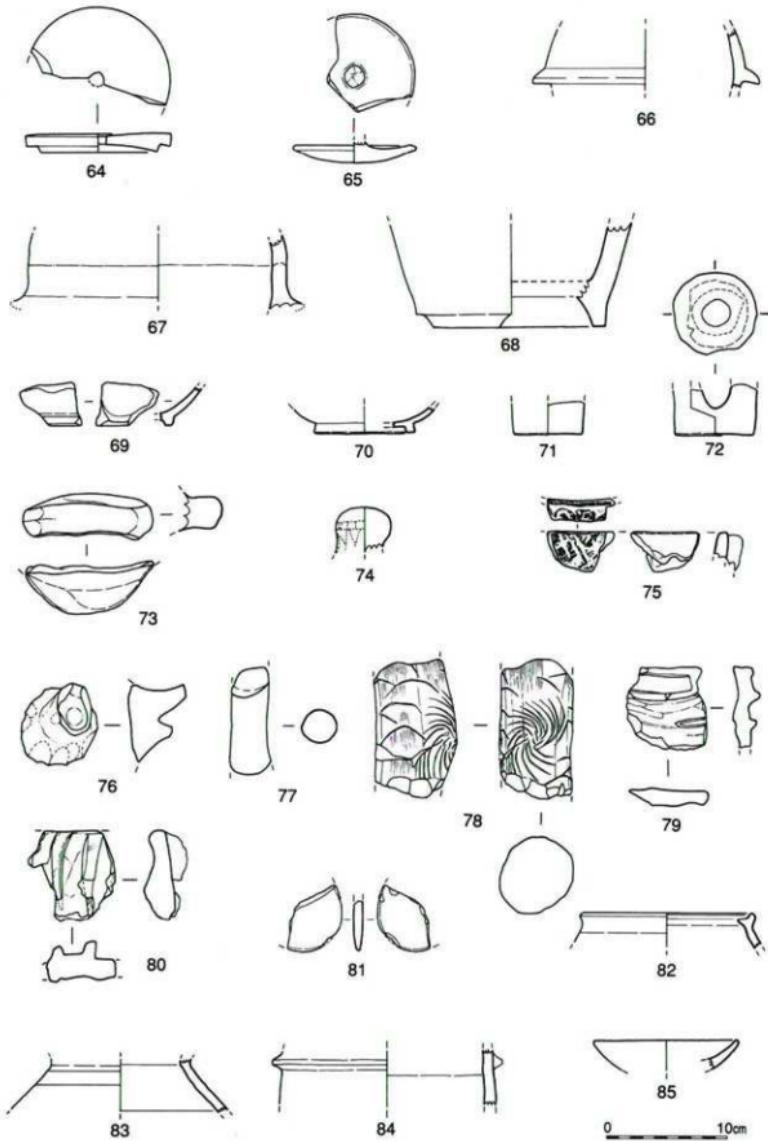
第67図 瓦質土器4（壺・鍋・深鉢・浅鉢）



第68図 瓦質土器5（浅鉢・碗・水盤・大皿）



第69図 瓦質土器6（火炉・竈・香炉）



第70図 瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物・急須・銅釜・皿)

第17節 青銅製品

第71図の1～10の10点である。

このうち男性用のかんざしは同図1～3の3点で、同図3は頭部を欠損するもので残存部の長さは8.1cm、重さ6.4gで竿部は2部に分かれ、頭部近くは長さ10.2mmで断面は径2.3mmの円形を呈し、端部は3.5mmを測り、徐々に太くなり先端は尖る。断面は正方形を呈する。表面は青銅のサビとともに金メッキが若干認められる。断面は正方形を呈する。出土地は不明である。

同図1は軸部で残存部の長さ40.2mm、重さ2.4gを測り、頭部に近い竿部は1.6mmの円形で、残り竿部の断面径は頭部側が2.5mm、端部は3.1mmを測り、徐々に太くなり尖る。フー31第2層の出土である。

女性用は同図4が長さ112.6mm、頭部は幅11.4mm、厚さ0.6mm、竿部は断面を六角形に長さ(3.8cm)を整形し、それより先の端部までは面を変えて同様に六角形に整形する。断面の厚さは先端部3.2mm、軸の切り替え部は厚さ3.6mmを測る。ヒー30第2層の出土である。

同図2は竿部で長さ44.8mm、重さ1.5gを測る。断面形はほぼ六角形を呈し、全体にはほぼ同じ厚さで3.3mmを測り、この状況から女性用と思われる。

同図5は頭部の平面は長楕円形を呈し、長径は26.7mm、短径(幅)5.2mm、厚さ2.0mmを測る。竿部の頭部に近い側の断面は円形を呈し、2.2mmを測り、竿部の端はほぼ六角形を呈し、中央が1.5mm、端部が2.3mmを測り、徐々に太くなる。重さは3.8gを計る。ニー32第2層の出土である。

耳かきとされるものは同図5～8の4点である。

同図6は完形で頭部の平面は長楕円形を呈し、長径10.5mm、短径(幅)4.0mm、厚さ0.9mmを測り、竿部は頭部に近い所で断面が円形を呈し、厚さ2.8mmを測る。竿部の端部は六角形を呈し、頭部に近い方は3.6mm、端部は2.3mmを測り、徐々に細くなる。重さは6.4gを計る。フー31第3層の出土である。

同図9は竿部のみ残存で断面は六角形を呈し、残存部の長さは5.3mm、厚さは頭部に近い方が2.7mm、端部は0.7mmと徐々に細くなる。重さは1.4gを計る。出土地は不明である。残存部の形状から耳かきの竿部と考えられる。

同図10は耳かきの一部と考えられるもので残存部の最大長15.3mmで断面は六角形を呈し、頭部に近い所は厚さ3.6mm、端部は1.4mmで徐々に細くなる。重さは8.5gを計る。ノー32、33第3層の出土である。

同図8は板状に加工したもので幅4.2mm→3.8mmと徐々に細くなり、断面隅丸方形を呈する。出土地は不明である。

同図7は残存部の最大長9.4mm、直径2.2mm、重さ2.4gを計る。先端部は切断痕がある。用途は不明である。ヌー33第4層の出土である。

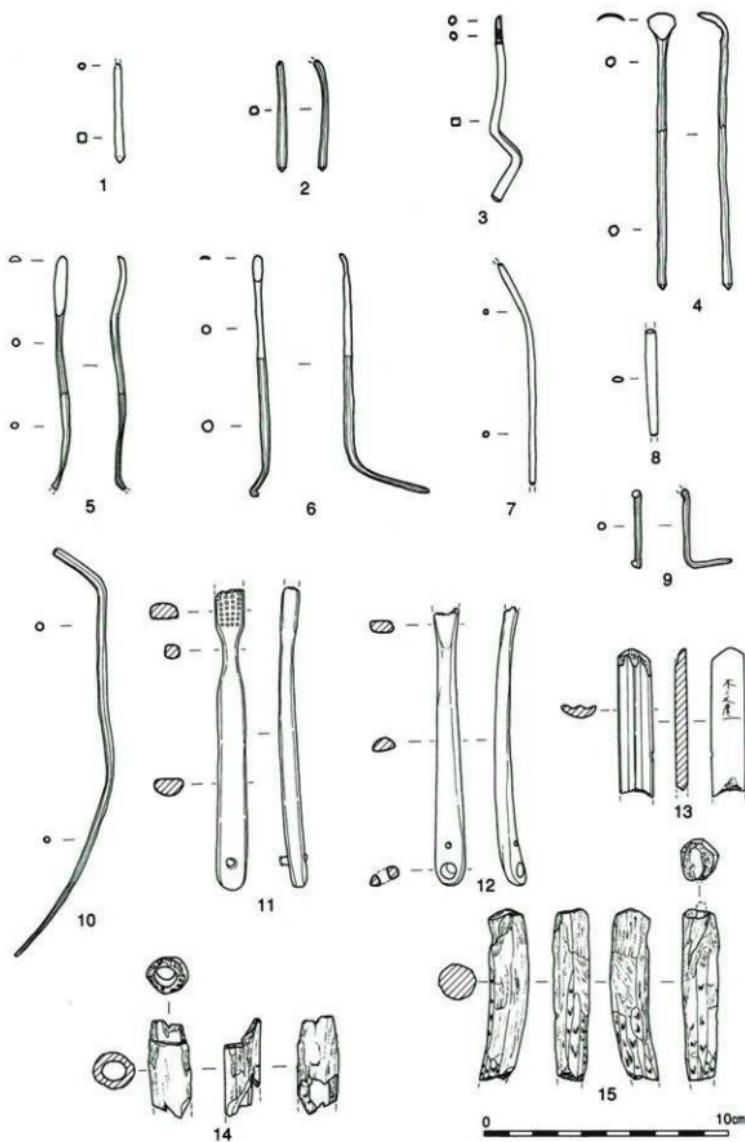
第18節 骨 製 品

本品は5点出しし、その内訳はハブラシ状製品が2点、用途不明が3点出土した。

第71図11はハブラシ状の製品で若干、頭部を欠損する。残存部の最大長は12.3cm、頭部の幅は1.7cm、柄部の幅は1.2cm、厚さは頭部が5.7mm、柄部6.4mmを測る。頭部は毛の起毛のための孔が4列である。柄部の端に径3.0mmの孔を施し、その中に棒状(樹脂製?)のものがはめられている。表採品である。

同図12は上記と同様で頭部を欠損する。残存部の最大長は11.3cm、柄部の幅は1.3cm、厚さ6mmを測る。柄部の端に径6mmの孔を施し、孔は両方から穿孔する。また、孔のすぐ上に径2.4mmの穿孔の跡が確認されるが、貫通はしていない。ヒー30第2層炉跡?から出土した。これらはウシの骨を用いたものであろう。

同図15はジュゴンの肋骨を用いたもので、ほぼ四面にシャープな削り痕が確認され、近位端側に径4.5mmの孔らしき痕がみられ、また、遠位側には荒い削り痕が確認できる。残存部の最大長68.6mm、最大幅15.0mm、最大厚13.0mmを測る。ネー33溝状遺構、石積みの下から出土した。



第71図 青銅製品・骨製品

同図14はブタの大腿骨の骨体を横位に段違いに切断したもので横幅15.8mm、残存部の長さ38.9mmを測る。ネー34第2層の出土である。類例の報告はなく用途は不明である。

同図13は長管骨を半裁し内側部を双溝状に研磨加工する。また、外面も研磨加工され、「木○○」の字が銘記されている。最大幅14.0mm、残存部の長さ58.2mmを測る。フー29茶色土(Ⅱ?)の出土である。用途は不明である。

第19節 古 銭

出土した古銭は総計111個でそのうち訳は古い順にみると永楽通寶、元□□寶、紹興□寶、祥符元寶、嘉祐元寶がそれぞれ1個、洪武通宝が2個、破損あるいは字の不明瞭のためのもの(5個)と鳩目錢が89個、明治以降の半錢、一錢、二錢それぞれ1個出土している。第15表に出土状況を載せた。

最も多い鳩目錢についてみると、ネー32の「古銭集中地」のNo1-No5(第16図)で集中枚数は2枚~13枚、一括して出土している。ほかに溝状造構からも32枚出土し、両方をあわせると鳩目錢の94%がネー32グリットから出土している。第16表に有文銭、第17表に無文銭の観察表を載せた。これによると鳩目錢は大きさが18.5mm~21.1mm、重さは平均1.2グラムを計る。また、文献によると1626年ごろには1個づつ使用し、1699年からは十個か結び縫、重さを一定にして封印して使用した。本品は古銭の分類では私鑄銭に分類される。鳩目錢の分類(「形」、「郭穴」、「比率」)は是光氏の分類に準じた。

層別にみると最も多い鳩目錢は第2層以下に出土し、第2層より上では寛永通宝、半錢、一錢、二錢が確認されている。以上のことより古銭からみると第2層以上の寛永通宝以降の銭と、第2層以下の鳩目錢とそれ以外の銭に分けられ、本遺跡の時代的なメルクマークといえるであろう。

＜追記＞ 湯田古窯跡(Ⅰ)の報告の中で第104図11は九州帝京女子大学の桜木晋一氏によれば、「大世通宝」であろうとのご教示をいただいた。第72図23に再度掲載した。「大世通宝」は1454年に琉球で鋳造されたものである。また報告書作成中、慶應大学教授鈴木公雄先生から古銭について有益な御教示を賜わったことを記して謝意を表します。

註

註1 渡口真清「鳩目錢」沖縄大百科事典 沖縄タイムス社 1983年

註2 是光基「国内出土のいわゆる「無文銭」について」「考古論集－瀬見浩先生退官記念論文集－」瀬見浩先生退官記念事業会編 1993年3月

第13表 古銭出土状況

出 土 地	A 区												B 区					合計						
	西番	種類	分類	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	灰褐色	第2層	溝状造構	特殊	古銭集中	No1	No2	No3	No4	No5	小計	灰色	茶褐色	第2層	不明	
1057 嘉祐元寶													1						1			0	1	
1142 紹興□寶													1						1			0	1	
1368 洪武通寶				1	1														2			0	2	
1408 永楽通寶													1						1			0	1	
祥符元寶													1						1			0	1	
1534 鳩目錢	a												18	2	8			1	29			1	1	30
	b												1	1	1			5	58	1		1	59	
1636 寛永通宝		2	1										20	3	4	13	10	5	3	2		2	5	
1876 二錢		1																	1			0	1	
1887 半錢		1																	1			0	1	
1919 一錢		1	1																2			0	2	
元□□寶													1						1			0	1	
不明					1	1	3											5			1	1	6	
合計		3	4	1	3	2	4	2	1	0	39	1	5	12	13	10	6	104	1	2	2	1	111	

第14表 有文銭観察一覧

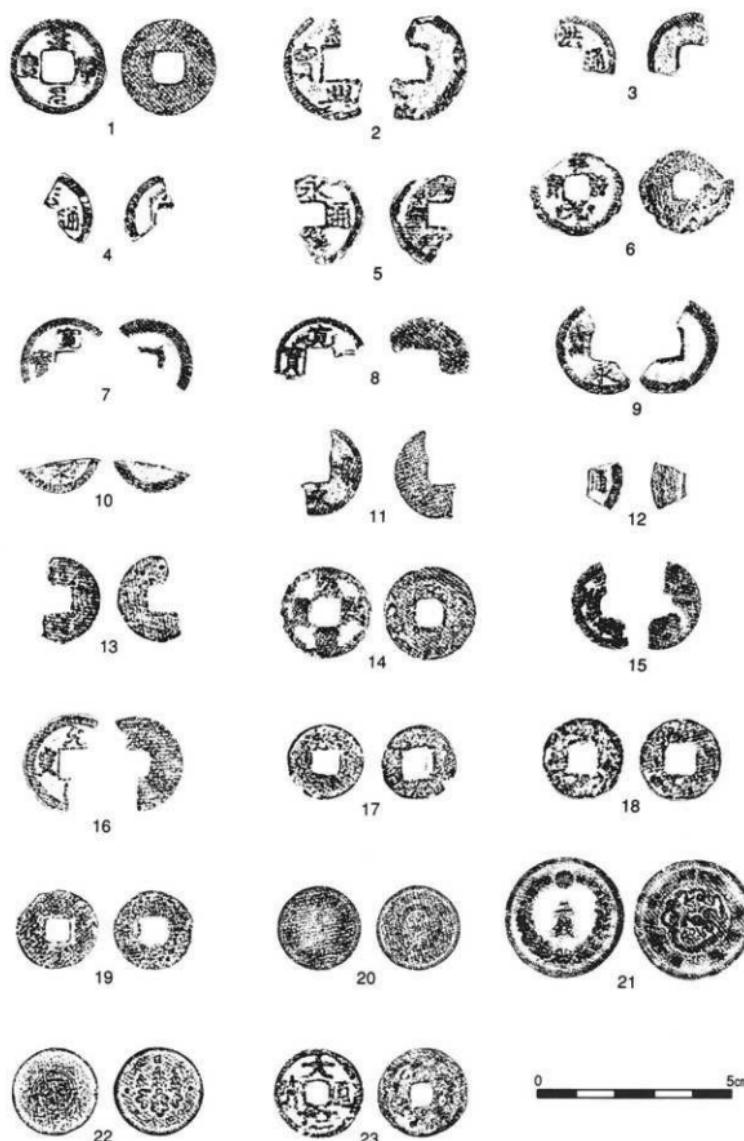
図番号	銘	銭貨名	裏面	書体	備考	認 認 認 認 認	認 認 認 認 認	形	跡	出土地	層
1	47	嘉祐元寶	完	篆書	全体の文字が摩耗。	24.8	8.1	3	A	ニ-3-2	灰褐色土
2	11	紹興口寶	完	破	楷書「通」が欠損	29	7.5	3.1	A		砂利敷柱穴 94
3	43	洪□通□		破	楷書 裏に文字あり。	24.7	-	0.7	A	ノ-3-3	第3層
4	44	□□通□		破	楷書「洪」の一部と「武」「寶」の文	22.7	-	0.7	B	ハ-3-0	第2層
5	6A	永業通□		破	楷書「寶」が欠損、字は削と明瞭。	25.8	5.2	1.2	A	ネ-3-1	砂利層中
6	14	祥符元寶		破	楷書「寶」が欠損。	24.7	6.4	1.6	A	ノ-3-2	第5層
7	12	寛□口寶		破	楷書「水」が欠損。字は明瞭 「寶」の下は「ハ」になる。	24.3	4.9	1.5	A	ノ-3-1	第1層
8	13	寛□口寶		破	楷書「水通」が欠損。「ハ」鉢。新 真永。	23.5	6.2	1.4	A	ノ-3-2	第1層
9	15	□水口寶		破	楷書「寛」の上部の字を欠く。	24.7	6.1	1.3	B	ヒ-2-9	茶褐色土層
10	16	真永通寶		破	楷書「水」以外は欠損。	21.3	-	0.7	R	フ-2-9	茶褐色土層
11	42	□水通□		破	楷書「寶」と「寶」字欠損。	23.6	6.8	1.1	A	ネ-3-3	第3層
12	39	□□通□		破	「通」の文字のみ残り他は欠 損。真永通寶の感じがする。	26.6	-	0.4	A	ニ-3-2	第3層
13	40	□□○○○		破	摩耗が激しく判読不能。	22.8	6.9	1.4	A	ニ-3-4	第2b層
14	46	□□□○○		破	摩耗が激しく判読不能。	25.9	-	0.5	A	ヒ-3-4	第4層(?)
14	48	○○○○○		完	摩耗が激しく判読不能。	24.1	7.1	2.5	A	ヌ-3-4	第4層落ち こみ
15	49	○○○○○		破	摩耗が激しく判読不能。	24	-	0.9	A	ヌ-3-4	第4層落ち こみ
16	9	元□口寶		破	行書 字は摩滅している。	24.4	6.3	1.8	A	ヌ-3-4	溝状遺構
21	41	二銭	完	完	近代の銭貨である。	31.7	-	14	A	ヌ-3-1	第1層
20	45	半銭	完	完	近代の銭貨である。	22	-	3.2	B	ヒ-3-0	第2層焼土 混じり
22	10	一銭	完	完	「大日本大正八年」の文字有 り。	23.1	-	3.5	A	ヒ-3-0	第2層

注: 「-」は計測不可

第15表 無文銭観察一覧

図番号	銘	銭貨名	形	備考	認 認 認 認 認	認 認 認 認 認	形	跡	出土地	層	
17	6B	鳩目銭	完		19.6	6.5	3	B	1	1	
	1	鳩目銭	破		20.1	6.4	3.1	1.1	B	1	A
	3	鳩目銭	完		20.2	7.3	2.8	1	B	1	A
	2	鳩目銭	完		18.9	8.3	2.3	1.1	B	1	A
	5	鳩目銭	完		20.7	6	3.5	1.3	B	1	A
	4	鳩目銭	5枚接着		18.8	8.2	2.3	5.2	B	1	A
	30	鳩目銭	完		18.5	8.1	2.3	0.7	B	1	2
	31	鳩目銭	2枚接着		20.5	6.3	3.3	2	B	1	1
	32	鳩目銭	完	2枚接着	20.5	8.3	2.5	2.6	B	1	2
	33	鳩目銭	完	2枚接着	18.5	7.5	2.5	0.5	B	1	2
	34	鳩目銭	完	2枚接着	21.1	8.1	2.6	0.9	B	1	2
	35	鳩目銭	完	2枚接着	20.8	6.9	2.7	2.7	B	1	1
	36	鳩目銭	完	2枚接着	19.4	6.4	3	7.3	B	1	1
	37	鳩目銭	完	13枚接着	18.9	6.7	2.8	16.1	B	1	2
	38	鳩目銭	完	10枚接着	20.3	7.1	2.9	12.3	B	1	2
	19	鳩目銭	完	2枚接着	20	7.8	2.6	2.5	B	1	2
	20	鳩目銭	完	10枚接着	20.8	6.8	3.1	12.1	B	1	1
	21	鳩目銭	完	2枚接着	20.3	6.5	3.1	2.8	B	1	1
	22	鳩目銭	完	9枚接着	20.2	8	2.5	11.2	B	1	2
	23	鳩目銭	完	5枚接着	19.5	6.8	2.9	6.1	B	1	2
	24	鳩目銭	完	4枚接着	19.7	7.5	2.6	4.5	B	1	2
	25	鳩目銭	完	2枚接着	20.3	6.4	3.2	2.2	B	1	1
	26	鳩目銭	完	2枚接着	20.1	6.3	3.2	2.6	B	1	1
	27	鳩目銭	完		20	6.4	3.1	1.1	B	1	1
	28	鳩目銭	完		20.9	7	3	1.1	B	1	2
	29	鳩目銭	完		21	6.3	3.3	1.5	B	1	1
	17	鳩目銭	完		20.2	7	2.9	1.2	B	1	2
	18	鳩目銭	完	10枚接着	19.5	8	2.4	10	B	1	2
	7	鳩目銭	完		20.7	7.3	2.8	1.2	B	1	2
	8	鳩目銭	完		18.7	7.6	2.5	1.1	B	1	2

注: 「形」「郭穴」「比率」は足立(1993)による。「比率」は直徑+孔径



第72図 古銭拓影

第20節 キセル

陶製のものが5点（雁首4点、吸い口1点）得られており、第73図に示した。1・2は無軸のもので、3～5は施釉された資料である。

1・2はパイプ形とされるもので、行政棟地区でも出土している。近世の時期における比較的ボリューマンタイプのものようである。1は正面図の上部は暗褐色をなし、下部から裏側にかけて自然釉が掛かり黒色を呈している。裏側には白っぽい粘土のようなものの付着もみられる。本来、七角形に面取りされたものようであるが、角がなくなり丸くなっている。2は火皿部・接続部とも八面に面取りされるものようである。接続部の上面が若干下がり、裏側が部分的に膨らんでいるためやや歪な形になっている。火皿部の先端は破損している。1よりも短い資料である。

3・4もパイプ形であるが、施釉するものである。2点とも面取りはされず、丸くつくれられている。3は瑠璃釉が施されるもので、胎土は黄白色の細かなものである。外面は接続部の端部を除き全釉。内面は火皿部が施釉され、接続部が無釉である。火皿部の半分程度、接続部の上方が破損しているものの、全体の様子は窺い知ることができる。形状的には1・2と同様である。4は白濁色の釉を施すもので、細かな貫入が認められる。接続部は内外面とも端部を除き全釉。火皿部は欠失しており状況は不明。接続部の形状は3と異なり、接続部端の方へ太くなるようにつくれている。胎土は灰白色でやや粗め。

5は灰釉が施されている吸い口の資料である。口の部分は破損しているが、外面は全釉のようである。内面および接続部断面は無釉。胎土は灰白色で、やや細かい。接続部端は周囲に砂粒状のものが付着している。図の下方から裏側にかけて、風化のためか釉が白く濁った感じになっている。

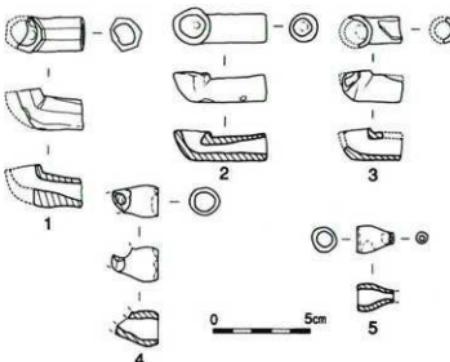
類例資料が壺屋古窯跡群Ⅰなどから報告されている。

註

註1. 「古我地原内古墓—沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)」『沖縄県文化財調査報告書第85集』 沖縄県教育委員会 1987年12月。

註2. 「浦田古窯跡（I）—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—」『沖縄県文化財調査報告書第111集』 沖縄県教育委員会 1993年3月。

註3. 「壺屋古窯跡Ⅰ—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査—」『那覇市文化財調査報告書第23集』 那覇市教育委員会 1992年3月。



第73図 キセル

第21節 円盤状製品

本製品は、磁器、陶器、瓦などを円盤状に打削調整した二次製品である。今回の調査で本製品は総数212点出土している。区別の出土状況は、A区105点、B区79点、区不明28点となっており、遺跡の本体であるA区からの出土が最も多く全体の49.5%を占めている。

種類別の内訳は、磁器28点、施釉陶器12点、無釉陶器71点、褐釉陶器11点、陶質土器1点、土器2点、瓦87点となっており、瓦と無釉陶器で全体の74.5%を占めている。

大きさ別の出土状況を第16表に示したが、これによると3cm、4cm台で全体の59.4%と半数以上を占め、次に5cm台、2cm台と続く。第74図はサイズ別と各種類の関係をグラフ化したものである。1cm、2cm台では磁器が約半数を占めているが、3cm、4cm台とサイズが大きくなるにつれ無釉陶器、瓦の占める割合が高くなる。

部位別にみると、口縁部1点、胸部191点、底部10点、瓦の縁を利用したもの10点である。胸部の利用が殆どであるが、僅かに口縁部や瓦の縁を利用した資料が見られた。

断面形を見てみると凹3点、平98点、湾曲111点となっており、湾曲が全体の52.4%を占める。

平面形の比率は、円形22.6%、方形11.8%、橢円形27.4%、不定形38.2%である。また、剥離方向では外→内が62.3%と全体の半数以上を占め、両面24.5%、内→外13.2%と続く。

今回の調査でも、前回と同様に瓦、無釉陶器を利用した資料が主体となっていた。これは遺跡の性格との関連を示唆するものであろう。また、サイズと種類に相互関係が見られるものの、本製品の用途についての傾向までは見いだすことができなかった。これまでの資料及び、新たな資料を含め検討する必要がある。なお、個別の観察は第17表に示した。

参考文献

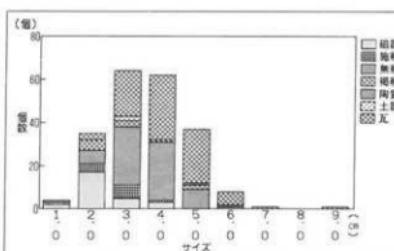
- 「湧田古窯跡（I）」『沖縄県文化財調査報告書第111集』沖縄県教育委員会、1993年
- 「御細工所跡」『那覇市文化財調査報告書第18集』那覇市教育委員会、1991年
- 「壺屋古窯群Ⅰ』『那覇市文化財調査報告書第23集』那覇市教育委員会、1992年

第16表 円盤状製品出土状況

単位：cm

サイズ	磁器	施釉	無釉	褐釉	陶質	土器	瓦	合計
1. 0	2	1	1					4
2. 0	17	4	6	5			3	35
3. 0	5	6	27	3	2	21	64	
4. 0	3	1	27	1		30	62	
5. 0			9	2	1	25	37	
6. 0	1		1			6	8	
7. 0						1	1	
8. 0							0	
9. 0						1	1	
合計	28	12	71	11	1	2	87	212

第74図 大きさと種類の相関



第17表 a 円盤状製品観察一覧

単位:mm、g

順位	種類	部位	長径	短径	厚さ	重さ	形態	輪邊	断面	釉色	観察事項	順位	アーチット	備考	
1	楕円陶器	不明 脚部	完	3.75	3.4	0.7	11.9	方形	外→内	凸曲	褐色	剥離は丁寧。	B	/-30	第2層
2	楕円陶器	不明 脚部	完	4.58	4.85	0.6	18	不定形	内面	凸曲	褐色	剥離は丁寧。	B	/-29	茶褐色
3	楕円陶器	不明 脚部	完	5.9	5.8	0.9	41.6	円	外→内	凸曲	褐色	剥離は丁寧。 第75回10。	B	7-29	
4	楕円陶器	不明 脚部	完	2.85	2.6	0.7	7.3	不定形	内面	平	褐色	剥離は粗い。	A	t-33	第3層 下部
5	楕円陶器	不明 脚部	破	5.9	2.55	0.7	15.9	円	内面	凸曲	褐色	剥離は丁寧。	A	t-33	第3層 瓦だまり
6	楕円陶器	不明 脚部	破	2.85	2.6	0.8	8.9	方形	内→外	凸曲	褐色	剥離は粗い。	B	/-29	明茶
7	楕円陶器	不明 脚部	破	2.6	2.4	1	8.4	円	内→外	凸曲	褐色	剥離は丁寧。	A	/-33	第3層?
8	楕円陶器	不明 脚部	破	2.15	1.9	0.7	4.2	椭円	内→外	凸曲	褐色	剥離は丁寧。			
9	楕円陶器	不明 脚部	破	2.75	2.8	0.9	9.9	不定形	内→外	平		剥離は粗い。 第75回9。	A	t-33	第3層
10	楕円陶器	不明 脚部	破	1.15	2.85	0.7	10.4	方形	外→内	平		剥離は粗い。	A	/-31	第3層
11	楕円陶器	不明 脚部	未	2.65	4.2	0.8	15	不定形	外→内	凸曲	褐色		B	/-30	第2層
12	瓦	丸瓦	完	7.05	6.5	1.7	90.6	方形	外→内	凸曲		中間色。剥離は丁寧。 第76回21。	A	t-31	第2層 上部
13	瓦	丸瓦 緑付	木	5.4	5.5	1.3	35.4	不定形	内面	凸曲	赤色		B	/-30	第2層
14	瓦	丸瓦 脚部	破	4.75	5	1.9	34	椭円	内面	平		灰色。剥離は丁寧。			
15	瓦	不明 脚部	破	5.7	5.5	1.9	61.3	不定形	内→外	平		灰色。剥離は粗い。			
16	瓦	平瓦 緑	完	5.9	5.9	1.4	47.8	円	外→内	平		中間色。剥離は粗い。	A	t-33	第3層
17	瓦	平瓦 緑	完	4.3	8.95	1.2	27.2	方形	内面	凸曲	褐色	剥離は丁寧。	B	/-30	第2層
18	瓦	平瓦 緑	完	0.5	6.9	1.6	87	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	/-31	上部
19	瓦	平瓦 緑	完	3.8	3.8	1.3	20.8	円	内→外	平		灰色。剥離は丁寧。	B	/-29	明茶
20	瓦	平瓦 緑	破	4.8	5.75	1.3	38	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	t-31	複合
21	瓦	平瓦 緑	破	4.8	4.65	1.3	39.9	椭円	内面	平		灰色。剥離は粗い。	B	/-30	壁
22	瓦	平瓦 緑	未	5.2	4.8	1.2	23.34	不定形	外→内	平			A	/-31	第2層
23	瓦	平瓦 緑	未	5.2	5.2	1.4	42.4	不定形	内→外	平		灰色。	B	/-30	壁上部
24	瓦	平瓦 脚部	完	6.6	4.95	1.9	91	方形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	B	/-30	第2層
25	瓦	平瓦 脚部	完	5.85	6	1.4	58	不定形	内面	平		中間色。剥離は粗い。	B	/-30	第2層
26	瓦	平瓦 脚部	完	5.5	4.8	1.7	62.7	椭円	外→内	凸曲		灰色。剥離は丁寧。 第76回20。	A	t-32	第3層
27	瓦	平瓦 脚部	完	4.3	4.6	1.7	44.7	不定形	外→内	凸曲		灰色。剥離は丁寧。釉かが かっている。	A	t-32	複合
28	瓦	平瓦 脚部	完	5.1	4.5	1.4	37.8	不定形	内面	平		灰色。剥離は丁寧。	A	t-33	第3層 瓦列
29	瓦	平瓦 脚部	完	4.65	4.6	1.6	43	不定形	内→外	平		灰色。剥離は粗い。	A	t-33	第3層 瓦2f
30	瓦	平瓦 脚部	完	5.4	5.95	1.9	74.4	不定形	内面	平		赤色。剥離は粗い。	A	t-31	第2層 瓦2f
31	瓦	平瓦 脚部	完	4.35	4.5	1.1	25	円	外→内	平		赤色。剥離は丁寧。摩耗し ている。	B	/-30	瓦
32	瓦	平瓦 脚部	完	4.75	4.7	1.4	46.5	不定形	内面	凸曲		赤色。剥離は粗い。	A	t-33	溝状造構
33	瓦	平瓦 脚部	完	3.35	3.4	1.4	18.1	椭円	内面	平		赤色。剥離は丁寧。	B	/-30	第2層
34	瓦	平瓦 脚部	完	5.4	4.7	1.6	51.4	椭円	外→内	凸曲		赤色。剥離は粗い。			
35	瓦	平瓦 脚部	完	2.5	2.8	1.3	15.8	円	外→内	凸曲		赤色。剥離は丁寧。	B	/-30	第2層
36	瓦	半瓦 脚部	完	3.5	3.7	1.5	23.5	円	内面	平		赤色。剥離は丁寧。	B	t-30	複合
37	瓦	半瓦 脚部	完	4.05	4	1.4	29.1	不定形	外→内	凸曲		中間色。剥離は粗い。	B	t-29	濃赤褐色
38	瓦	半瓦 脚部	完	4.3	4.1	1.6	36.1	椭円	内面	凸曲		中間色。剥離は丁寧。	A	t-31	第3層 下部、埃 土混じり
39	瓦	平瓦 脚部	完	5.5	5.2	1.2	53.6	椭円	外→内	凸曲		中間色。剥離は丁寧。	A	t-31	溝状造構 内鐵土混 じり
40	瓦	半瓦 脚部	完	4.7	4.5	1.2	25.3	椭円	内→外	凸曲		灰色。剥離が丁寧。	A	t-31	表採
41	瓦	半瓦 脚部	完	4.7	4.4	1.3	34.13	不定形	内面	平		灰色。剥離は粗い。	B	/-30	第2層
42	瓦	半瓦 脚部	完	5.7	6	1.3	55.7	7	不定形	内面	凸曲			/-30	表採
43	瓦	半瓦 脚部	完	3.9	4.1	1.6	37.2	方形	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	B	/-29	灰褐色
44	瓦	半瓦 脚部	完	5.05	5.3	1.4	44	椭円	内面	凸曲		灰色。剥離は丁寧。	A	t-33	±±±±±
45	瓦	半瓦 脚部	完	4.2	4	1.4	29.6	椭円	外→内	平		灰色。剥離は丁寧。	A	/-34	第2b層
46	瓦	半瓦 脚部	完	5	4.9	1.4	44.5	椭円	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	t-31	±±±
47	瓦	半瓦 脚部	完	4.2	4.5	1.6	33.7	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	t-31	表採
48	瓦	半瓦 脚部	完	5.5	5.2	1.5	52.3	不定形	内面	平		灰色。剥離は粗い。	B	t-30	複合
49	瓦	半瓦 脚部	完	6.1	5.6	1.4	52.5	不定形	外→内	平		中間色。剥離は粗い。	B	/-29	表採
50	瓦	半瓦 脚部	完	5.5	5.1	1.5	44.8	方形	内面	平		灰色。剥離は丁寧。	B	/-29	灰茶褐色
51	瓦	半瓦 脚部	完	4.9	4.45	1.5	37.4	椭円	内面	平		灰色。剥離は丁寧。	A	t-32	第3層
52	瓦	半瓦 脚部	完	5.4	5.25	1.9	65.5	不定形	外→内	平		灰色。剥離は粗い。	A	t-34	第3層 下部
53	瓦	半瓦 脚部	完	3.45	3.6	1.7	21.9	円	外→内	凸曲		灰色。剥離は粗い。	A	t-33	第2層
54	瓦	半瓦 脚部	完	5.2	5.15	1.5	50.7	椭円	外→内	凸曲		中間色。剥離が粗い。	A	t-33	第3層
55	瓦	半瓦 脚部	完	4.8	5.25	1.5	36.8	椭円	外→内	平		中間色。剥離が粗い。	A	t-31	第3層

第17表 b 円盤状製品観察一覧

単位:mm、g

種類	器形	部位	長径	短径	厚さ	重さ	形	端面	断面	釉色	観察事項	記	ラジオ	層	
56 瓦	平瓦	脚部	完	4.1	4	1.2	21.6	楕円	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-31	第2層 下部、地 灰褐色	
57 瓦	平瓦	脚部	完	4.25	3.9	1.3	24.2	楕円	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-32	第2層 中	
58 瓦	平瓦	脚部	完	3.7	3.6	1.5	22.6	方形	両面	平	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-34	第2層 上部	
59 瓦	平瓦	脚部	完	4.4	4.1	1.5	27.2	不定形	外→内	平	赤色。剥離は粗い。	A	-2-32	第2層 上部	
60 瓦	平瓦	脚部	完	3.1	3.3	1	12.4	不定形	外→内	平	赤色。剥離は粗い。剥離後 摩耗。	A	-2-33	第2層 中	
61 瓦	平瓦	脚部	完	3	3.15	1.2	12.1	円	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。 第76図16。			第2層	
62 瓦	平瓦	脚部	完	2.7	3.15	1.3	12.4	楕円	両面	平	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-33	第3層	
63 瓦	平瓦	脚部	破	9	8.85	1.9	185	不定形	両面	凸曲	赤色。剥離は丁寧。 第76図22。	A	-2-24	瓦混じり	
64 瓦	平瓦	脚部	破	4.85	4.85	1.1	31.7	楕円	外→内	凸曲	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-34	第2層 砂利混じ り	
65 瓦	平瓦	脚部	破	6.5	2.7	1.3	26.8	楕円	両面	凸曲	赤色。剥離は丁寧。 赤色。剥離は丁寧。摩耗し ている。	B	-2-30	瓦	
66 瓦	平瓦	脚部	破	5.1	5.15	1.2	27.2	不定形	外→内	凸曲	赤色。剥離は粗い。	A	J-31	窓内口1号 窓?	
67 瓦	平瓦	脚部	破	4.2	4	1.5	25.4	不定形	内→外	平	赤色。剥離が粗い。	A	-2-31	第2層	
68 瓦	平瓦	脚部	破	6.7	5.1	1.3	42.2	楕円	内→外	平	灰色。剥離が粗い。	B	-2-30	瓦	
69 瓦	平瓦	脚部	破	6.4	9.95	1.5	48.2	方形	内→外	平	灰色。剥離は丁寧。	A	-2-31	西壁	
70 瓦	平瓦	脚部	破	4.05	4.1	1.5	31.7	不定形	外→内	平	灰色。剥離は丁寧。	A	-2-34	下部	
71 瓦	平瓦	脚部	破	3.4	2.65	1.1	17.5	楕円	両面	平	灰色。剥離は粗い。	B	-2-30	第3層 木の根瘤 虫	
72 瓦	平瓦	脚部	破	5.6	5.4	1.6	48.1	方形	外→内	平	灰色。剥離は丁寧。	A	J-33	第3層 地山直上	
73 瓦	平瓦	脚部	破	5.3	5	1.6	52.6	楕円	外→内	平	灰色。剥離は丁寧。	B	J-30, 31	地山直上 瓦	
74 瓦	平瓦	脚部	破	4.1	9.95	1.3	21.6	円	外→内	平	灰色。剥離は粗い。	B	-2-29	灰褐色	
75 瓦	平瓦	脚部	破	5.5	5.1	1.3	36.9	方形	外→内	凸曲	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-33	第3層 下部	
76 瓦	平瓦	脚部	破	5.1	4.7	1.2	32.3	不定形	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。 中間色。剥離は丁寧。剥離 後摩耗。	B	-2-30	表採 第2層 禮品	
77 瓦	平瓦	脚部	破	5.3	4.7	1.5	37.4	楕円	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。 赤色。剥離は丁寧。	B	-2-30	第2層 禮品	
78 瓦	平瓦	脚部	破	4.2	4.05	1.1	20.9	楕円	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。	B	-2-30	第2層 下部	
79 瓦	平瓦	脚部	破	5.3	5	1.5	37.8	不定形	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。	A	-2-31	第3層 下部、地 土混じり	
80 瓦	平瓦	脚部	破	3.35	3.2	1.8	23.4	方形	外→内	平	赤色。剥離後摩耗。	B	-2-29	灰茶 表採	
81 瓦	平瓦	脚部	破	2.9	3.4	1.7	18.4	方形	両面	平	赤色。剥離後摩耗。 第76図17。			表採	
82 瓦	平瓦	脚部	破	3.3	3	1.3	12.7	円	外→内	平	赤色。剥離は丁寧。	B	-2-29	茶褐色 溝状道構 燒土混じ り	
83 瓦	平瓦	脚部	破	4.4	4.6	1.3	29.5	方形	両面	平	中間色。剥離は丁寧。	A	-2-31	木の根瘤 虫	
84 瓦	平瓦	脚部	未	3.6	3.9	1.2	23	方形	両面	凸曲	灰色。	A	J-32	壁	
85 瓦	平瓦	脚部	未	3.9	3.7	1.2	27.3	不定形	両面	平	灰色。	A	-2-31	地山直上 黄褐色	
86 瓦	平瓦	脚部	未	3.35	3	1.6	22.2	方形	内→外	平	灰色。			表採	
87 瓦	平瓦	脚部	未	6.95	6.25	1.8	82.4	不定形	両面	平	灰色。			表採	
88 瓦	平瓦	脚部	未	4.9	5	1.6	46.4	不定形	内→外	平	灰色。	B	-2-30	第3層 木の根瘤 虫	
89 瓦	平瓦	脚部	未	2.7	3.1	1.7	17.2	不定形	外→内	平	灰色。	A	-2-31	第2層	
90 瓦	平瓦	脚部	未	4.7	2.75	1.2	22.1	不定形	両面	平	灰色。	A	-2-31	瓦	
91 瓦	平瓦	脚部	未	3.7	3.05	1.5	17.8	不定形	外→内	平	灰色。	A	-2-33	第3層 下部	
92 瓦	平瓦	脚部	未	4.8	4.25	1.7	74.8	方形	内→外	凸曲	中間色。剥離が粗い。			第2層	
93 瓦	平瓦	脚部	未	4.7	5.2	1.2	22.8	方形	両面	平	赤い。	A	-2-31	瓦	
94 瓦	平瓦	脚部	未	2.9	3.9	1.5	25.3	不定形	両面	平	赤い。	A	-2-33	焼土混じ り	
95 瓦	平瓦	脚部	未	3.7	3.75	1.5	21.3	不定形	両面	平	赤い。			木の根瘤 虫	
96 瓦	平瓦	脚部	未	3.35	3.7	1.3	16.2	不定形	外→内	平	赤い。	B	-2-30	地山直上 壁	
97 瓦	平瓦	脚部	未	3.55	3.35	1.3	16.9	不定形	外→内	平	赤い。			地山直上 壁	
98 瓦	平瓦	脚部	未	3.1	3.3	1.3	18.7	方形	外→内	平	赤い。	A	J-32	第1層	
99 現代磁器	底部	破		6.55	6.5	1.1	63.2	楕円	内→外	凹	剥離は粗い。			地山直上 壁	
100 現代磁器	不明	脚部	破	3	0.7	0.8	1	楕円	内→外	凹曲	表:青白 裏:白	表採	A	-2-31	表採
101 現代磁器	不明	脚部	破	3.8	1.55	0.5	4.2	円	内→外	凸曲	表:青白 裏:白	表採	B	-2-29	明茶
102 現代磁器	不明	脚部	破	2.85	1.9	0.7	3.8	不定形	内→外	凸曲	剥離は丁寧。			表採	
103 現代磁器	不明	脚部	未	2.6	2	0.7	5	不定形	内→外	凸曲	表裏:綠			地山直上 壁	
104 磁器	盤体	脚部	完	4.23	4.45	0.8	21.4	楕円	内→外	凸曲	剥離は丁寧。	B	-2-30	地山直上 壁	

第17表 C 円盤状製品観察一覧

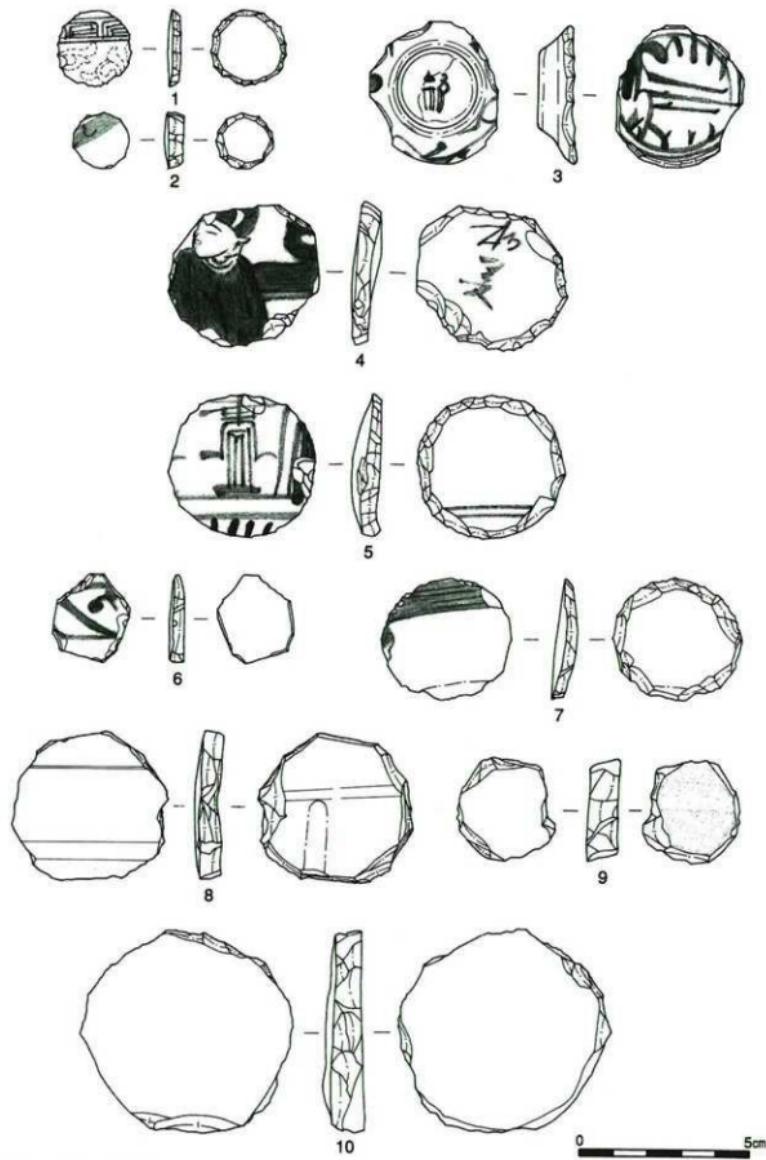
単位:mm、°

種類	形状	部位	長径	短径	厚さ	重さ	形	輪郭	断面	特色	観察事項	型	カラード	層		
105. 荒挽	滑鉢	胴部	完	4.1~4.25	0.8~21.5	円	外~内	曲	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層			
106. 荒挽	滑鉢	胴部	完	3.85	3.85	0.8	16.7	円	内~外	曲	鋸歯は粗い。	A	J-34	第1層		
107. 荒挽	滑鉢	胴部	完	3.55	3.45	0.8	14.2	円	外~内	曲	第76図12。	A	J-32	第3層		
108. 荒挽	滑鉢	胴部	完	3.8	3.8	1.1	19.7	円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層		
109. 荒挽	滑鉢	胴部	完	3.6	3.2	0.8	18.7	不定形	外~内	平	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層		
110. 荒挽	滑鉢	胴部	完	3.7	3.95	0.8	15.4	円	外~内	平	鋸歯は丁寧。滑鉢の使用痕あり。			表探		
											第76図13。					
111. 荒挽	滑鉢	胴部	破	4.55	5.35	1	32.1	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	瓦		
112. 荒挽	滑鉢	胴部	破	3.7	4	0.7	15.3	不定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層		
113. 荒挽	滑鉢	胴部	破	3.5	3.7	0.8	14.7	円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	B	J-30	荒		
114. 荒挽	滑鉢	胴部	破	3.18	3.4	1.1	13.2	円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層		
115. 荒挽	滑鉢	胴部	破	4.3	3.9	0.8	11.3	円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	A	J-31	第2層		
116. 荒挽	滑鉢	胴部	破	3.55	1.7	0.7	8.5	7	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層	
117. 荒挽	滑鉢	胴部	未	4.4	4	0.8	17.2	不定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層		
118. 荒挽	不明	胴部	完	5.45	5.19	1	11.44	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。			表探		
119. 荒挽	不明	胴部	完	5.5	4.45	1	21.55	円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	n-29	茶褐色		
120. 荒挽	不明	胴部	完	4.9	5.85	1	14.6	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層		
121. 荒挽	不明	胴部	完	5.2	4.4	1	14.55	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	i-29	茶褐色		
122. 荒挽	不明	胴部	完	4.8	5	1	22.95	円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	K-29	明茶		
											第76図14。					
123. 荒挽	不明	胴部	完	4.5	5.05	1	14.46	8	不定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	J-29	明茶	
124. 荒挽	不明	胴部	完	4.3	5	1	13.43	9	不定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	/~30	第2層	
125. 荒挽	不明	胴部	完	4.55	4.3	1	31.31	3	不定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	J-30	荒	
126. 荒挽	不明	胴部	完	4.4	4.45	1	32.4	円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	A	J-32	第2層		
127. 荒挽	不明	胴部	完	4.4	4.75	1	32.1	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	H-29	第2層		
128. 荒挽	不明	胴部	完	4.4	4.4	1	27.7	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	A	J-32	第2層		
129. 荒挽	不明	胴部	完	3.85	3.8	1	23	滑円	面面	曲	鋸歯は丁寧。	B	H-29	灰茶		
130. 荒挽	不明	胴部	完	3.2	3.6	0.9	16.2	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	H-30	茶褐色		
131. 荒挽	不明	胴部	完	4	3.7	1	21.2	9	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。鋸歯摩耗。	A	J-34	第2層	
132. 荒挽	不明	胴部	完	3.4	3.55	1	16.7	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	H-30	茶褐色		
133. 荒挽	不明	胴部	完	3.3	3.15	1	15.3	滑円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	B	T-29	明茶		
134. 荒挽	不明	胴部	完	2.55	2.75	0.8	8.5	円	内~外	平	鋸歯は丁寧。	B	/~30	荒乱地土?木の根		
											荒乱					
135. 荒挽	不明	胴部	完	2.65	2.65	0.7	6.1	滑円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	B	J-30	荒		
											第76図11。					
136. 荒挽	不明	胴部	完	5.4	5.2	1	24.45	6	不定形	外~内	曲	鋸歯は粗い。	B	n-29	荒	
137. 荒挽	不明	胴部	完	5.1	5.1	1	13.39	8	不定形	外~内	平	鋸歯は粗い。	A	J-32	第3層	
138. 荒挽	不明	胴部	完	4.7	4.8	1	31.9	9	方形	面面	鋸歯は粗い。	A	J-33	第3層		
139. 荒挽	不明	胴部	完	4.45	4.5	1	27.6	6	不定形	外~内	平	鋸歯は粗い。	A	J-31	第1層	
140. 荒挽	不明	胴部	完	4.6	4.5	1	24.6	円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	A	J-34	地土混じり		
											り					
141. 荒挽	不明	胴部	完	3.95	4.1	1	21.7	円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	A	J-32	第1層		
142. 荒挽	不明	胴部	完	2.7	2.5	0.8	8.2	不	定形	面面	鋸歯は粗い。	A	J-31	第2層		
143. 荒挽	不明	胴部	完	2.5	2.45	1	8.1	滑円	外~内	曲	鋸歯は粗い。	A	A-31	荒		
144. 荒挽	不明	胴部	破	3.9	3.55	0.8	14.2	円	外~内	平	鋸歯は粗い。	B	/~30	第2層		
145. 荒挽	不明	胴部	破	6.9	6.6	1	11.16	円	外~内	曲	鋸歯は粗い。	A	A-31	荒		
											第76図15。					
146. 荒挽	不明	胴部	破	5.75	5	1	33.5	滑円	外~内	平	鋸歯は粗い。	B	/~30	第2層		
147. 荒挽	不明	胴部	破	4.5	5.1	1	32.3	不	定形	外~内	曲	鋸歯は粗い。	B	H-30	第2層	
148. 荒挽	不明	胴部	破	3.85	4.45	1	25.4	滑円	外~内	曲	鋸歯は粗い。	A	H-22	第2層		
149. 荒挽	不明	胴部	破	4.45	3.2	0.8	15.8	滑円	外~内	平	鋸歯は粗い。	B	H-30	第2層		
150. 荒挽	不明	胴部	破	3.8	3	1	15.6	方形	面面	平	鋸歯は丁寧。	B	B-29	灰茶		
151. 荒挽	不明	胴部	破	3.2	2.9	1	13.18	滑円	面面	平	鋸歯は丁寧。鋸歯摩耗。	B	H-30	第2層		
152. 荒挽	不明	胴部	破	3	3	1	13.7	滑円	外~内	平	鋸歯は丁寧。	A	J-31	第3層		
153. 荒挽	不明	胴部	破	4.25	2.6	1	11.4	5	滑円	外~内	平	鋸歯は丁寧。				
154. 荒挽	不明	胴部	破	4.7	4.7	1	30.1	不	定形	外~内	平	鋸歯は粗い。	B	/~30	第2層	
155. 荒挽	不明	胴部	破	5.3	2.7	0.7	14.6	1	滑円	外~内	曲	鋸歯は丁寧。			表探	
156. 荒挽	不明	胴部	破	5.1	2.3	0.8	12.7	不	定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	B	H-30	荒	
157. 荒挽	不明	胴部	破	4.85	3.45	1	28.1	8	方形	面面	平	鋸歯は粗い。	A	J-32	第2層	
158. 荒挽	不明	胴部	未	5.6	6.3	1	2.45	不	定形	外~内	曲	鋸歯は粗い。	A	J-32	第3層	
159. 荒挽	不明	胴部	未	4.45	4.4	1	23.35	4	方形	外~内	曲	鋸歯は粗い。	A	J-31	荒	
160. 荒挽	不明	胴部	未	4.25	4.3	1	22.3	6	不	定形	外~内	曲	鋸歯は粗い。	B	/~30	第2層
161. 荒挽	不明	胴部	未	3.9	4.4	1	21.2	不	定形	面面	平	鋸歯は粗い。	B	A-29	灰茶	
162. 荒挽	不明	胴部	未	3.5	4.45	1	22.28	9	不	定形	面面	平	鋸歯は粗い。	B	A-29	茶褐色
163. 荒挽	不明	胴部	未	4.2	3.7	1	27.5	不	定形	外~内	平	鋸歯は粗い。	A	A-31	表探	
164. 荒挽	不明	胴部	未	3.45	3.6	0.9	13.9	不	定形	外~内	曲	鋸歯は粗い。	B	/~30	第2層	
165. 施釉陶器	不明	口縁	未	2.5	2.2	0.4	3.3	不	定形	面面	曲	表に文様。 第75図6。	A	t-31	第2層	
											黒					
166. 施釉陶器	不明	底座	完	3.6	3.9	0.9	14.3	不	定形	外~内	曲	鋸歯は丁寧。	A	J-31	第3層	
167. 施釉陶器	不明	底座	完	3.45	3.7	0.4	7.8	滑円	外~内	曲	表裏:灰					
											表に文様。 鋸歯は丁寧。	A	J-31	第3層		
168. 施釉陶器	不明	胴部	完	3.4	3.8	0.9	13.8	滑円	外~内	曲	表裏:灰	B	/~30	瓦層		
169. 施釉陶器	不明	胴部	完	2.65	2.55	0.5	4.8	円	外~内	曲	表裏:茶	A	J-32	第2層		
170. 施釉陶器	不明	胴部	完	1.7	1	0.7	1.7	円	外~内	曲	表裏:黒	A	J-32	第1層		

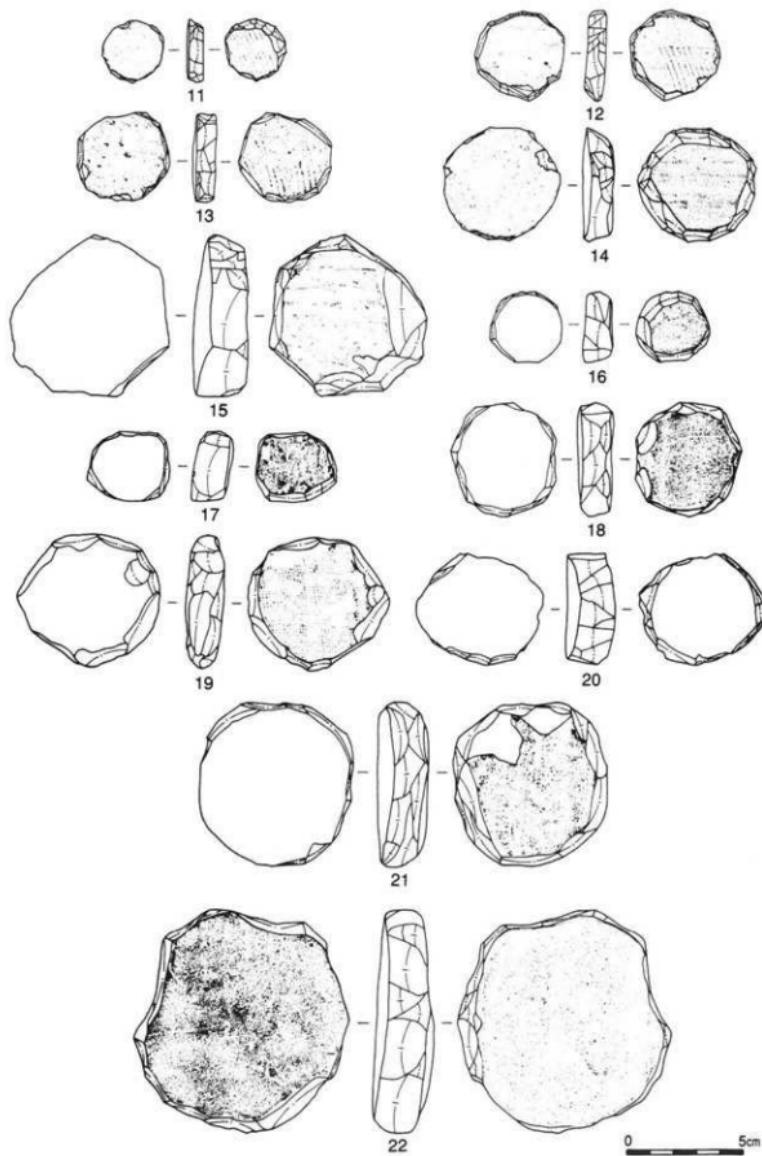
第17表 d 円盤状製品観察一覧

単位:mm, g

登録番号	種類	器形	部位	厚	長径	短径	重さ	形状	腹足	断面	釉色	観察事項			版	グリッド	通
												裏	外	内			
171	施釉陶器	不明	胴部	完	4.2	6.5	0.6	17.8	不定形	外→内	高曲	褐色	裏に輪だれ。剥離は無い。	A	7-32	第2層	
172	施釉陶器	不明	胴部	破	3.4	2.5	0.5	5.8	円	外→内	高曲	黒	剥離は丁寧。	A	3-33	第1層	
173	施釉陶器	不明	胴部	破	2.35	2.15	0.5	1.9	方形	内→外	高曲	表裏:灰	剥離は丁寧。	A	2-31	第3層下部、暗灰色土	
174	施釉陶器	不明	胴部	破	2.55	3.65	0.8	12	円	両面	高曲	東:黒	剥離は無い。	A	2-26	第2層	
175	施釉陶器	不明	胴部	破	3.1	3.35	0.5	9.7	不定形	外→内	高曲	灰	剥離は丁寧。	A	3-31	第1層 瓦だまり	
176	施釉陶器	不明	胴部	未	2.4	2.1	0.8	5.2	不定形	内→外	高曲	表裏:黑		A	1-23	第1層 禮品	
177	磁器	不明	胴部	完	2.35	2.85	0.5	9.3	円	外→内	高曲		剥離は丁寧。	A	2-33	第2層	
178	色絵	不明	胴部	完	2.25	2.15	0.4	2.2	円	外→内	高曲		表に雷文帯と「点描地文」。 剥離は丁寧。	A	2-31	第2層	
179	染付	皿	底部	完	4.4	4.1	0.7	16	椭円	内→外	平		中国産。表に人物像、裏に「和美」の銘。剥離は丁寧。 18C頃。湧田1993年第57回参照。 第75図4_a	A	3-31	第1層	
180	染付	小杯	底部	破	2.65	2.6	0.3	6.3	円	外→内	凹		中国産。剥離は無い。17C代。	A	2-31	2号窯から木の根	
181	染付	小碗	底部	完	4.1	3.65	0.4	11.1	椭円	内→外	凹		表に「福」。剥離は無い。	A	2-31	第2層	
182	染付	不明	底部	完	2.7	2.2	0.8	6	不定形	両面	平		剥離は無い。	A	2-31	第2層	
183	染付	不明	底部	破	2.19	1.15	0.3	1.2	円	外→内	平		剥離は丁寧。	A	2-32	第2層	
184	染付	不明	底部	未	2.85	3.2	0.8	8.9	不定形	内→外	平		B	3-30	茶褐色土		
185	染付	不明	底部	未	2.85	2.7	0.7	6.9	不定形	前面	平		A	2-32	第2層		
186	染付	不明	胴部	完	3.5	3.55	0.6	8.8	方形	外→内	高曲		剥離は丁寧。	A	2-31	禮品	
187	染付	不明	胴部	完	2.55	2.5	0.5	4.7	円	外→内	高曲		剥離は丁寧。	A	2-31	混じりけ	
188	染付	不明	胴部	完	2.45	2.4	0.4	3.2	円	外→内	高曲		剥離は丁寧。	A	2-31	第1層	
189	染付	不明	胴部	完	2.25	0.7	3.6	椭円	外→内	高曲		福建・広東系。「蓮弁文」 の崩れた文様。剥離は無い。 湧田1993年第54回参照。	n30.31	第2層			
190	染付	不明	胴部	完	1.6	1.55	0.5	1.9	円	外→内	高曲		剥離は丁寧。				
191	染付	不明	胴部	破	2.35	1.5	0.3	2.5	円	外→内	高曲		剥離は丁寧。	A	2-33	第1層	
192	染付	不明	胴部	破	1.9	0.9	0.5	0.9	円	両面	高曲		剥離は丁寧。	A	2-32	第2層、砂利混じり	
193	染付	不明	胴部	未	2.9	2.8	0.4	4.8	不定形	外→内	高曲						
194	染付	不明	胴部	未	2.4	3.3	0.4	3.9	方形	外→内	高曲			A	2-32	第1層	
195	染付	不明	胴部	未	2.6	2.45	0.65	9.2	不定形	外→内	高曲			A	2-31	第2層	
196	染付	糊	胴部	完	4.1	4.25	0.7	14.9	円	外→内	高曲		福建・廣東系。表に「寿字文」。 剥離は丁寧。18~19C前半。湧田1993年第54回参照。 第75図5_a	A	3-32	第3層	
197	染付	糊	胴部	完	3.55	3.4	0.4	7	円	外→内	高曲		福建・広東系。表に「寿字文」。 剥離は丁寧。18~19C前半。湧田1993年第54回参照。	A	2-31	第3層 燒土混じり	
198	染付	糊	胴部	完	2.95	2.5	0.4	4.5	椭円	外→内	高曲		福建・広東系。「蓮弁文」 の崩れた文様。剥離は丁寧。 18~19C頃。	B	2-28	茶褐色	
199	土器	不明	胴部	完	3	3.3	0.9	11	椭円	両面	平		剥離は無い。	A	2-33	第2層	
200	土器	不明	胴部	破	3.9	6	0.8	21.6	円	外→内	高曲		剥離は丁寧。			表採	
201	陶質土器	不明	胴部	未	5.4	5.8	1.3	41.6	不定形	外→内	高曲		B	/-30	第2層		
202	白釉	不明	底部	未	3.2	2.95	1.2	21.1	不定形	両面	平					表採	
203	無釉陶器	不明	胴部	未	3	3.2	2.5	0.5	7.1	円	外→内	高曲		B	/-30	第2層	
204	無釉陶器	不明	胴部	破	4.02	4.6	0.7	19.1	椭円	外→内	高曲		剥離は無い。	A	2-31	第2層	
205	無釉陶器	不明	胴部	破	3.7	3.4	0.9	15.1	円	両面	高曲		剥離は無い。	A	2-32	第2層	
206	無釉陶器	不明	胴部	破	2.7	3.8	0.9	9.8	円	両面	高曲		剥離は丁寧。	A	2-32	第2層	
207	無釉陶器	不明	胴部	破	1.95	3.35	1.3	32	円	外→内	高曲		剥離は無い。	A	2-34	第2層	
208	無釉陶器	不明	胴部	未	4.1	4.32	0.9	23.6	不定形	両面	高曲			B	/-30	瓦	
209	無釉陶器	不明	胴部	未	3.9	4.4	0.8	19.2	方形	外→内	高曲			A	2-32	第2層	
210	無釉陶器	不明	胴部	未	3.65	3.2	0.8	12.2	不定形	外→内	高曲			B	/-28	灰茶褐色	
211	無釉陶器	不明	胴部	未	2.8	3.9	0.8	11.1	不定形	外→内	高曲			B	2-30	號	
212	無釉陶器	不明	胴部	未	3.05	3.1	0.9	12.2	不定形	外→内	高曲			A	2-31	混乱 混じり混じり	



第75図 円盤状製品1



第76図 円盤状製品 2

第22節 埋 墓

1点だけ確認でき、第77図1に示した。丸底状の底部から直線的に外側へ開いて口縁部に至る。口縁はラフなつくりの平縁で、口唇部は舌状を呈す。推算口径が約4cm、高さが約2cmで、行政棟地区から報告されているものからすると小型のものである。また、底面部の厚みが1cm以上あり、実際の内側の深さは1cm弱である。内底面に近い部分に外側から径約5mmの孔を穿つ。全体が黒灰色になっており、内外面に釉状に溶解したものの付着する部分も見受けられる。ハ-34第3層から出土。

第23節 石 製 品

第77図2・3の2点が出土した。

同図2は円形状に加工したもので推算外径59.2mm、内径22.7mm、最大厚9.7mm、重さ10.1gを計る。石質は硬砂岩の可能性が高い。ヒ-31第4層焼土の出土である。用途は不明である。

同図3は硯の墨受け部の角部分にあたるもので厚さは最少厚6.8mm、縁の部分は9.4mm、重さ14.2gを計る。石の色は灰紫色を呈し、縁位に研磨痕が認められる。表面採集である。

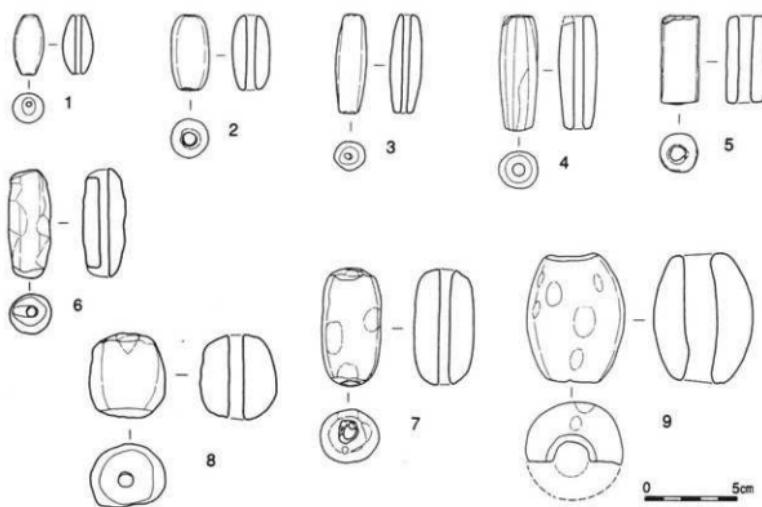
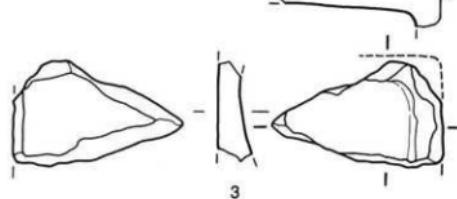
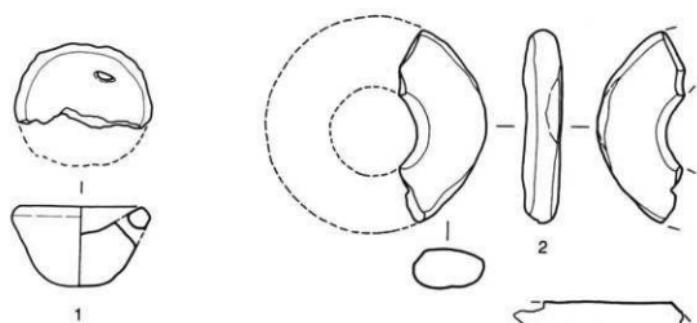
第24節 土 錘

本品は出土総数36個でA区は第2層-2個、第3層-6個、第4層-4個、第5層-5個、攪乱-1個、B区-第2層-1個、不明-1個、区不明-9個が出土した。

これによると8.2g～101.6gまで出土するが、完形を重さ別にみると最も多い重量は20g台-14個、10g台-9個、10g以下-4個、30g台-4個、50g台-1個、60g台-4個、80g-1個である。また大きさでみると壺屋古窯で仮分類したaタイプ(短径/長径の比率が1.2～1.9)では30×17.1mmが最も小さく、68.6×52.3mmが最も大きい。bタイプ(短径/長径の比率が2.0～3.5)では32.9×16.6mmが最も小さく、67×21.5mmが最も大きい。量的にはaタイプ-15個、bタイプ-21個である。大きさについては細分が可能と思われ、第78図に大きさと重量の散布グラフを示した。また、土錘の作り方をみると横に切り痕のあるものは表面を削り痕で調整し、また、孔の部分は丸味があるものは表面を指圧などで調整する傾向がみられる。本遺跡では後者の方が21個と主流を示す。質を比較すると壺屋古窯のものは陶質であるが、本遺跡出土のものは瓦質である点で異なる。

註

註1 那覇市教育委員会「壺屋古窯群I」『那覇市文化財調査報告書第23集』1992年3月



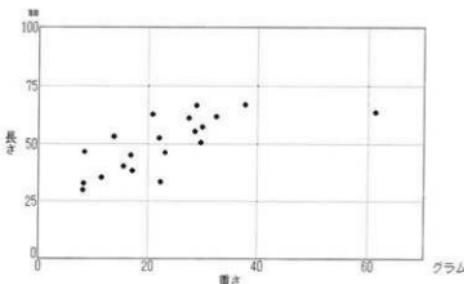
第77図 上：坩堝（1）、石製品（2、3） 下：土錘

第18表 土錐観察一覧

単位:mm, g

試験番号	リットル	層	層備考	高さ	幅	幅	孔径	孔2	重さ	色調	孔	観察事項	備考
1 A	t-31	第4層		完	67	21.5	3.1	7	b	37.6	灰褐色	切り痕	焼成は良好。
2 B	n-29	第2層	明茶褐色	完	55.3	20.2	2.7	4.3	b	28.5	明灰褐色	切り痕	焼成は良好、砂質、表面に若干削りの跡。
3 A	t-31	第3層下 り①	焼土混じ	完	52.6	22.4	2.3	8.4	b	22	明茶褐色	切り痕	焼成は良好、砂質。
4 A	n-32	第3層		完	53.2	15.9	3.3	3.9	b	13.7	明茶褐色	切り痕	焼成は良好、砂質。図3
5 A	t-31	第5層b		完	50.7	22.7	2.2	4.9	b	29.5	灰褐色	丸味	焼成は良好、両端に溝。
6 A	/-31	溝状焼 土混じり		破	54.9	22.2	2.5	5.7	b	25.8	灰褐色	切り痕	焼成は良好、白い混入物が確認できる。
7				破	62.5	48.3	1.3	15.3	a	101.6	茶褐色	丸味	焼成はやや脆い。
8 A	t-31	第5層b		破	59	44	1.3		a	50.6	暗灰褐色	丸味	焼成やや良好。
9 A	t-31	第5層	焼土混じ り	破	45.7		0		a	9.9	灰褐色	切り痕	焼成やや良好。
10 A	=30.31	第3層 下部	暗灰褐色	破	34.2	32.2	1.1	8.3	a	23.1	灰褐色	丸味	焼成やや良好、砂質。
11 A	/32.33	第5層		完	32.9	16.6	2		b	8.3	茶褐色	切痕	焼成は弱い。図1
12 A	t, /32. 33	第4層	焼土混じ り	破	45.6	40.2	1.1	9.6	a	66.2	灰褐色	丸味	焼成は良好。図8
13 A	t-31	第3層 下 土	暗灰褐色	完	62.9	19.1	3.3	5.1	b	20.8	明灰褐色	丸味	焼成は良好、砂質。
14				完	30	17.1	1.8	5.2	a	8.2	灰褐色	丸味	焼成は良好。
15 A	-31	攪乱		破	45.4		0		a	21.4	灰褐色	丸味	焼成はやや脆い。
16 A	-32	第3層		破	49.5	15	3.3	4.8	b	11.7	茶褐色	不明	焼成は脆い。
17		表採		完	46.6	15.2	3.1	4.1	b	8.5	灰褐色	切り痕	焼成は良好、砂質。
18 A	-34	第4層		完	61.7	19.4	3.2	5.4	b	32.4	黒褐色	切り痕	焼成は良好、表面は削り痕がある、自然釉。図4
19				破	58.3	38.2	1.5	11.4	a	11.4	暗灰褐色	丸味	焼成は良好。
20 A	/-32			破	58.6	52.3	1.3	17.8	a	89.2	茶褐色	丸味	焼成は弱い。図9
21				破	58.7	33.4	1.8		a	62.5	暗灰褐色	丸味	焼成はやや良好、砂質。
22 A	t-32	第3層 下部	砂利面中	完	57.5	20.4	2.8	4.8	b	29.8	灰褐色	丸味	焼成はやや良好、表面は手の握りが明瞭、両端の孔から溝がある。図6
23 A	/-31	溝状造構 内焼土混		完	52.6	18.7	2.8	4.4	b	22	灰褐色	切り痕	焼成はやや良好。
24 A	=30.31	壁地山直 上		完	33.4	22.8	1.5	8	a	22.2	暗灰褐色	丸味	焼成良好。
26 A	/-32	第5層		完	66.6	18.8	3.5	7.1	b	28.7	暗灰褐色	丸味	焼成良好、指跡。
27 A	t-34	第2層	砂利混じ り	完	63.7	31.5	2	5.8	b	61.3	灰褐色	丸味	焼成はやや良好。図7
28				完	61.2	21.9	2.8	4.3	b	27.4	灰褐色	丸味	焼成はやや良好。
29 A	-33	第3層 下部		完	46.2	19.5	2.4	7.9	b	23.1	灰褐色	切り痕	焼成は良好。
30 B	/-29	茶褐色		破	36.6	16.3	2.2	3.9	b	10.6	灰褐色	切り痕	焼成は良好。
31				破	26.5	0	10.9	a	12.2	茶褐色	切り痕	焼成は非常に良好、陶質よい、孔は他に比べて大きい。	
32 A	t-37	燒土混じ り		完	44.8	20.2	2.2	4.2	b	16.8	明灰褐色	丸味	焼成はやや良好、砂質。
33		表採		完	35.3	18.2	1.9	5.4	a	11.6	明灰褐色	丸味	焼成はやや良好、砂質。
34 A	/-32	第2層		完	38.1	20.6	1.6	8.6	a	17.2	茶褐色	切り痕	焼成は良好、孔は中に瘤となる。
35				破	42.4	37.9	1.1	3.3	a	22.8	明灰褐色	丸味	焼成は良好。
36 A	=31.32	第4層		完	40.1	19.8	2	6.4	b	15.6	灰褐色	丸味	焼成は良好、砂質。図2

注:「孔2」の項は直径/長径の比率で a タイプ (1.2~1.9) 、 b タイプ (2.0~3.5) として分類



第78図 土鍤の長さと重さの相関

第25節 窯道具

4点だけ確認でき、第79図1～4に示した。3に示した小型のハマは注意されるが、他の3点はいずれも行政棟地区から報告されているものの中に類例資料が認められる。以下に今回得られたものの特徴について略述する。

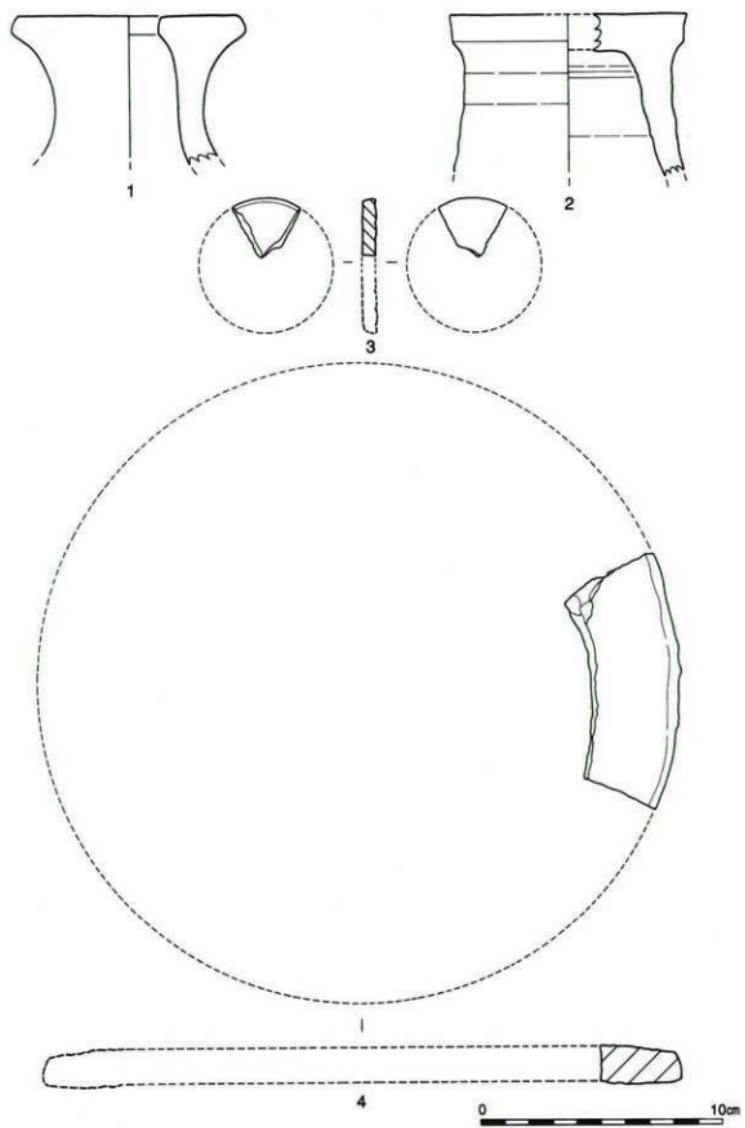
1・2はトチン、3・4はハマの資料である。1は瓦質のもので全体的に丁寧なナデ仕上げが施されている。円盤部は平滑な面を有し、端部は丸味を持って整形している。端部下方から内側へゆるやかなカーブを描くように底面部に向かい、脚部中央付近で最も径を減じる。円盤部の径は9cmを測り、ほぼ中央に径約2cmの孔があいている。灰色の焼きあがりで、脚部は中空。調整痕の状況からすると脚部と円盤部は張り付けのようである。脚部下方が破損しており、高さは不明である。2は陶器質の橙褐色の焼きあがりをなすもので、1よりも堅く焼き締まる。胎土中にわりと大粒の鉱物が散見される。円盤部の周縁は約1cm幅ではほぼ平坦面に整形し、その下方は若干内側へすぼまるものの、そこから底面部へは外側へ開き気味になる。脚部の内外面はロクロ引きのままで、円盤部には糸引き痕が明瞭に残る。円盤部は中央部の方へ若干くぼむ感じになり、ヘラ状の工具による弧状の沈線が1本認められる。推算の径は約9cmで、1と同じような大きさである。

3は小型のハマで推算の径は約5cmである。表面は丁寧にナデているが、裏面はそれほど意識されていない。縁部は裏面の方が小さくなるように斜めに削って調整しているが、わりと雑である。表面には縁部と同心円状の沈線が約5mm間隔で2本認められるが、本来何本施されたかは不明。6mm前後の厚みを有し、胎土には白色の微砂粒が比較的多く含まれる。黒褐色を呈し、わりと堅い感じのものである。4は径の推算が約26cmを測る大型のものである。つくりは雑で、両面の調整もあまり意識されていない。焼成時の影響か若干歪になり、はらみの部分も見受けられる。表面には同心円状の沈線が密に施されており、胎土には白色の微砂粒を多量に含む。類例の資料が行政棟地区や黒石川窯跡、壺屋古窯群Ⅰなどから得られている。

註

註1. 「黒石川窯址 沖縄県石垣市黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書」『石垣市文化財調査報告第15号』 石垣市教育委員会 1993年3月。

註2. 「壺屋古窯群Ⅰ－個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査－」『那覇市文化財調査報告書第23集』 那覇市教育委員会 1992年3月。



第79図 窯道具

第26節 脊椎動物遺体

金子 浩昌

1. はじめに

湧田古窯跡から出土した動物遺体についての第2報であるが、現在議会棟のある場所であって、前回報告した地点に接続する。前回と同様に獸骨特にブタを中心とした獸骨が多く出土していて、この時期の動物相を特徴付けている。計測部記号は A. V. d. Driesch (1976) による。

出土した動物遺体の種名表

A. 節足動物門

イワガニ科
モクズガニ

B. 脊椎動物門

- I. 軟骨魚綱
サメ目
メジロザメ科
属・種不明
- II. 硬骨魚綱
スズキ目
ハタ科
属・種不明
エフキダイ科
ハマエフキダイ
- III. 哺乳綱

1. クジラ目
ゴンドウクジラ科
属・種不明

2. 食肉目

イヌ科
イヌ
ネコ科
ネコ

3. 奇蹄目

ウマ科
ウマ

4. 偶蹄目

イノシシ科
ブタ
ウシ科
ウシ

A. Phylum ARTHROPODA

Family Grapsidae
Eriocheir japonicus

B. Phylum VERTEBRATA

- I. Class Chondrichthyes
Order Lamniformes
Family Charcharhinidae
Gen. et sp. indet.
- II. Class Osteichthyes
Order Perciformes
Family Serranidae
Gen. et. sp. indet.
Family Lutjanidae
Lethrinus mebulosus

III. Class Mammalia

1. Order Cetacea
Family Globicephalidae
Gen. et. sp. indet.
2. Order Carnivora
Family Canidae
Canis familiaris
Family Felidae
Felis catus
3. Order Perissodactyla
Family Equidae
Equus caballus
4. Order Artiodactyla
Family suidae
Sus scrofa var. domesticus
Family Bovidae
Bos taurus

2. 動物遺体の概要

A. 節足動物

甲殻類

モクズガニ Eriocheir Japonicus

左側の可動指1点がある。

B. 脊椎動物

a. 魚類

・メジロザメ科 Charcharhinidae

椎体が4点出され、椎体径32mmが最大である。

・ハタ類 Serranidae

大型の歯骨が出土している。

・ハマフエフキダイ Lethrinus mebulosus

大型の歯骨1点がある。

第19表 魚類出土量

部位	出土地 層序	A 区			B 区			その他		合 計	
		表 採	第2層		第 3 層	第 1 層	第 4 層	不 明	表 採		
				b 層							
スズキ目	メダカ科	種不明	脊椎		3			1		4	
スズキ目	フジツブ科	ハラフジツブ	R L			1				1 0	
	ゲイ	頭骨								0 0	
	種不明	骨	R L		1					0 0	
アカハタ科	アカハタ科	ナシヨウ	咽	R L					1	0 1	
	アカハタ	頭骨								0 0	
	種不明	骨	R L		1			1		1 0	
ハタ科	ハタ	種不明	頭骨	R L	1		1			2 0	
		種不明	頭骨	R L			1			0 0	
カクレハタ目	ハリセンボン科	ハリセンボン	頭骨	破片			1			1	
種不明	脊椎					1	1		1	4	
	尾椎							1		1	
	破片				1	3				4	
個 体 数		1	1	1	1	1	1	1	1	8	
R 前上顎骨 L 前上顎骨					R 上咽頭骨 L 上咽頭骨		下咽頭骨				
凡例： R歯骨 L歯骨											

b. 哺乳類

・イヌ Canis familiaris

イヌの遺骸は全層を通じて10数点を検出しているのみであり、個体数を推定できる程のまとまった標本もなかった。頭蓋骨片1点と肋骨5点、肩甲骨、上腕骨、尺骨、寛骨各1点という数である。やはり遺跡と直接的なつながりがないということなのであろう。

第20表 イヌ出土量

部位	A区														合計				
	擾乱		第1層		第2層				第3層		第5層								
	R	L	不明	R	L	R	L	b	R	L	不明	R	L	R	L	不明	R	L	
頭蓋骨	頭頂間骨							1									0	0	1
肋骨	破片		(1)						2		1						0	0	5(1)
肩甲骨	遠位端							1									0	0	1
上腕骨	骨体～遠位部											1					0	1	0
尺骨	遠位端											1					1	0	0
骨体						1	1										1	1	0
蹠骨	臼部										1						0	1	0
合計		0	0(1)	0	1	1	0	1	0	0	3	0	1	1	0	1	2	3	7(1)

凡例：（）キズあり

・ネコ Felis catus

B区第2層で1個体が出土している他は、A・B区ともに断片的に出土しているのみである。標本は四肢骨で上腕骨1点、大腿骨1点、頸骨で数点の破片があったにとどまった。

第21表 ネコ出土量

部位	A区						B区						合計				
	第2層		表採		第2層		b		c								
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	不明	R	L	不明	R	L	
頭蓋骨	前頭骨								1		0	1	0				
	側頭骨								2		0	2	0				
上顎骨									1	1	1	1	0				
脊椎骨	頸椎										5	0	0	5			
	胸椎										8	0	0	8			
	腰椎										10	0	0	10			
	仙椎										1	0	0	1			
	尾椎										11	0	0	11			
肋骨	破片										14	0	0	14			
肩甲骨	骨体～遠位端						1	1			1	1	0				
上腕骨	完存								1		0	1	0				
	近位部～遠位端						1	1			2	0	0	0			
	骨体			1					1		0	2	0				
腕骨	完存								1	1	1	1	0				
尺骨	完存								1	1	1	1	0				
中手骨											8	0	0	8			
蹠骨									1	1	1	1	0				
大腿骨	完存								1	1	1	1	0				
	近位部		1							1	0	2	0				
	近位部～骨体				1				1		2	0	0				
	近位骨端のみ			1					1		0	2	0				
脛骨	完存								1		1	0	0				
	近位端～骨体					1		1		0	2	0					
腓骨											3	0	0	3			
踵骨	完存								1	1	1	1	0				
距骨	完存								1	1	1	1	0				
中足骨	II								1	1	1	1	0				
	III								1	1	1	1	0				
	IV								1	1	1	1	0				
	破片									1	0	0	1				
指骨	基節骨									6	0	0	6				
	中節骨									4	0	0	4				
	末節骨									1	0	0	1				
不明										4	0	0	4				
合計		0	1	0	2	1	0	1	14	19	76	16	23	76			

第22表 ネコ歯牙出土量

部位 出土地 部位	右							左							合							
	I I 2 3 C.			P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I I 2 3 C.			P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3		
	I	I	2	I	3	C	m	2	m	3	m	4	I	I	2	I	3	C	m	2	m	3
上顎骨	不明			1			1	1					1			1	1				6	0
下顎骨	A	第2層																			0	0
	b				1	1															4	0
	B	第2層																			2	0
不明																					3	0
	不明			2																	0	0
合計	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	11

ウマ Equus Caballus

ウマの遺骸は大型家畜の中ではもっとも少ないと、出土の傾向としては古くに現れ、A区第6層に1点の遺骸がみられ、第4・4層とウシと同程度にみられ、第3層でやや多くなる。骨の出土は少ないが、歯牙の数からみた最少個体数はウシと大きく変わらない。下顎骨破片がやや目についたのは骨を区別しやすいからである。歯のうちは1点もなく、上下ともP3、P4がもっとも多く、咬耗Ⅰ～Ⅱ段階が多い。

中手骨 Bd: 41.21

大腿骨 L : Bp : 95.59

踵骨 R : GH : 52.50

Lmt : 52.01
GB : 55.53
BFd : 45.49

中足骨 SD : 28.92 ノ-31. 燐土混じり

基節骨 Bp : 44.43 ヌ - 33. 塵土混じり

中節骨 GL : 42.18 ヌ-31, 第6層

Bp : 42.94
SD : 38.84
Bd : 42.77

第23表 ウマ出土量

第24表 ウマ歯牙出土量

部位		右							左							合計							
出土地	層位	11	12	13	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	11	12	13	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
		1	1	2	3c	m2	m3	m4	1	1	2	3	4	1	1	2	3c	m2	m3	m4	1	1	2
上 頸 骨 区	擾乱																						0
	第3層	1				1	1			1												1	
	第5層							1														4	
	埴土混じり																					0	
	第6層								2	2												1	
	不明					1	1															0	
B 区	擾乱																						2
	第2層		1						2	2												4	
	c							2	2	1	1	1										0	
	合計	0	1	1	0	0	0	0	0	1	5	5	3	3	0	1	1	0	0	0	0	33	
		0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
下 頸 骨 区	擾乱															1							1
	第1層																					0	
	第3層																					2	
	第5層																					0	
	b																					0	
	第2層							1	1	3	3				1							1	
B 区	c		1				1	1	3	5	5	1										4	
	不明											1										0	
合計		0	0	1	0	0	0	0	0	3	5	6	3	3	2	0	1	1	0	0	0	45	
		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	

・ブタ *Sus Scrota var. domesticus*

先に報告した本遺跡出土の標本と同じような性格の遺骸が出土している。ブタの出土も初期の堆積層にまで遡れるようで、A区で第6層、B区第4層、第5層で頭骨片が含まれ、第3層上部、B区第2層で多く出土していることを認めることができる。

(頭蓋)

頭頂骨がよく残されている。大型のもので、後頭骨鱗頭骨鱗部幅は65.0mmに達し、その全長は220mmに達するであろう。矢状縫合の化骨は不完全。萌出している臼歯の咬耗はほとんど見られず、エナメル質部分の咬耗を僅かにみる程度である。上下顎骨のM3は未萌出のものが大部分である。犬歯は雌雄共に細めで華奢である。

(四肢骨)

上腕骨遠位骨端滑車上孔はすべての標本が閉鎖している。四肢骨の近位骨端、遠位骨端の化骨している標本はない。

上顎・下顎骨及び歯の計測値（歯冠長×歯冠幅）

$$R \quad (dm^1 \sim M^2) \quad 46.61 \quad \text{瓦溜り}$$

$$dm^1 : 12.73 \times 9.53$$

$$M^1 : 15.19 \times 11.57$$

$$M^2 : 18.68 \times 14.14$$

$$R \quad (P^4 M^{1 \cdot 2}) \quad 44.56$$

$$M^1 : 32.92$$

L (P¹⁻⁴M¹⁻²(3)) 瓦溜り
 P¹-M²: 74.29
 (< P²P³P⁴>dm¹M¹⁻²) 瓦溜り
 M³は歯槽内完全埋没

湧田古窯跡 瓦溜り	現生リュウキュウイノシシ						
P ₄ -M ₂ : 47.87	P ₄ -M ₂ : 40.43						
M ₁ : 15.81×9.79	M ₁ : 12.65×8.68						
M ₂ : 20.22×12.72	M ₂ : 16.76×11.00						
M ₁ 骨体厚: 18.80	M ₁ 骨体厚: 18.00						
骨体高: 44.0	骨体高: 32.57						
M ₁ の++++段階で M ₂ 歯槽閉鎖の切れがみられる。							
イノシシ下顎骨dm ₄ -M ₂ R-32 第3層下部							
dm ₄ -M ₂ : 30.12							
dm ₄ : 15.97×7.46							
M ₁ : 13.91×9.32							
M ₂ : 28.43×14.05							
下顎犬歯	<table border="0"> <tr> <td>L 幅 12.11 (最大) ♀</td> <td>焼土層</td> </tr> <tr> <td>L 幅 10.92 (最大) ♀</td> <td>第2層 歯は全体に細く湾曲が強い。</td> </tr> <tr> <td>R 幅 10.79 (最大) ♀</td> <td>ネ-33 第2層</td> </tr> </table>	L 幅 12.11 (最大) ♀	焼土層	L 幅 10.92 (最大) ♀	第2層 歯は全体に細く湾曲が強い。	R 幅 10.79 (最大) ♀	ネ-33 第2層
L 幅 12.11 (最大) ♀	焼土層						
L 幅 10.92 (最大) ♀	第2層 歯は全体に細く湾曲が強い。						
R 幅 10.79 (最大) ♀	ネ-33 第2層						
桡骨	<table border="0"> <tr> <td>R SD: 16.38</td> <td></td> </tr> <tr> <td>R SD: 11.48</td> <td>焼土混じり</td> </tr> <tr> <td>L SD: 17.76</td> <td>表採</td> </tr> </table>	R SD: 16.38		R SD: 11.48	焼土混じり	L SD: 17.76	表採
R SD: 16.38							
R SD: 11.48	焼土混じり						
L SD: 17.76	表採						
尺骨	<table border="0"> <tr> <td>R DPA: 24.21</td> <td>ヒ-30 第2層</td> </tr> <tr> <td>L DPA: 45.0±</td> <td>ハ-30 第2層 骨体の湾曲が認められる。</td> </tr> </table>	R DPA: 24.21	ヒ-30 第2層	L DPA: 45.0±	ハ-30 第2層 骨体の湾曲が認められる。		
R DPA: 24.21	ヒ-30 第2層						
L DPA: 45.0±	ハ-30 第2層 骨体の湾曲が認められる。						
脛骨	<table border="0"> <tr> <td>L SD: 19.49</td> <td>ノ-28 灰褐色層 イノシシに比べて幅広く湾曲が弱い。</td> </tr> <tr> <td>SD: 14.93</td> <td>ノ-30 暗褐色土層</td> </tr> </table>	L SD: 19.49	ノ-28 灰褐色層 イノシシに比べて幅広く湾曲が弱い。	SD: 14.93	ノ-30 暗褐色土層		
L SD: 19.49	ノ-28 灰褐色層 イノシシに比べて幅広く湾曲が弱い。						
SD: 14.93	ノ-30 暗褐色土層						

・ウシ Bos taurus

A区第5層で僅かであるが出土していて、ウシ飼育の過れる時期が推定される。それ以後第3層の上部から第2層に多く、標本の大部分がここから出土している。B区での出土は少ないが、第2層b・c層を中心になっている。

アタに次ぐ量の遺骸が出土しているが、その全体量は少なく、また部位によって保存の状況は異なる。頭蓋はほとんど検出することがなかった。角などほとんどみられないのは、別に処理されているからであろう。しかし、下顎骨の出土は目立った。下顎歯の多かったのもそのためであり、下顎の部分が運ばれていますれば、何らかの調理に使われていたからであろう。

椎骨の出土は少ない。運び込まれる骨はごく限られていたのであろう。

歯牙の出土状況は別表に示したが、M 3の少ないことが目につく。乳歯も少ない。

肩甲骨	L GLP: 84.84	ヒ-31 第4層焼土混じり。
	BG: 56.82	
	SLC: 57.82	

肩甲骨	R	GLP : 69.36 BG : 50.99 SLC : 51.61	ヌ-34 瓦溜り
肩甲骨	R	SLC : 56.61 SLC : 59.24	ニ-34 第2 b層
以上はadのこれより小さい若いものあり。			
c + 4 (第1層)		幅 : 54.76	
距骨	L	GL : 48.44 Bd : 44.69	フ-31 トレンチ
距骨	R	GL : 62.65 Bd : 38.47	ネノ-30 撥乱
中足骨	pro Bp	: 45.59	ニ-34 第2 b層
	dis Bd	: 52.24	
		SD : 23.37	ネノ-30 撥乱 細く小さい。

第25表 ウシ歯牙出土量

第26表 ウシ or ウマ出土量

部位	出土地 層位	A区							B区							合 計					
		第2層		第3層		第4層		第5層		不 明	小 計		第2層		小 計						
		1層	溝 状 進 模	下 部	4層	5層	6層	7層	8層	9層	b	c	10層	11層	12層	13層					
頭蓋骨	不明	R	L	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	R	L	不明	不明	不明	不明	R	L	不明		
頭骨	側頭骨		1								0	1	0				0	1	0		
	破片										0	0	4	6	2	5	13	0	0	17	
脊椎骨	棘突起										0	0	0				1	0	0	1	
	破片										1	0	0	1			1	0	0	2	
肋骨	破片										0	0	1	1			1	0	0	2	
中手・中足骨	遠位骨端のみ										1		0	0	1		0	0	0	1	
	破片	1		1	3	1	4	1	2		2	0	0	15	1	2	4	7	0	0	
合	計	1	0	1	1	#	1	8	2	2	1	2	0	1	22	1	10	23	0	1	45

第27表 ブタ歯牙出土量

部位		右						左						左右 不明		合 計					
出土地 順序	層	I1 I2 I3 C I1 I2 I3 c			P1 P2 P3	P4	M1	M2	M3	I1 I2 I3 C I1 I2 I3 c	P1 P2 P3	P4	M1	M2	M3						
		m1m2	m3	m4						m2m3m4											
上 部	第1層						1									1					
	第2層				P1	2	1	4	1		3	2	2	2	1	19					
	b				1<1>1<1>>2		1<1>1<1>	2	2				4<3>>	<2>		5					
					1	2										6					
	第3層										1	1	1	1	1	1					
中 部	下部							2	1							1					
	第4層						1									0					
	第5層															0					
	不明						1						1	1	1	4					
													1	1	1	2					
下 部													1			8					
	B															8					
	第2層	b														1					
	c															0					
								1	1							0					
合計		2	0	0	0	0	0	1	2	2	5	10	7	2	5	2	6	0	0	57	
未明出		0	0	1	0	1	2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
遺 跡								1	1	2	2							1	2	12	
遺 物																				4	
遺 品																				1	
表 探																				1	
第1層																				2	
第2層																				0	
下 部	b																			0	
																				0	
	第3層																			0	
	下部																			0	
																				0	
骨	第5層	b																		0	
																				0	
	第6層																			0	
	不明																			0	
																				0	
B	第1層																			0	
	第2層																			0	
	表 探																			0	
	そ の 他																			0	
	第2層																			0	
合 計		4	0	1	0	9	0	0	0	0	1	3	3	3	1	5	2	0	0	0	34
未明出		0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
遺 跡																				19	
遺 物																				19	
凡例：<>未明出、△遺、○遺																				32	

第28表 ゴンドウクジラ出土一覧

部位	層	個数
R上顎骨	破片	1/30 燐土混じり

第29表 ネズミ出土一覧

部位	層	個数
L大腿骨	近位部	地山直上攢乱

第30表 ヒト出土一覧

部位	層	個数
歯	ハ-31	第3層
R上腕骨	ハ-34	第3層
基節骨	不明	1

第31表 トリ出土量

部位	出土地 層位	A区						B区						その他				合計
		東壁／攢乱			第2層			第2層c			不明			不明				
		R	L	不明	R	L	b 砂利混じり	R	L	不明	R	L	不明	R	L	不明	R	合計
中手骨	骨体	1															1 0 0	
大腿骨	遠位部		1	1													1 1 0	
脛骨	近位部					1											0 1 0	
	骨体									1							0 1 0	
中足骨	骨体																1 0 0	
破片			1														1 0 0	5
合計		1	0	1	1	1	81	1	0	1	0	0	3	0	1	1231	4	5

凡例： 8 : 雄

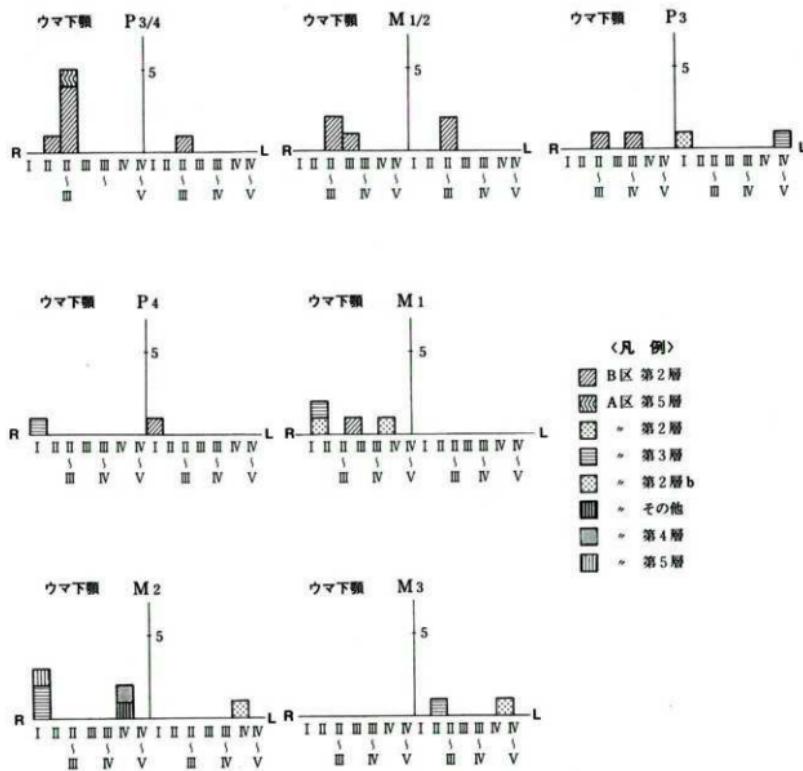
第32表 ヤギ歯牙出土量

部位	出土地 層位	右						左						合計	
		I1 I2 I3 C			P1 P2 P3 P4 M1 M2 M3			I1 I2 I3 C			P1 P2 P3 P4 M1 M2 M3				
		I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I		
上顎骨	A 第2層													1	
														0	
下顎骨	A 第3層 下部													1	
														0	
合計	A 第6層 区					1	1	1	1					9	
		0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	11	
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

第33表 ヤギ出土量

部位	出土地 層位	A区						B区						合計			
		トレンチ第3層			小計トレンチ			トレンチ第2層			小計トレンチ						
		R	L	R	L	R	L	R	L	b 砂利混じり	R	L	R	不明			
上腕骨	生存	0	0					1			0	1	0	0	1		
	近位端	0	0					1			0	0	1	0	0		
	破片	0	0			1					0	0	1	0	0		
脛骨	近位部～遠位部	0	0			1					1	0	0	1	0		
尺骨	遠位部	0	0								1	0	1	0	0		
中手骨	近位部	0	0			1					1	0	0	1	0		
対骨	上部	1	1	(1)	1	(1)	1				1	1	1	2	(1)		
	近位部～遠位部	0	0			1					1	0	0	0	0		
	遠位端	0	0			1					1	0	0	1	0		
	遠位部	0	0			1					0	0	1	0	0		
基節骨	近位部～遠位端	0	0			1					1	0	1	0	0		
	破片	0	0			1					0	0	1	0	0		
合計		0	1	1	(1)	1	(1)	0	1	5	1	2	0	1	1	0	6 4 4 7 5 (1) 4

凡例： () キズあり



第80図 ウシ歯の年齢構成グラフ

3. 収束

本古窯跡で出土した動物遺体は、伴出する輸入陶磁器の年代から16世紀頃と考えられており、また先に県庁舎行政棟建設地において知られた古窯跡に伴う動物遺体と同じ性格をもつものであった。獸骨であるブタ類を中心としてウシ、ウマなどの大型家畜が主体であって、ここでの肉の扱い方をよく示していた。これに付いては既に前回の報告の際ふれておいたことであった。

参考文献

- 金子浩昌 「伊波仲門門中墓出土のブタ遺存体」 [石川市古我地原内古墓 沖縄自動車道(石川-那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)] 沖縄県文化財調査報告書第85集 P177、沖縄県教育委員会 1987年12月。
- 金子浩昌 「湧田古窯跡出土の脊椎動物遺体」 [湧田古窯跡(I)-県庁舎行政棟建設に係る発掘調査-] 沖縄県文化財調査報告書第111集 P176-192、沖縄県教育委員会 1993年3月。

第34表 ブタ出土量

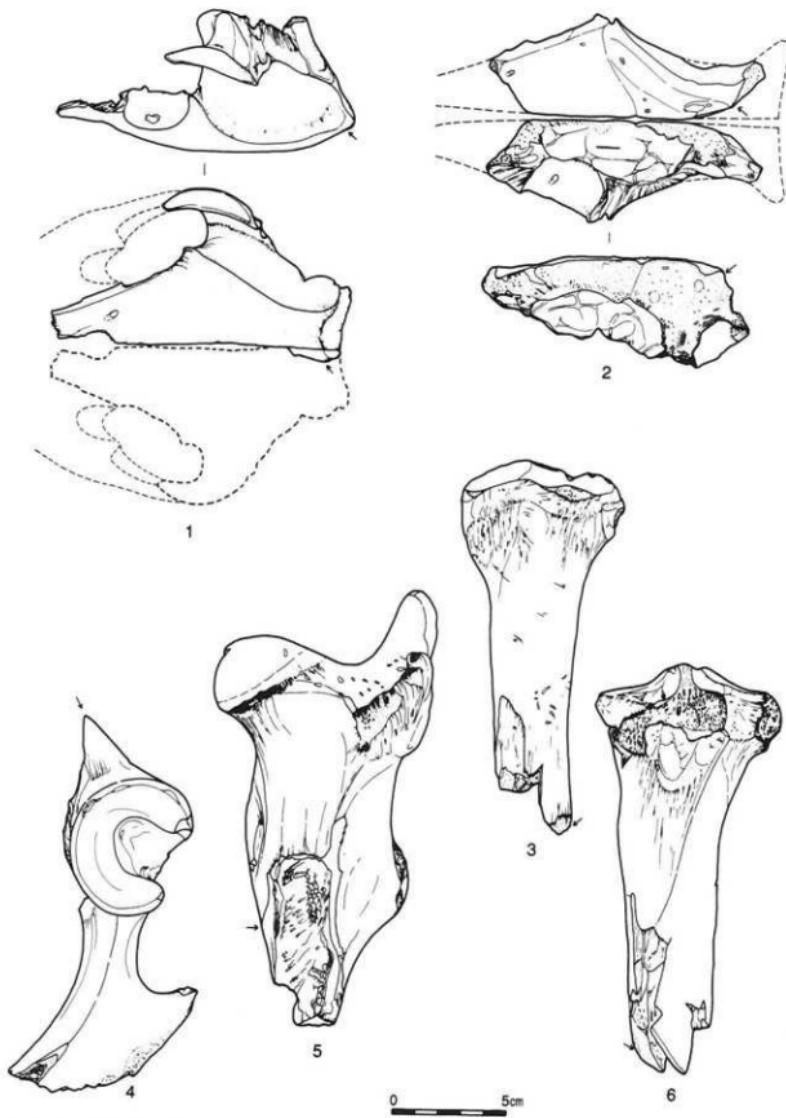
凡例 (○) : キズ有り, (△) 幼, <>半欠, (×) 骨端はずれ

第35表 ウシ出土量

凡例 () : キズ有り, { } 幼, <>半欠

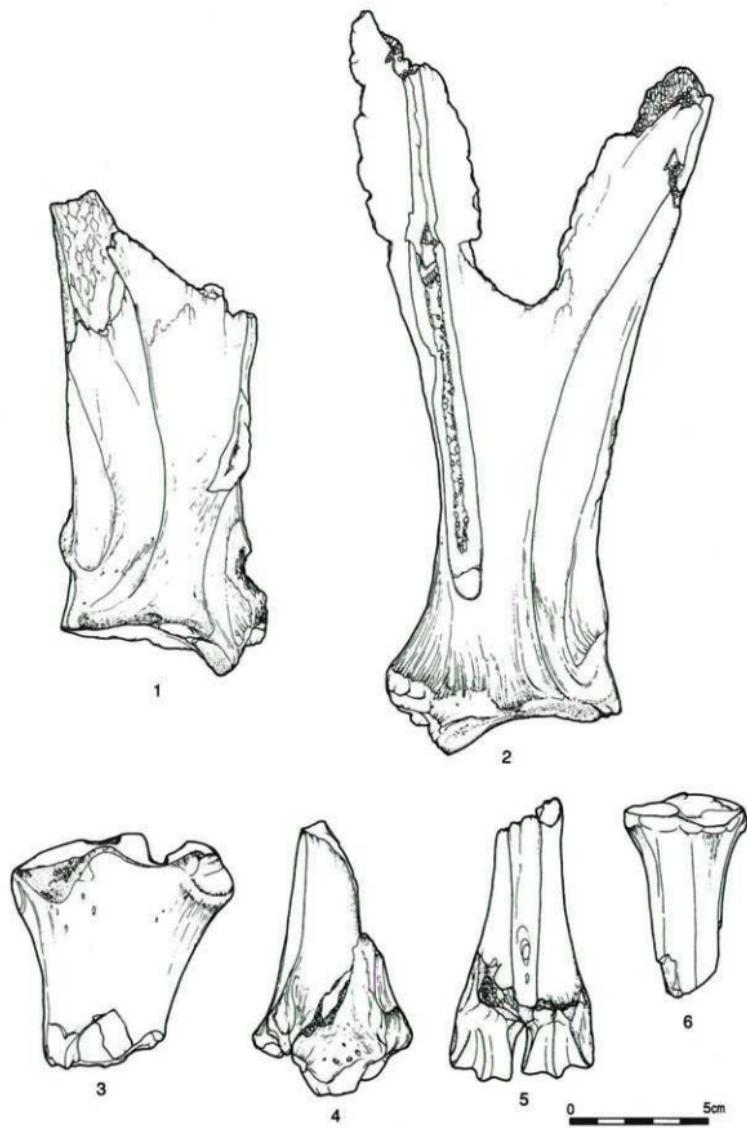
35表 ウシ出土量

凡例 () : キズ有り, {} 幼, <>半欠



第81図 切痕をもつ骨

1、2：ブタ頭蓋、3：ウマL 桡骨近位端、4：ウマR 寛骨臼部、5：ウマL 大腿骨近位部
6：ウマL 脊骨近位端



第82図 切痕をもつ四肢骨（ウシ）

1 : R 肩甲骨、2 : L 肩甲骨、3 : L 桡骨近位端、4 : R 胫骨遠位端、5 : R 中足骨遠位端
6 : R 中足骨近位端

第27節 貝類遺存体

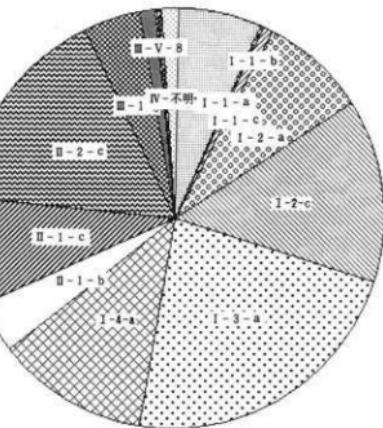
出土した貝は32科89種で出土量は、個体と他の遺跡に比べたら少い。

最少個体数の算出方法は「喜如嘉貝塚」1994年に準じた。出土した貝の量は、^(甲)ほか同時期の首里城跡や御細工所跡に比べたら多い方であるが、発掘面積と比較すると非常に少ない。

出土量を層別に見ると第2層が最も多く、次に第3層と続く。表採は総数にしては多いが、擾乱などを含めている。

貝種別にみるとチョウセンサザエが最も多く49個体、次にマガキガイ34個体、サラサバティラ31個体、ウラキツキガイ28個体、オハグイロガイ24個体、チョウセンサザエ20個体である。

この時代において、貝類は食用の主流ではなかったと思われるが、出土した貝をみると前述の2遺跡から出土する貝と同じ貝が好まれて採取されていることから嗜好性を優先にして採集したと思われる。また、ヤコウガイは破片の数が多い。これは首里城跡や御細工所跡、孔子廟などの近世の王朝関連の遺跡で目につく貝で、ほか同時期のヒヤジョウモ遺跡等では非常に少ない。したがって、食用かそれ以外の用途があるのか、今後検討を要する問題である。



第83図 生息地別出土状況

註

註1 沖縄県教育委員会「首里城跡－親会門・久慶門内側地域の復元整備事業に係る遺構調査」沖縄県文化財調査報告書第88集 1988年

註2 那覇市教育委員会「御細工所跡」那覇市文化財調査報告書第18集 1991年

註3 那覇市教育委員会「ヒヤジョウモ遺跡－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ－」那覇市文化財調査報告書第26集 1994年3月

第VI章 総括

本地区は、標高約7.5mを測る微丘陵の北端に位置する。調査の結果、低地部分は2次堆積層となっており、本遺跡に関する遺構は検出されていない。一方、微丘陵部分では各種の遺構が検出されており、この丘陵一帯で遺跡が展開していたものとみられる。以上のことから、本地区は湧田古窯跡の縁辺部にあたることが判明した。次に層位・遺構・遺物の状況についてみると、確認された遺物包含層は4枚である。第2層は調査区のほぼ全面を被覆しており、遺物としては中国産陶磁器は17世紀後半から18世紀に属する福建・広東系の粗製の印青花碗・鉢類、18世紀から19世紀に属する草花文・「寿」字文の碗類、仙芝祝寿文を描く小碗などであり、沖縄産陶器は、湧田系の灰釉及び壺屋系の施釉陶器と壺・壺などの無釉陶器が出土している。第3層は土取り場遺構を被覆する層であり、第2層出土の遺物および、中国産陶磁器では、明代に属する青磁・白磁・染付が出土している。第4層では、明代の陶磁器類と灰色瓦・埴・レンガ等の瓦類と摺鉢・こね鉢・壺等などの瓦質土器が出土しており、遺構もこの層より検出されていることからこの第4層が本地区的生活層と考えられる。第4層は焼土・灰混じりの薄い土層が幾重にも堆積しており、この層中より瓦列遺構・瓦敷遺構・ピット群が検出されている。またこれらの遺構群とほぼ同レベルからサンゴ屑から成る固く締まった砂利面が広がっていること等からこの砂利面を含む遺構面が本地区的生活面と考えられる。第4層中ではこの生活面はピット群に伴う遺構面が同層の上面より、さらに瓦敷遺構に伴う遺構面が下位のレベルで検出されている。但しこの2枚の遺構面にはレベル的な上下関係は認められるが、これらの遺構面を包含する第4層の堆積状況を考慮すると、時間的な差は極めて小さいものと考えられる。次にこの第4層検出の遺構についてみると、張床土壌、瓦列遺構、瓦敷遺構等はいずれも瓦類を伴うことから瓦窯生産に関わる遺構と見られる。遺構の性格については瓦列・瓦敷遺構は何らかの施設に伴う遺構であると考えられるが、詳細については不明である。張床土壌は、土壤内に灰色粘土が塗られており、また土取り場跡と近接していることから、原料となる粘土の精製に関わる遺構であると考えられる。

以上のことから、本地区的操業期間について考えると、生活層である第4層は、輸入陶磁器は、青磁では剣先蓮弁文碗、染付では蕉葉文碗や見込み花文碗など16世紀代に属する遺物で構成されている点を考慮すると主たる操業期間は16世紀代と考えられ、その後この層を覆う第2層の年代の上限が17世紀後半代と見られることから、本地区における瓦生産は16世紀末から17世紀代までには廃絶したものと考えられる。最後に本地区と前回調査した行政棟地区との関係について言及すると、位置・遺構・遺物の性格からI地区からの延長と考えられる。

第36表 巻貝出土状況

番号	科名	貝種名	棲息場所	層別																合計	個体数		
				第1層				第2層				第3層				第5層				窓内E層			
				b	砂利層	溝状通構																	
1	ナツカニ科	リコナツカニフ	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	完形殻頂破片	1	0	0	1	
2	ニシカニ科	ニシカニ																		1	0	0	1
3		ニシカニ	I-2-a																	1	0	0	1
4		ニシカニ	I-3-a																	1	6	5	7
5		ニシカニ	I-4-a																	3	28	38	31
6	リョウソウ科	リョウソウ	I-4-a	1	1	2	16	4	1	9	32		1	1	1					2	2	1	16
7		リョウソウ	I-3-a																	2	2	13	33
8		リョウソウ	II-1-b																	1	3	12	0
9		リョウソウ	I-4-a																	2	0	8	24
10		リョウソウ	I-4-a																	2	1	7	8
11		リョウソウ	I-2-a																	1	0	1	1
12	アラミ科	アラミ	I-1-b																	1	0	0	1
13	アラミ科	アラミ	V-8																	1	0	0	1
14	アラミタリコ科	アラミタリコ	IV-5, 6	1																1	0	0	1
15	アラミタリコ科	アラミタリコ	I-2-c		1	1													2	1	0	4	
16	アラミタリコ科	アラミタリコ	I-1-a		1														1	2	1	0	
17	アラミタリコ科	アラミタリコ	I-2-c																1	0	0	1	
18	ウニニ科	ハナウニ	III-1-c																1	0	2	0	
19		ヒンコウイ	III-0-c																1	0	2	1	
20	ウニニ科	ウニニ	II-2-c		2														1	0	2	1	
21		ウニニ	III-1-c		3		1		2										1	6	0	6	
22	スイカニ科	ムカシスイカニ	I-2-c		1														1	0	0	1	
23		スイカニ	I-2-c		1	6	1	1	1	16		1	2		1	1	3		1	1	4	34	
24		スイカニ	I-2-c																0	1	0	1	
25		スイカニ	II-2-c		1	2													1	2	0	3	
26		スイカニ	I-2-c																0	3	1	3	
27		スイカニ	I-2-c																0	1	2	1	
28		スイカニ	II-2-c		8	4	2	2	1	5	1	1	1						16	8	0	24	
29	ナガミタリ科	ナガミタリ	I-2-a		1														1	0	0	1	
30		ナガミタリ	I-2-a																1	0	0	1	
31		ナガミタリ	I-2-a																0	0	1	0	
32		ナガミタリ	I-2-a																1	0	0	1	
33		ナガミタリ	I-2-a																2	0	0	2	
34		ナガミタリ	I-3-a		1		1		3	1	2		1		1				5	2	2	7	
35		キロダララ(ナガミタリ)	I-1-a																1	3	0	3	
36		ナガミタリ	I-1-a		2		2	1							4				1	9	0	0	
37		ナガミタリ	I-2-a		1														1	0	0	1	
38	タラウイ科	タラウイ	I-2-a																1	0	0	1	
39	タラウイ科	タラウイ	I-2-c		1		1												1	1	0	2	
40		トドマツ	II-1-c			1													1	0	0	1	
41	オキニ科	シラチトドマツ	I-4-a																0	0	1	0	
42	オキニ科	アラミタリコ	I-3-a																0	0	1	0	
43		アラミタリコ	ワレメ																1	1	0	2	
44		アラミタリコ	I-3-a		1														1	1	1	2	
45	サザナミハコ科	イガミハコ	II-1-c		2														2	0	0	2	
46	サザナミハコ科	ヒメイガミハコ	I-2-a		1														1	0	0	1	
47		ヒメイガミハコ	II-1-c																2	0	3	0	
48	ナツカニ科	イガミハコ	I-2-a																2	5	1	7	
49		ナガミタリ	I-2-a																1	0	1	1	
50		リガクシラウツカニ	I-3-a		1														2	0	0	2	
51		リガクシラウツカニ	I-3-a		1														1	0	0	1	
52	ナツカニ科	イガミハコ	I-1-c																1	0	0	1	
53	ナツカニ科	ナガミタリ	I-2-c																0	2	1	2	
54		ナガミタリ	I-2-c																1	0	0	1	
55		ナガミタリ	I-1-a		2														2	2	0	4	
56		ナガミタリ	I-1-a	3															4	0	0	4	
57		ナガミタリ	I-2-a																1	1	2	2	
58		ナガミタリ	2																2	0	0	2	
59		ナガミタリ	3																1	0	0	1	
合 体 数			2	1	0	39	67	30	9	5	4	37	66	67	3	4	0	1	4	2	0	1	
個 体 数			3		106		14	103	7			7			1		29		3	1	1	299	
* 表採の中には堅、擾乱、ケーブル砂層、トレンチを含む。																						299	

第37表 二枚貝出土状況

*表掲の中には壁、攤乱、ケーブル砂層、トレンチを含む。

貢出土状況

出土地	表 採						第 1 層						第 2 層						第 3 层						不 明			合 計			個体数														
	完形			殻頂			破片			完形			殻頂			破片			完形			殻頂			破片			下 部			完形			個体数											
貝種名	棲息場所	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R												
二世ノイ	I-2-a							1																						0	2	0	0	0	2										
アカウツギホウ	II-2-c																												0	0	0	1	2	1											
アカウツギ	II-2-c																												0	0	0	1	0	1											
アカウツギ	I-4-a	1	4	1						1			1																			1	1	4	1	2	5								
アカウツギの一種	I-2-a	1								1		1																																	
セカキ	I-2-a			1																													1	0	0	0	1	4							
ラキツカイ	II-2-c	2	4	3	6	1		2		3	6	6	4	1	1							2	1	1	2	1			3	2	2	3	11	13	14	15	3	28							
タガル	I-2-a	1																														1	0	0	0	0	1								
アカウツギ・カイ	II-2-c			1																											0	0	0	0	1	0									
アカウツギ	II-2-c																														1	0	0	0	0	1									
トゴウ	I-2-c																														0	0	0	0	1	0									
タマコ	I-2-a	1	1							1		1	1																1	0	0	3	1	2	3										
レジン	I-2-c			1									1	7							1		1	1				0	0	1	2	9	2												
不明				1																									1	0	0	0	2	0											
ヤマグアリ	I-1-c							1	2																					1	2	0	0	0	2										
スカイ	II-1-c	1																											0	1	0	0	0	1											
レスリダミ	III-0-e	2								2	1																		0	0	4	0	1	4											
ハカイ	II-1-c																												3	0	0	0	0	3	0										
ヤシノイヌミカイ	II-1-c									1																			0	0	0	1	0	1											
ヤシノイヌミカイ	III-1-c																												0	0	0	1	2	8											
ハミナエリ	I-2-a	1	1							2	1										1	1	1	1	1	2	1	2	2	4	4	4	2	8											
イカヅチカイ	II-1-c	1	1																										0	0	0	1	0	1											
ラカイ	II-2-c	12	10	1	1				1	2	1	1	1								2	1						1	1	2	0	0	0	2											
トエジ	II-2-c																												1	0	1	0	0	0	1										
キソミカイ	II-1-c									1											1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	4												
キソミカイ	II-1-c																				1	1	1	1	1	1	1	3	4	4	4	6	5	6	10	7	7	15							
カクシノヒナタリ	II-1-c	2	1	3	2	1				1																		1	0	0	0	0	1												
ラカイ																												1		0	0	0	0	1											
ナガマスクミカイ類の一種																												0	0	0	0	0	1												
ゴガイ																												0	0	0	0	1	0												
合 計		18	19	15	12	7	1	0	2	1	1	7	11	14	10	15	1	0	0	0	0	1	1	0	5	2	7	3	3	1	2	2	1	0	10	12	7	9	13	43	46	48	38	39	108
個 体 数		42							4									27			1							13			4								116					108	

* 表採の中には壁、撮乱、ケーブル砂層、トレンチを含む。

図 版



図版1 作業風景



図版2 発掘の状況



図版3 作業風景

圖版 4 層序 上：二-31~33東壁 中：ネ-31~33東壁 下：ヌ-ノ-33南壁





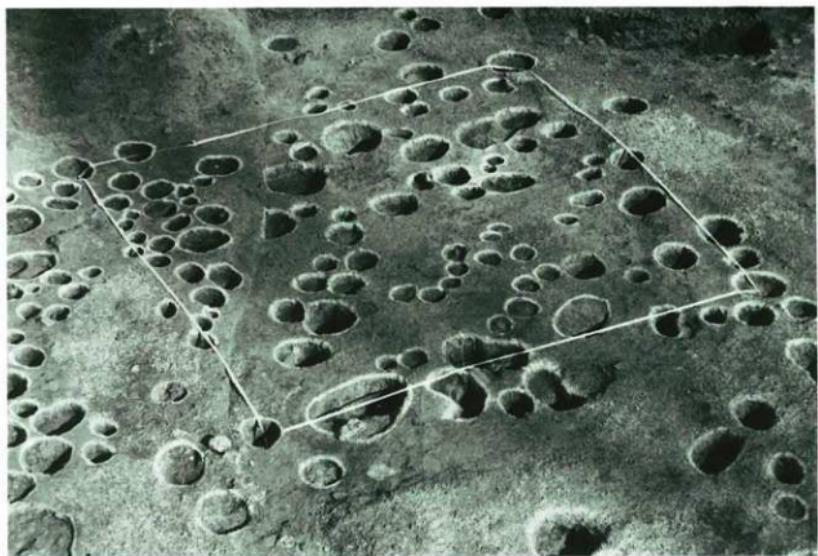
図版5 遺構の全体状況



図版 6 遺構の検出状況



圖版 7 張床土壤



図版 8 ピット群検出状況



図版 9 土取り場跡の検出状況



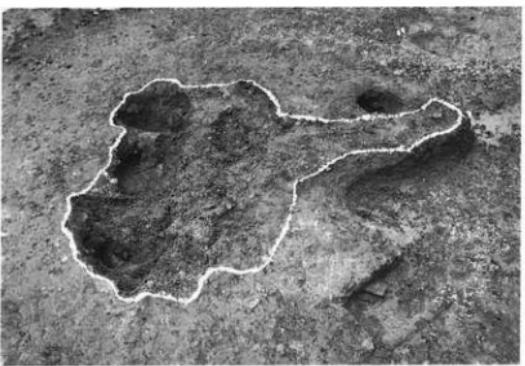
図版10 砂利敷遺構の状況



図版11 瓦敷造構の状況



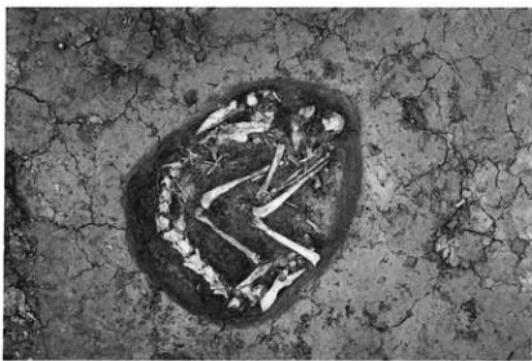
図版12 溝状遺構



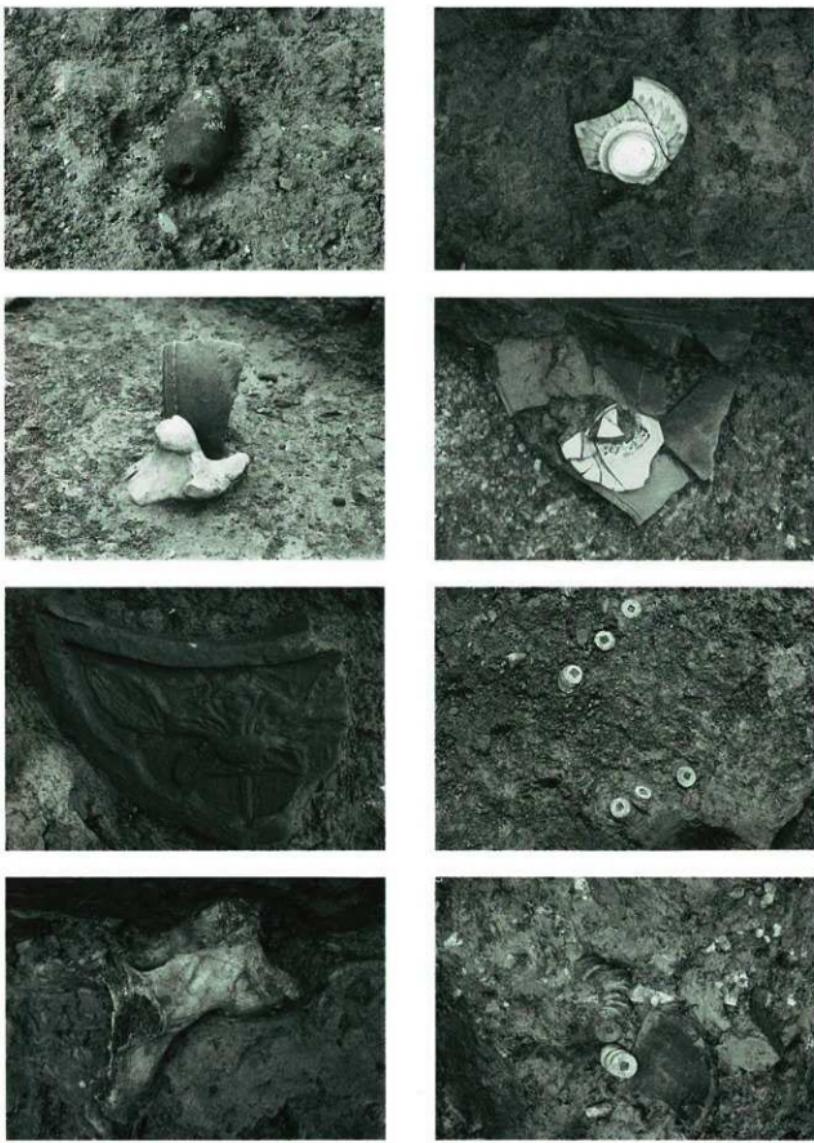
図版13 敷石遺構の状況



図版14 B区井戸の状況



図版15 B区ネコ検出状況



図版16 遺物出土状況



図版17 青磁 1 (碗)



17



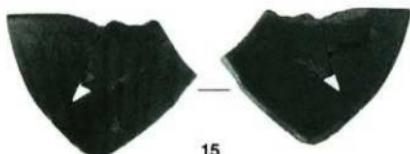
18



12



13



15



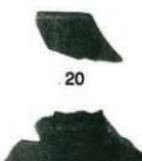
14



16



19

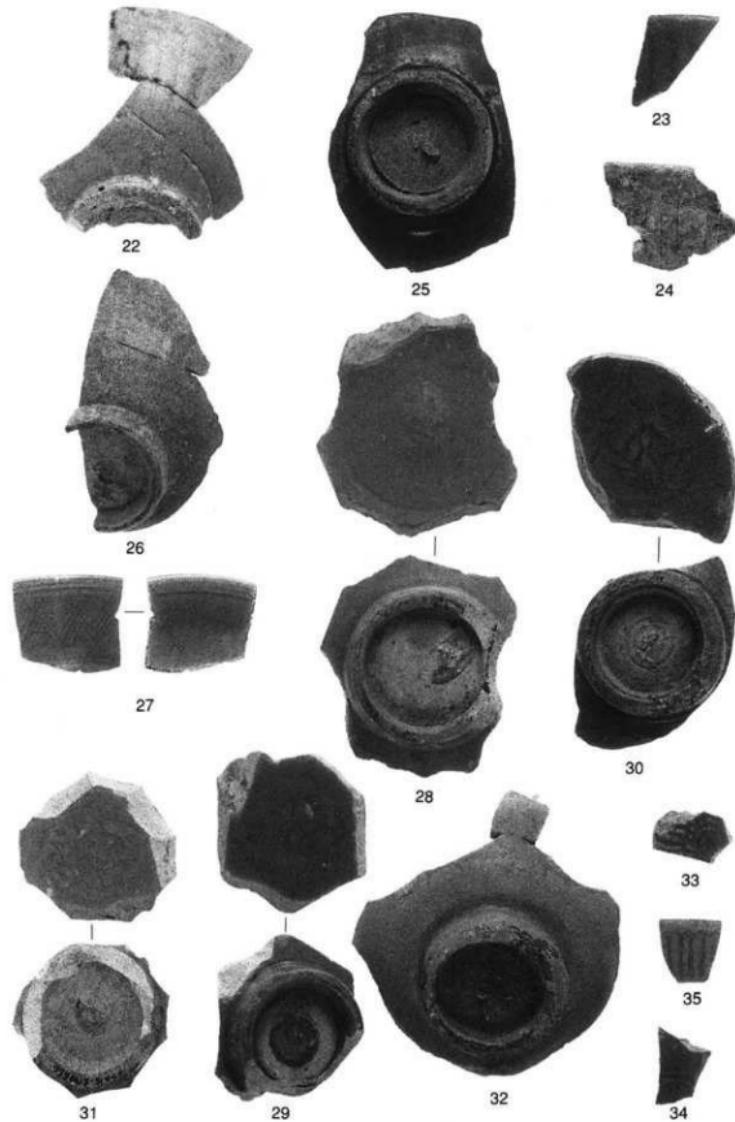


20

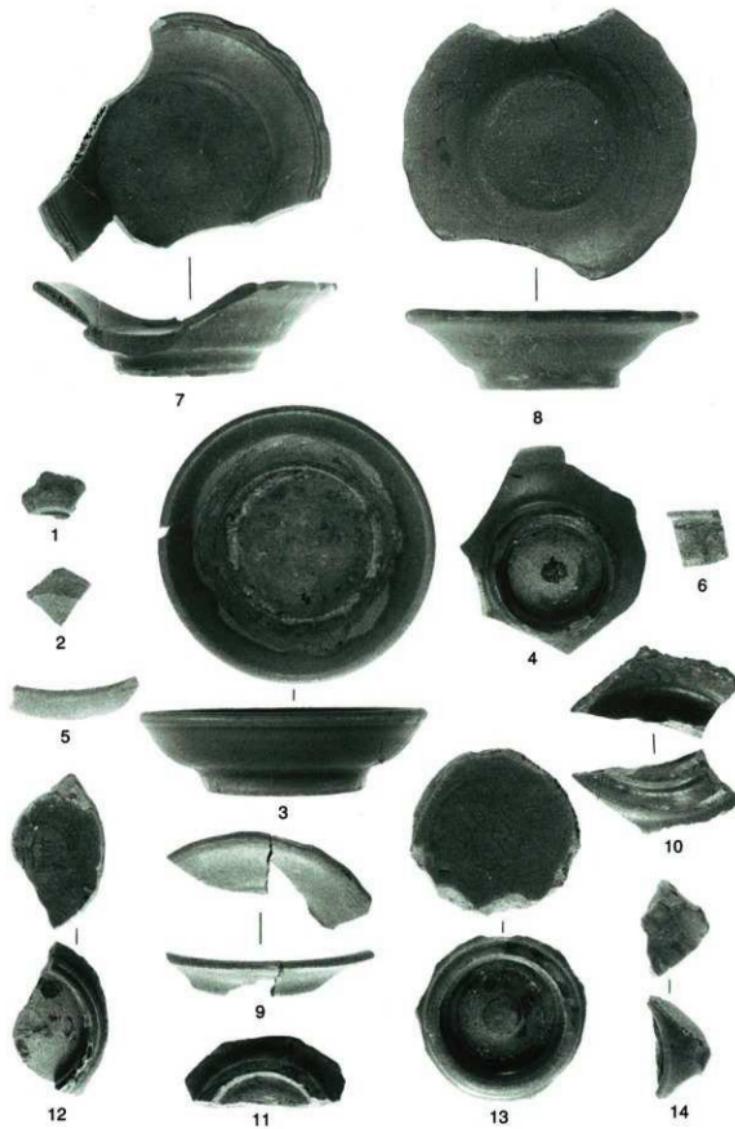


21

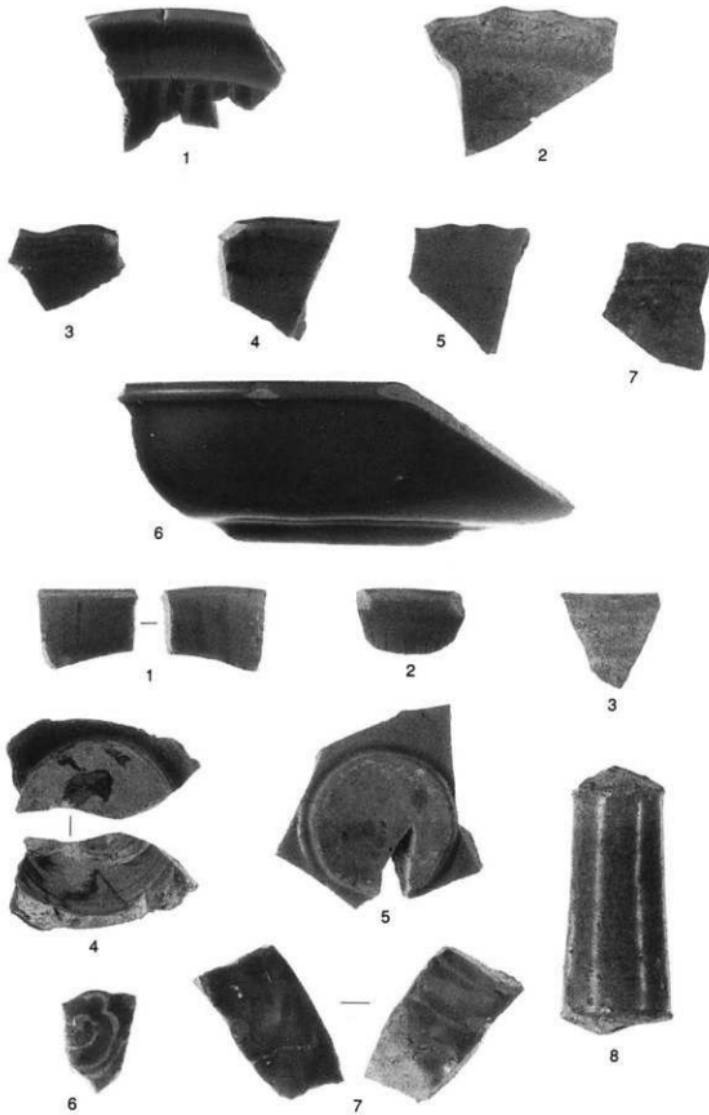
图版18 青磁 2 (碗)



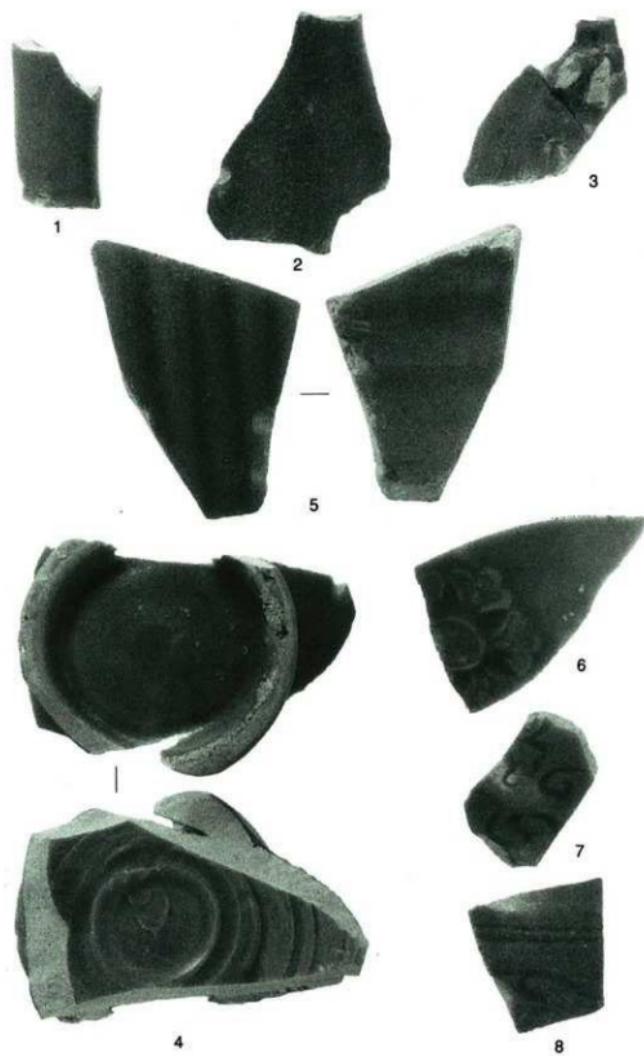
図版19 青磁 3 (碗)



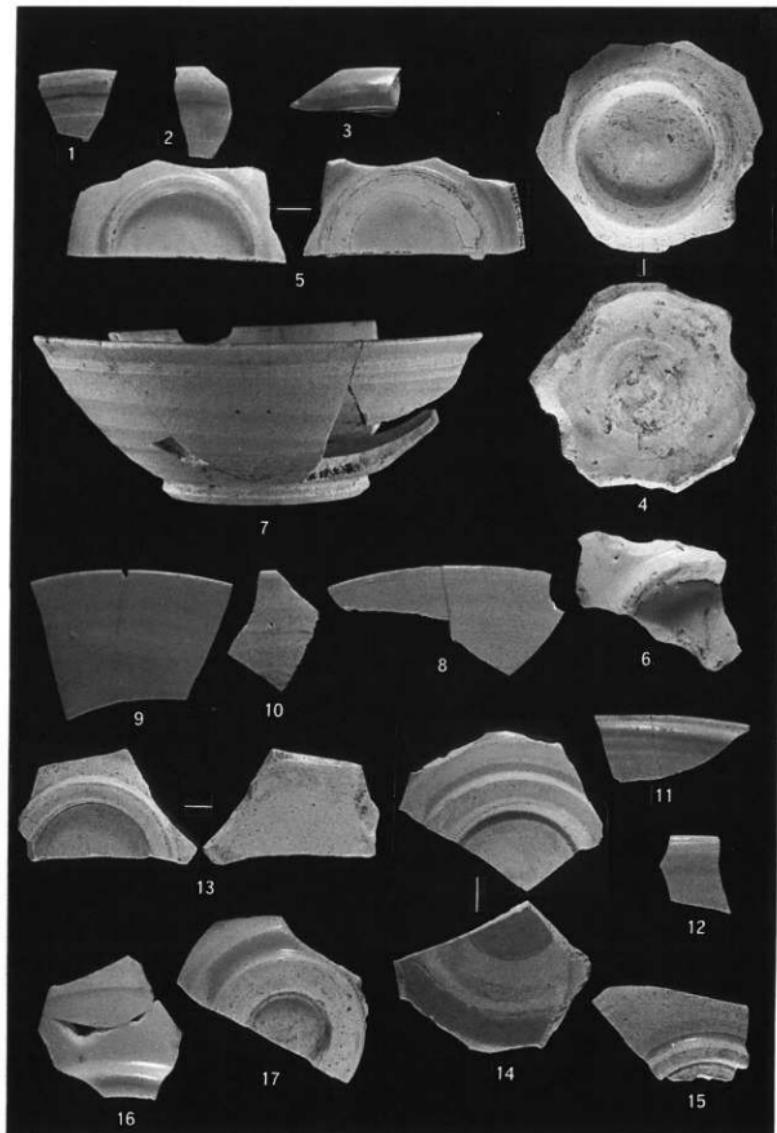
図版20 青磁 4 (III)



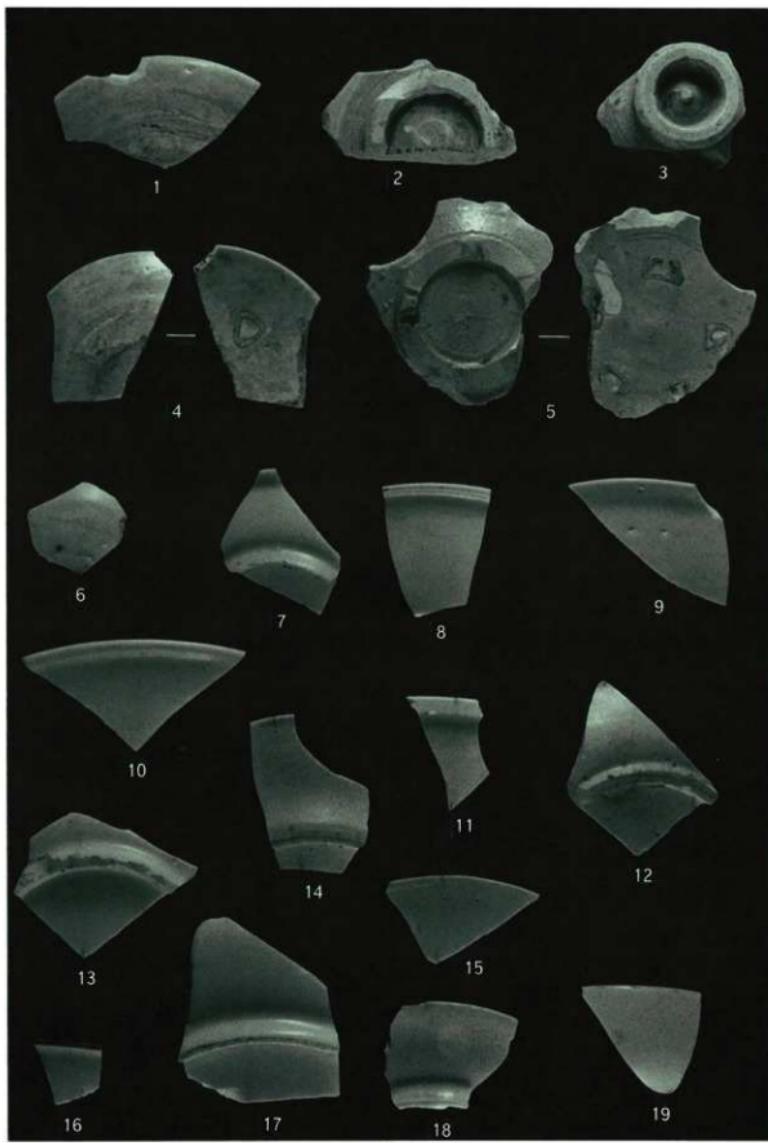
図版21 青磁 5・7 (盤・香炉・その他)



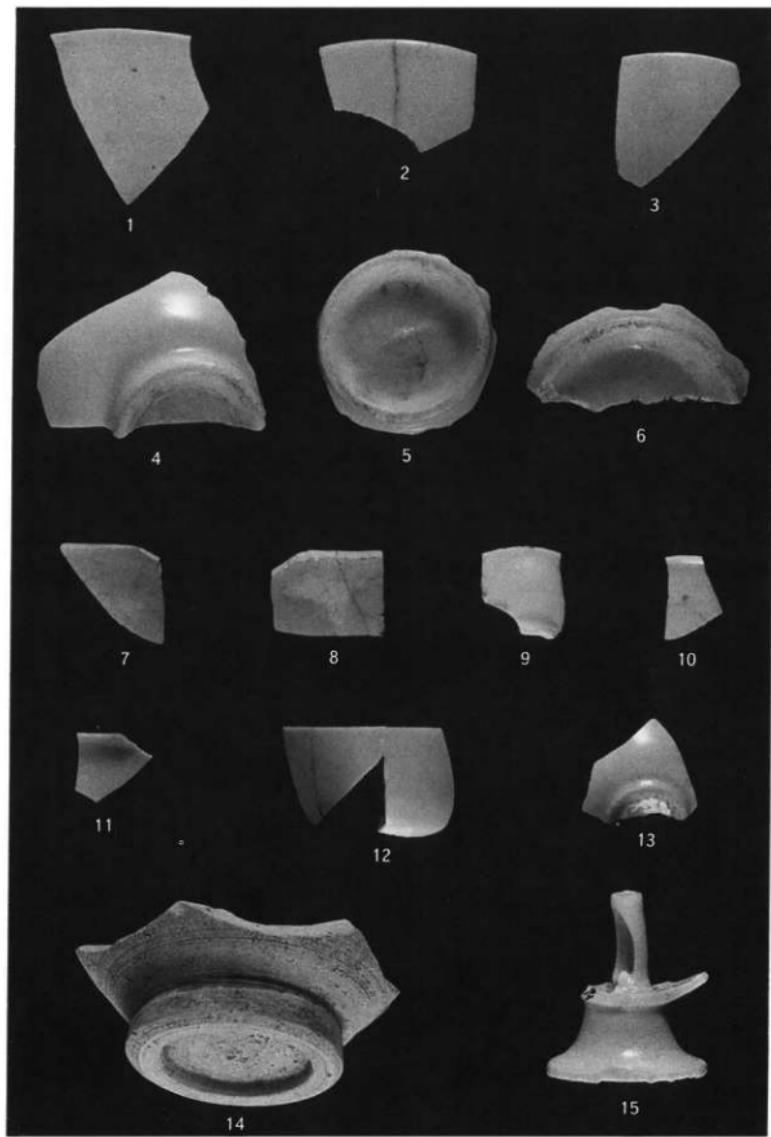
图版22 青磁 6 (袋物)



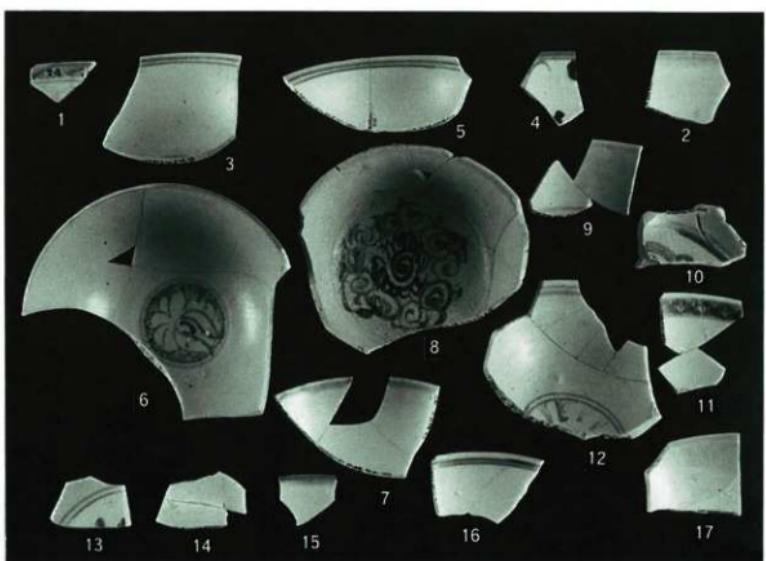
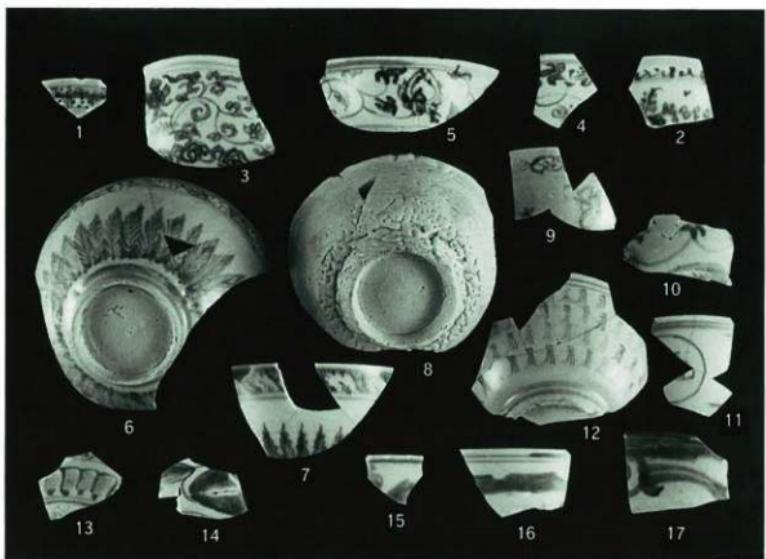
図版23 白磁 1 (碗)



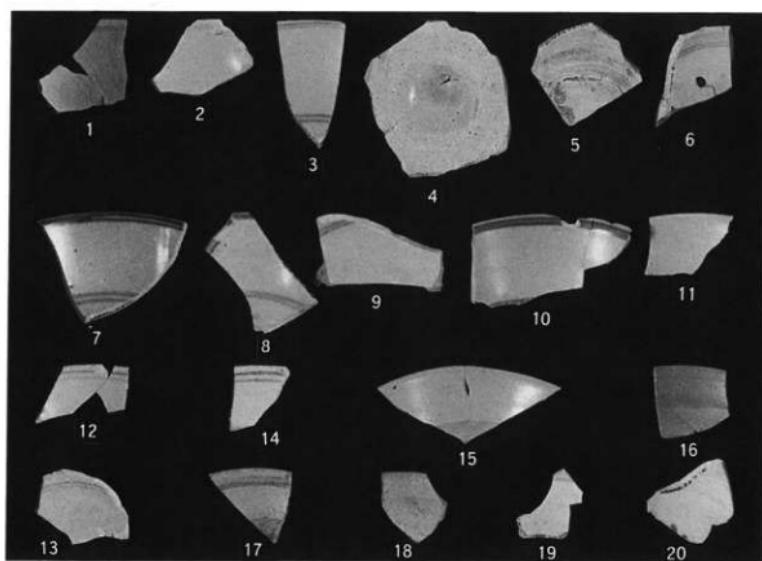
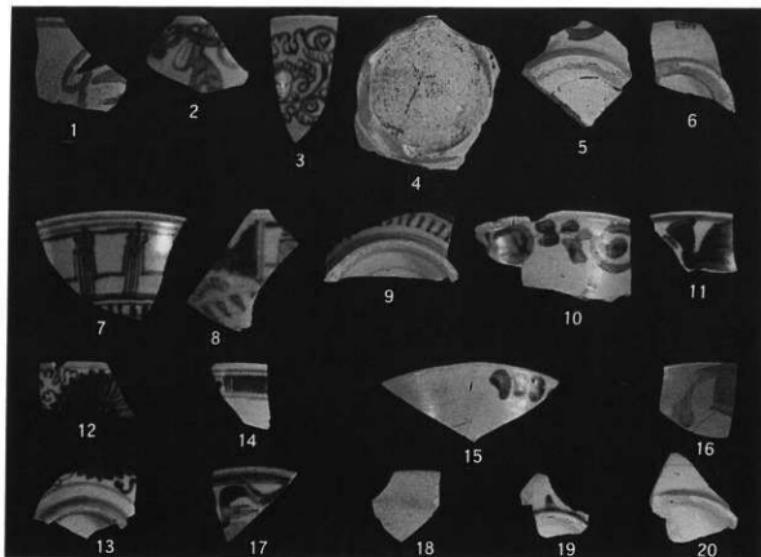
図版24 白磁 2 (皿)



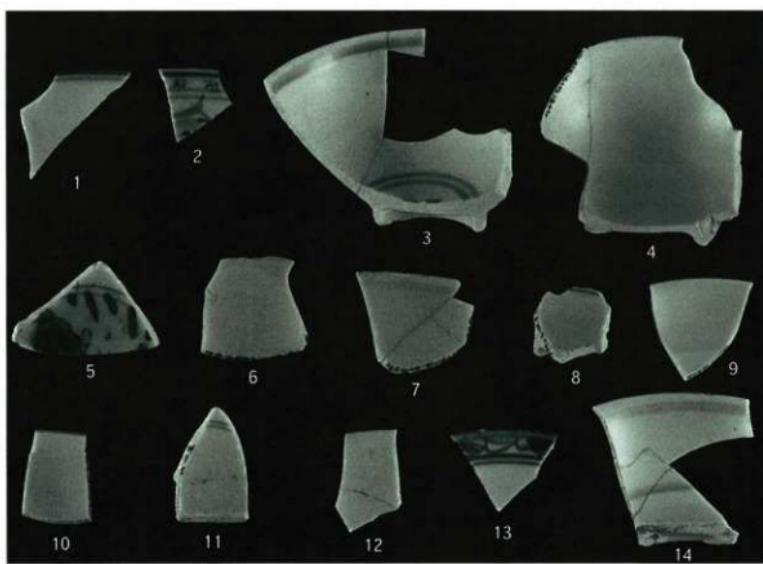
图版25 白磁 3 (小碗·杯·袋物·灯明具)



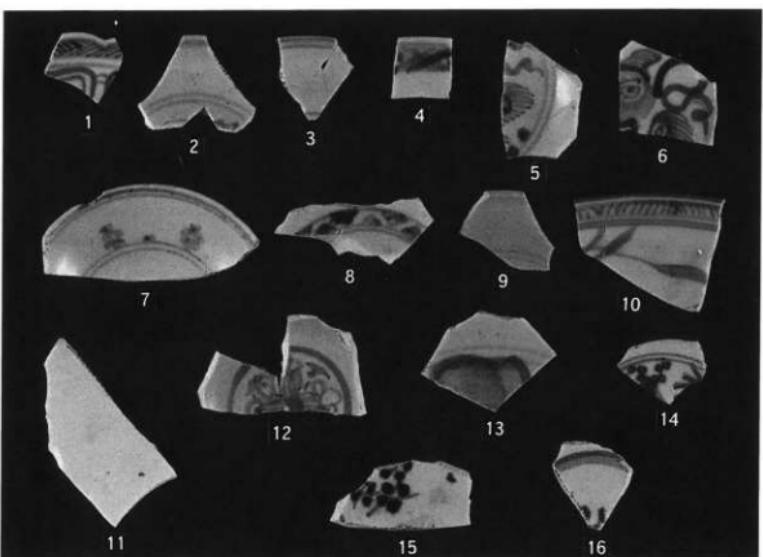
図版26 染付 1 (碗) (上:外面、下:内面)



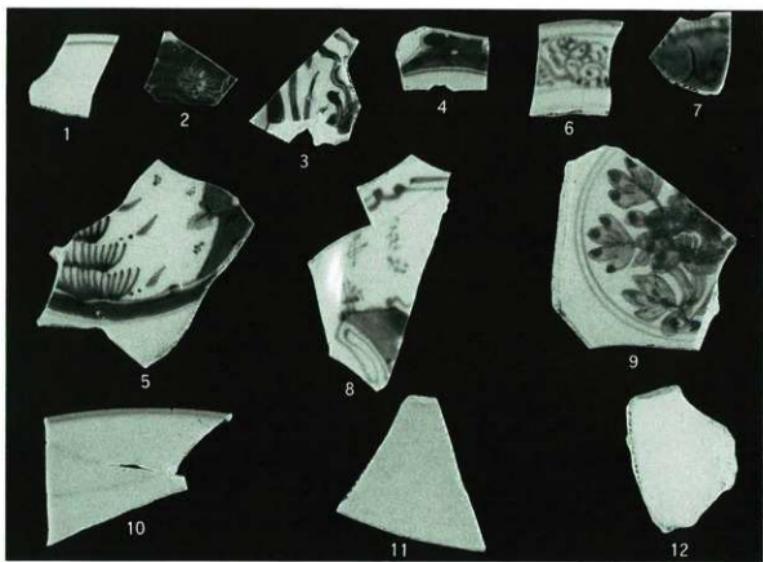
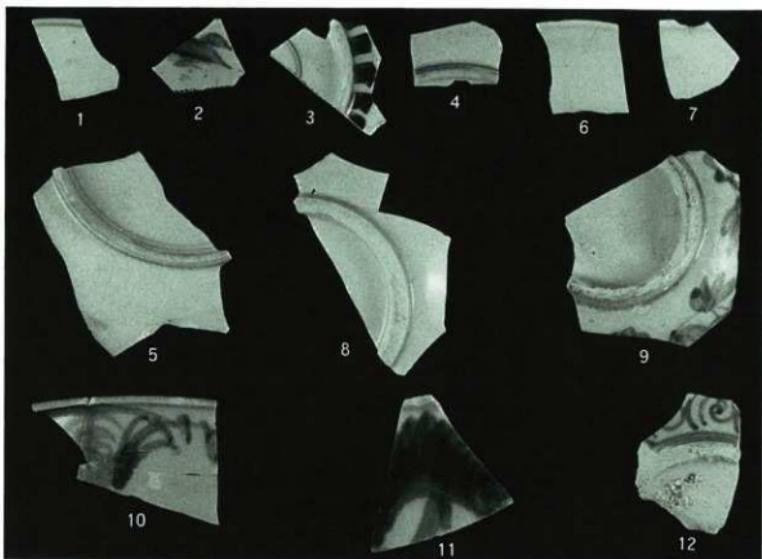
図版27 染付 2 (碗) (上: 外面、下: 内面)



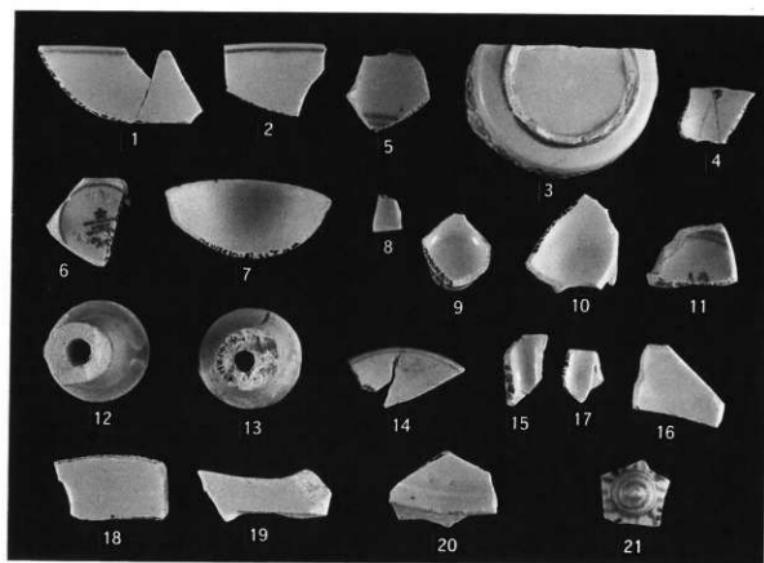
図版28 染付 3 (小碗) (上:外面、下:内面)



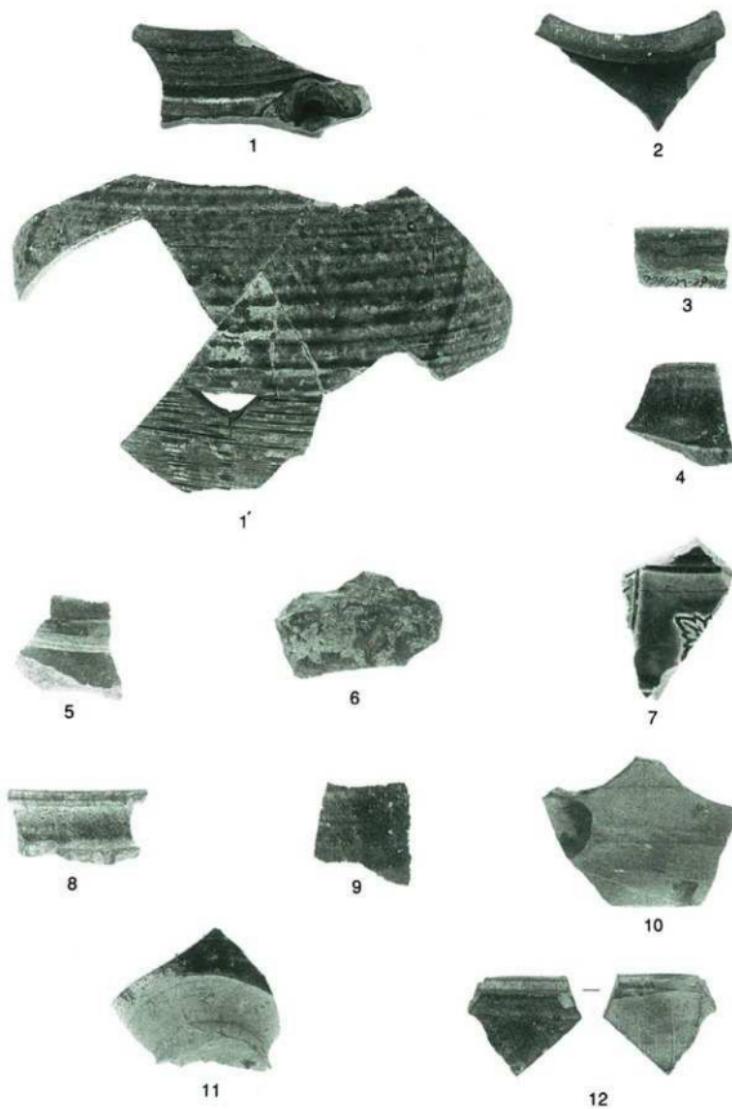
図版29 染付 4 (Ⅲ) (上:外面、下:内面)



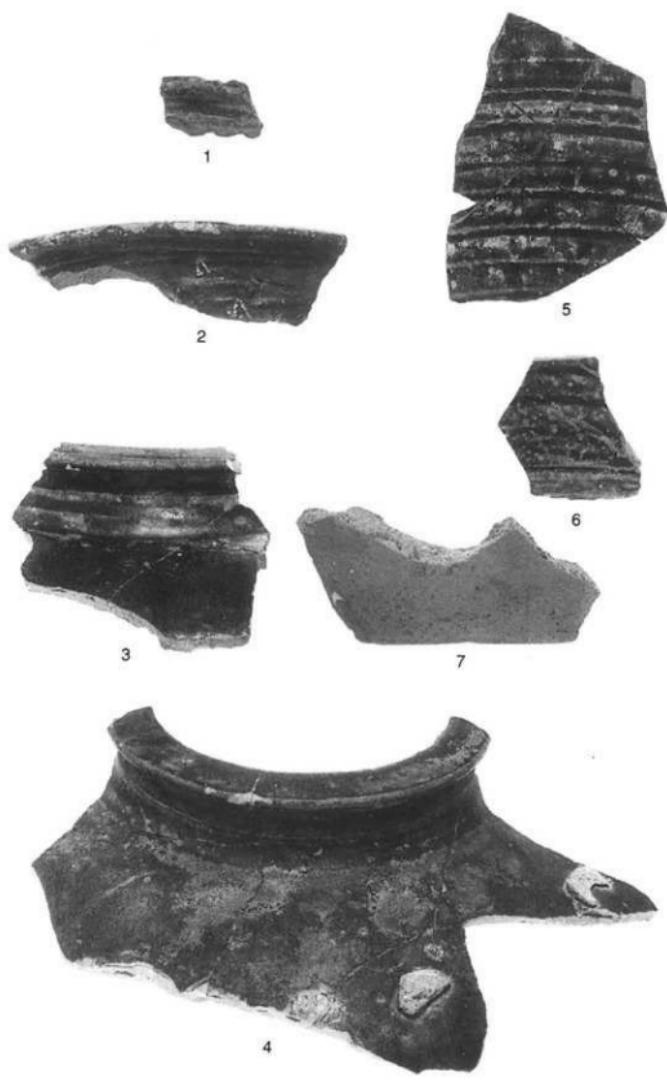
図版30 染付 5 (皿・鉢・袋物) (上:外面、下:内面)



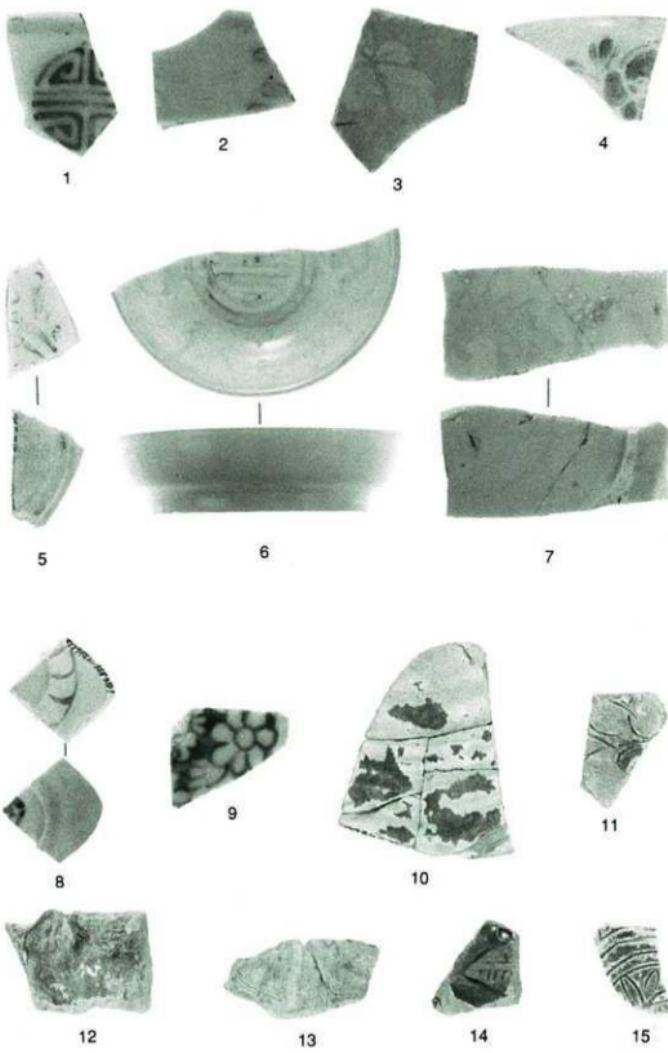
図版31 染付 6 (小杯・小碗・高足杯・瓶・蓋) (上:外面、下:内面)



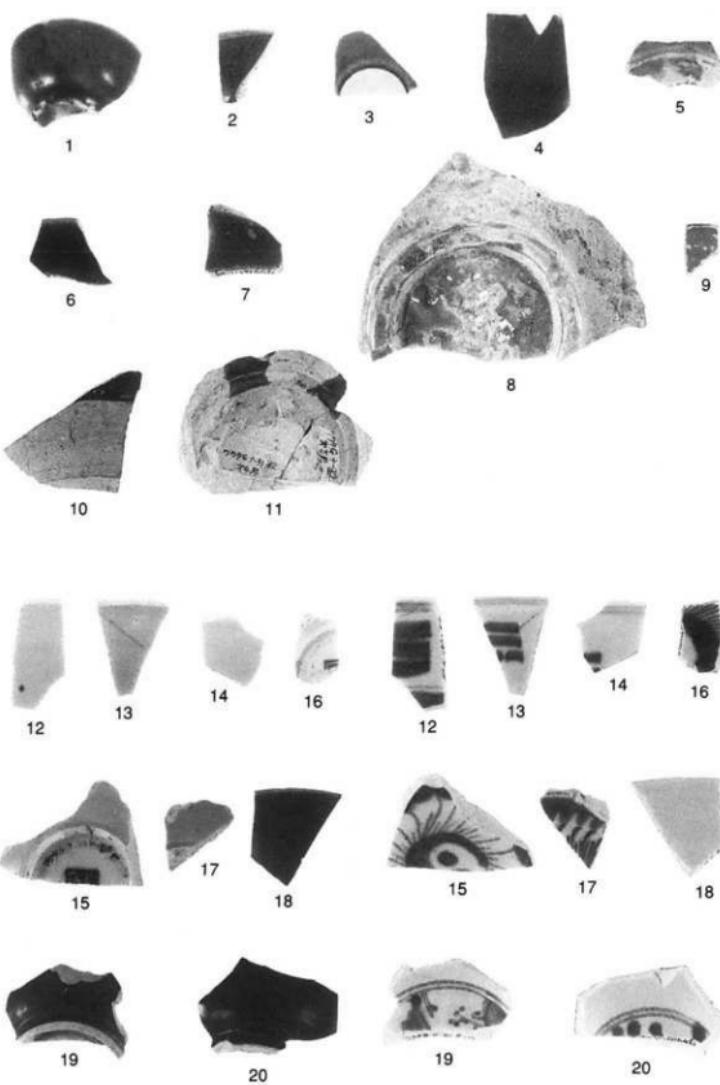
圖版32 褐釉陶器 1 (小型壺・茶入壺・瓶・搗鉢)



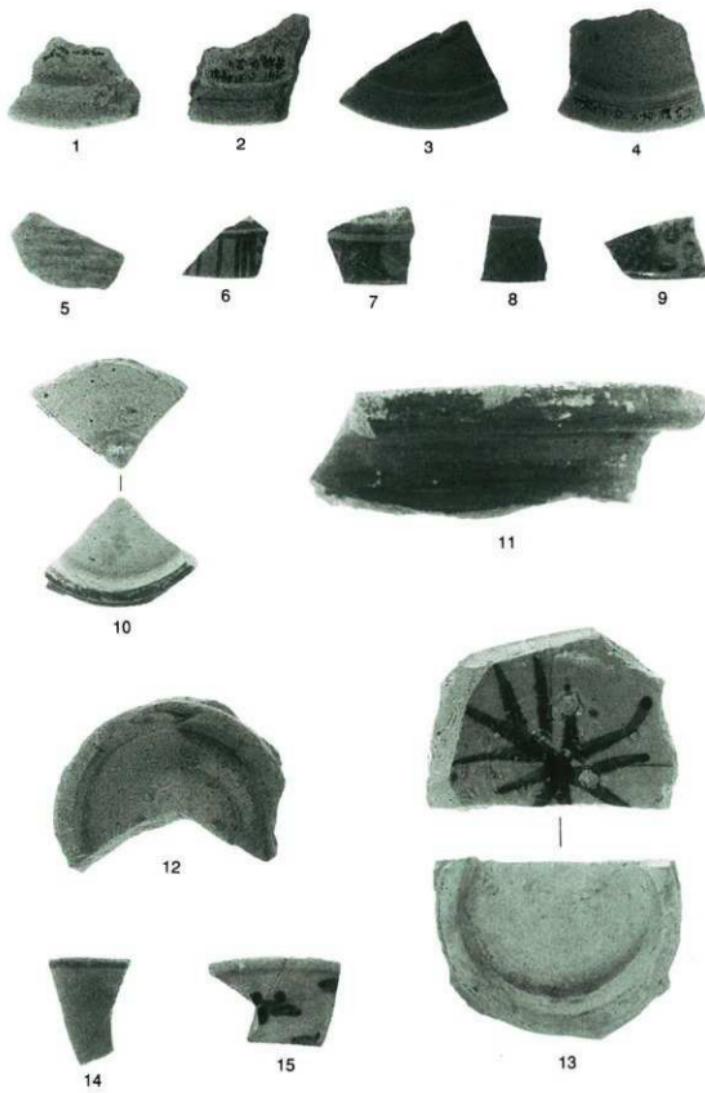
図版33 褐釉陶器 2 (水甕・壺)



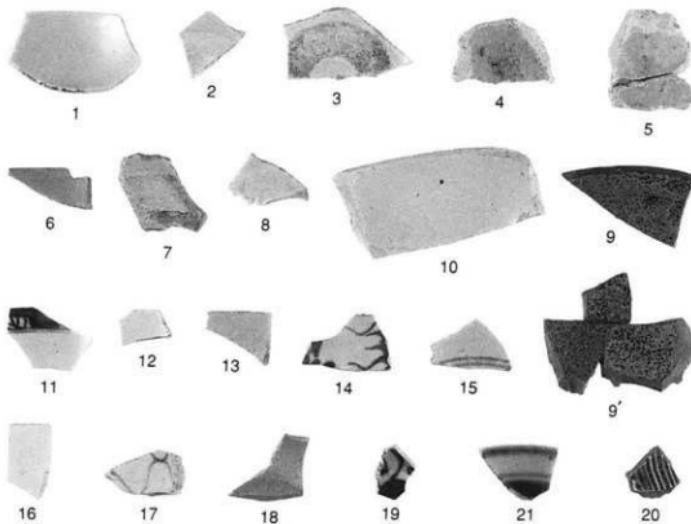
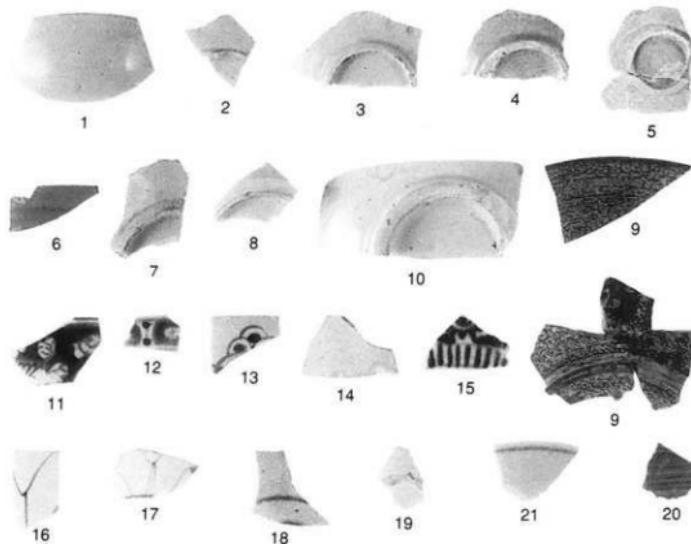
図版34 色絵と三彩



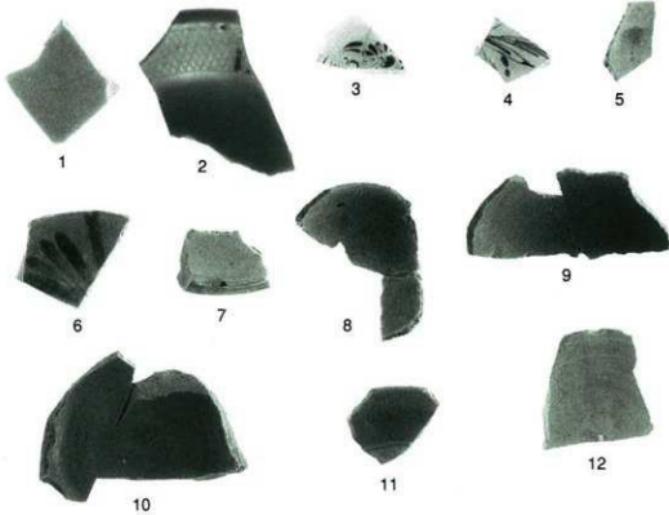
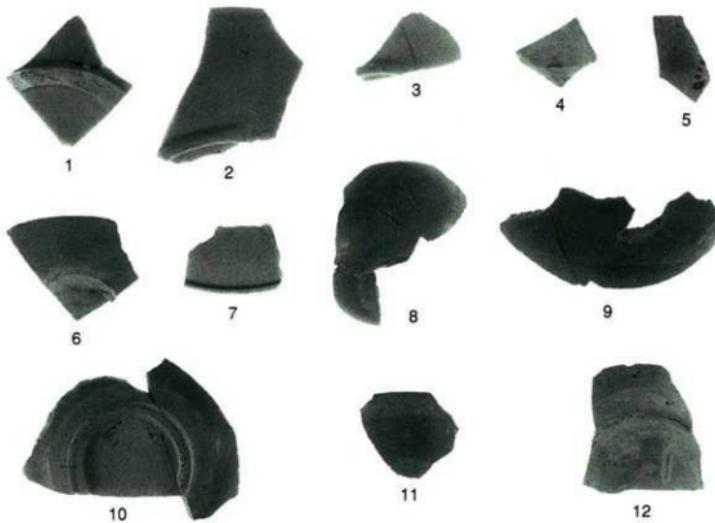
図版35 上：瑠璃釉、下：その他の陶磁器（青磁・鉄釉染付一下左：外面、下右：内面）



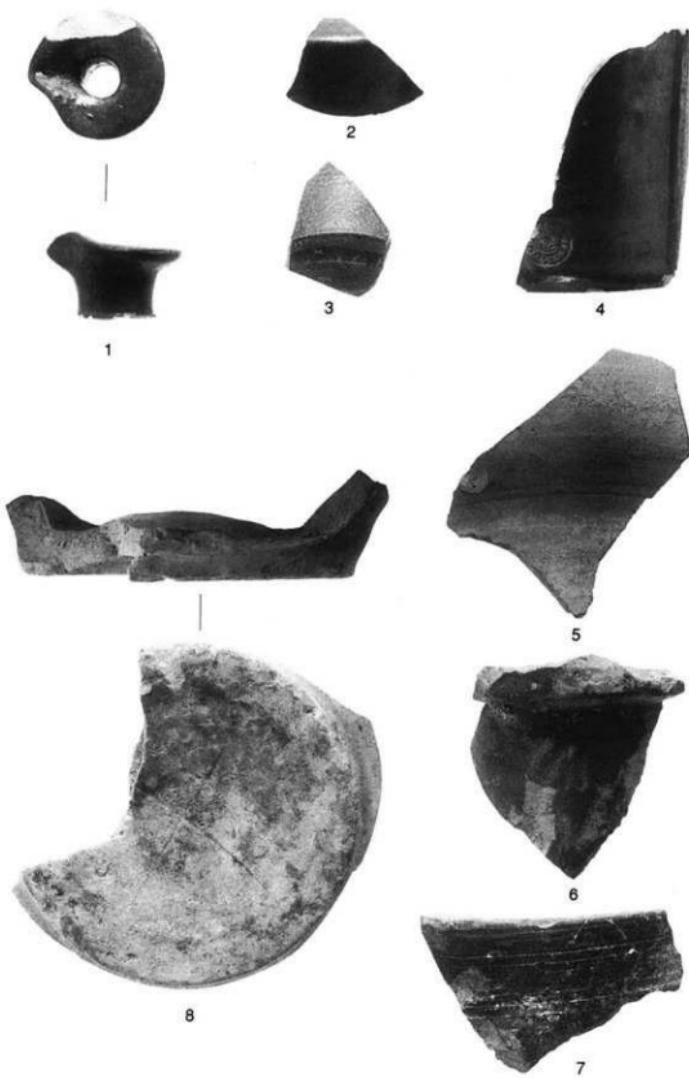
図版36 東南アジア陶器



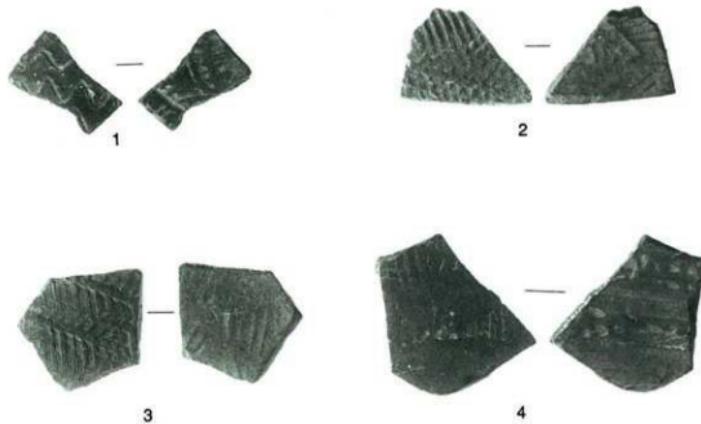
図版37 本土産陶磁器 1 (上: 外面、下: 内面)



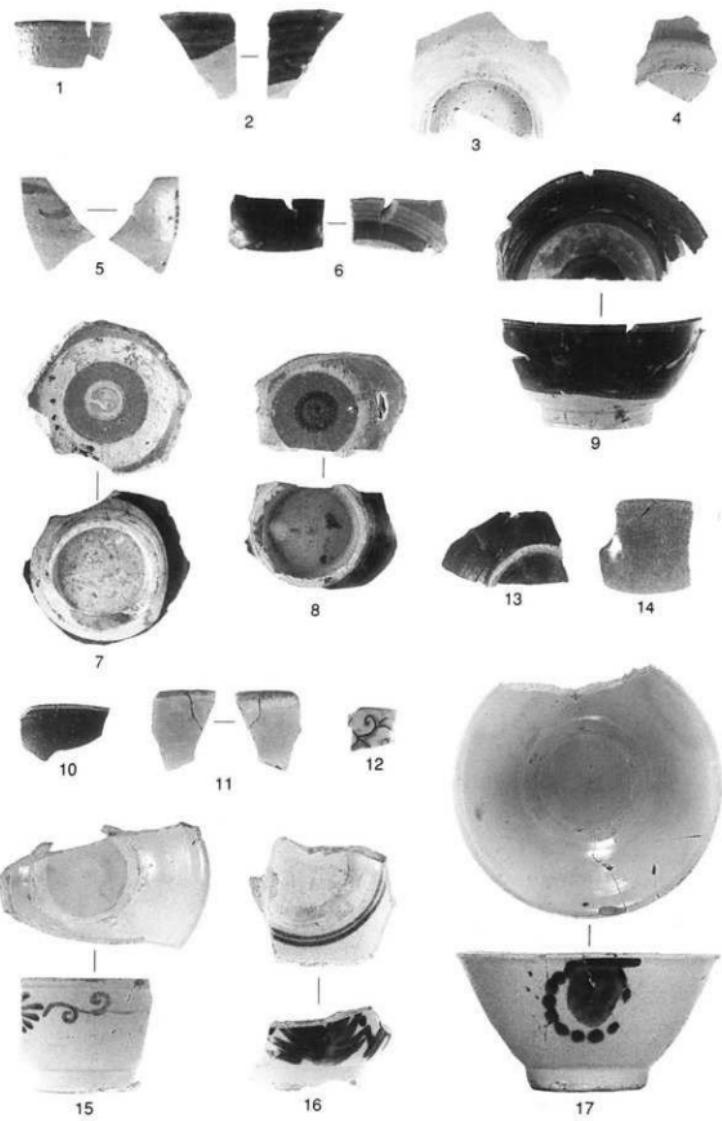
図版38 本土産陶磁器 2 a (上:外面、下:内面)



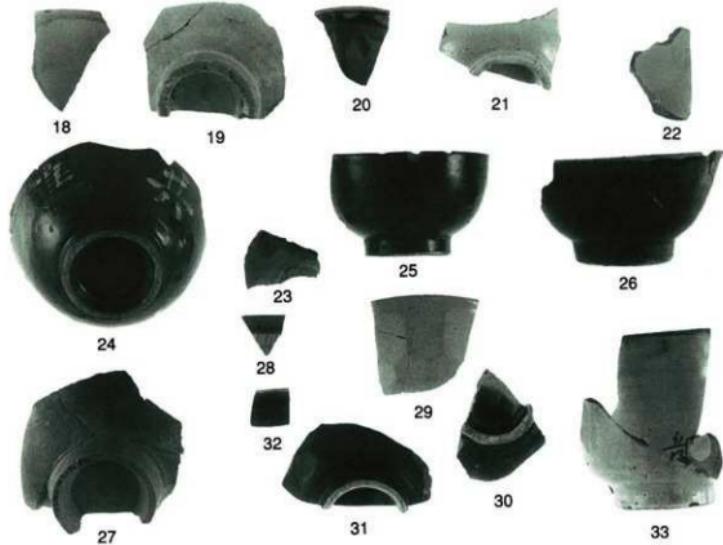
図版39 本土産陶磁器 3



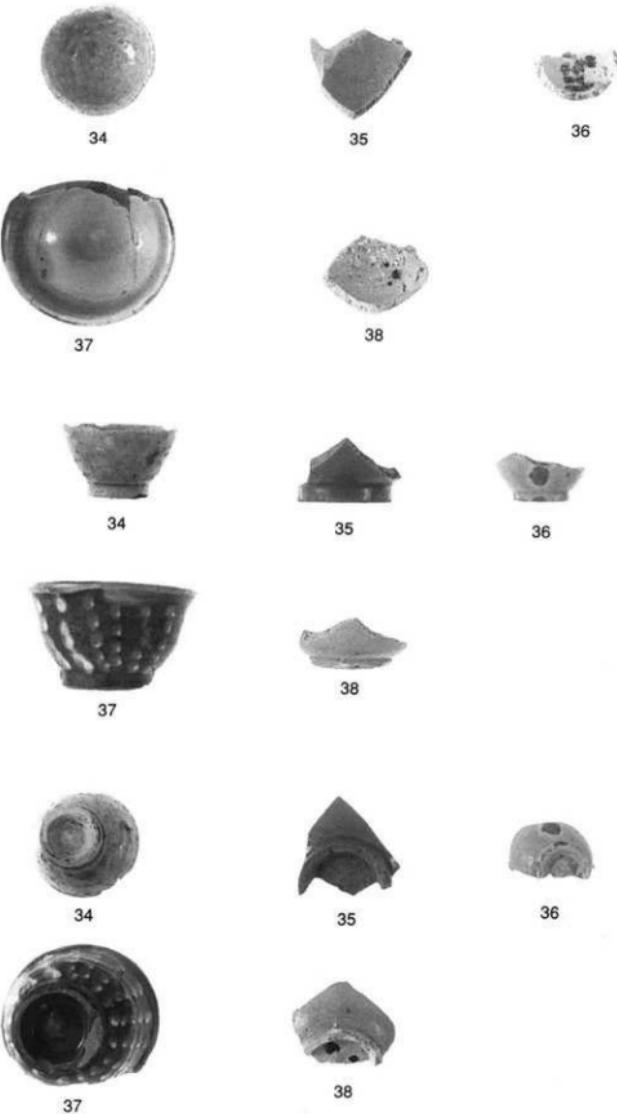
図版40 上：本土産陶磁器 2 b、下：須恵器



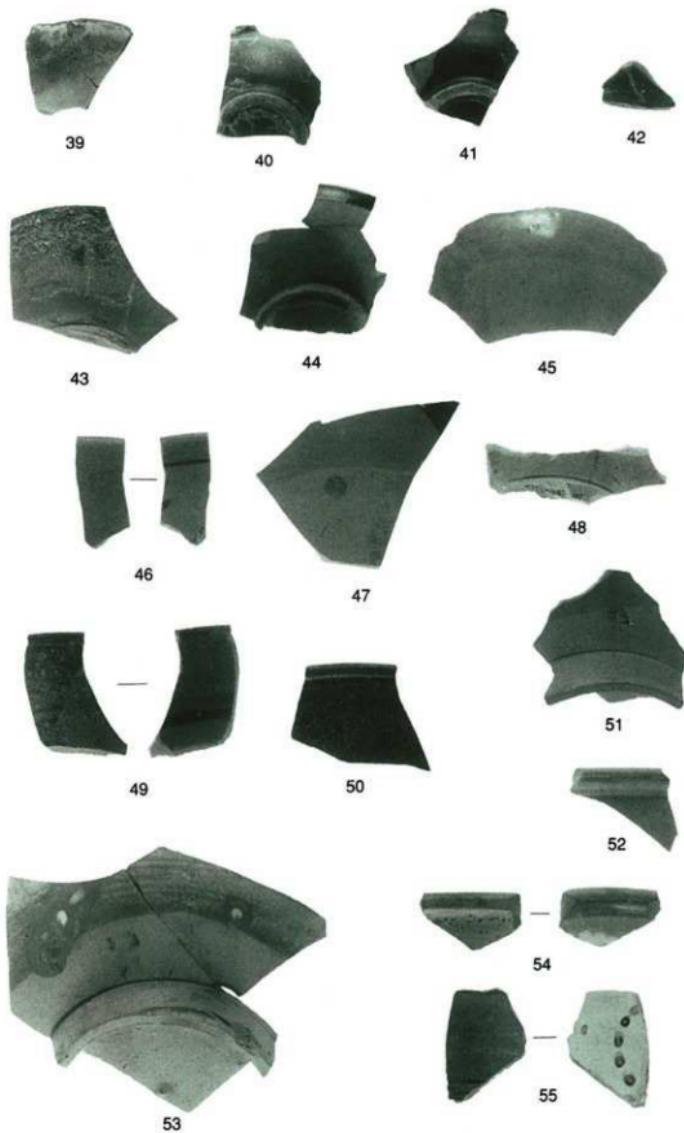
図版41 沖縄産施釉陶器 1 (碗)



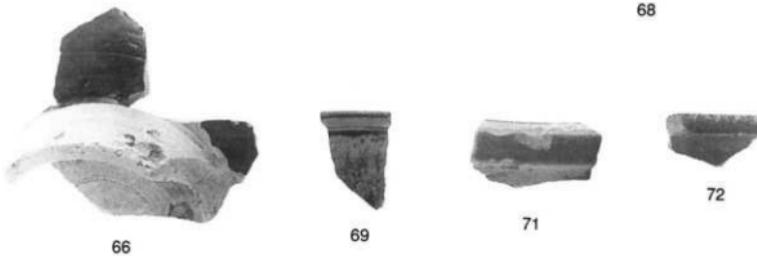
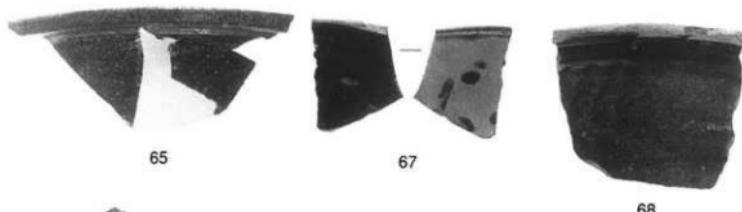
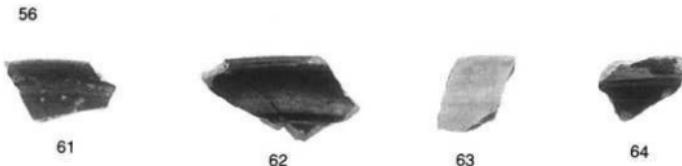
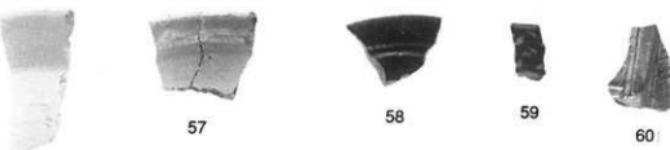
図版42 沖縄産施釉陶器 2 (小碗) (上:外面、下:内面)



図版43 沖縄産施釉陶器 3 (小杯) (上: 内面、中: 側面、下: 外面)



図版44 沖縄産施釉陶器 4 (小皿・大皿)



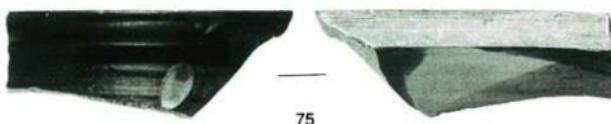
図版45 沖縄産施釉陶器 5 (小鉢・大鉢)



74



76



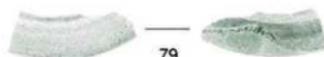
75



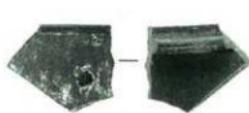
77



78



79



80



81



84



83

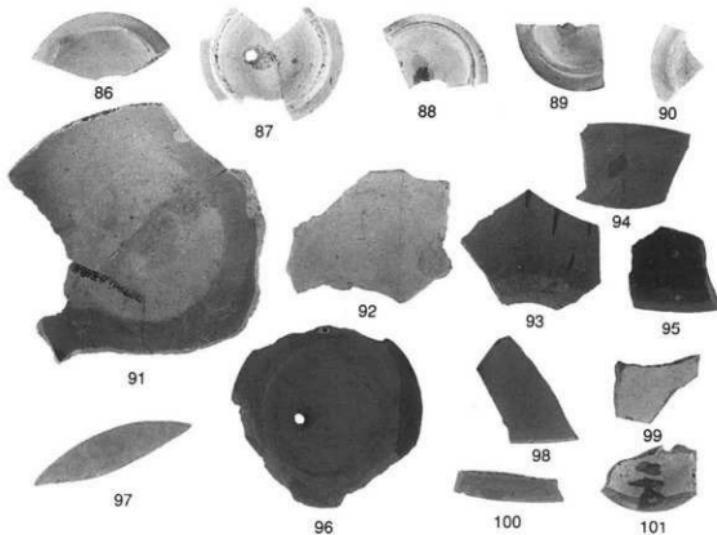
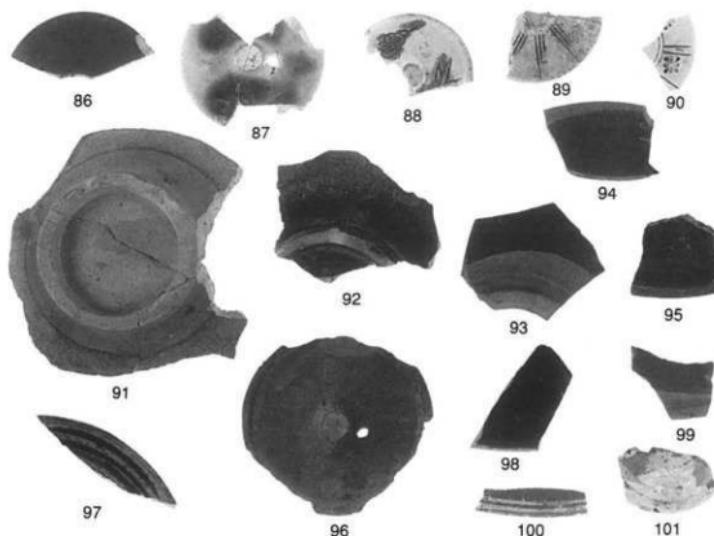


82



85

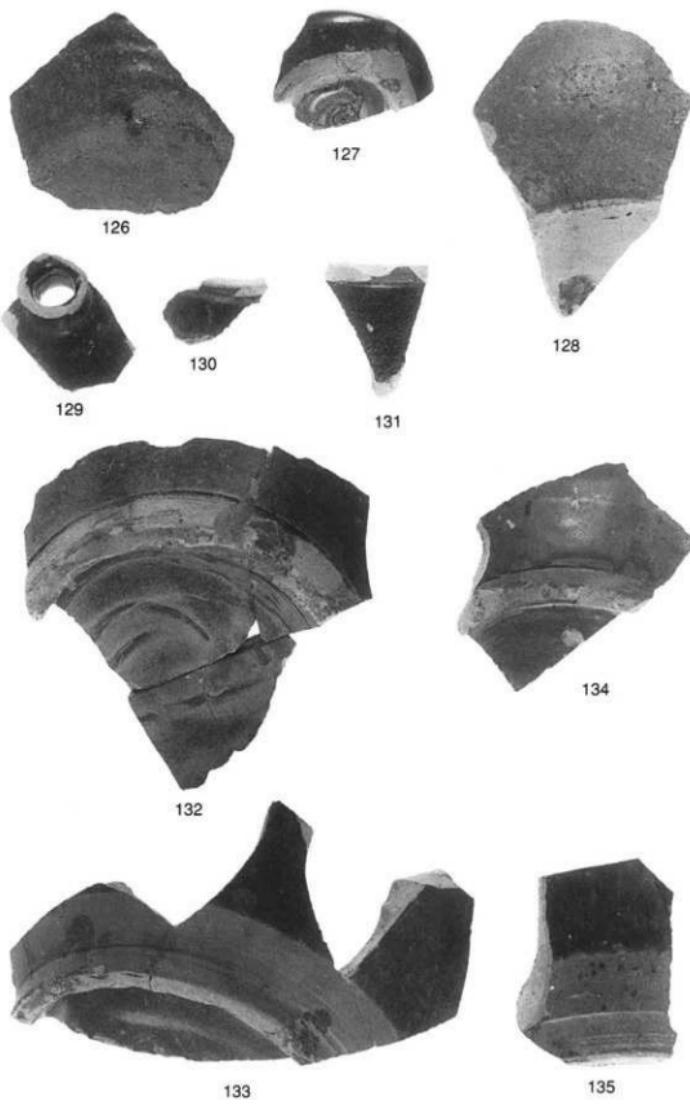
図版46 沖縄産施釉陶器 6 (鍋・酒器)



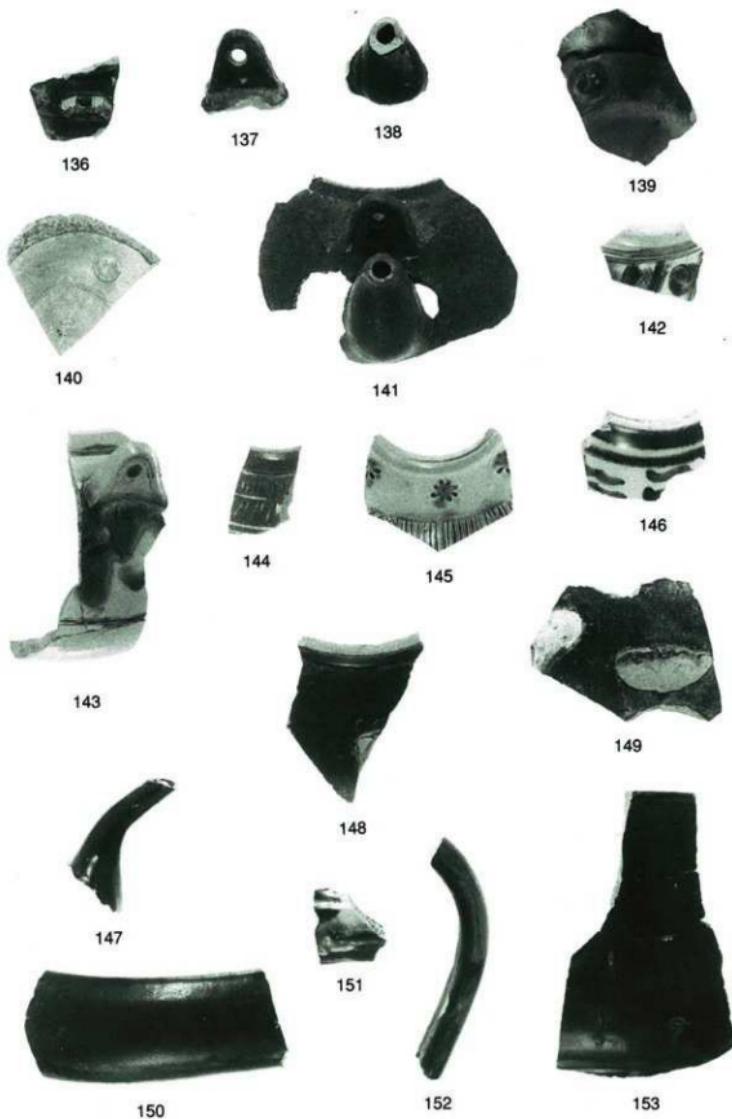
國版47 沖繩產施釉陶器 7 (蓋類) (上:外面、下:内面)



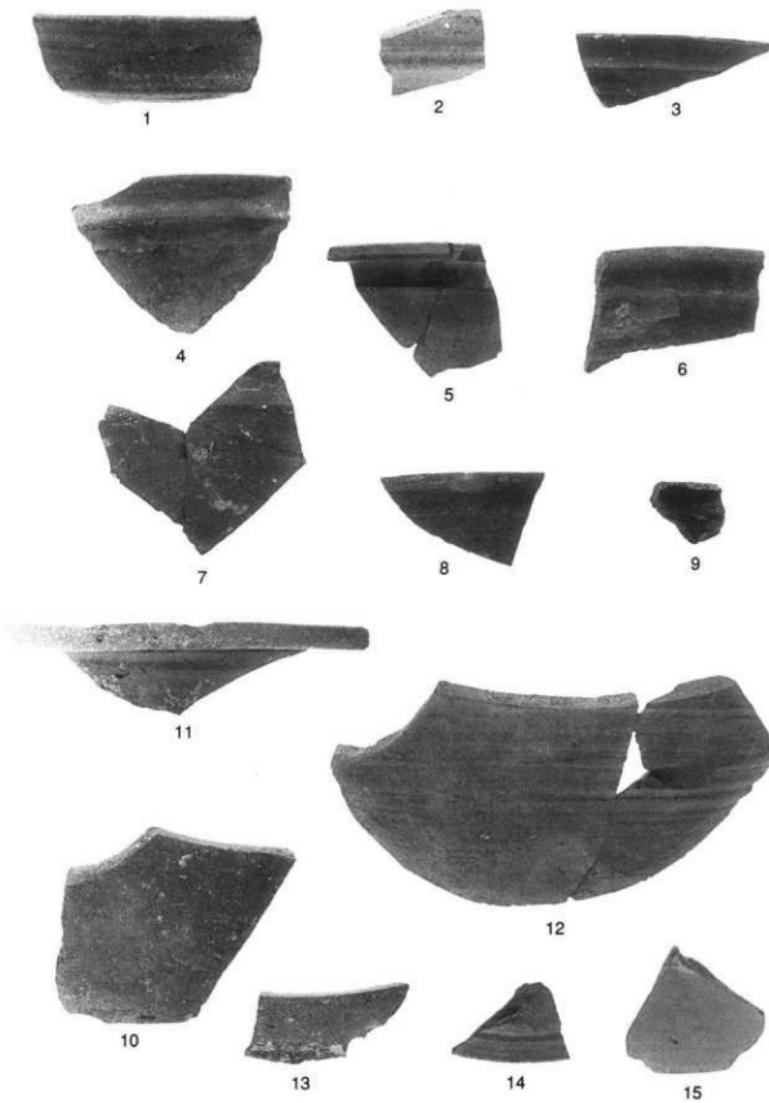
図版48 沖縄産施釉陶器 8 (秉燭・火取・香炉・火炉・花瓶・茶入)



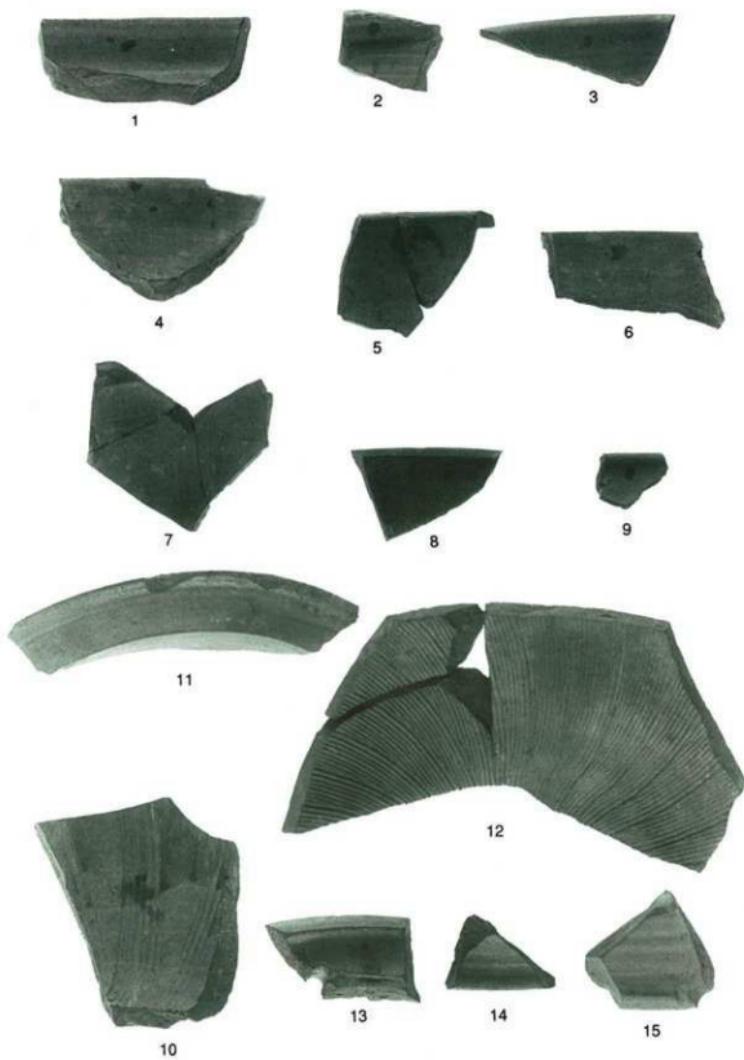
図版49 沖縄産施釉陶器 9 (水注・壺・油壺)



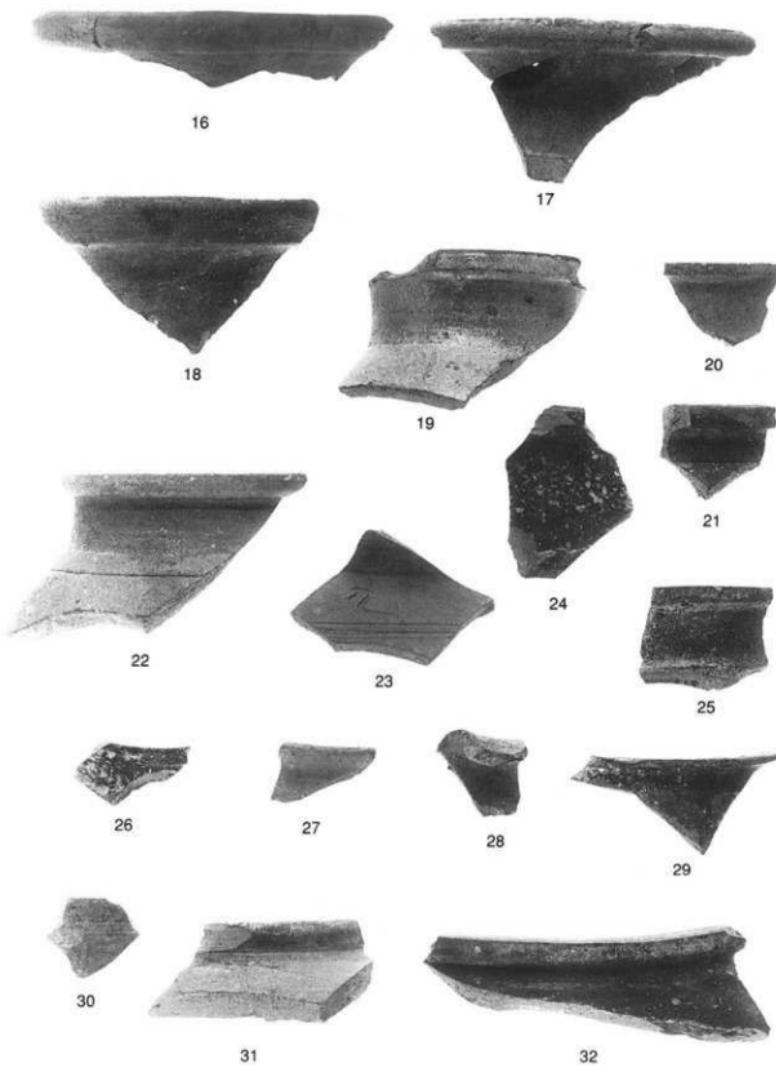
図版50 沖縄産施釉陶器 10 (急須・片口鉢)



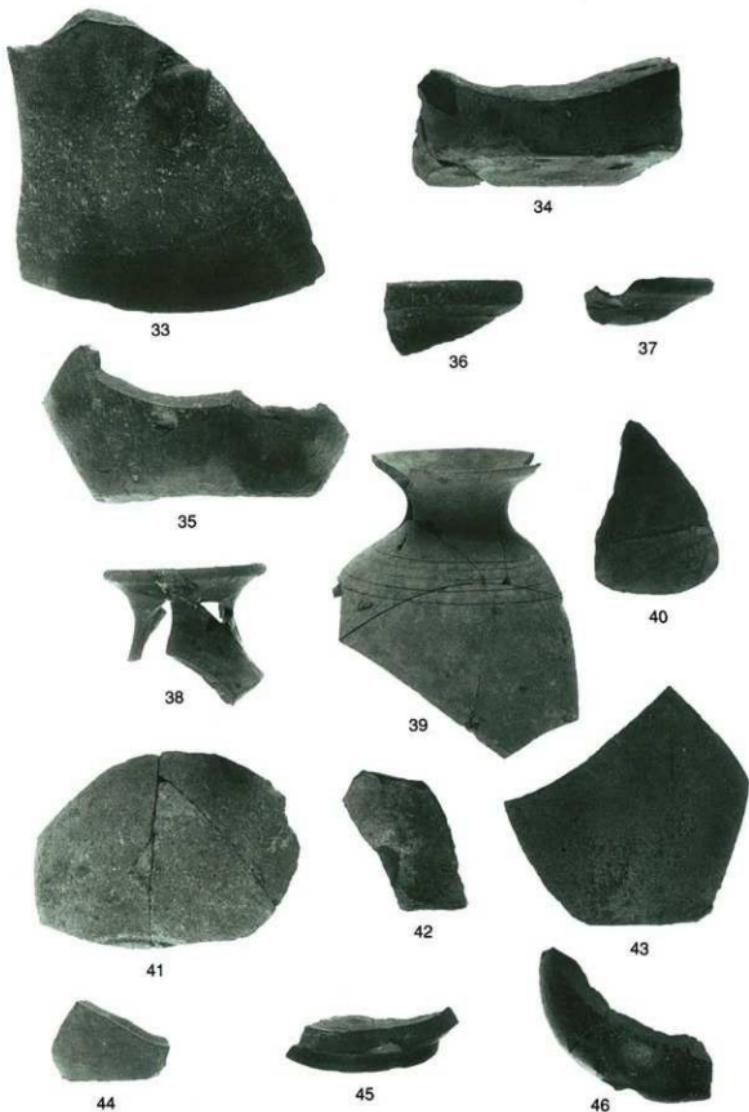
図版51 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢-外面)



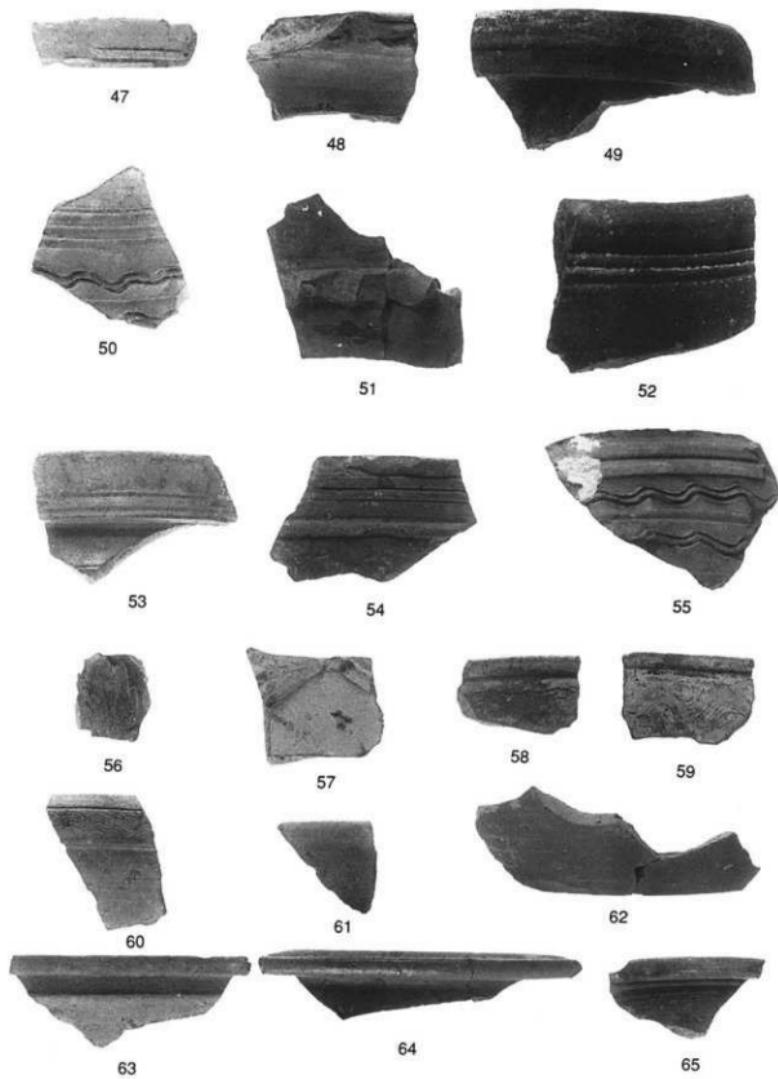
図版52 沖縄産無釉陶器 1 (摺鉢-内面)



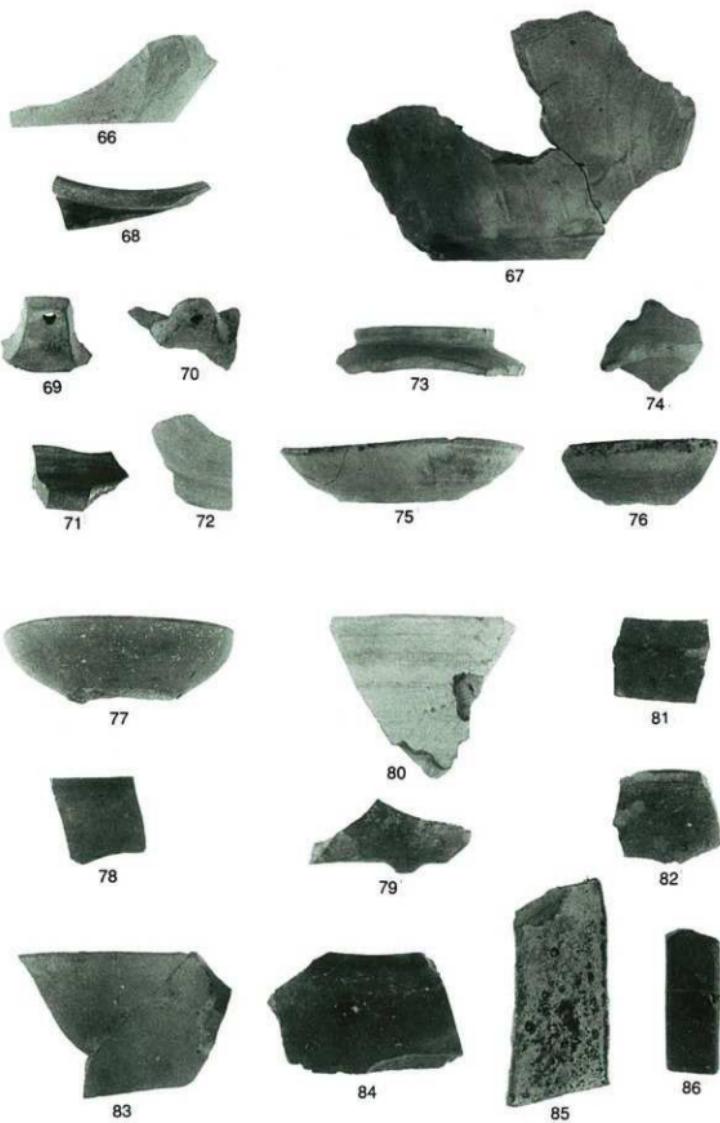
図版53 沖縄産無釉陶器 2 (壺)



図版54 沖縄産無釉陶器 3 (壺・瓶子)



図版55 沖縄産無釉陶器 4 (水甕・厨子甕・水鉢・小鉢)



図版56 沖縄産無釉陶器 5 (水鉢・花鉢・鍋・急須・灯明皿・小皿・香炉・火炉・急須の把手)



87

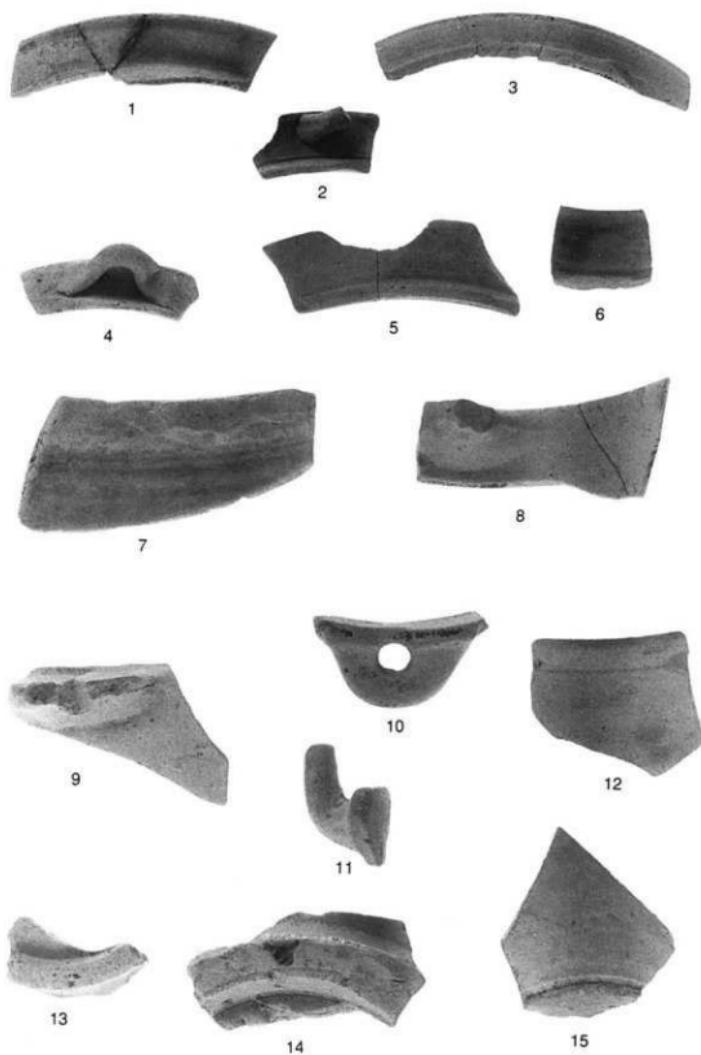


88

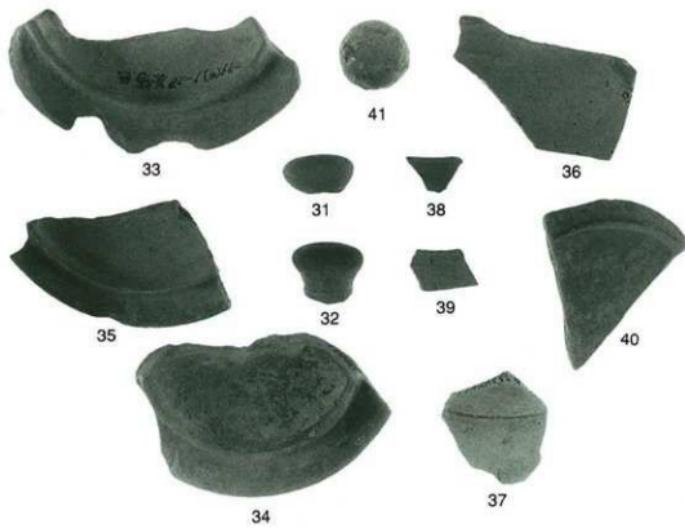
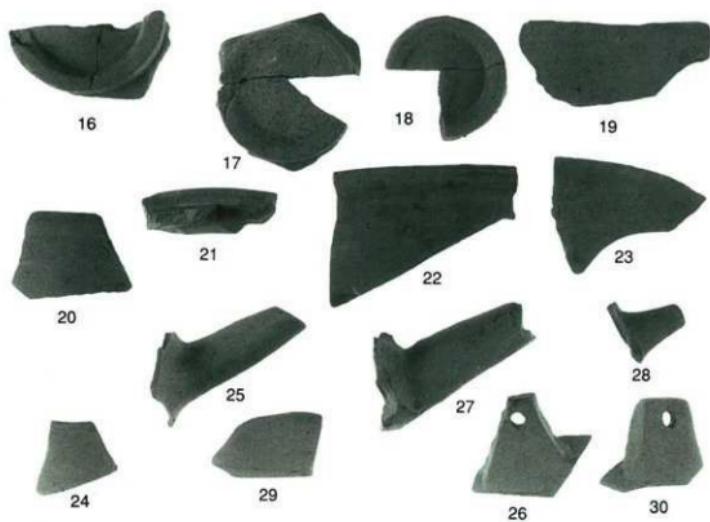
図版57 沖縄産無釉陶器 6 (壺か甕の底部)



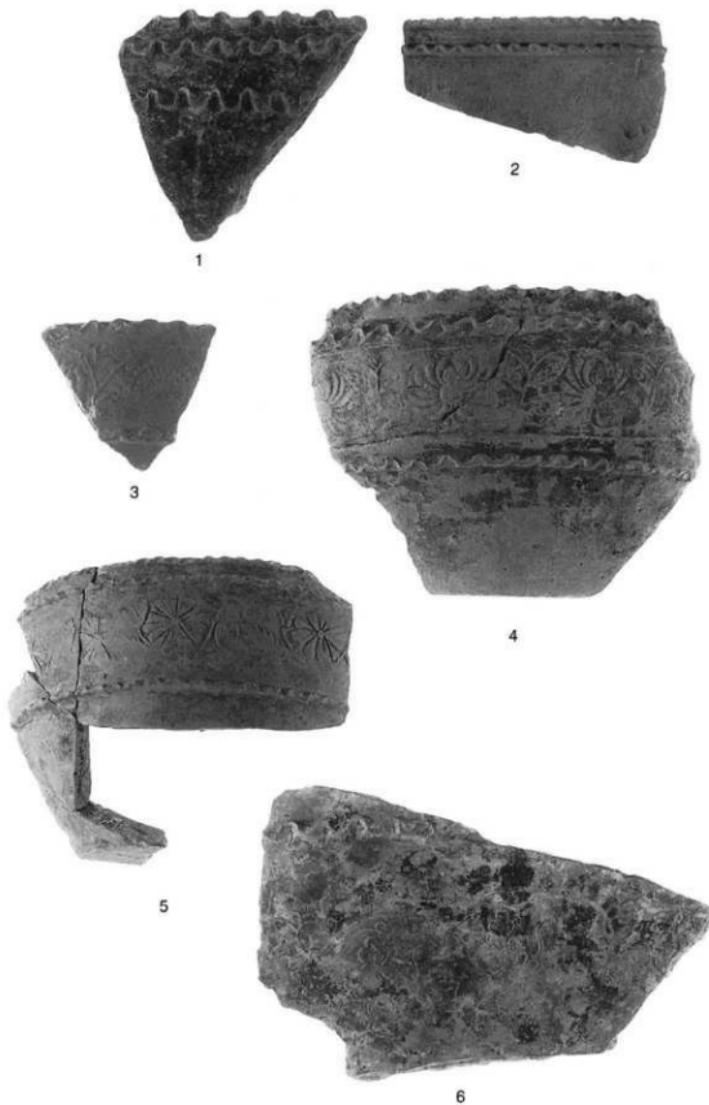
2



図版59 陶質土器 1 (鍋・火炉)



図版60 陶質土器 2・3 (鍋の蓋・水鉢・急須・蓋・撮・壺・球状製品)



図版61 瓦質土器 1 (植木鉢)



7



10



8



|



9

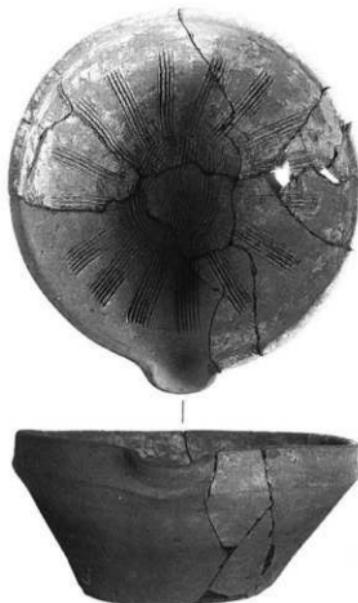


11

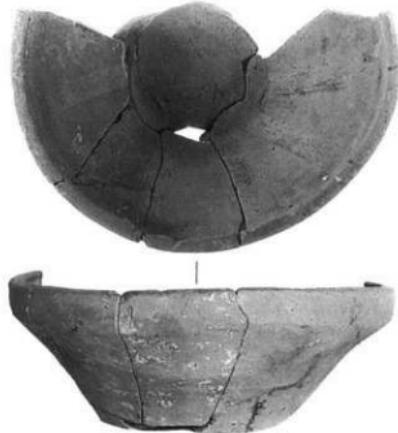


12

図版62 瓦質土器 2 (こね鉢)

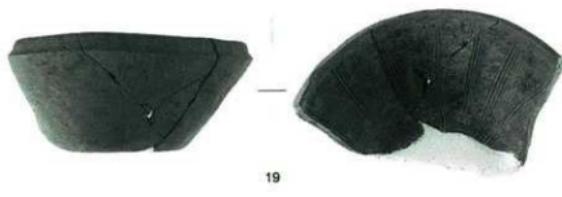
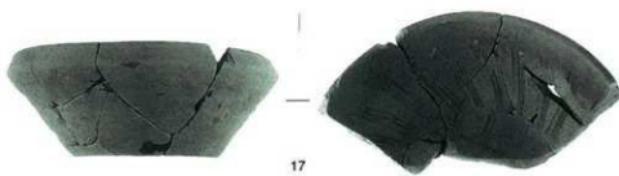


13

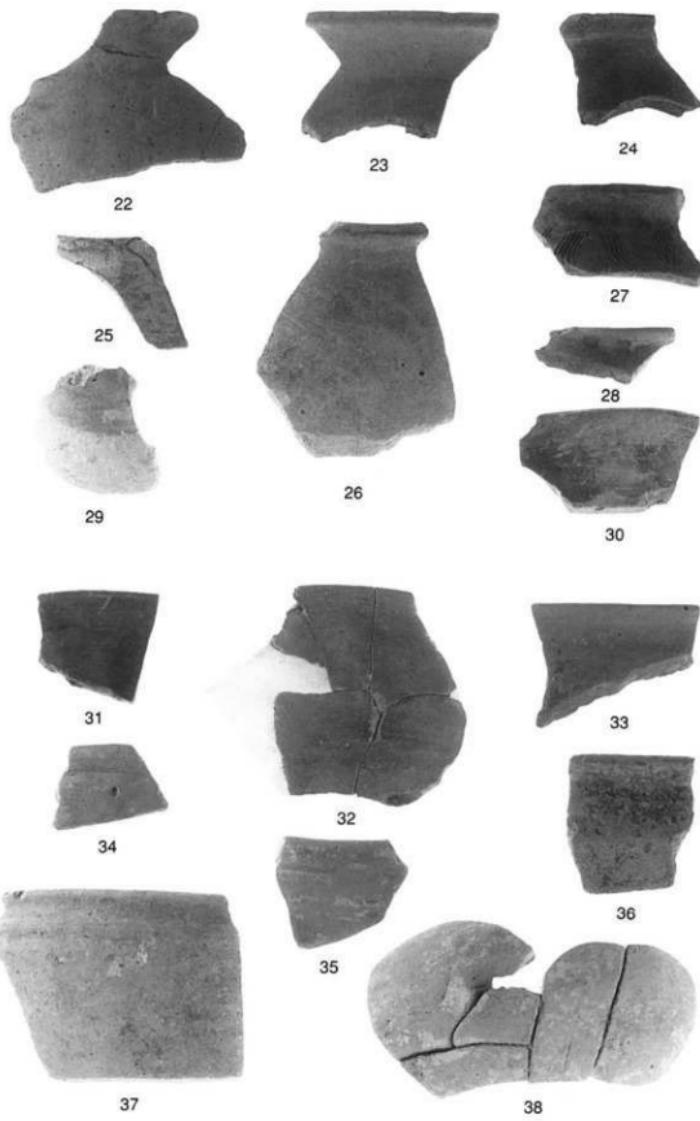


15

國版63 瓦質土器 3 (摺鉢)



図版64 瓦質土器 3 (摺鉢)



図版65 瓦質土器 4 (壺・鍋・深鉢・浅鉢)



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52

國版66 瓦質土器 5 (淺鉢・碗・水盤・大皿)



53



54



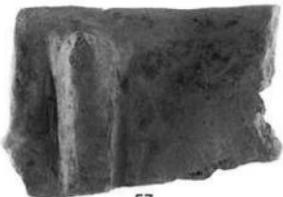
56



|



55



57



58



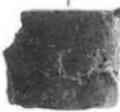
59



60



61

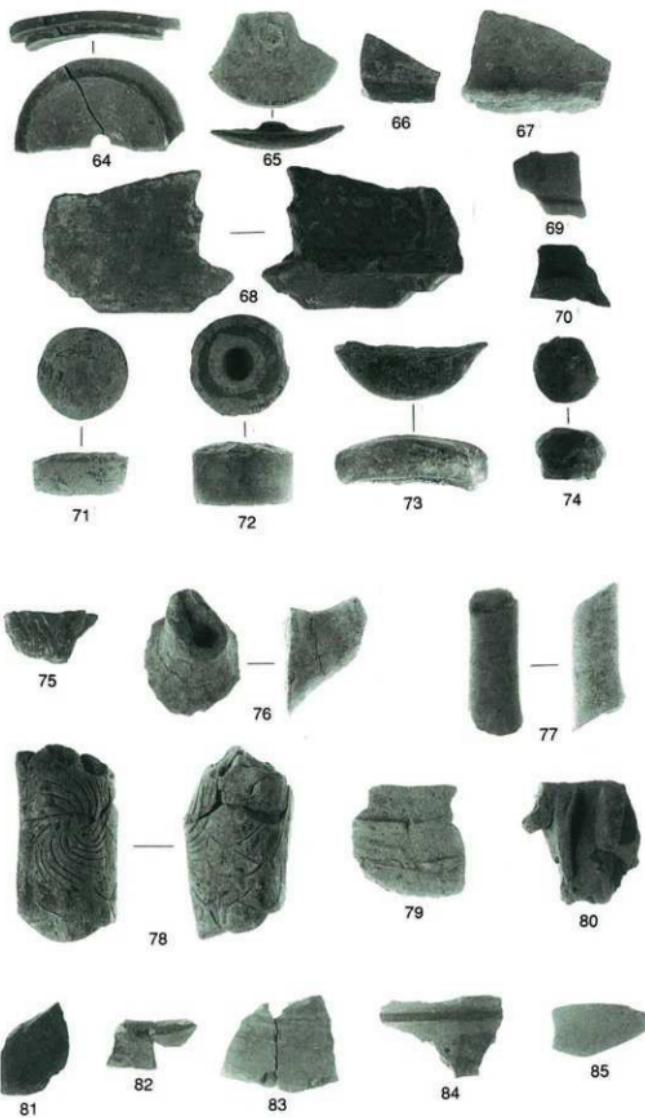


62

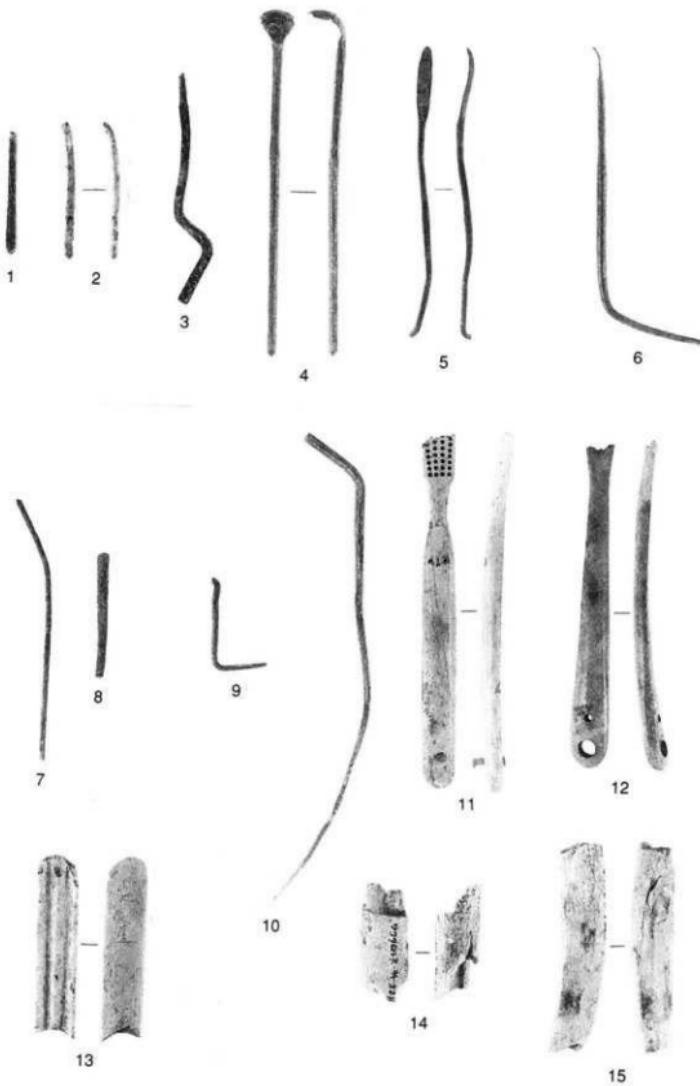


63

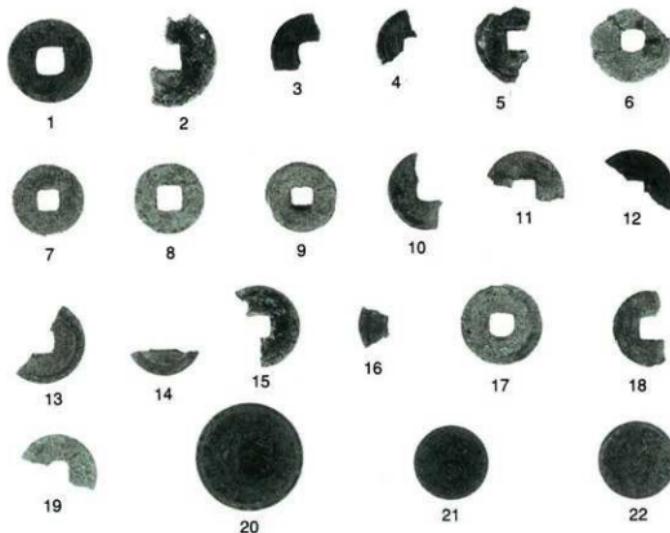
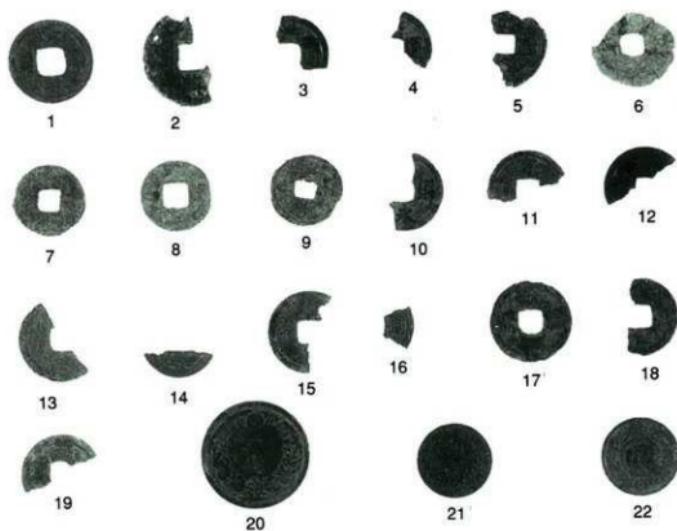
國版67 瓦質土器 6 (火炉・竈・香炉)



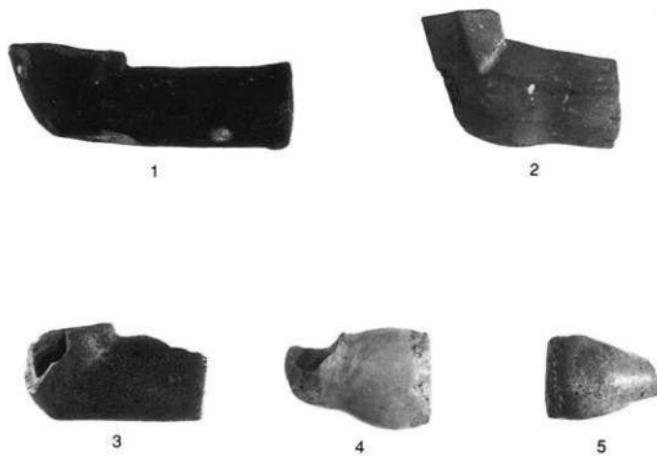
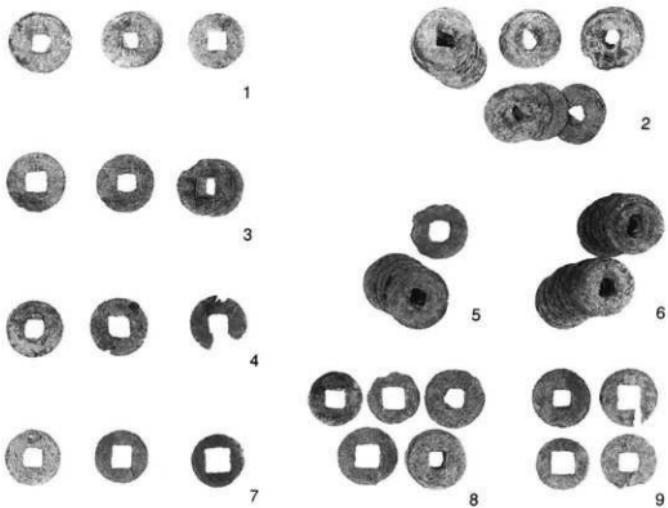
図版68 瓦質土器 7 (蓋・茶釜・香炉・碗・置き物・急須・鍔釜)



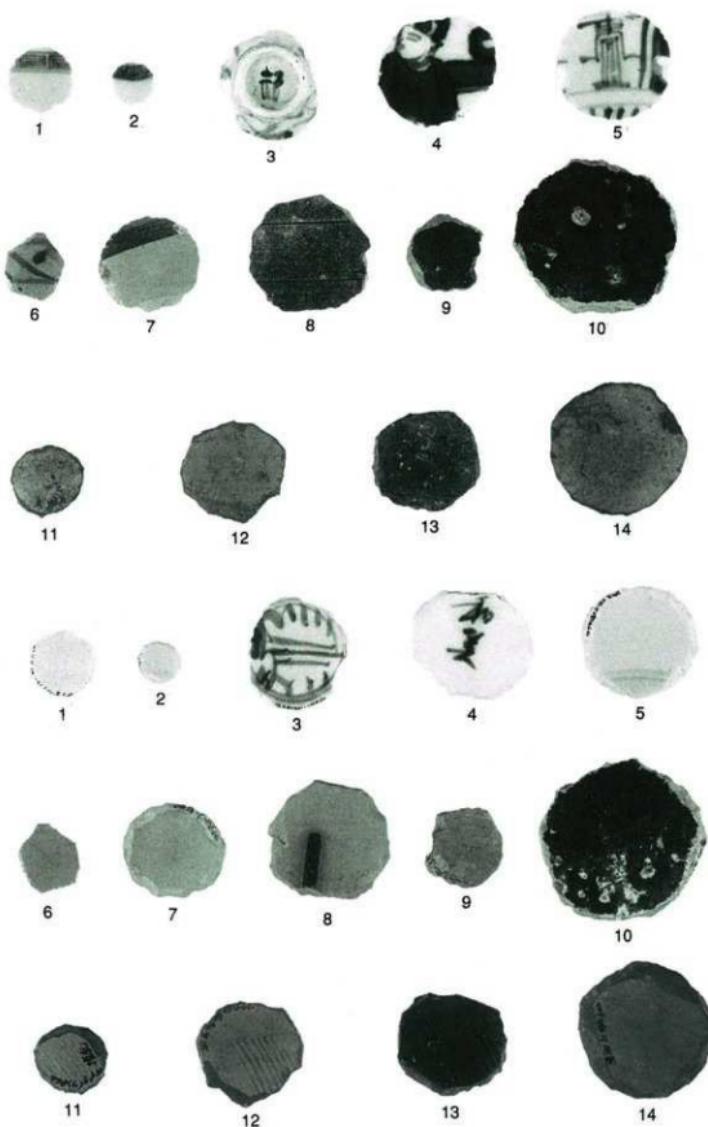
國版69 青銅製品・骨製品



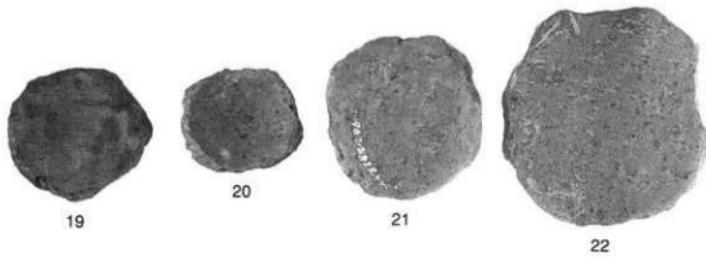
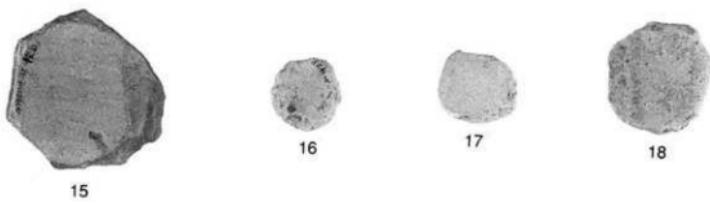
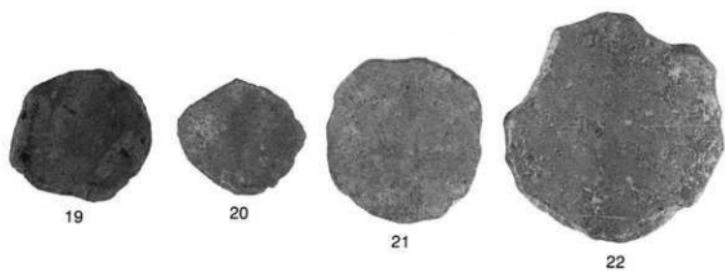
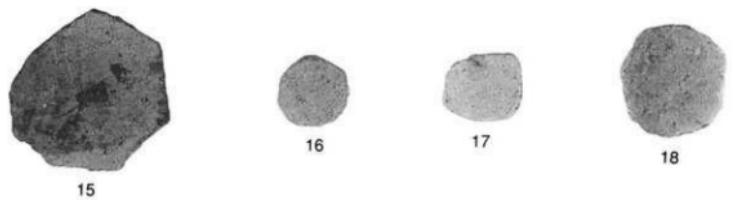
図版70 古銭 (上:表面、下:裏面)



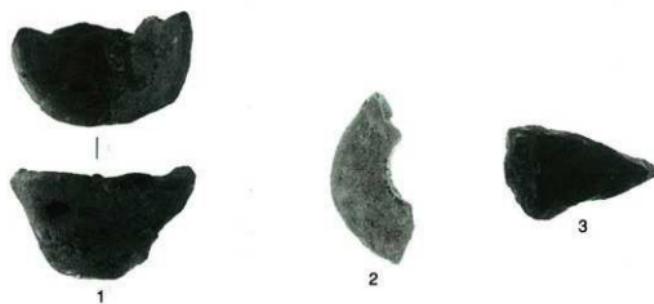
図版71 上：古銭（鳩目銭）、下：キセル



図版72 円盤状製品 1 (上: 外面、下: 内面)



図版73 円盤状製品 2 (上：外面、下：内面)



図版74 上左：坩堝、上右：石製品、下：土鍤



1



3



2



4

图版75 窑道具

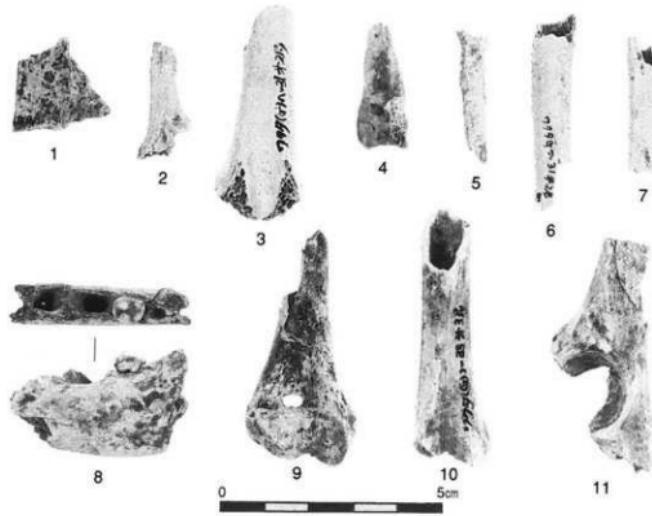
図版76

上：カニ・魚

1. オカガニ 可動指
2. メジロザメ科 脊椎骨
3. ネズミザメ科 脊椎骨
4. ハタ科 右 齒骨片
5. フエフキダイ科 右 齒骨
6. ハマフエフキダイ 右 口蓋骨
7. ナンヨウブダイ 右 上咽頭骨
8. ブダイ科 右 齒骨
9. ハリセンボン科 頸骨片

下：トリ・イヌ

1. ニワトリ 中足骨 右 骨体
2. トリ 中手骨 右 骨体
3. トリ 大腿骨 左 遠位端
4. トリ 大腿骨 右 遠位端
5. トリ 脊骨 左 近位端
6. トリ 脊骨 左 骨体
7. トリ 中足骨 左 骨体
8. イヌ 下顎骨 右 M₂
9. イヌ 上腕骨 右 遠位端
10. イヌ 上腕骨 左 骨体～遠位部
11. イヌ 寛骨 左 白部



図版76 上：カニ・魚、下：トリ・イヌ

図版77 ゴンドウクジラ

1・2. ゴンドウクジラ 上顎骨 右 破片



図版77 ゴンドウクジラ

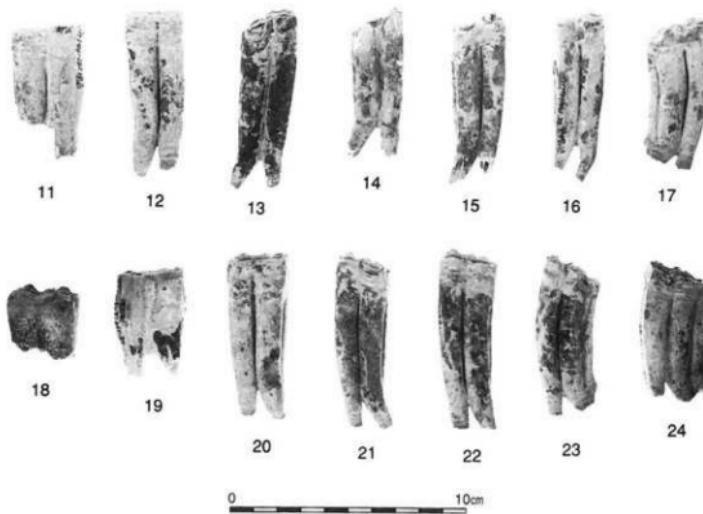
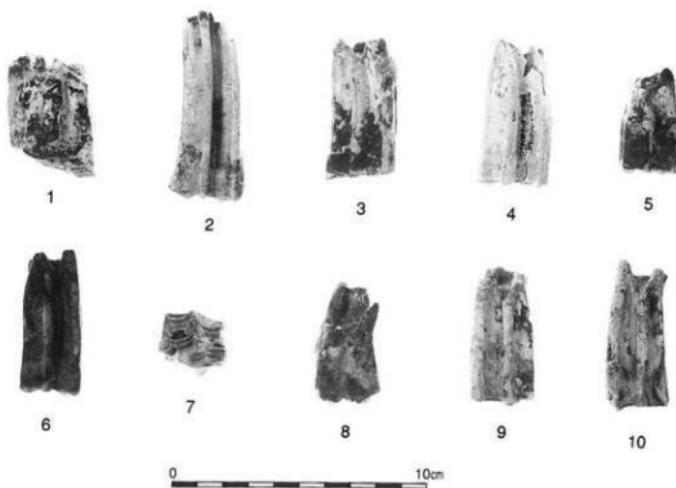
図版78 ウマ歯

上：上顎骨

1. ウマ 上顎骨 右 P²
2. ウマ 上顎骨 右 P³ or P⁴
3. ウマ 上顎骨 右 P³ or P⁴
4. ウマ 上顎骨 右 P³ or P⁴
5. ウマ 上顎骨 右 M¹
6. ウマ 上顎骨 右 M¹ or M²
7. ウマ 上顎骨 左 dm⁴
8. ウマ 上顎骨 左 P³~M²
9. ウマ 上顎骨 左 P³~M²
10. ウマ 上顎骨 左 P³~M²

下：下顎骨

11. ウマ 下顎骨 右 P₂
12. ウマ 下顎骨 右 P₃ or P₄
13. ウマ 下顎骨 右 P₃ or P₄
14. ウマ 下顎骨 右 M₁ or M₂
15. ウマ 下顎骨 右 M₁ or M₂
16. ウマ 下顎骨 右 M₁ or M₂
17. ウマ 下顎骨 右 M₃
18. ウマ 下顎骨 左 dm₄
19. ウマ 下顎骨 左 P₂
20. ウマ 下顎骨 左 P₃ or P₄
21. ウマ 下顎骨 左 M₁ or M₂
22. ウマ 下顎骨 左 M₁ or M₂
23. ウマ 下顎骨 左 M₃
24. ウマ 下顎骨 左 M₃

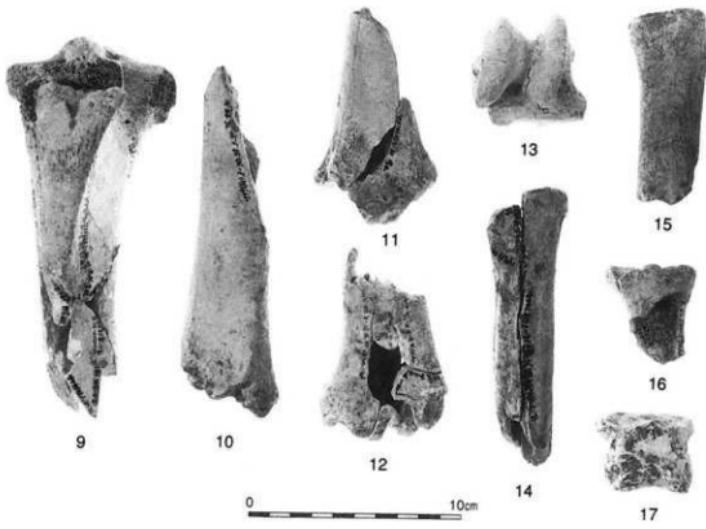


図版78 ウマ歯

図版79 ウマ・ウシ

1. ウマ 下顎骨 右
2. ウマ 下顎骨 右
3. ウシ 桡骨 左 近位端
4. ウマ 桡骨(桡尺骨) 左 近位端~骨体
5. ウマ 中手骨 左 遠位端
6. ウマ 寛骨 右 白部~下部
7. ウマ 大腿骨 左 近位骨端はずれ
8. ウマ 大腿骨 左 近位端

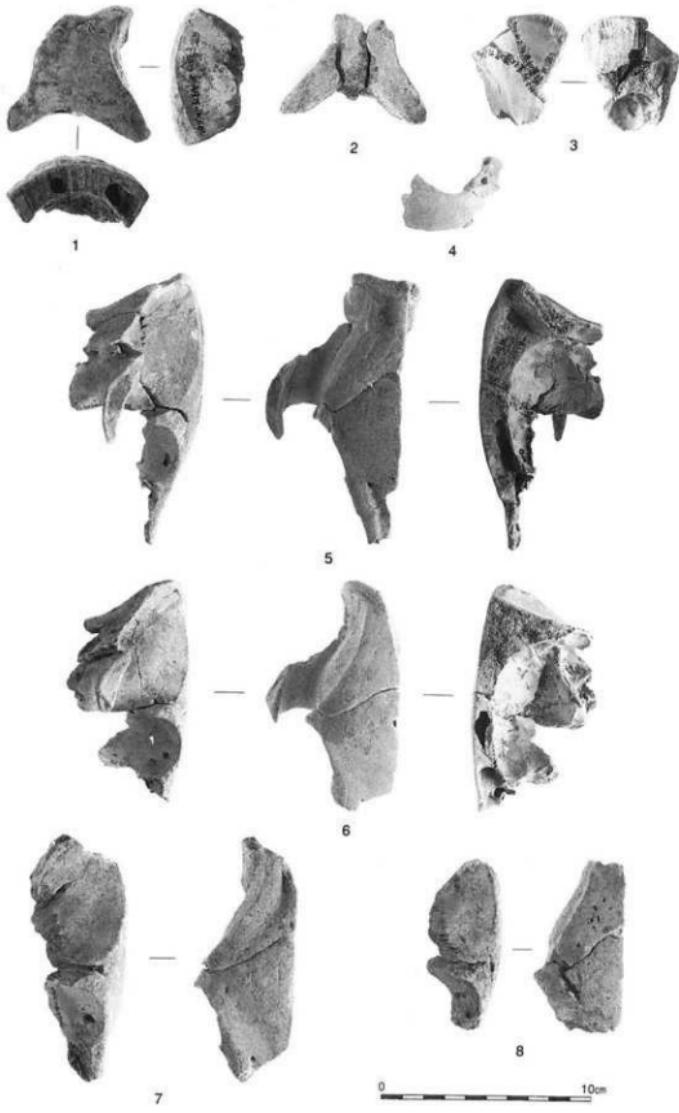
9. ウシ 脊骨 左 近位端~骨体
10. ウシ 脊骨 右 骨体~遠位部
11. ウシ 脊骨 左 遠位端
12. ウマ 脊骨 右 遠位端
13. ウマ 距骨 右 完存
14. ウマ 中足骨 左 近位端~骨体
15. ウマ 中足骨 左 近位端
16. ウマ 基節骨 右 近位端
17. ウマ 中節骨 左 完存



図版79 ウマ・ウシ

図版80 ブタ

1. ブタ 頭蓋骨 左右 頭頂骨
2. ブタ 頭蓋骨 左右 頭頂骨
3. ブタ 頭蓋骨 頸稜
4. ブタ 頭蓋骨 右 頬骨
5. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨
6. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨
7. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨
8. ブタ 頭蓋骨 右 前頭骨～頭頂骨



図版80 ブタ

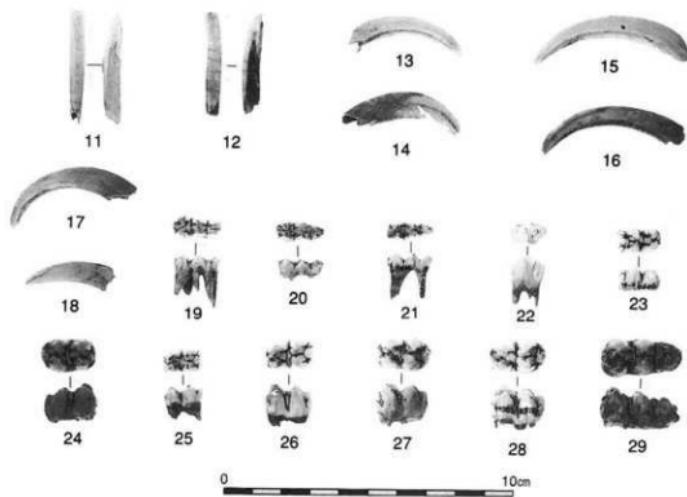
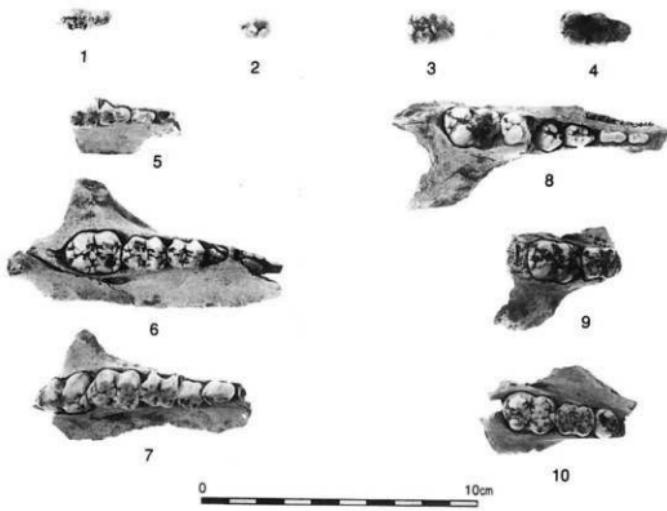
図版81 ブタ歯

上：上顎骨

1. ブタ 上顎骨 左 I²
2. ブタ 上顎骨 左 P²
3. ブタ 上顎骨 左 M²
4. ブタ 上顎骨 右 M²
5. ブタ 上顎骨 右 dm^{2, 3, 4}
6. ブタ 上顎骨 右 dm^{<2, 3>4} M^{1, 2}
7. ブタ 上顎骨 右 P^{3, 4} M^{1, 2, 3}
8. ブタ 上顎骨 左 P^{1, 2<3, 4>} M^{1, 2,<3>}
9. ブタ 上顎骨 左 M^{1, 2<3>}
10. ブタ 上顎骨 左 P⁴ M^{1, 2<3>}

下：下顎骨

11. ブタ 下顎骨 左 I₁
12. ブタ 下顎骨 左 I₁
13. ブタ 下顎骨 右 犬齒 ♀
14. ブタ 下顎骨 右 犬齒 ♀
15. ブタ 下顎骨 左 犬齒 ♀
16. ブタ 下顎骨 右 犬齒 ♀
17. ブタ 下顎骨 左 犬齒 ♀
18. ブタ 下顎骨 左 犬齒 ♀
19. ブタ 下顎骨 右 dm₁
20. ブタ 下顎骨 右 dm₁
21. ブタ 下顎骨 左 dm₁
22. ブタ 下顎骨 左 P₄
23. ブタ 下顎骨 左 M₁
24. ブタ 下顎骨 右 M₁
25. ブタ 下顎骨 右 M₂
26. ブタ 下顎骨 左 M₂
27. ブタ 下顎骨 左 M₂
28. ブタ 下顎骨 左 M₂
29. ブタ 下顎骨 左 M₃



図版81 ブタ歯 (上：上顎骨、下：下顎骨)

図版82 ブタ歯

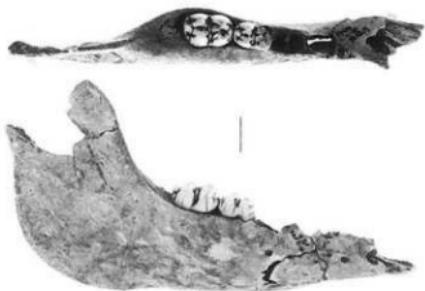
1. ブタ 下顎骨 右 $M_2 < z >$
2. ブタ 下顎骨 右 $M_{1, 2 < z >} \quad ♀$
3. ブタ 下顎骨 右 $<C> dm_{2, 3, 4} M_{1 < z >} \quad ♀$
4. ブタ 下顎骨 左 $P_4 M_{1, 2} \quad ♀$
5. ブタ 下顎骨 左 $<P_4> M_{1, 2}$
6. ブタ 下顎骨 左 $dm_4 M_{1 < z >} \quad ♀$



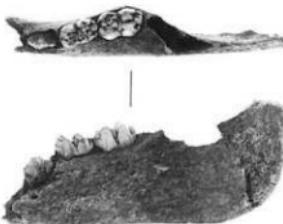
1



4



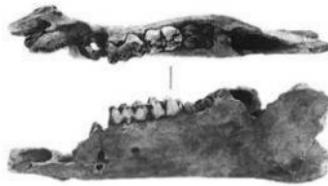
2



5



3



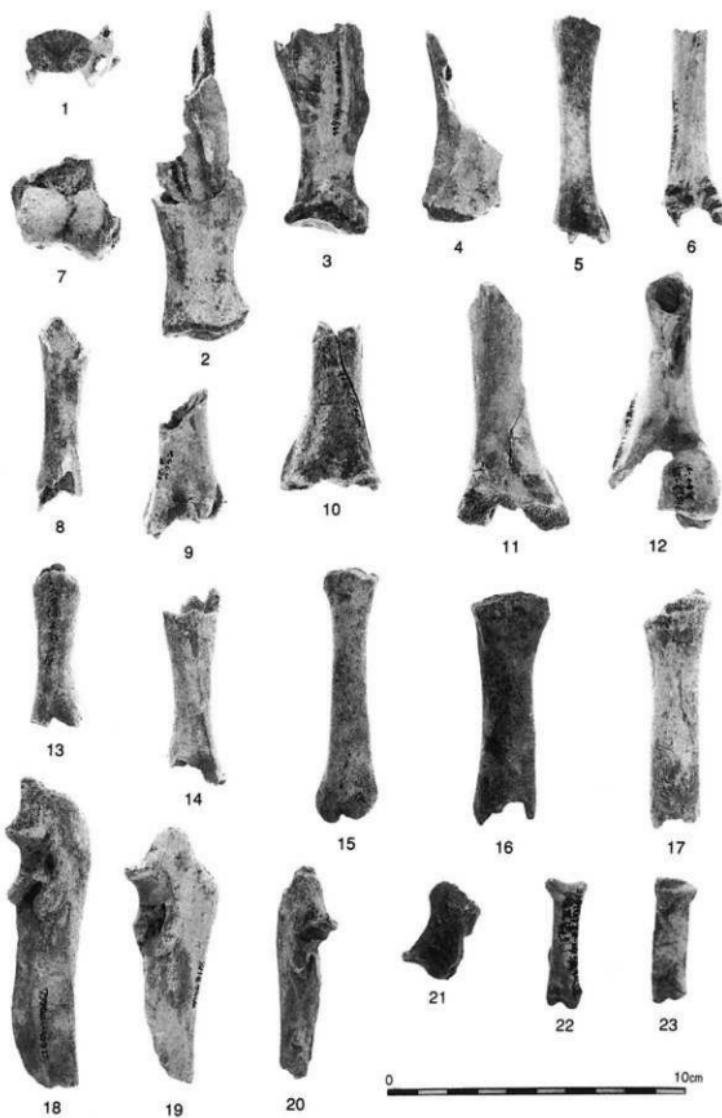
6

A scale bar indicating 10 cm.

図版82 ブタ歯

図版83 ブタ

1. ブタ 頸椎
2. ブタ 肩甲骨 右 骨体～遠位端
3. ブタ 肩甲骨 右 遠位端
4. ブタ 肩甲骨 右 遠位部
5. ブタ 上腕骨 左 近位部～遠位部（幼）
6. ブタ 上腕骨 左 骨体～遠位部（幼）キズあり
7. ブタ 上腕骨 右 遠位骨端のみ
8. ブタ 上腕骨 右 骨体（幼）キズあり
9. ブタ 上腕骨 右 遠位部
10. ブタ 上腕骨 右 遠位部
11. ブタ 上腕骨 左 遠位部
12. ブタ 上腕骨 右 骨体～遠位端
13. ブタ 上腕骨 左 骨体
14. ブタ 上腕骨 右 骨体
15. ブタ 桡骨 右 両端はずれ（幼）
16. ブタ 桡骨 左 近位端～骨体
17. ブタ 桡骨 右 近位部～骨体
18. ブタ 尺骨 左 近位部～骨体
19. ブタ 尺骨 左 近位部～骨体
20. ブタ 尺骨 右 近位部～骨体（幼）
21. ブタ 尺骨 左 近位骨端はずれ
22. ブタ 中手骨 左 III
23. ブタ 中手骨 左 IV



図版83 ブタ

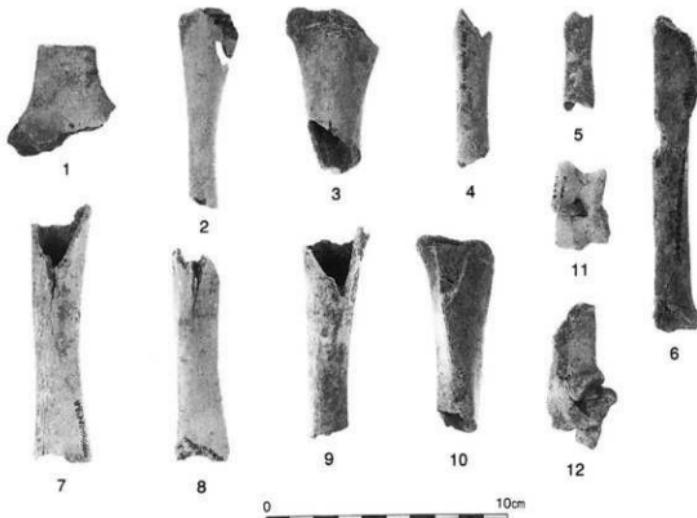
図版84

上：ブタ

1. ブタ 寛骨 左 上部 キズあり
2. ブタ 大腿骨 左 近位部～骨体
3. ブタ 大腿骨 左 近位骨端はずれ
4. ブタ 大腿骨 左 骨体
5. ブタ 大腿骨 左 骨体(幼)
6. ブタ 脊骨 左 近位部～遠位部
7. ブタ 脊骨 左 近位部～遠位部
8. ブタ 脊骨 左 骨体 キズあり
9. ブタ 脊骨 左 近位部～骨体
10. ブタ 脊骨 右 近位骨端はずれ
11. ブタ 距骨 右 完存
12. ブタ 踵骨 左 近位部～遠位部 キズあり

下：ヤギ

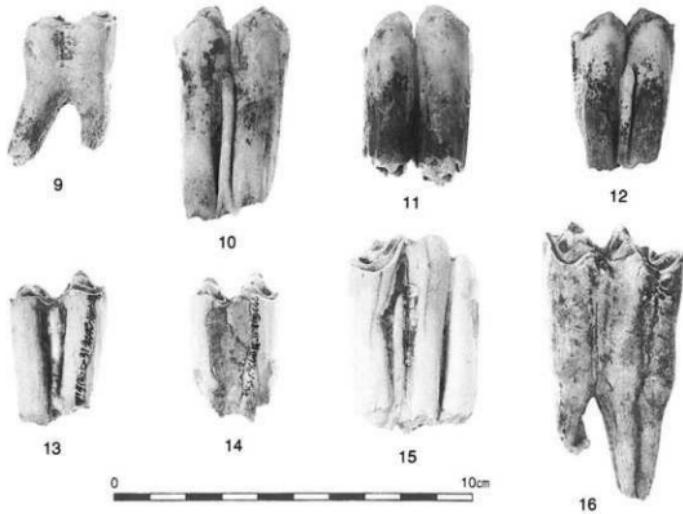
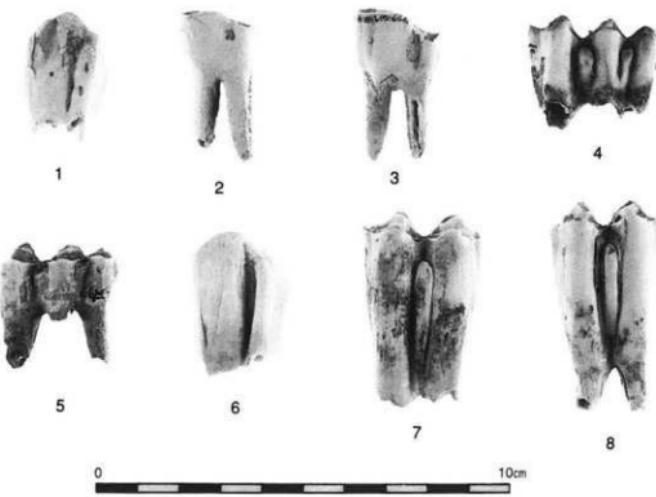
13. ヤギ 下顎骨 左 P₃
14. ヤギ 下顎骨 左 P₄
15. ヤギ 下顎骨 左 M₁
16. ヤギ 下顎骨 左 M₂
17. ヤギ 下顎骨 左 M₃
18. ヤギ 寛骨 左 腓骨 上部
19. ヤギ 寛骨 左 腓骨 上部
20. ヤギ 寛骨 右 腓骨 上部



図版84 上：ブタ、下：ヤギ

図版85 ウシ歯

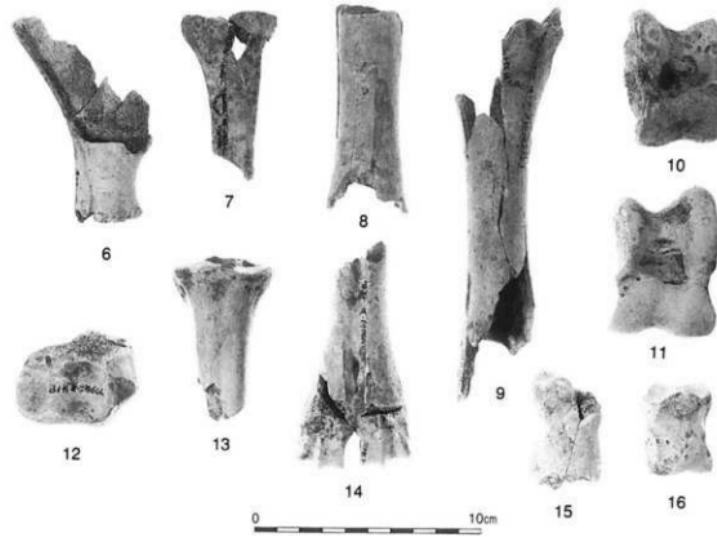
1. ウシ 下顎骨 左 P₃
2. ウシ 下顎骨 左 P₂
3. ウシ 下顎骨 左 P₁
4. ウシ 下顎骨 右 dm₄
5. ウシ 下顎骨 右 dm₃
6. ウシ 下顎骨 左 P₄
7. ウシ 下顎骨 右 M₁
8. ウシ 下顎骨 右 M₂
9. ウシ 下顎骨 右 M₃
10. ウシ 下顎骨 右 M₄
11. ウシ 下顎骨 右 M₂
12. ウシ 下顎骨 右 M₁
13. ウシ 下顎骨 右 M₃
14. ウシ 下顎骨 右 M₄
15. ウシ 下顎骨 左 M₃
16. ウシ 下顎骨 左 M₂



図版85 ウシ歯

図版86 ウシ

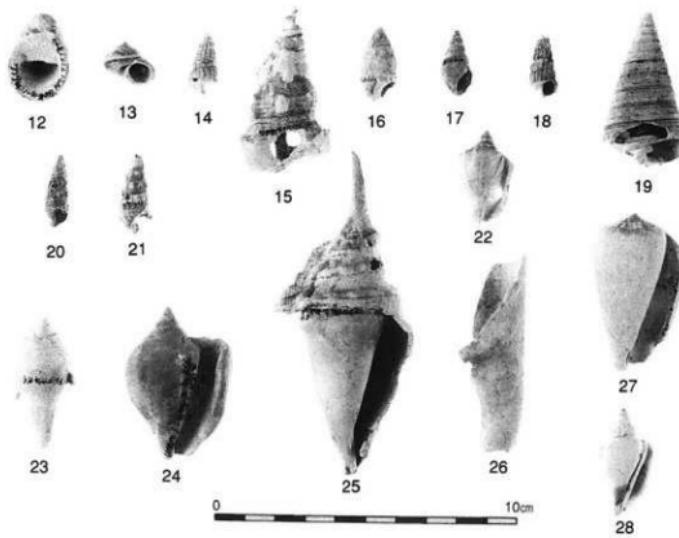
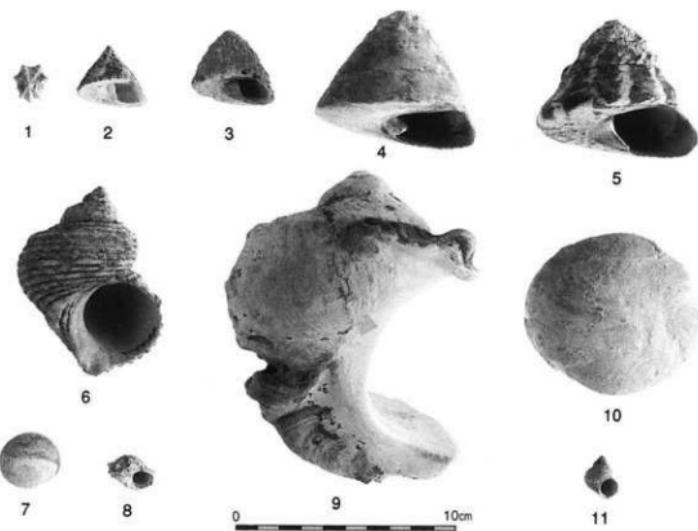
1. ウシ 頭蓋骨 角心
2. ウシ 下顎骨 右 P:
3. ウシ 肩甲骨 右 骨体～遠位端
4. ウシ 肩甲骨 右 近位部～遠位端 キズあり
5. ウシ 肩甲骨 左 近位部～遠位端 キズあり
6. ウシ 肩甲骨 右 骨体～遠位端 (幼)
7. ウシ 挠骨 右 近位骨端はずれ (幼)
8. ウシ 中手骨 左 骨体
9. ウシ 大腿骨 左 近位部～遠位部
10. ウシ 距骨 右 完存
11. ウシ 距骨 左 完存
12. ウシ 中心足根骨+第4足根骨 左
13. ウシ 中足骨 右 近位端
14. ウシ 中足骨 左 骨体～遠位端
15. ウシ 基節骨 右 近位端～遠位部
16. ウシ 中節骨 左 完存



図版86 ウシ

図版87 巻貝

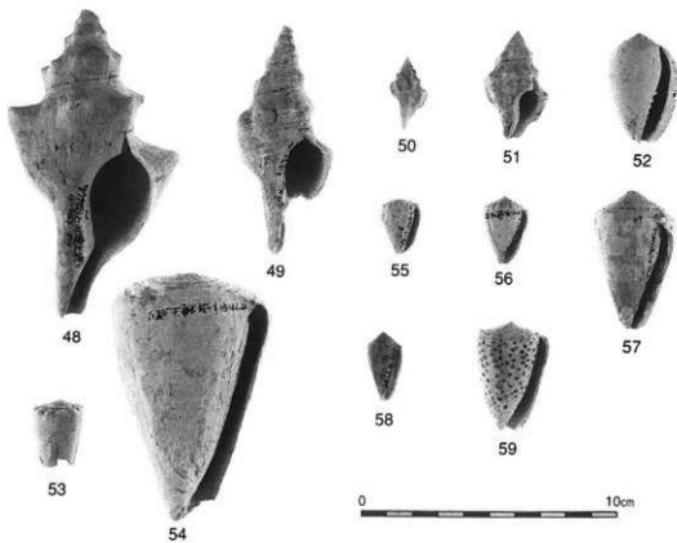
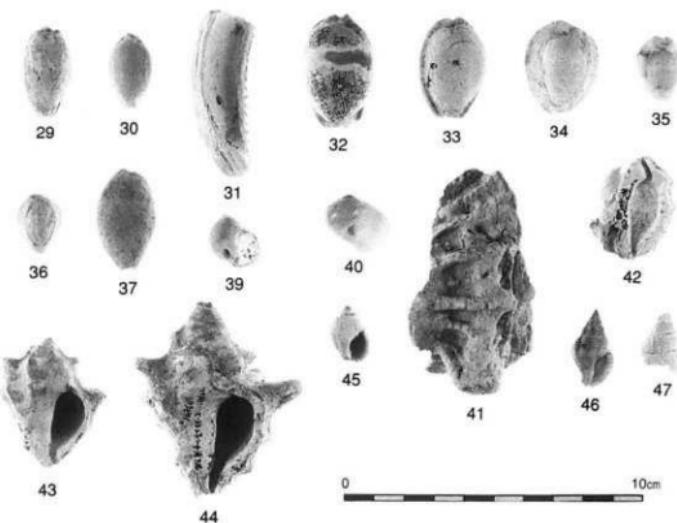
1. リュウキュウウノアシ
2. ニシキウズ
3. ムラサキウズ
4. ギンタカハマ
5. サラサバティラ
6. チョウセンサザエ
7. チョウセンサザエの蓋
8. カンギク
9. ヤコウガイ
10. ヤコウガイの蓋
11. コシダカサザエ
12. アマオブネ
13. オキナワヤマタニシ
14. トウガタカワニナ
15. オニノツノガイ
16. クワノミカニモリ
17. ヨコワカニモリ
18. ヘナタリ
19. センニンガイ
20. ウミニナ
21. イボウミニナ
22. ムカシタモトガイ
23. マガキガイ
24. ネジマガキガイ
25. スイショウガイ
26. クモガイ
27. スイジガイ
28. オハグロガイ



図版87 卷貝

図版88 卷貝

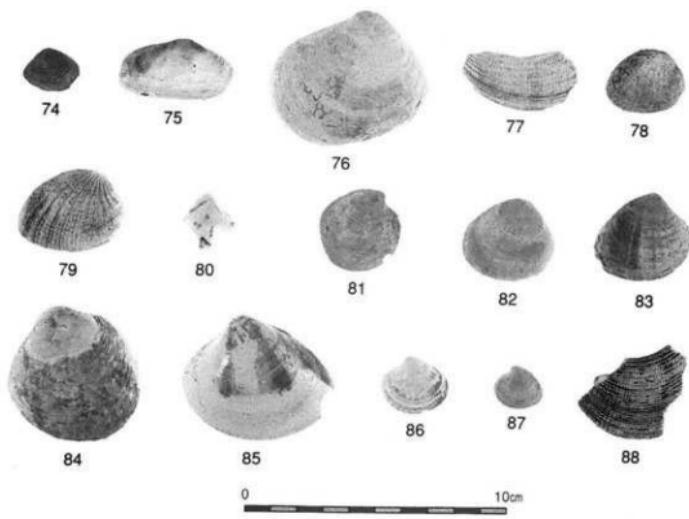
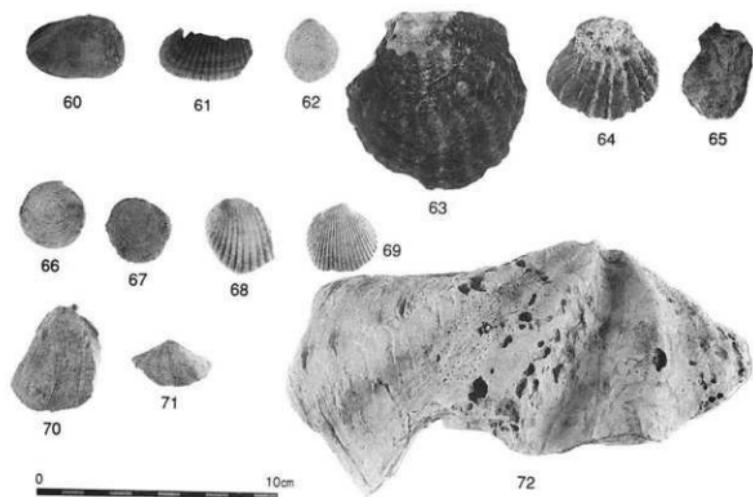
29. ナツメダカラガイモドキ
30. スソヨツメダカラ
31. ハチジョウダカラ
32. ヤクジマダカラ
33. コモンダカラ
34. ハナマルユキ
35. キイロダカラ (フシダカラ)
36. ハナビラダカラ
37. ヒメホシダカラ
39. シロヘソアキトミガイ
40. トラダマ
41. シワクチナルトボラ
42. アカイガレイシ
43. ツノレイシ
44. シラクモガイ
45. イボヨフバイ
46. ヒメホラダマシ
47. シマベッコウバイ
48. イトマキボラ
49. ナガイトマキボラ
50. リュウキュウツノマタガイ
51. ツノマタモドキ
52. イモフデガイ
53. クロミナシガイ
54. クロフモドキ
55. マライモ
56. サヤガタイモ
57. ヤナギシボリイモ
58. アラレイモガイ
59. ゴマワイモ



図版88 卷貝

図版89 二枚貝

- 60. ベニエガイ
- 61. リュウキュウサルボウ
- 62. ソメワケグリ
- 63. クロチョウガイ
- 64. メンガイの一種
- 65. ニセマガキ
- 66. ウラキツキガイ
- 67. キクザル
- 68. リュウキュウザルガイ
- 69. カワラガイ
- 70. シャゴウ
- 71. ヒメジャコ
- 72. ヒレジャコ
- 74. イソハマグリ
- 75. マスオガイ
- 76. シレナシジミ
- 77. スノメガイ
- 78. ホソスジイナミガイ
- 79. アラスジケマンガイ
- 80. マルオミナエシ
- 81. オイノカガミガイ
- 82. シラオガイ
- 83. オトコエシ
- 84. オキシジミガイ
- 85. チョウセンハマグリ
- 86. サラサガイ
- 87. イナズマスダレガイ類の一種
- 88. カゴガイ



図版89 二枚貝

沖縄県文化財調査報告書第121集

湧田古窯跡（Ⅱ）

－県庁舎建設に係る発掘調査－

印刷 平成6年3月20日

発行 平成6年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900 那覇市泉崎1丁目2-2

TEL 098(866)2731~2733

印刷 株式会社 近代美術

〒901-11 南風原町字兼城206-9

TEL 098(889)4113